

資

料

編

【凡例】

- ・資料編は、平安遺文中の仮名及び宣命書きを含む文書の集成である。
- ・底本には、CD-ROM版の平安遺文を使用した。ただし、書籍と対照し誤りと思われる箇所は訂正した。
- ・文書の選択に際して、固有名の仮名書きはとらない。また、いくつかの書き込みに仮名を含むものは、いくつか重要なものを除いてやはりとらなかつた。裏文書や端書に仮名および宣命書きを含むものはおおむねとつた。ただし、いくつかの新しいと思われるものはこれを除いた。
- ・宣命書き部分はへくで示し、宣命書き部分の改行はくで示した。また、仮名文書以外で仮名を含むものは、仮名の部分を傍線で示した個所がある。その他の記号は、CD-ROM版の方針による。
- ・全体に掲出順に通し番号を付した。ただし、研究篇において使用した通し番号とは異なる。
- ・国語資料として使用する際には、今後、ひとつひとつの文献的な批評が課題となる。

【第一卷】

1、《書籍頁〇〇四二》

〇五七 近江国馭家長解写〇正親町伯爵家旧藏文書

馭家長解 申依部内百姓所負租米限永年壳買墾田□□

合

在大原二条六里廿七家依田二百六十步 直米捌斗肆升

七里廿五社辺田一段 直米壹斛貳斗之

壳人馭家戸主秦仲磨戸口大初位下小長谷造福成者今得買人浅井郡

湯次郷戸主從七位上の臣吉野戸口中嶋大刀自女者

右、管得馭家長文部磨之解状備、部下戸主仲磨申云、戸口福成申云

（久）、已依所負租米、限永年壳与上件大刀自女既訖者、今依申状、

保証人等召集、追勘問、所陳有実、仍券文立如件、以解、

承和二年二月十日 大初位下小長谷造福成

妹 小長谷造大刀自女

妹 小長谷造真大刀自女

戸主 秦

秦

山前

秦

敢

馭家長文部

2、《書籍頁〇一二六》

〇一五二 讚岐国司解〇北白川宮御所藏文書

「此国解准太守告更不出之」

「改姓人夾名勘録進上、許礼波奈土無爾加官爾未之多末波無、見太

末不波可利止奈毛お毛ふ、抑刑大史乃多末比天定以出賜いと与可良

無、 有年申」

讚岐国司解 申言上改姓人事

合陸烟 並為和氣公

那珂郡参烟

因支首直麻呂男式人 道麻呂弟一人

一男宅成

兒広雄

次福雄

兒綿子女

次広成女

次時成女

二男宅麻呂（無兒）

因支首宅主男式人 道磨弟

一男秋吉

兒秋主

二男秋繼

兒秋益

次玉成女

因支首金布（無兒）

多度郡参烟

因支首国益男肆人 国益弟一人

一男末総

兒高主

兒岑成

二男総持

兒淨貞

兒安宗

次安道

三男持成

兒純雄

兒岑雄

次得雄

次生雄（無兒）

次宗雄

兒秋雄

四男淨生

兒富永

因支首男綱男式人

一男稻村

二男渠成

兒黑人

次黒成

因支首臣足男式人 国益從父弟

一男常主

兒真門

次貞野

二男常吉

兒貞村

右、被民部省去貞觀八年十一月四日符僞、太政官去十月廿七日符僞、得彼国解僞、管那珂・多度郡司解狀僞、秋主等解狀僞、謹案太政官去大同二年三月廿三日符僞、右大臣宣、奉 勅、諸氏雜姓概多錯謬、或宗異姓同、本源難弁、或嫌賤假貴、枝派無別、此而不正、豈称実録、撰定之後何更刊改、宜檢故記、請改姓輩、限今年内任令申畢者、諸国承知、依宣行之者、国依符旨、下知諸郡、爰祖父国益道麻呂等、檢抛実録進本系帳、并請改姓狀、復案旧跡、依太政官延曆十八年十二月廿九日符旨、共伊豫別公等、具注為同宗之由、即十九年七月十日進上之矣、而報符未下、祖耶已没、秋主等幸荷繼絶之恩 勅、久

悲素情之未允、加以因支兩字、義理無憑、別公本姓亦涉忌諱、当今聖明照臨、昆虫霑 恩、望請、幸被言上、忍尾五世孫少初位上之苗裔在此部者、皆拋元祖所封郡名、賜和氣公姓、將貽榮于後代者、郡司引檢旧記、所申有道、仍請国裁者、国司覆審、所陳不虛、謹請官裁者、右大臣（藤原良相）宣、奉 勅、依請者、省宜承知、依宣行者、国宜承知、依件行之者、具録于預改姓之人等夾名、言上如件、謹解、

貞觀九年二月十六日正六位上行大目秦忌寸「安統」

參議右衛門督正四位下兼行守藤原朝臣在京 從五位下行左近衛將監兼權掾藤原朝臣在京

皇太后宮大夫從四位上兼行權守藤原朝臣在京 從六位上行掾高階真人 主殿頭從五位上兼行權介当麻真人在京 正六位上行權大目土師宿禰

從五位下行介藤原朝臣「有年」 正六位下行少目阿岐奈臣 ○「讚岐国印」八十六アリ。

3、《書籍頁〇二四一》

〇一九〇 伊州某書狀〇正親町伯爵旧藏文書

付便信、頃年非奉、貴下不審、□少僧外土朽木、成円法印□（爾）被捨太弓末つ利之、雖悔嘆□（無力）益、若命存者、以春初參□、

不敏所申給、而藥師院北□（辻力）倉、被請宿雜器之中、沒器四□

（口）、大折櫃一合、桶三口、長櫃一荷、此□（平力）潜禪師被下別給請文取給、又鶴子下別給、而程遥塚、隔土毛闕□耳、為恥不少、

垂摧迹者宜哉、以狀、

延喜四年十月廿二日、伊州（草名）

謹々上 仁惟少寺主御所

4、《書籍頁〇二八七》

〇一九八 播磨国某莊別当解〇内閣文庫所蔵文書

「可尋有播磨券中、不分明、」

□〇〇庄解 申請本寺政所裁之事

□〇〇依美国図申付注御庄地内新開発田租米被収公愁状

□畝田未開地四至内并五拾七町（已是内他公私無地、）

但從去年被収公新開田式町六段二百十六步

五条又九坊七乃中田五段二百十六步之中『□〇〇』〔本田二段新開

一段二百十六步〕

十九菅長田五段二百十六步『□〇〇図注□〇〇』之中〔本田三段 新

開田二段二百十六步〕

『□〇〇』

廿雀田五段二百十六步『同年図注四段』 之中〔本田四段 新開

二段二百十六步〕

廿一雀田四段『同年図注二段』 之中〔本田二段 新開二段〕『校

図注二段未付』

卅四口小田六段七十二步『同年図注六段』 已新開『校図注六段

□〇〇』

卅三東池尻三段『同年図注二百八十□』 已新開『校図注二百八

十八遺未付』

十二山依田二段十六步『同年図注五段二百十六』 已新開『校図

注五段十六』

廿四棺尾田三段『同年図注三段二百』 已新開『校図注二段二百

八十八』

十六井於田五段『同年図注七段』 之中〔本田三段 新開二段〕

『校図注七段』

六橋方二段七十步『同年図注九段二百八十八』之中〔本田一段七

十二 新開田二百十六〕『校図注九段二百八十八』

六条十方（坊）十二山依三段二百八十八步『同年図注□〇〇』、十三

坪二段卅之中〔本田一段二百八十八步 新開田二段〕『校図注四段』

五条十方（坊）四池尻三段二百十六步 已新開、三東尻田四段百

步『同年図注九段』『校図注九段』

右、御庄田之坪内、未開地随水便、頗以年々発開田也、然則毎年寺

家收納使、称勘益田、其地子米者、被收勘来也、而以去年国收納使

不付国図（志／天）件御庄田之坪々四至之田（止／波）見（乍）、件

新開田等之租米勘取事甚、因茲、於国不被取由愁申、然則不可強取

由之国判給事明白也、而收納使猶乖判旨、不付国図田、称強負取已

了、是尤寺家永愁也、望請寺家政所裁、如是所漏国図庄田、可被裁

付定由、寺家御牒於国被奉上、件庄田、被国図付注定、并所被庄家

付負官稻等被省免、仍注愁状請裁、以解、

延喜八年正月廿五日 庄别当沙弥兼能

「判、依実弁付図帳、即郡下符、本寺返牒、

介橋朝臣「澄清」 大掾安倍朝臣

権大掾藤原朝臣

完道朝臣

大目坂本朝臣」

〇「播磨国倉」印二十九アリ。

5、《書籍頁〇三八七》

〇二六五 伊勢国近長谷寺資財帳〇近長谷寺文書

実録近長谷寺堂舎并資財田地等事

*書入れ部分に仮名を含む（今、多数のうち三例を示すに留める）

同条四疋田里十七坪老段《島》（康保二同）

《書籍頁〇三八九》

同条一当惠里十二・十三坪同六反『十二坪五反メ建仁』〔長和

記十二坪三反二百步下在之、
十六條七新家里十九坪・卅坪惣參段（加新開老段、）定肆段（長和二卅坪四反、廿坪一反下在之、）
（《書籍頁〇三八九》）
（《書籍頁〇三九〇》）

6、《書籍頁〇四〇七》

○二八〇 伊賀国板蠅杣四至紕繆記案○東大寺文書四ノ二
康保元年九月廿五日記

号東大寺所領板蠅杣四至紕繆狀
右件板蠅杣（と）云（は）、是名張河（与ノリ）西方（爾）来会笠間河西方（乃）高峯起（大ノ留）山也、又薦生牧（乃）四至、東限垣田河并壺野小峯、西限笠間河并大河、北限高峯者、又東大寺称杣四至（は）、東限名張河、南限齋宮登道大（大道力）、西限蕪尾野并小藏藏立、北限同名張河并八多高峯者、因之檢案内、紕繆尤多、故何者、東大寺使所陳四至内（爾）、所有田地・山林皆所領也者、件四至内併彼寺領掌者、此四至内（無脱力）敢有他人所領、然而百姓口分并私田地、他人所領亦巨多也、而不抛領件他領、尤一紕繆也、又刀禰等、件薦生牧内、先例專不聞東大寺領之由、加以件杣（与ノリ）東隔一峯并笠間河（天）相去薦生牧之程、已五十余町也者、紕繆数多也、仍為後日記

記使四世清忠王

件四至相去実也、刀禰、

六人部広吉

前権（檢）非違惣（物部）（在判）

田所判官代物（部）

内豎高田総蔭

郡判、依刀禰証署明白、与判之、

惣行事山辺（在判）

大領兼行事依羅

行事多米

7、《書籍頁〇四五四》

【第二卷】
○三一五 某寺資財帳○金比羅宮文書

□□□□寺院一具事

合

一三間四面御堂一字（在庇礼堂、）

正堂戸八具 礼堂東西二具 隔子五間

奉安置四十手单像□□□躰

金色觀音四躰

一躰、尼持寿奉頭（献）也、（土佐守国公真親母、）

一躰、佐土守清原滋藤奉造也、

一躰、源阿古君奉造也、□□□□

一躰、十一面觀音、主水令史調茂真奉造也、

梵王・帝釈四躰

二躰、越中守藤原弘雅朝臣奉造也、

二躰、主水令史調茂□□□□（真奉造也）

三間四面桧（皮脱）葺北堂一字（在礼堂庇、）

奉安置五大尊像一具

已上、主水令史調茂真奉造、
丹像三尺七寸帝釈天一躰、文室連（逆力）子奉造、

右仏、雖在其数、不注別像、

一桧皮葺三間四面礼堂、庇一字、

奉立五大尊像、調茂真願、但御片面改葺、故土佐守

国公真宿禰、後壇奉立古仏在其数、或願主苗胤在、

壇徳寺諸仏在其数、

一桧皮葺鍾楼一基 奉懸四尺五寸鍾一口、

板葺步廊一字（五間）

僧房二字（一字十一間四面庇、一字七間在三面庇、御室東、）

湯屋七間 二間出車宿 五間湯屋（泥、居一石三斗釜一口、）

一寺財經論 大般若經一部（造立住持御願、）

諸論法文等、雖有本員、悉以紛失、

幡六十流（卅四流為鼠喰損、故柔康大德所作、）

遺廿六流在其矣、

行香調度一具（金銅也、）

六寸花瓶二口（金銅也、但件花瓶本三口也、而神護寺七禪師被

借取、以三寸黑瓶二口替取、）

金如意一本、 文插一本、 以金銅莊嚴也、

一山城国

石原田二段（故主計属国相実妻文室逆子施入也、而施入田遺沽

与小槻糸平宿禰已了、施入之口（後力）沽去也、）

鴨河野尻庄卅町 広幡島三段（地子）

小野地二町餘（在券文、） 梅津島二町六段

右兵衛馬場末田島三段百八十歩（卅一坪一段東圭、廿五坪二段

餘、）

木辻島十戸主（七戸主故住持御忌日料、三戸主壇德寺、）

一丹波国

田中庄五町六段餘 小殿庄三町餘

刑部庄三町餘（加栗林、） 山国庄廿五町餘（加林十二町、）

小塩黒田三町 弓削一町

野間庄三町餘 志万郷二町餘

矢田庄二町餘（故住持御忌日料、） 漢子島三段

北島三段二百餘 栗林六段（在国分山本、）

一近江国

土田庄卅餘町（庄司真髮部兼平） 開田庄十五町餘（預道嶋）

富田庄田四町 島一町 山十二町山北

中嶋庄二町餘 島一町八段 野山二百町

一摂津国

服部庄六町餘（使僧勢珍） 能勢田一段（本二段成何（河）、預

秦春本、）

右件寺、元是東大寺僧朝南大法師所建立也 朝南大法師死去之後、

甥印聖法師伝領已經□代也、印聖法師依有在家之口、不修治寺家、

有世間不階、悉以寺物令紛失、因之檀越車持有世・秦米（末力）長

等、仁延大和尚修德修驗之間、有寺家北方常住檀德寺、件□見修驗

行、寺家附属事已了、隨則以延長六年二月八日、專付属仁延大和尚、

諸檀越共行向、実録所有堂舍僧房二字也、破損為宗、雨氣不留、宝

物三尺七寸鍾一口無其矣、尋求質置錢六百元、利并壹貫貳佰文、糸

幡六流、利并七百元也、以忽（総力）錢出取已了、但印聖法師不向

実録、恥於身已以逃散、經數日尋得、令加署名文書等又了、其後依

無住房、以錢伍貫文五間板敷屋一字買立、又□（以力）件屋遷住之

間、御堂不礼拝、只以件房諸人来拜、仍以錢四十貫文、西二条大路

右衛門（乃）小道西右少弁殿尋取一字、買取改建立已了、其後諸

檀越共或加檢皮、或以工部功食、只廿日之内造立也、隨則人々陳云、

我尽身力建立件寺、至末世定成牛馬立所哉、須汝□成御房弟子、御

一生之間為蒙威力、寄進仁延弟子、共可蒙恩勢、但至別当・三綱、

以仁延弟子師資相伝補任、更以不誤者、注其由、故仁延大法師在世

上覽又了、而故住持弟子、或有遠国、或有畿内、然而又可為寺家長

吏、仍故大師一室御弟子中、不求老若、以吏袴（幹力）堪者可為長

吏也者、仍撰定附属忠印大法師既畢、至門徒僧者、隨其品可被成三

綱・小綱等如件、

天元三年二月二日

專当 権都維那「虔淨」

都維那「円真」

寺主「慶延」
上座

權別当「弁康」

別当大法師

檢校大法師 ○印(文不明)八十四アリ。

刀禰大中臣(在名)
刀禰山(在名)

8、《書籍頁〇五〇四》

〇三六七 伊福部利光治田処分状案〇光明寺古文書

養子伊福部貴子

処分充進治田立券文事

合式箇処

一处在志摩国答志郡鴨村三条鴨里廿七小荒治田者

四至在本公驗、

一处在同郡村内十六竹依田壹段佰捌拾步者

四至(限東公田 限南小鯨盧并神戸田/限西十六竹依畠 限北

卯富畔)

此竹依田公驗者、為盜人被盜取已了、出來時、□訴申、公驗

可致沙汰也、

右件治田者、從答志郡司島福直妻子、限直物永財定買得、年來領掌、
更無他妨、而利光之齡及老耄之刻、無一人子、因之甲賀御庄下司出
雲介家女伊福部貴子(遠)、且号養子、且依有父方姪、以所領田地、
分与於貴子已了、但至于租稅者、鴨□(里力)滿葉寺奉造影自願數
躰仏菩薩燈油仏供料施入寺家又了、每年正二月行并時節日料也、於
領作官物者、可為私用途支者也、仍為後代、本公驗并沽券文相副、
処分如件、

長徳貳年拾壹月參日 内豎(豎)伊福部利光(在判)

件治田式箇処、分与貴子実正也、至于租稅者、奉施入滿葉(寺脱
力)実正明白也、仍証署加之、

9、《書籍頁〇五三一》

〇四〇四 東寺宝藏焼亡日記〇東寺百合文書の

(端裏)「□□宝藏目錄(長保二年注進)」

東寺

長保二年十一月廿七日立日記

右事發(は)、今月廿五(乃)夜(を)以(天)、北郷(より)火災
出来(天)、東蔵町(乃)並宝蔵焼亡(仁)、先北宝蔵北面焼之間(二)、
南宝蔵(仁)納置物取出□□□□、
一南宝蔵納置取出物等、
灌頂会具

箇四合之中

一合平文口置 納御袈裟一条

一合泥絵 納紫申一条(在横被、/絵皮包綾表衣一領)

一合黒漆皮 納道具

一合黒漆木 納香炉

已上在長者御封

諸大師影像七鋪

灌頂会料壇供御管一合

水精御念珠一連

鍮石香呂納管一合

御装束納管一合

三衣管一合

玉幡二流納管一合

如意一面

茶碗囊一口

十二天裝束面

吳樂面形等

白角如意一面（入錦袋、但取出間片耳折、）

大幡二流（納□□本筥、）

宝蓋各一蓋

金銅宝塔一基

同花瓶六口之中（三口五智）

□□（銅火力）舍六口

銅象一頭

鏡一口

法螺一口（但在穴、）

□□□（金銅力）六口（□□□、但一□□、）

同閼伽鏡廿口

同盤八口

同御粥鏡十六口（在盤十六口、）

同御汁物鏡十六口（在盤十六口、）

同菓子盤四十七口

同香水鏡二口（在盤□□口、）

磬一面

行香具

金銅篋八口

同訓十六枚

同花瓶二口

灌仏具

金銅太子一体（在多羅、）

同蓮花二本

同花瓶二口

伝法灌頂具一袋

銀阿弥陀仏一体（無光、但座金銅、）

一尺鏡一面（納平文□（管力））

平文置口小筥一合（納□（香力））

蒔繪筥一口（裏綾袋、付長者御封、）

御印三面（一面正印、一面供家印、／一面造印、）

五大尊十二天各一鋪

十二天面十九面（但一面朽損、）

両面錦打懸四領

十二天袴十二腰

同天打懸三領

同天衣十一領

同天撰腰十七枚

菩薩裳十九腰

金塗小鈴七十口

阿育王宝塔形一本

金塗大鈴一口

同柏形八十一枚

暫御經藏奉納物記

銀阿弥陀仏一体

大師影像七鋪

道具納筥一合

納袈裟筥一合

香炉納筥一合

三衣筥一合（納真言造紙等、）

御裝束納筥一合

如意一面

鏡納筥一合

玉幡二流納管一合

已上付長者御封、

右雜物等、随取出注記如件、

一北宝藏納置焼失物等

仏具

金堂講堂大幡卅六流

同天蓋

花口（鬘力）廿四枚

高座前垂二条

花笥五十枚

金銅御鉢六十二口

闕伽器三前（径四寸）

大花瓶四本

大磬一枚

大金鼓二口

御塔流星二果

鉦鼓一面

縫物大幡一流

灌頂足五流

諸国末寺公驗并庄庄公驗等

讚岐国善通寺公驗

参河国龍雲寺公驗

越前国高興庄公驗

丹波国大山庄公驗

摂津国豊島郡垂水庄官省符

四至（限東三条堺 限南三国河／限西六条堺 限北四条一里廿

五坪・五条二里四坪）

在条里

寺家官符等

别当官符

定額僧官符

所司官符

真言院後七日修法記（書／出）

四王寺四禅師疑補記（書／出）

造寺所年終帳

右自餘公驗等、前日（を）以、西院之上（乃）御房渡置（たり）、件

焼失公驗等不能委記、仍為後日、立日記如件

長保二年十一月廿六日 堂達僧（在判）

判納 造寺專当（在判）

别当権大僧都（在判）「雅慶」（裏書、下同ジ） 都維那（在判）

権少僧都（在判）「濟信」 専当法師

阿闍梨大法師安救 法師朝静

上座（在判）「中満」 法師

権上座（在判） 法師空瑜

寺主（在判）「仁満」 法師

堂達法師

文治三年十一月十七日、以正文書写之云、

10、《書籍頁〇六四七》

〇四七五 藤原教子讓状案〇東寺百合文書ヨ

「教子讓状」

上かつらのしやうハ、こみやの御かたよりゆつり給たる所にて、か
たしけなく候へは、かの御けうやうのために、ない大しんのあさり
の房せいけん、なかくまいらせ候、いろいろの御仏をこなはせ給
へく候、あなかしこ、

きうす二ねん十二月廿日 判 〇本文書、久寿二入ルベシ。

(一一五五年)

二、《書籍頁〇六九九》

○五二一 若江田所請文〇九条家本延喜式卷三十裏文書
若江御田所
請条条雜事

一御田結解事

右隨身合文結解、過來五日參上而已、件五日に候近親人殖松宮馬、
頭代仕經營所折統侍(り)、

一召細美布事

右兼仰事以前、雖催仰、去年進故内膳正美最二端返抄 不下給之
由、申□□□更不弁申侍(り)、於有經可進者、隨求得、隨身可參
上侍(り)、只去一(年)布立用之後、交易進之由、諸田堵等注申
也、

一糎事

右蒙仰以前可進上、還依老親所煩遲、同隨身參上而已、
以前注子細言上如件、以解、

長元五年五月一日

武藏守□有經

12、《書籍頁〇七〇〇》

○五二四 播磨大掾播萬貞成解〇九条家本延喜式卷四裏文書
播磨大掾播萬貞成解 申請 非違序裁事

請被任道理裁定、為西(七脱力) 条刀禰安倍清安不知姓豐延等從
者男近正(か) 川原毛父馬一疋并黑鞍一具等、被奪取不安愁狀

右貞成、自彼國參上新司御許之間、件近正從者(とし)天 京上□
間、清安豐延等隨身數多之人、西七条之末(爾) 出来(天) 申云、

件馬(ハ) 中臣松犬丸(か) 以去年六月十三日被盜取之馬(なり) /
と)申(天)、不論是非奪取已了、抑件馬元者(ハ) 彼國饒東郡(乃)

□村□居住(為)る) 大石頼安(か) 馬也、領知已經數年之間、依

有各毛々之要(天)、以去長元五年十二月中近正所領黑毛母馬(爾)

相替(天) 所領知也、皆非無券文、隨馬年已廿餘歲、此程已在地郡

司・刀禰等皆所見知也、又領主顯然也、而被盜取馬(と) 申(天)

偏觸申非違之序、近正之身被召禁者、重檢案内、件馬者、於頼安(か)

許(爾)之(天) 經十餘年(ハ)、隨(天) 近正領知之後又三箇年、而
清安豐延等(か) 所申(ハ)、以(去脱力) 年六月中被□(盜力) 取
申、又近辺之人々或不在(と) 申、或慥(爾) 見(天) 可申之由(を)

申(と) 云々、專無一定者、前後已相違者、為愁之甚、莫(過脱力)
於斯、望請 序裁、任理被裁糺、將知正理之貴、仍注事狀、以解、
長元七年二月八日 播磨大掾播萬「貞成」

13、《書籍頁〇七五三》
○六〇三 大納言房讓狀案〇東寺百合文書ヨ
「大納言房讓狀」
やましろのくに、かみかつらのしやう(か) みのともいふ、事、たま
てののりみつかよせふみ、いけのもんそくして、おほやなきとのの
ひめゆやの御所へなかくゆつりまいらせ候ぬ、ともかくも御心にま
かせられ候へく候、
ちうきう四ねん正月十日 (在判)

14、《書籍頁〇七五八》
○六一六 山城国乙訓郡司解〇神田喜一郎氏所藏文書
(端裏) 「長岡免判郡司二枚」
乙訓郡司解申請 按察大納言殿 政所御告書事

壹帛(可被載早令停止色々切物、免除長岡庄田畠臨時雜役狀、)
右今月十九日御 告書、同廿八日到来云云、所請如件、抑不可沙汰
申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

申所以者、未知給 御庄之由、又不下給坪付、暗何坪田畠(と) 不

知給、然而偏依怖申 御威、可停止色色切物臨時雜役、又從無 仰前、專無切充公物、不充負臨時(雜役脫)、但早被下給田畠坪付、任町段步數、可被令領知者也、号件字隱岐殿坪内田畠一坪也者、所言上也、仍注在(狀脫力)、所請如件、以解、

長久四年十二月廿八日 郡司凡「輔光」

○印(文不明、郡印力)十五アリ。

【第三卷】

15、《書籍頁〇七七一》

〇六三七 僧長仁公驗紛失狀案○法隆寺文書三十六

(端裏)「德万等作畠紛失公驗案文」

〈案文〉

僧長仁解 申請在地所由証判事

請被殊任道理加証判、盜人盜取私所領作手畠、為永代公驗立申紛

失狀、

在大和国平群郡坂門郷八条九里廿九卅兩(坪脫力)之内畠四段

〈字小泉〉

四至(限東中垣 南中垣/北大路 西中垣)

右、紛失狀者、件畠相伝作手処分帳并作手私券文等所宿置於野狛延重私宅、而之間、以永承元年十月廿七日夜中、延重宅(仁)俄強盜入来(天)、内財雜物等之中(三)被取加件畠文書等所被盜取也、因茲為後公驗、所愁申於在地保刀禰御前耳、望請、在地所由被加証判、將仰正理責、仍注在狀、以解、

永承元年十月廿八日 僧長仁

「畠四段之中西類壹段分充紀守女已了、殘三段得万実作也、」
件延重私宅強盜入(天)負物等盜取事、同姓愁申、但内子細不知、盜人入事白明也、

在地刀禰

和(在判)

上野掾子部々々
周防掾三統々々
甲悲介三統々々
惣刀禰春日宿院司散位藤原朝臣々々

16、《書籍頁〇七八六》

〇六六二 安芸国高田郡司解○嚴島神社文書

高田郡司散位藤原守滿解申請国裁事

請□殊任道理、裁下三田郷并私領別符重行嫡男守頼讓与子細狀謹案事情、守滿臨八九十歳(タリ)、因之且所讓与也、公驗相副、为国判申請、注在狀言上、以解、

永承三年七月二日 散位藤原守滿

如解狀、任公驗之理、守頼永以可領知之、

判

大介中原朝臣(花押)

17、《書籍頁〇八五五》

〇七二八 摂津国猪名荘司解○内閣文庫所藏摂津国古文書

(端裏)「一結雜文書(百通)」

猪名御庄司等解 申進申文之事

請被任殊道理裁下、秦成重去々年并隱田御地子米未進九十余石子細愁狀、

右、謹檢(事脱)情者、(背脱力)往古旧例、御庄田都等寺家御地子米追年致升合之未進、令徵納(と)云々、而間、前別当(有慶)御入(爾)、件秦成重二箇年之間、寺家 御領田(を)九町余(を)隱田(志/天)、于今無弁申事、而間當時御入(爾)、件成重所負御地子米九十余石代、任政所仰事旨、件成重作田等札立了、即日彼成重

無延申事（志／天）、所押苜稻九十余束、以先日所苜積百五十余束也者、望請寺家仰旨、任道理令裁□□□□仰正理貴由（を）、弥寺家仰事勤仕、仍注事□□□

天喜三年九月十二日

專當□□

案主秦（花押）

御庄司凡河内（花押）

18、《書籍頁〇八六八》

〇七五六 丹波国後河莊田堵等解〇百卷本東大寺文書九十五号

丹波国後河御庄田堵等解 申重請本家政所裁事

請被任前例、停止国宣鴨頭花紙伍拾枚勘責、国使判

官代為奈部兼安・県刀禰郷司使從類率、入乱山野追責不安愁状、

副進国符壹枚

右田堵等、謹檢案内、此御庄者無一步公田相□（交）事、何況大日如来御点顯給（与／り）以後、肆百歳及（多／り）、而未如是国事雜役更無被付仰事、何當時御任始被付責国役、就中当国船井郡北県八幡宮寺御領所志津禰御庄、多紀郡西県住吉御領小野原御庄、此等御領所免除已了、而此庄于今未被沙汰間、国使勘責甚以無為方、未例如是国役被免除者、何御庄子等跡□也、望當時長理天下 無并、因之御任間蒙免除恩裁、永代之大般若一会并政所御役為勤仕、仍注□子細言上如件、以解、

天喜三年□□廿八日專當出雲掾菅原（花押）

別當□□介紹

下總介紹（花押）

權檢校出羽介紹（花押）

旧老田堵備後掾紀（花押）

美野介紹

大和介紹（花押）

出雲介紹（花押）
信野介紹（花押）

19、《書籍頁〇八七七》

〇七八一 伊賀国黒田莊工夫等解〇佐佐木信綱氏所藏文書

『檢去天喜二年名張郡檢田累帳、注件黒田柚住人等并公郷内所被沒官作田四十六町五反、（長屋村十八丁百八十步、下津名張村五丁五反小、築瀬村六丁二反大、矢川村十六丁六反大、）者、其内所被苜納十八町六反百八十步郡司則佐所領給廿七町八反百八十步（長屋村十八丁百八十步、築瀬（村脱力）一丁四反、矢川村八丁四反）者、其内至于則佐預廿七町八反百八十步者、乍在収公内、不進其穫稻、然而沒官内也、其外各以前苜取限者、被注付彼作人名已了、然而有事牢籠之間、依不弁其官物、今年准傍例、所徴下也、更非収公田之内、所申既左道也、裁許須隨判定、

大判官代桃原（花押）

「下稅所」（花押）

目代学生紀（花押）

黒田御庄工夫等解 申進申文事

請被任 道理、不承引久富徳丸等名御封物二百五十五石余愁状、右謹案物情、以去天喜二年七月晦（よ／り）始、四至古川内早田稻苜取之次、八月廿五六日（よ／り）檢田之程、数千夫兵眷属引率、古川内住宅、兩日十六字焼亡了、三百人夫兵眷属坪々入立被苜取、守殿御坐十五六日也、其成任則任夫兵等、遺留二三十日、苜那木捨取也、僅田堵見付（天／ハ）打追散（天）逃亡、皆悉了、【也】廿五六町苜取那木給也者、以何物充下御封物哉、愁尤甚、莫於過斯、望請任道理、御使裁定件之田且々久富并徳丸等名御封物国前被返、不被承引、兼見物令徴給、田堵之慰愁吟、仰 道理之貴矣、仍注事状、以解、

天喜四年三月廿七日 物部時任

庁頭掃部延時

庄司藤原「政頼」

「判

如勘状者、不徴下収公田之内官物、只杣内雜人等苜取内、所徴下所当官物也、早任徴符数、早寺家御封方可弁申也、不可有遁避者也、

大介小野朝臣（守経）（花押）」 ○「伊賀国印」ハアリ。

20、《書籍頁〇八八六》

〇七九七 東大寺五師等日記案〇東南院文書二ノ五

（端書）「誓定日記案」

天喜四年四月廿三日午時立日記 「案」

右、事発（波）、今日辰時許（遠）以（天）、俄（仁）寺中（乃）北（乃）岡（与り）、甲冑齒（藺）笠等（を）著（之）、弓箭刀鉞（を）帶（之）天、騎兵歩兵等七八十人許出来（天）、北室（乃）馬道（与り）東第二（乃）房（を）打囲（天）、或（波）馬（仁）騎（り）、或（波）步（与り）馳騷（天）、声（を）高（之）天、喚叫（不）、此（を）聞（天）比房近辺（乃）者驚怖（天）、側（仁）聞（支）、窃（仁）見（礼ハ）、寺中（乃）人不可恠思、是檢非違使（乃）庁宣（仁）依（天）、犯人（を）追捕（須留）也（止）云、而間（仁）房（乃）内（与り）頸（を）取（天）出来、相次（天）身（仁）は）繩（を）付（天）、鎮守二十五所（乃）岡（仁）引捨、如此間、専寺他寺（乃）上下諸人等、市（を）成（須）、爰（仁）寺中（乃）所司大衆、此由（を）陳（せむと須留）処（仁）、弓箭（を）以（天）諸僧等（を）射散（之）天、敢令進止（須之）天、件頸（を）隨身（之）天、去了（奴）、其後大衆集会（之）天、彼（乃）房（を）見（礼）は、血肉流散（之）天、仏像経論（を）悉（久）汗（之）、房内（乃）隔等（を）打破（天）、敢其（乃）隱（礼）無、退（天）事（乃）子細（を）問尋（礼）は、件被殺害者（は）、是犯人頼正（加）子也、而（を）件（乃）

房（乃）住僧（を）、事（乃）縁有（天）相知（天）、窃（仁）通來間、窺來（天）殺害（世留）也（止）云々、但此次（天仁）被取（たる）【物等（たる）】物等、綿衣二領・紬衣一領・三重表衣一領・同裳一摺・甲袈裟一条・夏表衣一領・同裳一摺・五条袈裟一条・狩袴一摺・自餘（乃）損失（乃）物、其数（を）不記、仍為後日記、

日記申

五師

伝燈大法師位「長深」

伝燈大法師位「壤久」

伝燈大法師位「濟快」

伝燈大法師位「觀円」

伝燈大法師位「貞縁」

所司

都維那【從儀師伝燈大法師位】伝燈法師位

寺主伝燈大法師位

権上座伝燈大法師位「聖好」

上座威儀師伝燈大法師位「慶寿」

21、《書籍頁〇八八八》

〇八〇一 東大寺起請案〇百卷本東大寺文書九十五号

縦大仏放言加留給（と□（も））、捨身命不□□為憂矣、

可牒早速（仁）七大寺及延曆寺石清水□□、依別当（ノ）横法謀計（仁）、□（不）可遲遲、其所□□寺別当与非違別当同心之由、

天下因□□委細不可信尽矣、

若寺中寺外之衆中不【共】云供奉輩（は）、不簡上下臆、寺中（遠）

可掃、以先日別当許（仁）送（多流）末寺（の）条、依（テ）謀計

別当妄語（に）被留（天）、于今不為御汰沙（沙汰）、甚不覺也、
一大衆諸共上道（天）、先（ツ）寺別□可問是非、隨形可行善惡矣、
次可參 内□□殿、

一 国王大臣等可憂様先取一人□□只（に）非違別当（ハ）、可当流罪
（に）、雖源頼親（なりと）、依山階寺之憂□（に）被流、依安
樂寺憂、被取帥（ヲ）、余寺之例示也、豈被捨□寺哉、

一 唱七大諸寺衆（ヲ）、同日参会（して）可憂申、專更專寺憂不成後
唱、諸（ヲ）憂支度不可有、

一 有所司（ノ）以從者、寺中（にして）殺害せさせたる者也、今日
まで平安にあらずる、甚非□□矣、

右、八箇条支度如件、抑若寺僧之内比度此有不為憂者、為□不念寺
也、若不念寺者、永不可住寺、隱大仏八幡鎮守諸大明神祈念頭南北
兩京誹謗、何却為遮波哉、現在必可招災難、未來必墮在阿鼻地獄、
雖經無央數劫、不可聞三宝名字、永可斷仏種処也、来朝仏法此時始
絶（エ）、聖武天王御願此度始滅処也、是以諸山聖人為仏法啼涙、田
舎道俗哭失威（ヲ）嘲哂、非哉痛哉、釈衆是豈非閻室（の）一燈（の）
俄消哉、甚可悲歎悲歎焉、

天喜四年五月 日

惣行事 八幡大菩薩

判 氣比氣他

判 五百余所

判 廿五所

判 □大明神

22、《書籍頁〇八九〇》

〇八〇四 橘成友起請案〇臺明寺文書

（端裏）「橘成友状当山傍示之事、此案文稅所□□□」
橘成友謹言

不可自今以後狩獵臺明寺山禁制殺生塚須波留加多（毛）止（の）
西訓木尾より内佐古状、

右、禁制傍示之塚、元者は須波留加多（毛）止也、而今傍示之近、
猶不可狩獵件訓木尾内之由、山内住僧所令制止給也、隨制止旨、自今
以後不可狩獵件訓木尾内之状、起請如件、仍勒事状、謹言、

天喜四年六月廿九日

橘成友（在判）

23、《書籍頁〇八九三》

〇八一二 山城国玉井莊下司田堵等解〇東大寺文書四ノ二十八
（裏書）「下公文所

任先例可下知 □覺」

玉井御庄下司田堵等解 申請 東大寺 別当御房政所裁事

請殊被蒙 鴻恩、任先例裁定、分水被押留不安愁状、

右、謹檢 案内、自往古、三方分下充水、円提寺別当并石垣之御庄、
件両庄押留、敢不下給条、尤無為方、於無水不及力、巨多水有（那
加ら）不下給、当御庄之田皆悉早損無為方、悉損亡者、以何物百凡
共并御寺所役謹仕哉、雖令度代此由申、無更其御裁定、仍弥□□
政所御沙汰不候者、御寺公文所□□御敷、經代代□更其□□田
御庄、何無分水、□□御庄住人等皆悉当利□□哉、望請恩裁、
早任先例□□將御勢貴仰矣、以解、

24、《書籍頁〇八九五》

〇八一六 東大寺權上座聖好請文〇東南院文書二ノ五

謹請 官宣旨老紙事

被載可召進隱宿犯人房主僧事

右、依宣旨并御教書旨、大衆所司等集会於中門、召件房主僧之處、
難尋得、而間望晚分散、而件僧以明朝罷出、申云、至昨日者、他行
間不參仕也、但蒙政所大衆御恩、至于今日所廻候也、愚宿犯人促罷

出公庭、何遁其王哉、更以神明奉為証所不申也（と申）、随大衆等件僧罷出事、重為御寺大恥也者、房主僧大衆等所申旨如此、以此由可被洩啓 御前、聖好誠惶誠恐謹言、

天喜四年九月十日 從儀師「聖好」解文

25、《書籍頁〇八九八》

〇八二二 丹波国後河莊司解〇東大寺文書四ノ四十

（端裏）「後河庄申文」

後河御司等解 申□（望力）請本家 政所裁之事

請被令早停止国宣鴨頭草□□忽可弁造（進力）□□責不安愁□右、件御庄、謹安（案）物情、大日如来御点定後三百□歳及、而其間今未一分不為国事勤仕者、雖然、當時守殿公地相交御庄巢□□庄無例国事所被充仰、已大非道也、□□速停止（天）、御庄被令安堵、望知正理貴、御□□□□事由言上如件、以解、

天喜四年十一月十四日 □□□□

惣檢校□□□紀（花押）

26、《書籍頁〇九一五》

〇八五〇 陰陽允惟宗某申文〇東大寺文書四ノ八十二

（端裏）「陰陽□□行真、美作返抄申文」

「今月分十三日可行申例事、恐恐謹言、返抄四十石給了、」

言上

請申美作国返抄四十石事、

但淀定、字可令注付給也、（運賃料也、）

不然（ハ）必十二石被減留哉、

十石内、三石国司所留領也、

右、能申成給（者）、被下給之由、返返所悦申也、此恐此悦（花押）

參上而已、早以此趣可令言上、誠惶誠恐謹言、

（天喜五年）二月十日 陰陽允惟宗（花押）（狀上）

進上 都那師御室（參）

27、《書籍頁〇九一七》

〇八五四 安芸国高田郡司解〇嚴島神社文書

高田郡司散位藤原守頼解申請国裁事

請被殊任先判旨裁定、三田郷并別符重行田畠公驗相具（シ天）嫡

男守遠讓与子細狀、

右、謹檢案内、於七郷内三田郷者、依為守遠住郷、且別符共所讓与也者、或古河合或荒野□（新力）開、年来住人等領田畠、以見直物、買取券文顯然也、重為子孫、注子細言上、以解、

天喜五年三月十日 散位藤原守頼

依公驗讓狀明白、以無他□（妨力）、守遠可領知之也、

判

大介源朝臣（花押）

28、《書籍頁〇九一七》

〇八五五 龍泉寺氏人等解案〇春日神社文書十四

龍泉寺氏人等解申（請脱力）重河内国前并在序官人御証判事

請被殊蒙 鴻恩、任道理加判氏人先祖宗我大臣建立龍泉寺处处領地參箇処子細愁狀、

一寺敷地山内參佰町 在河内国石川東条 公驗面載坪々谷々

四至（東限檢嶺 南限手懸太輪 西限里田嶺 北限坂折小野田）

一紺口庄水田等氏人私領家地

在陸田里式坪陸段 參坪七段 肆坪伍段 玖坪伍段 拾坪捌段

拾壹坪式投 拾五坪壹町 拾陸坪伍段 拾七坪七段 式拾壹坪壹

町 式拾式坪壹町式拾玖坪七段 木屋戸里伍坪七段 拾式坪肆段

拾壹坪伍段 下尻社里拾玖坪捌拾步 參拾坪貳段 參拾壹坪五
段大 下来堂太尾南北拾町

一山地壹処

在古市郡 石川兩郡 科長郷

四至 東限春毛谷 南限比女御墓并御廟山西小河下太河于西限

太口河 北限赤馬谷并西尾太河于

在谷々水田 度々女谷 仁賀谷 宮毛谷

麻尾谷 葛根谷 九埋谷并西四至内田畠共

右、謹檢 案内、件処領地氏人等先祖宗我大臣所領也、仍自往古
于今未無他妨、而以去承和十一年比、氏長者公重不慮之外、為強盜
殺害、住宅燒亡之次、調度文書等同燒失畢、因之当初殘氏人等僧等
注子細、以去寛平六年三月五日国前(二)訴申候日、任道理処処田
地等可寺領国判明白也者、望請 早国前并在庁官人、任先例理、被
令加証判給、將仰正道貴、且又後代永為全公驗也、仍勒在状、謹所
請申、如件、

天喜五年四月三日 龍泉寺氏人宗岡公明(在判)

權俗別当宗岡朝臣(在判)

俗別当散位宗岡公用(在判)

件氏人等之訴申所々領地、自往(于脱力)古今寺領由其有聞、仍在
庁官人等加証判之、

惣判官代河内(在判)

前介菅野(在判)

散位源朝臣(在判)

散位源朝臣(在判)

依有在庁官人等証判、加 国判、可寺領也、
守藤原朝臣(在判)

29、《書籍頁〇九二一》

〇八六四 大和国清澄莊解案〇東大寺文書四ノ二十二
(端裏)『清澄庄家伝教事』

東大寺御領清澄御庄解 申請 本家政所恩裁事

請殊蒙政所恩裁、早任道理、可被裁下、御庄内田(二)藥師寺權
別当隆經大師被申下内大臣殿御使、立札制止不令苻愁状、

立札坪坪、京南一条二里七坪十七条廿里廿八坪

廿九坪者、

右、謹檢案内、御庄田刀等追年耕作、隨御寺勘定并濟地子等、更無
他妨經數代也、而件坪坪、以去八月廿八日、内大臣殿御使罷下、立
札彼殿御領之由札制止、作人等雖愁歎不能苻納、漸及損失、而如此
無賴之輩如何方術并濟御寺地子、勤仕雜役哉、仍言上如件、抑退承
案内、藥師寺之權別当隆經大法師被申下御使被制止云々、望請 恩
裁、早任道理、令苻將徵納地子矣、仍注事状、以解、

天喜五年九月三日 御庄子等僧公縁

僧念清

僧源縁

僧光慶

僧祐身

御庄司等專当秦是近

庄別当僧道賢

30、《書籍頁〇九二六》

〇八七三 越後国石井莊前司兼算解〇京都大学所藏東大寺文書
越後国石井莊前司解 申請 本寺政所裁事

言上条々雜事

一請被裁免住人古志得延愁条

右、件得延元者、以去永承七年、兼算為彼御庄司、罷下之間、庄
務執行之程、件得延兼算之許捧名簿、從比郷来伺、仍来住成田堵、

朝夕召仕之處、付前司目代藤原成季、漸訴兼算不能、或時者兼算從者（を）馬盜人（二）申懸（天）愁国司、或時者乍從者放言為宗、就中前司件御庄如本可所知之由、成庁宣被返預之處、依兼算執行、為不隨、地子乍負、差信濃国、數多百姓諸共逃去者、為令且擱留、且地子弁濟、擱留（を）所訴申也者、注子細言上如件、

一前講師秦慶愁条
右、件秦慶本為御庄内居住、乍安堵、成郡司光元因縁、所耕作田（を）郡司諸共（二）成公田乃至国分田、御庄方一步田（を）不令合適、合坪等者地子物為遁避、又者以田人之作畠、徵其地子、全不弁進本家（二）、所弁進田率綿等、国内丁別（二）充三兩所徵取（を）申請国司（天）、本寺（二）徵弁進之處（二）、從本訴宇弁進之由、乍居住為本庄亡敵也者、依如此非常之熱（を）不承引之間、已向背者、移住他所、仍言上如件、

一去年御庄田地子沙汰条
右、件御地子須先弁進之處（二）、任去年御下文之旨、招寄浪人從隣国（天）、令開発荒田之間、得延丸弁三〇余地子稻（を）斤定（之）
/天）下農料、所耕作開田当廿余丁也、然間先為令申案内、以去年付永蓮黑鹿毛父馬一疋、付草便可將參之由、解文進上、隨以去四五月擬參上之處、依得延訴、為良真使被口遣之間、重又守御許被奉下御消息等（天）所凌礫取馬四疋・殖田三丁六段等也者、注子細言上如件、

一去同三年地子条
右、件田地子、須曲理弁濟者也、然而守御庄惣檢交兼知者、於隣国浪人等成恐逃返本国（之天）不作口（一力）步田、然其年本田五丁三段判、明年被行加作者并六丁九段三百步敷、依無見作、前司雖被徵下田率綿、以之由所訴申、可然之由被判定、任理已以免除者、但被不除免判事者、為彼代所申請也、仍言上如件、
以前条事言上如件、望 請政所恩裁、一々任理被裁定者、仰貴恩之

貴、（企）御庄興福之謀、仍注事狀、以解、
天喜五年十二月十九日 大法師「兼算」

31、《書籍頁〇九四二》

〇八九一 山城国石垣莊住人紀某日記〇東大寺文書四ノ九十一
天喜六年八月十日立日記

右、事発（波）、御庄住人紀末志良比女、以去四月廿二日昼（を）、同住人笠助経（か）私宅（爾）罷入（天）、両面（乃）袖桂一領鏡一面等盜取（天）、那賀郡（之）老母（か）許（辺）罷越、然間有風聞、相尋程（爾）、件女母（か）許（爾）贓物共（爾）有而、糺擱（と）為間（二）、其後高野（乃）政所（爾）雅源都那師（と）申僧（乃）許罷竈（太ノり）、因之本処（よノり）尋（天）、二三度請乞（二）、件雅源 大師之御威（を）募申（天）、件盜人（を）不出、仍立日記
記申石垣御庄住人紀（花押）

32、《書籍頁〇九九六》

〇九三〇 伊賀国玉瀧杣賀茂延安解案〇東大寺文書四ノ八
賀茂延安解 申請 本寺政所 恩裁事

請被令殊任理也僧增仁讓文、御杣惣別（当脱力）職勤修愁之狀、
右、延安謹案事情、數年之間、件增仁御杣別当之識（職）勤仕、而及于年八十不堪起居者、至于延安、增仁養子也云々、因之任讓文令預執行間、尊勝院使朝源（を）成別当、所令所知、尤不安者、猶如增仁口狀、延安（を）惣別当之識任補（を）、御杣司千覚併真末許被仰給、尤所仰也、永被令停止朝源別当識、仍注事狀、以解、
康平二年七月廿五日 賀茂延安

33、《書籍頁一〇二六》

〇九八一 僧蓮照日記〇吉田文書一

康平五年十月十三日立記

右、事發者、法隆寺〔乃〕蓮快五師、大原頼本〔加〕手〔与り〕、広入道僧延元〔加〕買地、平群郡八条九里卅四坪五坪等併同寺〔乃〕五師真増〔乃〕所領□地等〔を〕買取之、□□〔仁〕被語合〔天〕云、真増〔加〕所領地〔乃〕公驗坪付等〔者〕、故五師南一〔乃〕御領也、而〔を〕故南一〔乃〕五師□仏□□〔仁〕被度充〔る〕□□公驗〔乃〕類地〔なれば〕、見合〔天〕、坪付〔乃〕次第〔を〕知〔らむと〕思也、其公驗取出〔せと〕被申〔志仁〕、件公驗〔者〕、只今〔ハ〕蓮照〔加〕許〔仁者〕無〔志〕、藥師寺〔乃〕先別当□□□御□□□置〔太り〕申〔加者〕、空〔久〕被還〔天〕後〔仁〕、亦數日〔を〕經〔天〕、彼五師蓮照〔仁〕遇〔天〕、彼公驗〔を〕取寄〔太り〕、□被問〔加〕□取寄〔天〕□□□語申〔加者〕、以去十月二日未時〔天〕、又真増五師蓮照〔加〕私宅〔仁〕被來〔天〕被申〔天〕云、故内供禎泉禪師〔乃〕□闕日〔乃〕何〔乃〕日〔と〕云一定〔を〕不知者、彼闕日〔乃〕日為知〔仁〕、其公驗〔を〕見〔むと〕被申〔加者〕、蓮照彼公驗〔を〕取出〔天〕奉見之間、為要事〔仁〕菌内罷出〔太る〕程、真増五師蓮照〔加〕公驗〔加〕案文〔を〕書取併公驗〔乃〕文字〔乃〕点〔を〕書損〔志弓太ひて〕後々〔仁〕相論成〔さむとす〕、仍為後代立記、

日記申僧蓮照

件公驗□□字点等被損事、見逢人々、

僧永真

僧行朝

僧善照

僧□□

安部〔草名〕

被楷失所所、本公驗面四至之上三四字許、西四至墓字点、北四至山字本□□□

34、《書籍頁一〇三一》

〇九八九 朝妻寺上座僧某田地壳券案〇法務御房初任次第紙背文書

謹解 申壳買処地立券文事〔但百□〔直力〕絹漆疋請了、〕

明寂処分西一段分、

合田老段 四至〔東限渡併丁 南限登道 西限同寺田 北限岑〕

右件田〔有四十一条二里十八二段、〕朝妻寺田也、故別当御為四十九

日法恩料所壳也、但於地子物者、御寺令知行給〔し〕、而今依要用有、

為其料充与、永尾張今吉僧長尊壳渡、仍券文如右、以解、

康平六年七月十五日 朝妻寺上座僧

但尾張今吉僧定万処分田式段者、

但此林除尾張高松、

35、《書籍頁一〇四一》

〇一〇〇八 讚岐国曼陀羅寺僧善芳解案〇東寺百合文書

修行僧善芳解 申請 国裁定事

請被早禁断善通寺曼陀〔羅脱〕寺南之外門在三俣山、所名字

高色皮志髮山伝也、而件山中大師入給点有驗靈地、為上求為下

化衆生、伽藍建立給、又在辺大師御行道所、而件字名施坂寺、

件道場大師如意輪法所勤行給〔ける〕也、即大師入滅世之後、

於破壊顛倒後、至于今無建立輩、為繼大師之御遺跡、以去年即

道場所於穩〔隠力〕居、如本以草葉建立、為果宿願、暫間経廻、

而多度・三野兩郡悪業人等朝夕罷入乱、獺野鹿鳥禽為殺害事、

敢不可称計、而如此悪人每見滯難禁、嗚悲乎、觀殺生果報、現

世碎心肝山林、迷命根野中、後世受結業无間、尽果報鉄林上、

更自他俱无益事也、又大師御仏法弘宣砌、当国当郡高名殊勝、

最上究竟勝地也、何有心輩此峯企殺生之志乎、速此兩郡獮人等為禁斷給耳、

一曼陀羅寺政所可被為免離御堂所領之田畠等事

副進先司与判一通、而件寺家辺無緣聖人建奇宿住給、便即田畠等充行丸部則時・秦守任等、於同心橫帳、無礼放言、非道非理為宗、為宿住諸僧等、御依故不候、住不給事、惟似為永大師御弘法遺跡禁斷、望請、悉此由給、被与判者、大師聖靈之御助成人併仏弟子生々世々善知識來縁也、速此利仰致免離敷、

右謹檢事情、且為繼大師御聖靈仏教旧跡、且又為弟子上求下化弘誓大願志也、仰乞乎、三宝境界大師聖靈、仏法外護者守殿応道受給、為天下大平万民与樂国司安穩民家保稔息災延命御祈禱、件惡人等獮早々禁制給、仍為後々代々証、故注事狀、以言上如件、

治曆二年七月六日 修行仏弟(子脱力)善芳

裏書

件兩寺是弘法修行之砌也、受人界生之者、敢不可成汗穢、何況於殺生乎、在地郡司承知、一切停止之、在御判

36、《書籍頁一〇五一》

〇一〇二三 伊勢国大國莊司解案○東寺百合文書京東寺領大國御庄司解 申請本寺裁事

請被殊任 解狀、令聞案内祭主殿、申給請神宮使、停止諸寺人人或庄田請作、動成治田畠、被相論不安愁狀、

右、如稻木大夫隨身庄公驗本寺公驗等者、專一段一步不可有成願寺田・釈尊寺土田御齒、有高・有任・範任朝臣・為任・用常甲乙人人等領田畠寺不可有、件大夫公驗二兄国里卅四坪・卅五坪相論之由、件大夫為庄前上司外、子孫隨身、而件沙汰之日、大神宮檢非違使在地有司郡司共見候者、同本寺公驗皆代国司旨(免力)判請也、

御庄欲返置、多人歎奈_レ者、惜留不出立(を)、偏庄司等不入田(を)／＼称庄田入田、皆為人人寺寺領田所掠領也、放詞所被申分明也、同者御寺公驗正文下給(天)可沙汰者也、不然祭主在京御座者、令御寺公驗次第文書隨身対面之次、祭主殿令見奉(天)成公判、上件諸寺甲乙人人謀計論田永被停止、将仰正理貴、仍言上如件、以解、

治曆四年二月廿八日

庄下司寂安

37、《書籍頁一〇八八》

〇一〇七七 讚岐国曼茶羅寺僧善範解○東寺百合文書二判、曼陀羅寺事、如善通寺定之、在御判

漫茶羅寺住僧善範解申請本寺政所裁事

請被蒙 鴻恩、善通寺別当不可進退漫茶羅寺由、裁定給、留跡可奉修造大師御行道所字施坂御堂併漫茶羅寺胡麻堂僧房等子細之狀、

副進 年來修造供養願文併勸進知儀(識)帳等

右、善範謹案 事情、件伽藍大師御建立之後、依無久修理之勤、破壞顛倒盛也、因之、以先年比、隣国彼境罷向、材木買求、如形修造、又昨今日重擬修理間、別当延与罷下、致方方責、寺家向日供給疎惡之由勘当、一夜間三度令供給、徵取物見米一石・大豆一石・勝命麦一石・綿衣一領准直十石、又下向以前使徵取麦二石併十五石也、如此間、難遂修造本意、就中自備前国、語度令居住工三宅氏近(を)擬擲取、陸礫仕程、本国罷帰仕、無為方者、言上如件、望請本寺政所裁、留跡、如本懷為修造、仍注事狀、謹以解、

延久四年五月十四日

僧善範

38、《書籍頁一一〇八》

〇一〇八七 讚岐国善通寺所司解案○東寺百合文書ウ(端裏)「讚岐末寺」

讚岐国善通寺所司等解申請東寺長者 御室政所裁事

請被特蒙 鴻恩、且任道理判定、且替別当成下給、為当寺別当僧

延与去年十一月拜堂、隨即年寺領田畠地子物皆悉徵取、不令充

用方方例立用、子細愁之状、

副進、前法務僧正御判併国掌御判例立用勘文等、

右寺者、此弘法大師御先祖建立無止前跡也、仍代々之間、東寺長者

所別当成下給也、而件延与(ハ)去年別当職罷成、冬時倒來寺家、

即年田畠地子物恣任心悉徵取、不致仏神事之勤、因之以去二月之比、

件寺所司等於參向前法務 御室、此由愁申處、可為宗仏性燈油修理

破壞之勤由、御判已了、雖然、件御判之後、未致一塵之勤、乍自身

京候、寺(ニハ)付目代法師、又今年地子物(毛)全徵取、半分(ハ)

令運上京(与)、半分(ハ)十二月之内鎮西下向粮料可割置(と)、

昨今日申下由、有其聞云々、仍乍驚注大略、言上如件、望請 御室

政所裁、可然以因果所知正行之人、被別当定下給、令興隆仏法於 大

師前跡、令繼 慈尊之出世、仍言上如件、以解、

延久四年十月廿八日 小寺主法師

上座大法師智遲

都維那法師快仙

寺主大法師

39、《書籍頁一一〇九》

〇一〇八八 讚岐国曼茶羅寺僧善範解〇東寺百合文書ユ

漫茶羅寺住僧善範解申請東寺長者御室政所裁事

請被特蒙 鴻恩、善通寺更不可擬進退漫茶羅(寺脱力)由、判定

給子細愁之状、

副進、代代御判等、

右善範、謹案事情、不可為善通寺別当□□(進退力)当寺所以者、

件寺大師御建立之、多歲押移破壞顛倒畢、仏像為風雨朽損給、其時

善範勵無力、於諸国勸進、以善知識之力、數数堂舍如本奉建立、今

未其勤、而不致一寺修理之勤(を太仁)、善通寺兩所押行、僅地子物
徵取、不令充用修造、甚非常事者、言上如件、望請本寺政所裁定、
任道理被免給、近年重同修造為旨、仍注事状、以解、

延久四年十月廿八日

僧善範

40、《書籍頁一一一三》

〇一〇九一 後三条上皇告文〇石清水田中家文書

維延久五年歲次癸丑二月乙卯朔二日丙子(爾)掛(毛)畏(き)某

大神(能)広前(ニ)太上天皇恐(美)恐(美/も)申給(へ/と)

申、去年(乃)冬(乃)比(よ/り)心神不豫(シ/弓)、茲年(乃)

春(爾)及(末/天)、間以不宜(寸)、若是神明(乃)成崇(シ)

給(ヒ)、亦尚風熱相尅(せる/加)所致歟、抑理政(セシ)時、聖

化難施(具)、撫民(シ)日、彝範多滯(礼り)、日夕(乃)恐(り)

寤寐(ニ)積(れり)、仍早(具)遁俗(之)思(ヲ)抽、礼(ミ)

保年之謀(乎)企(多/り)、神明縱成崇(シ)給(と/も)、謝(す

る/爾)随(天)施冥助(天)、風熱縱相尅(せり/とも)、祈(爾)

依(天)令解散(め)給(へ)、因茲吉日良辰(を)択定(天)、官

位姓名(乎)差使、奉出給(布)、此状(乎)掛畏(き)大神、平(久)

安(久)聞食(天)、霧露無飯(具)、身体安穩(仁)、簾帷無動(久)、

風塵鎮靜(シ/天)、常磐堅磐(ニ)夜守日守(爾)守恤(美)掌給

(へ/と)恐(美)恐(美/も)申給(へ/と)申、

殿上人為使

作者左中弁実政

41、《書籍頁一一二六》

〇一一一三 播磨国赤穂郡司秦為辰解案〇東寺百合文書中

荒野開発輩、可抽賞者也者、無他妨、

永可領知之、 在判

赤穂郡司解申請国裁事

請被特依且公益、且以勲功賞、令領知当郡久富保字庄荒井溝荒田狀、

步危上老所、拾捌町余、当作伍町式段、字抽井、

四至〔東限字尾朝路 南限字童堂／西限字母祚多和 北限字大

藏山〕

步危下老所、參拾式丁余、字多波田井畝、

四至〔東限字童堂 南限字法師崎鷹取山／西限長尾 北限字大

藏多和氣〕

副進 留守所御外題二枚

右、謹檢案内、至于作田者致領掌、於官物者為存公益、始從去年廿日于今、件井溝〔を〕為宿所、未私宅罷埽、而尽五千余人人劫〔功力〕者也、但件井、雖有旧跡、為難所罷立、而經年序畢、抑件井溝為體、田口自迄井口遠三十町許、其内土樋渡程五箇所、木樋〔野〕渡所五段余、山腰步尾〔遠〕穿鑿道事式町余、其内誠無限巖破治所五段許除六尺余也、是当保郡入部之每使檢白者、仍言上如件、望請國裁、任解狀、垂勲功之賞、被令裁定、領知件荒井溝流荒田等者、对〔勒力〕事狀、以解、

承保二年四月廿八日

大掾秦為辰

42、《書籍頁一一三八》

〇一一三五 伊賀国名張郡司并刀禰等解案〇東大寺文書四ノ四

如郡司刀禰等勘狀者、有其理之上、以清友北大木南辺可為御

領、是尤充公驗之理之、在国判

名張郡司并刀禰等解 申請 庁宣卷紙事

被裁藥師寺別当御房御領之内、助信訴申私田畠可勘狀進狀、

右、去十二日御庁宣同十三日到來称、件田任道理雖有領掌、今助信

横令所知之由、頗難知其理非者、在地郡司刀禰承知、任道理無阿容、

可令進上勘狀、兼又以參府可令言上子細之狀、所仰如件者、所請如

件、謹勘事情、件助信訴申田畠年來□檢田帳〔二ノ八〕夏見郷所罷入也、但以去々年〔延久六年〕七月之比、藥師寺別当御房御使寺□

〔主力〕定憲等罷下、任公驗理四至堺候之日、〔限東柚山 限西宇多

川 限南鹿高 限北供御川〕因玄件四至内令立券之處、助信出來、

夏見郷宇倉迫上立申□以是□中村夏見堺、仍御寺御使等、清友〔か〕

□〔北方〕大木為堺已了、隨則御油并自余雜事、迄至□〔今日力〕

同勤仕明白也者、非郡司□禰等進上、仍所注進□□〔如件力〕

□□〔承保〕三年十月十三日

刀禰大村〔在判〕

郡司長谷〔在判〕

43、《書籍頁一一四二》

〇一一四二 造像智識貢上狀〇伊勢四天王寺文書

以承保四年二月二日藥師如來御躰像中、納進民部□□内作末作各

結名等、

一、内作、物部吉守、但本願施主物部美沙尾、先所本願也、而未代

〔仁〕罷成〔天〕、本願仏菩薩一躰、□□□□各故僧定尋至用清躰

〔各〕〔天〕、此之像造作各□依此為當來大願、成勢一一結名、躰

像御中所納如右、

以承保四年二月二日

内作物部吉守 同吉末

末作勝重孝 同重清

所司等 上座僧秦円

寺司僧長円

別当大法師

願主 寺家御目代僧定尋

此時

44、《書籍頁一一七七》

〇一一七〇 某消息〇東南院文書五ノ一八

伊賀ふみとんたてまつる、のこりは、ならにそはるたつねとり給へし、(花押)

「承暦三年十月十四日

使僧快尊」

【第四卷】

45、《書籍頁一二一〇》

○一二二七 追補使山口清任書状○書陵部所藏壬生家古文書
おほせ事はかし□(こカ)まりて、うけたまはりさふらひぬ、さておほせ事候ゆたけまるか名田官物の事、去年もともつねか未進そのかすさふらへは、さらにとりさふらはす、いかにまうさふらはむや、ことしはとのよりさた候ひて、ともつねか結解にのそきさふらひしには、さらにさらにとり候はず、いかてゆたけまるとうけたまはりさふらひなからには、とりさふらはんするそ、たたとことこは、たらしおはしませ、清任恐謹言、

十二月廿日 追補使山口(花押)

応徳元年

所領寛丸名田内五段内見御納所預友常号件御納所田内進済官物之間、使清任返事也、

46、《書籍頁一二二八》

○一二三三 奉恒消息案○書陵部所藏壬生文書

応徳二年四月(日)かみのたえさふらひてむらいにさふらふ、
いかに□てやくまうした□かひさま□候は
す、くらとのに御ふみを□□まつりてたま
へたふ、

おほつかなくさふらほとに、いとこひしうこそ、くらとのの御つかひてうつた□まうてきられて、五日せめられて、一丁□官物たしさふらひにき、おまへ□ふみをくらとのに、二年に一丁かはりさふら

はずとまうしたまへりけれ、わけまへさふらひぬ、はしめきぬは六疋、ぬのひとむらに候を、五疋とさふらふ、あやしう候、このたひ、にはかにてきぬ候と□はしりもとめて、絹二疋たてまつる、いつ□とかはもとめあへて(さ脱力)ふらはむけの□かひ候ともみし、いまにさふらはす、□かとしのきぬのおさめ所さふらはぬ、あふ□く□ふらうされはかりて、まいりてとまうめり、なにともたのみまうすもなむ□はし、こはこの御つかひまうし候□む、在判、

47、《書籍頁一二三二》

○一二三八 東寺領伊勢国大國莊政所日記○東寺百合文書
東寺御領大國莊政所応徳二年六月六日立日記

右事發、庄領宇川合庄田三岡前里十三坪一町内五段、為令播殖、田汁(を)作置之間、稻木大夫延能神主從類卅余人俄到来、件田五反非道押殖、因之庄遣使者令制止云、本寺御下文并祭主御外題已了、經沙汰之後、依一定可播殖者、其時(二)延能神主從類云、何(乃)本寺使(者)可在(と)申(天)、放奇雖、本寺使頭打破(と)申(天)、以杖木打破磔(志/天)不知是非致乱行計、仍為後日沙汰、注在狀、以解、

日記申御庄専当高橋成任

太神宮御領平田御菌檢校藤原

大中臣(花押)

件日記被注稻大小大夫從類所為、殆似乱行企、不待使沙汰、件田競殖之上、為沙汰雖加制止、不承引旨実正也、仍加進署名之、

在地岡前村刀禰御菌預泉用吉

48、《書籍頁一二三三》

○一二三九 太神宮檢非違使新家俊晴解○東寺百合文書せ・な

使檢非違使俊晴解 申進 申文事

注言上東寺御領川合大國御庄司訴申論田四町并川合御庄前下司檢
非違使賴季、於小名田堵等依放空納返抄条、為尋御庄司惣返抄
雖進向、閉門戸迹隱為事、不出對惣返抄、未沙汰年來官物結解
間、川合御庄田作人延能神主從者吉友・諸枝等俄出來成亂行、
雇語機子等、擬押殖論田、根元子細狀、

右、以今年五月十四日御庄司僧円順進於祭主之申文、其狀云、請被
殊任解狀、停止延能神主無庄充文、他人耕作下種後、以四月廿八日
及番殖期、号古作庄田重押蒔、年來庄田四町七反籠作不致弁、恣張
行不善不安愁狀、在東寺勅施入庄田多氣郡十五條三岡前里十三坪一
町・廿三坪一町、副進本寺御下文・賴季結解、右狀云々、子細具也、
給御外題稱、下檢非違使俊晴并在地刀禰等、如申狀者、彼延能神主
恣押作旨、无其謂、任道理可令停止濫吹之企、兼又年來未進、依実
正可令弁濟之、且又沙汰弁定、

可言上者、又以同日(天)、同御庄司進於祭主之申文云、請被殊任本
寺御下文、停止賴季論田妨、可令幡殖德光、兼又賴季為下司、每年
官物致未進、町別米乍納、不庄政所進不安愁狀、在東寺勅施入田多
氣郡相可郷四疋田里卅四坪一町、副進本寺御下文并御消息、右狀云々、
子細具也、給御外題狀稱、下檢非違使俊晴并在地刀禰等、如申狀者、
賴季所為尤不当也、早停止件企、可令幡殖德光、兼又納米有実者、
隨可令沙汰申、若不尋子細、彼方雖成外題、不可致監行、兩方使共、
可言上子細者、依御外題之旨、擬致沙汰之處(爾)、以今月一日(天)、
從彼神主之御許(与/り)被送於使俊晴所(多/る)文書二枚也、
其内一枚去五月七日日本寺御下文、其狀稱、東寺下伊勢國大國庄司所、
早任前例可耕作寺領川合庄田事、合參町、在三岡埜里十三坪一町(字
背本)・廿二坪一町(字国帖)・廿三坪一町(字小山田)、右件寺領、
川合庄田參町、太神宮權禰宜從五位上荒木田延能五代相伝作手之由、

有其許(訴力)、何況所当地子代返抄顯然也、然者件田如本件神主延
能可充行、重勿致愁、故下者、一枚(ハ)、以去五月廿八日延能神主
進於祭主之申文狀云、請被任道理并本寺御下文旨、且裁定、且令停
止為東寺御領大國庄司円順、押妨作相伝作川合庄田參町狀、在地了
村岡前里、坪付在本

寺御下文面、右狀云々、子細具也、給御外題狀稱、下檢非違使俊晴、
件御庄田事、先日依御庄司訴、下知之処、今相副本寺御下文有此愁、
仍可令從本寺御下文旨之狀如件者、仍使俊晴蒙兩方御外題(天)、先
彼神主被訴申(多/る)沙汰事為弁定、以今月朔一日(天)、俊晴(加)
進於彼神主(都/る)返事狀、已以來六日(天)可參上於御庄也、
彼日申案内、可左右申之由先了、仍以約束之日(天)參上御庄之処
(爾)、御庄司(乃)被命云、件論田(ハ)今日彼神主目代後見之者
吉友・諸枝等非待使弁定(之/天)、俄押殖之処(爾)、遣御庄使暫
使到來之程、雖加制止、弥致亂行之由(乎)、被触示已了、遣俊晴從
者一人(之/天)、件田事以先日今月六日可被相沙汰之由、令申御返
事先了、而何不相待【待】沙汰之約日(之/天)、猥可被押殖乎者、
沙汰之間、不可播殖之由、加制止之處、弥成放言(之/天)、雖押殖
(と/牟)、猶重彼神主後見吉友(乎)御庄呼取(天)、俊晴令示知
子細之詞云、彼神主目代以去春時(天)、件川合御庄田内、彼神主御
作田三町内一町(乎)、川合御厨田(と)注請(多/る)請文(乎)
出(せ/り)、仍任請文旨、不論是非、被充行之由分明也、殘二町(ハ)、
依不注請(天)、所被充行於他人數、其(を/ハ)何臨播殖之期(天)、
恣可被押殖乎、又本寺御下文(ハ)、已御庄司所(爾)被下給(多/
り)者、彼神主御下向之、即被進於御庄司(礼/天)、官物進未結解
勘定(之/天)、無官物未濟者、從御庄可被請殖之由(乎)令示知之
処(爾)、吉友陳狀云、主人神主(ハ)志摩國所被下向也、件官物(ハ)、
追年弁濟於下司許已了、更無未進、但於論田条者、本寺御下文、于

今未進於御庄司之事、不得意所承也、又件名田三町内一町、春時(爾)川合御厨田(と)請(天)、殘二町(ハ)依不請申(天)被充行他人之条、同不得其意所承也者、於件田者、任使制止(天)非殖(之)天、田人等罷上之由(乎)所申也、其後經三二日後、雇語機子等、猶可令押殖件田之由(乎)所支度申敷者、於今日者、不相向使之弁定(之)天、偏募兩機殿之神威(天)重所為致乱行敷、次条川合御庄前下司檢非違使賴季論田一町并件御庄田年来官物進未結解沙汰事、以去五月廿一日俊晴相會於彼賴季之次、本寺御下文并祭主御外題等(乎)令見知之処(爾)、賴季陳狀云、本寺御下文狀、放空納返抄之由(乎)被注下之条、是尤不得意候事也、故何者、賜御庄司惣返抄以後、尋小名田堵等所放下司返抄也者、以來廿五日進參御庄(天)、可沙汰申之由已了、然則以今月六日(天)、俊晴參上御庄、件川合御庄田、年来官物所濟惣返抄(乎)相具、可來沙汰之由、帖送三个度也、然而依不來向(天)、以昨日(天)御庄司使共雖進向於賴季許(と)牟、已閉門戸(天)、不相會者、若

件官物惣返抄(乎)不帶者敷、加之、以去年八月廿日(ヲ)御庄政所(爾)注進(礼)る如永保二三年兩年結解并賴季手跡返抄案文者、無惣返抄(し)天、少名田堵等、依被放返抄者、官物并町別米弁多未進之由具也者、東寺御領川合・大國御庄勅施入田六十六町之内、十五町年来所當官物進未結解、不堪沙汰進者也者、兩条訴沙汰大略如此、仍為蒙重公定、注子細、進申文如件、以解、

応徳二年六月九日

使檢非違使新家(花押)

49、《書籍頁一二三五》

〇一二四一 太神宮檢非違使物部賴季書狀〇東寺百合文書な進上

紙式帖(員百枚)

右一日仰事候、相構所令進上候也、大夫祐殿被仰称、件官物未進并糧米者、以今明之内可沙汰進之由、所被仰候也、不知他人、且偏隨仰不可申左右之由、所承候也、其中於糧米者、安野村主辺(に)進上可申也(と)所仰口候、次稻木大夫沙汰(ハ)彼目代時、可令沙汰候也、御京上(ハ)何日許乎【候】敷、可仰候御、賴季恐々謹言、

二月五日 檢非違使物部(花押)狀

進上 相模御庄主(御中)

50、《書籍頁一二三六》

〇一二四二 太神宮檢非違使新家俊晴解〇東寺百合文書な「下大神宮司、件御庄田事、下知檢非違使等、令沙汰之処、依不快沙汰、賴季訴之日、可決司庁之由、下知先了、随対決兩方理非、任実正道理、可言上之、

祭主(花押)

使檢非違使俊晴解 申進 申文事

注言上東寺御領川合大國御庄司僧円順訴申寺家勅施入田六十六町内多氣郡見熟十五町、年来官物進未可沙汰進由、依御外題旨、或度々牒送、或雖進向、遁事左右、不相沙汰根元子細狀、在条里坪付、申文狀具也、

右、以今年五月十四日(天)、御庄司僧円順進於祭主之申文狀云、請非殊任本寺御下文、停止賴季論田妨、令播殖徳光、兼又賴季為下司、每年官物致未進、町別米乍納、不庄政所進不安愁狀、在東寺勅施入田、多氣郡相可郷四疋田里卅四坪一町、副進本寺御下文并御消息、右狀云々、子細具也、給御外題狀称、下檢非違使俊晴并在地刀禰等、如申狀者、賴季所為尤不当也、早停止件企、可令播殖徳光、兼又納米有実者、儘可令沙汰申、若不尋子細彼方、雖成外題、不可致濫行、

兩方使共可言上子細者、依御外題之旨(天)、川合御庄前下司賴季論田一町并御庄田年來官物進未結解、為令沙汰(め/二)、以去五月廿一日(天)、俊晴相會於彼賴季之次、本寺御下文并御外題等令見知之(爾)、賴季陳狀云、本寺御下文狀、放空納返抄之由、被注下之條、是尤不得、意候事也、故何者、賜御庄司惣返抄(天)、小田堵等(二)下司返抄(乎)所放也者、以來廿五六日(天)、進參於御庄(之/天)、可沙汰申之由已了、仍以今月七日俊晴參於御庄(之/天)、件川合御庄田年來官物惣返抄(乎)相具(之/天)可來沙汰之由、牒送三个度也、然而不來沙汰(之/天)、經日來之後、以去廿二日重牒送之(爾)、以同廿三日可來沙汰之由返報已了、仍終日雖相待(と牟)、更以不來向者、件官物之惣返抄(乎)不帶者數、加之以去年八月廿日(天)、御庄政所(爾)注進(礼/る)如結解并返抄之案文等者、無惣返抄(之/天)、小名田堵(爾)被放返抄之由(と)見(多/り)者、年來官物并町別米弁多可有未進之由具也、而件賴季依不相沙汰(天)、東寺勅施入田六十六町内十五町、年々官物進未結解不堪沙汰進、又延能神主訴申名田三町内、去年作田一町五段官物代八丈絹一疋半、任御庄司返抄之旨(天)、被勘合已了、於一町五段弁条者、以今年四月十九日(天)、賴季放返返抄之狀(二)、成願寺領田三町内(と)注(せ/り)、以去年八月(天)注進(礼/る)結解狀(二/ハ)、東寺御領(と)注載(多/り)、加之件返抄之内、絹米等更以不進上、於御庄政所者、賴季之許所留置數、是則相当空納返抄之由(乎)御庄司依被勘返(天)、彼神主去年作一町五段官物依未濟之條、今年作田一町五段雖幡殖(と/牟)、避進御庄(天)、件官物弁濟之後、始自明年任五代相傳之理(天)、如元可被宛行之由、文契出弁已了、委子細(ハ)別紙申文具也、兩方訴沙汰大略如此、仍重為蒙、公定、注子細、所進申文如件、以解、

忠徳二年六月廿五日

使檢非違使新家(花押)

51、《書籍頁一二四〇》

〇一二四九 東寺領伊勢国川合莊文書進官目錄案〇東寺百合文書二

(端裏)「案文」

若進文書紛失日、以此定案詞、後代可尋申、

川合庄依沙汰進官文書目錄等事

合

件庄延曆廿二年正月七日施入狀稱、為遮那丈六夜燈日供・每七月施瓮料、以件川合勅旨田六十六町所勅施入之由、去承和十二年十一月一日、大納言正三位行兼(兼行力)右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉 勅官符、同年十一月十五日国司正五位下行守兼齋宮權頭長岑宿禰高名請文也、隨庁宣分明也、

一承和二年四月十九日、從二位大納言兼皇太子傳藤原朝臣宣奉勅官符、同十五日民部省符、同廿五日国到來、国司從五位上丹墀真人清貞相傳庁宣、郡司同廿六日郡符顯然也、

一去長保元年十一月三日、民部省勘文、承和九年凶帳川合勅旨田六十六町之中、見入田六十町九反餘步、東寺領注載也、

一承平二年十月廿五日、伊勢国大神宮司大中臣恒瀧官符請文云、壹紙、被載忘令如旧東寺領掌勅施入庄式箇處、川合・大國庄者、一去延長三年八月廿五日、大神宮司大中臣賴行牒狀云、件川合勅旨東寺田五十九箇坪々田、東寺旧領之由注載、牒送寺政所、

一承和二年四月十五日、在国田所判官代等勘定云、以庄外施入東寺田、以庄内公田廿一町二段百廿步、謂手郷卅二烟、各公田相傳之由勘定、所謂庄外施入東寺田川合勅旨六十六町、兩郡(飯野/多氣)諸郷散在也、

一承和十二年四月十五日、依官符并国符、兩郡司注繪凶人宅坪付、皆東寺川合注進、多氣郡・飯野郡三疋田・四疋田・五相可里・六

山田田・二井内(於力)里・二判田里・三岡前里、惣五十餘箇坪々
繪図東寺領注勘也、

一 治曆四年三月十日、祭主神祇大副大中臣永輔朝臣下文称、伊勢大神宮司右状云、件庄田本公驗分明也、敢不可有牢籠、仍召仰多氣・飯野兩郡司等、大神宮使并寺家使相共儘可催弁之状明也、同年十一月八日大(宮脱力)司大中臣宣衡庁宣同前、副下大國庄司申文、注載諸寺甲乙人相論者、

一 承保四年四月十五日、祭主神祇大副大中臣輔經下文云、可早本寺御使相共沙汰東寺御領庄司与諸寺甲乙人等相論坪々事、副下庄解明鏡也者、

一 以應德二年六月九日大神宮檢非違使新家俊晴申文云、東寺御領川合大國御庄勅施入田六十六町之内、十五町年来官物進未結解載也、

一 同年六月廿五日檢非違使俊晴於祭主賴宣朝臣進申文云、多氣郡川合田六十六町之内、見熟田十五町年来官物進未可沙汰進、依御外題旨者、爰情以案事情、成願寺別當觀範解狀不明、永保元年十一月十六日、於祭主衛牒送状云、欲被早任道理裁定寺家所領伊勢國多氣郡十五條三岡前里内田五町、称東寺大國庄領田成妨、寺家嗟峨先帝御願、去貞觀五年九月三日官省符田也者、去應德元年十月廿八日仁和寺宮御室政所進申文云、件庄田者二品秀良親王以勅旨田、去承和年中、成官省符所被施入也、以去年十一月十五日間宣旨称、以去年六月五日得觀範解狀称、成願寺嗟峨天皇御願、秀良親王建立者、詞不同、恣巧虚言欺、年号相違、願主不同、官省符兩度申(由力)来不分明、号有改定宣旨、田二町五段穫稻一千二百五十束押取、

一 以去承和十二年十一月廿八日、国司(高名)川合勅旨田依本図每年檢田帳可勘進之外題、在国田所下知、随則勘文云、東寺勅旨施入川合田六十六町、桓武天皇以延曆廿二年正月七日官符、所被奉勅施入、三箇一身勅旨田条里坪々者、始自多氣郡十五條三岡前里

十三坪、至于飯野郡、勅旨田每坪引勘云、

元從四位下屋部王家領(川合田注)・宝龜元年馬上帳為親王家領川合田、同二年帳(二八)中務卿注之、同四年帳(二八)皇太子傅領田注之、延曆廿二年馬上帳、勅旨施入東寺田(注)之、大國、弘仁・承和等、皆東寺領川合(注)之、同二年図相伝布勢内親王勅施入東寺大國庄内公田云々、

一 物部賴季為東寺川合勅旨田庄司、永保二三年結解十五町具注也、賴季隨身日記、如高山賴友解狀者、觀範奸領貞觀寺上座隆源所帶公驗之由、眼前也、又如奏状、以康平年中賜官符、為成願寺別當廿八年之由注載、庄司賴季・賴友・觀範等詞、以有相違、為被糺邪正、言上如件、

應德三年七月日注留之、

東寺權上座大法師位

一 就成願寺別當觀範・能算・明算等、每度奏状勘出相違、奏状二通(之/中)一通九箇条、一通三箇条也、

52、《書籍頁一二五六》

○一二七七 大宰府公文所勘注案○東南院文書七ノ九
公文所「年来依弁来寺可領」

勘注依觀世音寺三綱觀秀等訴、召問松永法師相論桑垣子細事、三綱觀秀等進公驗

一枚、長保四年二月卅日府下文、可任代々公驗、令觀世音寺領掌上座郡把岐庄所領田地事、

在筑前国上座郡

四至(東限大路 南限古河/西限宮前山并表木 北限康柱)
一枚、寛治三年六月七日、散位賴行朝臣下文云、下松永法師、可早停止号御厨御領所觀世音寺永代御領地押妨事、

松永法師進文書

一枚、寛仁五年四月十三日、羽鳥秀高蒙寺家裁申文判云、件桑区
依有事疑、暫檢知、然而依無所拋、免除既畢、在檢校大法師判、
在筑後国生葉郡字中嶋地

四至（東限五六条切繩 西限觀慶領地子午宮畔／南限古川来
相前 北限大川）

一枚、長元三月廿五日、羽鳥助益蒙符（府）裁申文御外題云、兩
度券文并国郡判明白、可領掌也、雖公寺、至于無理不可相妨之、
一枚、治安四年四月三日、贄人羽鳥助益蒙筑前国裁申文外題云、
如愁狀并前檢校与判者、助益所領之由、已以明白也、何背其旨、
今俄有其妨哉、任請度文書、早可領掌之、

一枚、寛弘四年三月十一日、贄人羽鳥高秀高（衍力）蒙筑後国生
葉郡司裁申文云、件地如愁狀、生葉郡内也、專非上座郡把岐庄
内、可愁公底、但各国堺大河為限、仍与判之、

一枚、長徳二年正月十日、羽鳥秀高請随近刀禰等判文（乃）刀禰
判云、件地先祖領掌已分明也云、

三綱等申云、件地往年寺領也、而件松永法師、或時（ハ）募御贄
人之威、或時又号御厨御領、今年始押摘桑葉、并責取麦地子等之
条、尤不安、但於募厨之威者、頼行朝臣可停止松永法師妨之由、
奉下文先了者、任往平（年）寺家領知之旨、被裁許申者、其由如
何、

松永法師陳申云、件地贄人源順先祖相伝所領也、随彼先祖次第伝
領（之天）、致御菜備哉、而為彼贄駟士、所致此沙汰也、但彼寺以
從大河北筑前国上座郡公驗（天）、從河南筑後国生葉郡（乃）順先
祖領地擬押取之条、相違顯然也、只被下実檢使、可被決件非掌妨

（ト）申、

以前条、公驗申詞勘注如件、但寺家公驗（ハ）筑前国上座郡大河（与
リ）北也、於北者從河南候之由申、文（又力）松永法師公驗（ハ）
從河南筑後国生葉郡字中嶋也、但寺家公驗（仁）南限古河之由注条、

從古河北（乃）新河、何時分流哉者、各所申暗以難知、故遣下実檢
使、臨地頭問在地古老人等、可被決事欺、抑左右在御定、

寛治三年九月廿日 案主書生紀

監代竹志

監代小乃（在判）

監代藤原

監代早良（在判）

監代大中臣（在判）

少典清原

大典清原

53、《書籍頁一二六五》

○一二八九 大和国僧永能解○法隆寺文書九

僧永能謹解 申出奉米差進領田事

合伍段者（之中）本寺二段、香木三段此内三段ハ唱曉分也、

在石壺登道副者、（字悔過谷）

四至（限東神川并登道 限南下石壺／限西峯 限北上石壺）

右件田、元者、以先年之比、長好寺主御出举初捌斛代、舍兄五師安
朝所弁進也、而件初斛永能弁濟、件公驗返預、年来□□（領掌力）
之間、上座御出举米肆斛代、本公驗相副永所度進也、仍為後日注狀、
以解、

寛治四年十月廿八日 僧（花押）

（裏）「法隆寺三經院所領信融寄進之處也」

54、《書籍頁一二六八》 *末尾に（ハ）

○一二九七 東寺別當時円請文案○東寺百合文書二

法橋上人位（某）解 申請 官宣旨事

表紙 載心令弁申大威儀師伝燈大法師位【能】能算訴申、任符旨、

被停止成願寺所領伊勢国川合庄田并東寺所領大國庄内押取

事、

右、被去六月廿六日官宣旨称、得能算今月十六日解状称、右大史大江〔某〕「為実」奉、左中弁藤原朝臣季仲伝宣、大納言源朝臣経信宣、奉勅、宜令東寺別当弁申子細者、謹所請如件、抑所訴申東寺田、元桓武天皇御勅施入、以去延曆廿二年正月七日為寺家夜燈日供、每七月十五日施瓮料也、宣不限飯野一郡、多氣郡之内、無論坪庄田、其数甚多、一兄国・二兄国・三分・二段田・四段田・一段五段・二石淵里等之内、田畠廿餘町也、全无他妨、是本願勅旨川合田六十町之内也、專不可為成願寺領、三疋田・四疋田・五相可・二判田・六山田・二幡・三岡前里田十五町前法務僧正信覚、依東寺領、以公文上座円順大法師、下遣彼国、令弁定之尅、成願寺庄司頼季追從件円順、補任東寺方田十五町預職、每年所当地子弁進之間、以去永保三年八月十六日、頼季写取大國・川合両庄本図案文、与前別当観籠同心、雖構書東寺天徳・安和去文、每事相違、彼寺文書從貞観・承和有其証、彼時頼季不可望成東寺庄司、何況二代別当奏狀調度文書等甚多相違、每進奏狀、其詞不定也、観宿都僧与秀良親王発願被建立寺者之時、田数十八町也、観範解状、嵯峨天皇御願秀良親王建立、貞観五年九月三日官省符顯然者、田数十七町三段二百步者、構作東寺安和・天徳去文状云、彈正尹二品秀良親王、昌泰年中造立寺者、承和二年三月十五日官省符明白之由訴申者、彼寺民部省勘文云、多氣郡十七里三反二百步、庄家雜舍敷地勘注処、至于畠者勘字与里、不注坪四至、注入同里、又多氣郡田数依十七町三反二百步不足、飯野郡十四条五井於上里一坪二反注入也、又件図云、宝龜・承和・嘉祥班田、源定賜田注出也、又秀良親王依承和二年三月十五日官符領掌之後、昌泰造寺者、驚令勘年限、秀良親王畢寬平之比卒去、何寬平之比卒去之親王、更以昌泰建立件寺哉、又安和二年二月七日東寺去文、同以謀計、寬忠律師安和二年閏五月十日補任寺家別当、而作去文之期、但二月七日者、何未補寺家別当之先、遮成去文哉、又大

国庄・垂水・蘇嶋・高興庄等、贈四品布勢内親王為御世菩提、存生之時、寄貢高野大師、而以去弘仁三年十一月廿七日奉勅施入田畠、多氣・飯野内于今明白也、又円順時始非論申、本自依有東寺領、彼寺構出東寺去文也、何彼寺文書・流記等、每造出度、相違可非一哉、観範之時宣旨請文、龜注進官、重又両寺公驗依宣旨進官者、又雖進官、依無裁定、習観範・頼季等例、能算大律師同不知子細、【子細】構出東寺所領田飯野郡四至仟佰、不載多氣郡、令奏聞之旨也、彼郡寺田七十七町、両庄田畠明白也、而以去天慶二年三月十七日夜中、東寺寺主僧真演為彼両庄沙汰下向之刻、為盜人非殺害之次、御寺次第文書公驗三分之一紛失之後、依不隨身本寺公驗、不遣下之間、如此非常輩、川合本施入田・大國庄田共構取、雖然殘庄田散在件郡也、又宇多院宣下者、為大國・川合庄荒熟実檢也、又為円順皆悉押取成願寺領者、是又無実也、但東寺田十五町之外、庄司頼季件殘地子可納之由、度度雖訴申、円順敢不承引矣、早可弁進者、当初頼季申云、成願寺（ハ）專非貞観寺末寺、伯父隆源進退寺也、件僧当国神民父子戸子課人也、而非殺害隆源身之後、観範押領件寺許也、不可弁上申、自用已了、見存者也、訴彼寺之旨、旁多相違、以何為証驗哉、仍注在状、謹解、

寛治五年七月 日

都維那法師

寺主大律師

上座大律師

別当法橋上人位時円

（裏）（花押）

品、《書籍頁二二七二》

〇一三〇二 下野国薬師寺注進状案〇東大寺文書四ノ四十七
注進

東山道下野国河内郡薬師寺、往古国王聖武天皇御願、東大寺末寺也、

三年(三)一度太政官符罷下(天)、得度授戒所始行也、仍於今者破壞顛倒既以明白也、四至、東限田河、南限下条堤、西限国分寺、北限荻窪也、仍代々国持(師力)禪寺雖預知之、彼東大寺本所之沙汰、更以所不知也、然于今田島三百餘町所也、【仍】伽藍無止、可然人々可被沙汰立哉(云々)

寛治五年十二月十三日

56、《書籍頁一二七三》

○一三〇三 下野国薬師寺僧慶順解案○東大寺文書四ノ四十 薬師寺住僧慶順解 申請 東大寺別当御房裁事

請被殊蒙 貴恩御勢、經官裁沙汰、立下野国河内郡御坐号薬師寺、往古国王文武天王御願、東大寺末寺也、而未代之近来、破壞顛倒已了、成荒野聚落也、因之彼所罷預如本奉建立、欲為勤仕朝家子細愁状、

副進寺家注文彦通

右慶順、謹檢 案内、件寺是往古国王文武天皇御願、東大寺末寺也、然則三年(三)一度太政官符罷下(テ)、得度於授戒所始行也、雖然於于今者、破壞顛倒已以甚、□成猪鹿之菌、永絶念誦講誦勤、更不至於聖朝御願祈禱、加之仏像成塵土、四天護法頻致示現、而則東大寺分沙汰、今永所不知也、因之罷預於彼所、為朝家鎮護吏民快樂、如本所欲奉建立也、但彼寺分田島二百餘町也者、於年貢者、八丈并絹駒共乃至以如細布可進濟者也、望請被裁定、且經官裁、被申下宣旨、且任符識、被預行者、猶將仰正理之貴、仍勒状謹解、

寛治六年正月十日

僧慶順

57、《書籍頁一二七六》

○一三一〇 筑前国観世音寺楽頭山村助正解○内閣文庫所蔵 観世音寺古文書

観世音寺音楽々頭監代山村助正解 申請 寺家裁事 請被殊許為友恒加制止、不令勤仕安居酒希(着下同)子細状、右、謹檢案内、依例今月十五日鍾堂酒肴疑(擬下同)令勤仕之處、友恒加制止之条、尤不審之事也、抑友恒所為、従本為御寺御、似無方心、其故以已主人、申成案所別当之職(と)、地子米(を)令京上(天)、恒例仏事(を)疑令懈怠之旨、不当事也者、蒙 寺家之裁定、今度酒希之保(条力)為令勤仕、言上如件、以解、

寛治六年七月十一日 監代山村助正

58、《書籍頁一二〇五》 *人名のみ仮名書き

○一三三九 弓削七子田島処分状○股野文書

(端裏)「処分」

譲与 所領田島事

合式所陸段者

一在左京五条六坊西辺田式段者
一在山辺郡永原郷十二条六里七坪式段(在地西次)
一在同郡同十三条六里十二坪式段西次
右、件田島先祖相伝之所領、或以私物買取者也、而依無所生子、以覺尊入寺為一男、年来之間被養育、不異生男、依之相副本公驗各一通、永処分進之状如件、

嘉保二年二月九日 弓削「なつこのこ」

たゝこさうのためなり

判

59、《書籍頁一二五一》

○一三八九 播磨大椽棗為辰讓状案○東寺百合文書并

譲与

播磨国赤穂郡久富保公文職并重次名地主職等事

右、件所帶名田畠桑原等者、開発之私領也、而永息男為包（仁）所讓給之狀、如件、

承徳二年二月十日 大椽秦（為辰）（在判）

60、《書籍頁一二六三》 *裏書のみ

〇一四〇六 僧聖心田地讓狀〇東大寺文書四ノ七十七

讓与 処分田事

合式段百五十歩（在友寺從御堂東辰巳辺者）

四至（限東山 限南寺山／限西路 限北山）

右件田、式段余之中於壹段小者、僧頼禪所新開也、而頼禪存生時、以件田処分妻畢、隨妻又讓与一男僧聖心、其後聖心加開曠野、領掌耕作既及數十年、全無他妨、然間聖心之親弟小兒數日受病愁惱、其時不慮外、信方之妻女、自称付靈氣之由、兩三日間、度々走来、詔証申云、件田依不分与僧濟仔、故父頼禪所付惱也、若分与者、小兒病患忽可令除愈者、是以聖心依祖子憐愍無極、雖不知事夷不、為小兒除病存命、隨女詔証申狀、於田壹段者、以今年七月廿六日讓与濟仔、其後不幾間、同八月一日小兒既死去畢、仍件女付靈氣申条、相構無実事、謀計証申之由顯然也、在地近辺諸人所見聞也者、於今者返取件田、永讓与弟子僧叡尊畢、敢不可有他妨、仍為後代注子細、所讓与如件、

承徳三年八月九日 僧聖心

（裏）「於此湯田者、紫摩金院敷地波田替付畢、近延（花押）

【右京湯田壹段（と）堂後壹段替付畢、】

於御堂東南谷田壹段者、僧永円壳渡畢、（花押）

鎮守社神祭屋（云）事（ノ）付了、

於御堂南田者、東行道之南裏併西（モ）其ノトヲリハ口永

円壳渡了、（花押）

61、《書籍頁一三九一》

〇一四二二 みこ田地直請取狀〇東大寺文書四ノ五十三

（端裏）「すきさき四枚也 南一段券」

たのあたひのきぬ五十疋・よね五石・たしかにたまはりぬ、こにちのために、かきしるしをたてまつる、

康和弐年

正月十日 みこ

62、《書籍頁一四〇二》

〇一四四五 大和国石名莊住人等解〇東大寺文書四ノ三十九 石名御庄住人村永元等解 申請本寺 政所裁事

請被特蒙 鴻恩、早任道理裁定、糺返給同御庄前任人僧得万法師之前妻目々女、自故祖父時永手処分賜竹御菌畠壹段之麦、以去三月上旬比、知事延賢、号得万法師之所負物、法師逝去後、押苺取候歟不安愁之狀、

右、謹檢 案内者、件畠壹段、祖父時永之度賜処分之内也、而目々女与永元者伯父妹之間也、其中自何（も）依有芳議、於永元宿預候事已了、目々女（か）婦女共心一合志申預事尤実也、庄内住人等見聞給、但得万法師者、与妻女有離遠之心、逝去早了、於以前之所負物、妻女更以子細不知、就中以去三月之比、於政所訴申、延賢併得万対檢庭、延賢之大非道之御定、仍決断已了、其後件法師逝去已了、爰知事決断之後、或法師逝去時、号猶件所負物代壹石、取麦壹段、俄押苺取候事、尤非道中大非道也、永元苺取候（こそ）、思勤御寺公事耳、知事延賢非此、付方々行非道給者也、或被著同御庄住人時之私宅給間、是時者白地罷出程、有妻女補設敷、或供給調備程、不待居（之天）声上腹立給、馬鍬一具手斧一支被奪取事已了、是時罷返（天）、度々雖請乞申、更以不返給、是時於公事雜役、敢以无懈怠、件麦（も）以謀計心所被押苺、事甚以大非常也、愁甚莫斬過矣、望

請、早任道理、令御定裁許者、糺返御坐（ハ）、弥仰正道貴、仍注子細言上如件、以解、

康和三年七月廿三日 御庄住人村永元

同是時
僧良能

63、《書籍頁一四〇六》

〇一四五二 僧定俊書狀〇東寺百合文書マ

（端裏）「清水寺別当返狀」

謹言

請珍皇寺島弁進損亡代事

右、如 仰令沙汰候之処、彼寺僧等奇恠事等申（天）更不承引仕者、私難左右、賜 御使、所当程可沙汰渡候、更々不可遁避候、如斬事、于今不沙汰仕、所恐申候也、早々賜御使、儘可沙汰渡候、定俊誠恐謹言、

（康和三年）九月廿一日 僧定俊（請文）

64、《書籍頁一四一一》

〇一四六三 僧快円書狀〇東寺百合文書し

追言上、件勘文袖書（ニ）御判□（可力）下給候者也、下野返抄二枚進上、但御判并成正仰御可下給候、件国未前分料沙汰不候者也、前々以惣返抄前分料（は）沙汰取候事也、快円謹言、

十月十一日 僧快円□（請力）文

放返抄時、從国寺家送勘文、袖書文、
下公文所、任先例可勘問、（花押）

65、《書籍頁一四二四》

〇一四八五 尼序妙讓狀〇股野文書

讓与 処分所領事

合五段者、（在左京五条六坊五坪、西辺置一段（天）／次二段、

【同五条六坊四坪南辺三段】

右、件所領者、尼序妙之先祖相伝私領也、而年来之間、東大寺僧覺尊（を）養子（と志天）、可養育由語申（志天）、所讓与也、然而件僧田島公驗等取納、老後之尼（を）追出畢、而間、依流浪難堪、相尋類身僧行延、身命可存由合語（云々）、茲行延答云、何様（万れ）於于今者、誰人（を可者）知人（と）、可被思（と）申（天）、押涙養育仕間、件子細等、依大歎語申、仍西院御房訴申件由処、尤至道理也（と天）、東大寺上座御許相具彼覺尊并尼所從、对決子細日、依有道理限、尼可領知之由、裁定畢、依之最後臨終之教養恩依難報、件行延之妻安部姉子永所讓与也、仍為後日、注子細与処分、以解、（花押）

〇字面ニ黒ノ手印（左手）一個アリ。

康和四年六月廿四日 尼序妙

（裏）「於件四坪三段者、出本（挙力）方便補了、法師丸渡出挙申者、長治三年二月十八日」

66、《書籍頁一四五二》

〇一五一六 禪師君家地売券〇東寺百合文書カ

とうさい一丈九さく

きたみなみ六九丈

いはんかち、うりわたしたてまつる、ようようあるに、やくのしさうきよわらのいちきよに、あたひ八丈五疋、四丈のぬの二たん、ろくたうのぬのいたん、よねいちこく、うけわたす、

かうわ五ねん五月八日（花押）

せしのうちをいきみのさたなり

67、《書籍頁一四五四》

〇一五二六 僧某書狀〇東京大学所藏東大寺文書

此間何等事候らん、御京上次鳥羽にや御坐したりけむ、不審不審、抑覺尊入寺申田事、一日大底申定了、其後無音、如何如何、可被尋仰、故尼所領惣合(し天)九段也、其を奈良の(五段をは)入寺(二)田舎(の)四段をは行延(二と)定候也、之中田舎(三)行延佃一段候なる稻を添と被示しかは、行延はおしみ候しかと、代(を)給、件田稻をは入寺渡(と)申(天)、稻(をも)渡(と)支度仕也、されは其田券を可被返由を申候也、さて互無後論定せんと思給候也、此由必々可被伝仰也、早々一定可被示之由、同被仰下候、恐々謹言、

九月五日 僧口慶

上座御房

「康和五年」

68、《書籍頁一四九三》

〇一六二七 有政入道書狀〇東大寺文書四ノ三十八

(端裏)「有政入道書狀」

私言上

木本庄沙汰事

右、頼慶得業猥発軍兵、遣下木本、可令損亡庄内之由、慥承其告、先為蒙本寺之裁、令触申件子細之處、被加下御返事、所奇思御候也、故何者、頼慶依非道之妨、注子細令奏聞之日、件庄可領知有雄丸、至于地利者、可相尋源算・頼尊兩人之時例之由、明載 宣旨狀、仍罷(被力)下 宣旨之後、見參之次、令言上子細之刻、仰云、頼慶(か)非道事(を)するなり、強不可張(行脱力)沙汰之事也云々、悦承道理之仰、而頼慶弥企暴惡之条、且背 宣旨、且蔑爾本寺之仰、可被尋下源算・頼尊時例之由、先日雖令言上、于今不被仰下左右、抑頼慶申旨令違背本寺之条、何事哉、所奇思御候也、件頼慶去

五月之比、方々廻計略、雖令 奏聞公家、依歿道之事、不蒙 裁報、

黙止即了、但從往古以降、未被下本家檢田使、今寄事於檢田、発軍兵令発向之条、濫吹之其一也、発私軍兵之輩、公家重所被禁遏也、近來世間無沙汰之間、伺其隙所企事欺、為後日重言上如件、恐惶謹言、

八月十四日 新発知位(草名)

進上 東大寺別当僧都御房(經範)(侍)

69、《書籍頁一五〇〇》

〇一六三七 伊賀国湯船柚住人等解〇東大寺文書四ノ四十六

湯船御柚在家住人等解 申請御柚預所裁事

請殊蒙恩裁、任先例道理、免除給為御柚下司山長重種并目代僧信

照・工吉任・吉恒・重時等、以非道無例御会板、在家之住人十家

令宛造不安子細愁狀、

右、謹檢 事情、以去年十二月御柚工等、不造進御材木、企隱居他国間、彼於十家住人者、不耕作一步田、故致安度之思所、下司目代田堵等、彼(ヲ)阿当(シ天)、背先例道理、会板宛所不安者也、付中於会板者、付田官物代所進造也、但在家召事(ハ)召物許也、先々預所宛給所者、莫過斯者也、若此非道不被停止者、何在家住人一日廻跡乎、望任先例道理、彼等非道被停止者、在家諸人止跡、將弥仰御勢之貴由、仍注事狀、以解、

長治二年壬二月廿二日 在家住人等

山長久末

尾張吉重

日熊常永

綾 安淨

百濟吉藤

70、《書籍頁一五〇六》

〇一六四八 東大寺領伊賀国黒田莊徵使解〇東大寺文書三ノ十一
黒田御庄大屋戸村徵使今犬丸解申請 本家裁事

請被任道理裁定給徵使職子細之狀

右、謹檢案内、元者雖居住御庄之内、更以一分之田畠(を)不領知、
然而(モ)依可令勤仕在家門並之所役、上件徵使之職(仁)令成下
以後、既及年来(天)、為本家御後見(天)、全无其懈怠、云何俄相
闕多町之烟、以為宗(る)公事足、武元(を)可改成下徵使之職哉、
以此謂彼、大訴莫過於斯、然即為蒙御裁定、且如旧令糺成彼徵使之
職給者、將以知正理貴矣、仍録根元子細旨、以解、

長治二年九月十四日 佐々貴今犬上

71、《書籍頁一五〇八》

〇一六五三 近江国愛智郡雉供御人等解〇山口光円氏本打聞集

裏文書

愛智郡雉供御人等解 申請 公文所裁事

請被殊蒙 恩裁、任道理解狀之理、令進国在庁勘狀、

永停止為日吉社司并新宮神民等、背先日御庁宣成阿党、重差宛

今年三月祭使依智秦恒安譴責、不知為方愁狀、

右、謹檢案内、件日吉保、本春宮亮御任、始所申請之開発、平流一
郷新開十五町也、其後毎国司遷替之刻、漸々請加、今既二百餘町、
神民二百余人也、然則、以件保神民、可令勤仕彼祭也、然而以前司
御任之時、大番文屋包元、為遁国中神事、号神民虚言申(天)、申請
彼新宮神事、擬令勤仕之處、是包元(か)為遁国中大事神事(を)、
依致謀計之、不神民人(能)、不可令勤仕彼新宮社神事之由、禰宜大
夫下文令進上留守所之後、從留守所包元申給(天)、庄司恒依(二)
為不披露、被奪取了、近則召次成行雖令勤仕彼新宮祭御供頭(を)、
日吉社司權守遣承人也、且又依彼庄田堵、所令勤仕、尤道理也、是

更以□(不力)可習彼(を)恒例(と)、然而差定供御人宮道重忠之
日、任先例□□申狀令言上於国前子細之日、可停止之由、雖被下知
御庁宣、□□(不承力)引、重同供御人恒安(を)差定之条、不知
為方者、望

72、《書籍頁一五三五》

〇一六八七 山辺延末牛馬弁進狀〇松田福一郎氏所藏東大寺

古文書

山辺延末解 申牽弁進馬事

合

鹿毛父馬一疋(直卅疋)

母牛一頭(直四十疋)

畠伍段(直百疋 在矢川条一切西右居垣内也、)

苧桑等共

右件私財、元者犯人真常之其時妻(二天)延末女子候也、仍其過依

無遁申候方、所弁進也、以解、

嘉承三年六月六日

山辺(花押)

刀禰丈部(花押)

「目代紀(花押)」 專当物部(花押)

葛木(花押)

御庄下司大江(花押)

73、《書籍頁一五三八》

〇一六九一 官宣旨案〇東京大学史料編纂所所藏春日社旧記

左弁官下 大和国

応重遣官使、除八幡・春日社・興福寺等領外、慥催勤庄菌司等不

運上主水司供御氷事、

副下 庄菌目錄一通

右、得彼司六月廿六日解狀稱、謹檢案内、自往古於水駄役者、不論權門勢家之領、所勤仕來也、而此一兩年各庄菌司等、募本家之威光、不勤仕供御之役、因茲供御役多以闕怠、愁(就力)中庄菌雖有其數、內藏寮黃瓜御菌司助遠・友清・則清等、同葛上郡司源念在家水馬賃物乍徵取、當日供御解怠、何故哉、不輕罪過、広瀬郡司刀禰供清者、水馬二疋也、一疋勤仕、一疋(ハ)闕怠、故今經奏聞、以內藏小舍人可催、是由宣旨雖被下、背宣旨更不承引矣、供御之職且友清一人所為也、傍庄司等学友清例、供御不調進營、若無此■裁許(ハ)、何運上供御哉、今度者為傍庄司、只為停止後代之非例、猶被下 宣旨、望請天恩、任一々被裁許、將仰 公威之貴者、權中納言源朝臣基綱宣、奉 勅、遣官史(使)、除八幡・春日・興福寺領之外、慥令催勤仕者、国宣承知、依宣行之、

嘉承三年七月六日 左大史小槻宿禰(在判)

左中弁藤原朝臣(長忠)(在判)

74、《書籍頁一五六〇》 *名詞のみ仮名書き

〇一七二五 僧勝俊家地直請取狀〇吉井良尚氏所藏文書

請 申屋地伍間直事

合限米拾式石(本券有)

綾わたきぬ壺兩代八拾疋

右、件屋地直、請納所、如件、

天仁三年四月十七日 僧勝俊(裏)(花押)

75、《書籍頁一五六八》

〇一七三八 東大寺三綱注進狀案〇東大寺文書四ノ七

(端裏)「東大寺所進勸學院使守俊東大寺□□」

東大寺三綱等注進

伊賀国名張郡東大寺黒田御庄并出作田及杣山等、依興福(寺脱)

相論、勸學院知院事左史生紀守俊、下向在地對問兩寺所司、比校彼此文書子細事、

知院事守俊問東大寺所司等云、東大寺杣興福寺杣四至各別(云々)、謂興福寺杣山者、是字国見杣也、依為便田、故左馬允藤原実遠并大(中臣)則綱等(実遠養子、見存)以黒田庄出作田、寄進於興福寺、件(子細)如何、

東大寺三綱等申云、先号興福寺往古杣、字国見杣者、是天平勝宝三年四月一日所被勅施入於東大寺也、經數百歲之後、以去康平之比、伊賀守資良朝臣、依 殿下仰、進借文於東大寺、所被借請也、是則造興福寺之間(云々)而其後興福寺作事于今無絶、依之雖致訴、未被返給、今日被称興福寺杣、已無実也(止)申、

守俊問興福寺中綱等云、東大寺三綱陳申旨如此、且進証文、且陳申子細如何、

中綱并頼因弟子僧等申云、慥不知案内、御寺(仁)公驗候(止所)承候(之)、於国見杣者、忽非相論、今日訴(者)、黒田庄出作田(乎)私領主実遠相副本券、寄進於御寺、然者可被堺四至也、本公驗四至(限東伊勢堺、限南奈知山/限西黒田山、限北剥山)此定(仁)可被沙汰也(止)申、

東大寺三綱申云、国見杣山、已守資良朝臣以前、已為東大寺領無其隱、然者、本自興福寺解狀(仁)件杣為寺家所領經數年、維摩会雜舍材木并斤衆備物庄(止)被注者、是無実也、加之実遠見存之時、件杣已為東大寺領、又如実遠所進本券者、黒田庄本官省符并杣之及出作田一步無殘(止)申、

又問云、件論田資良朝臣任以後、為庄出作、於其以往者無出作之由、見興福寺解狀(仁)、件子細如何、

三綱申云、資良任以前有出作田之由有証文、即長曆二年十二月一日国符也、隨所副進也、又寛和二年十二月十九日名張郡檢田所勘注文(仁)、有出作之由、委所見也、当庄已自実遠以往及実遠之時、以出

作田偏勤仕袖役、然即実遠何因進退雜役、可寄申興福寺哉（止）申、知院事守俊判云、於出作田者、任往古例、令出作黒田庄民、有以往証文之上、無出作田黒田庄、不可有故也、興福寺（仁者）可有地主論歟、

又東大寺三綱申云、興福寺可被相論地主（波）、件実遠領四个村之内、築瀬村者、実遠所負物代、養子信良治曆三年弁進東南院大僧都、師資相承、當時東南院當講領掌、是則地主也、夏見村雖実遠先祖領、舍弟不知名僧字新受戒得分也、件子孫等繼為領主、又矢河中村二処、実遠讓与佐保殿預信良、次當麻三子、次薬師寺別當隆経、次藤藏人保房、次寺僧実与、代々手継見文書、今地主件実与也、如此代々之間、申成寺家下文所領掌也、全非他所沙汰、如興福寺文書者、長治元年立券状云、大中臣則綱寄進（云々）、件則綱是宣綱男也、宣綱之時与保房致相論之日、宣綱之所進謀書、定被糺於官底、永被停止其妨了、宜旨四个度所副進也、何因父之時被停止事（乎）、以子寄文可為証驗哉、

守俊問興福寺中綱云、東大寺三綱陳申旨如此、件子細如何、中綱并頼因弟子僧等申云、実遠・信良・三子三代領掌実也、但三子不壳放、薬師寺別當隆経沽却之由、尤無実也、然者其後 宣旨不可用歟、沽却実者、非申限、不沽却之由三子書状所副進也、

東大寺三綱申云、三子壳買可依実否者、其証顯然也、保房之申下 宣旨之内、官勘状云、宣綱申状不壳三子之由、訴申之条、对問三子之尅、沽却実之由、申旨所見勘状、大略則綱不知案内、暗訴申興福寺歟、随付申状、如此相論出来歟、早可被見彼 宣旨也、

又問興福寺中綱云、東大寺三綱陳状并如宣旨者、沽却無実也、解状不叶前後、如何、

中綱申云、三子沽却実之由、宣旨相講事歟、難指南（止）申、東大寺三綱申云、宣旨之条、非邪事、奉行弁判顯然之上、片文留官歟、早可被糺真偽矣、

中綱申云、興福寺所進文書者、是貞觀六年正月十九日 倫滋立紛失状也、其後手継相承并 宣旨全無益也、可依貞觀文之由申、東大寺三綱申云、件貞觀文書所境四至之内、已籠本庄杣本杣等、若然者、見件由在地刀禰等、何可加証判哉、何況実遠以所領内一処、沽却禅林寺大僧都深觀之日、於本文書者、萬寿五年二月廿八日実遠住宅焼亡之時、紛失之由、所注載也、仍請在地国判等所副渡也、然者件本券尤有其疑（止）申、

右比校文書、对問所司等之尅、守俊雖執筆、不注勒上件旨、仍為後日、東大寺三綱大略注進如件、

天永元年十二月十日 勾当法師久命

都維那法師嚴慶
上座大法師朝秀

76、《書籍頁一五七〇》 *最後から四通目「三子仮名消息」

〇一七三九 伊賀国名張郡郡司等勘注〇東大寺文書四ノ八十五

一東大寺所進文書

一通 寛和二年十二月十九日出作檢田注文

状云、名張郡檢田所勸進東大寺板蠅御杣内条坪坪田事、

右、依御牒状国図并馬上帳勘注進如件者、

一通 長元七年七月十六日官符

状云、太政官符大和国伊賀国司、応免除勅施入東大寺所領板蠅杣住人等臨時雜役事、四至、

東限名張河、南限齋王登大道、

西限小倉倉立解小野、北限八多前高峯并鏡瀧、

右、得彼寺去六月廿七日奏状称、云云者、件板蠅杣 【已得】

已得河下之便、為寺家大切也者、右大臣宣、奉 勅、宜下知彼国、免除住人并工等臨時雜役、但四至之内、耕私所領、仮権門威、沽却要人之輩、早覓公驗而令進官、任其文契弁定理非者、

同年十一月廿三日国司良賢奉行者、

一通 長曆二年十二月一日国符

状云、国符名張郡司、可免除東大寺領板蠅杣四至内見作田六町百八十步并居住工夫等五十人臨時雜役事者、任官符并代代例、被免除件責者、郡宜承知、任旧例免除杣四至内見作田所当官物并居住人夫等臨時雜役者、

一通 天喜四年二月廿二日左馬允藤原実遠讓与養子甥信良状

状云、散位藤原実遠先祖相伝所領掌田畠目録事、合五箇所(頭書)「中村書落敷」、在名張郡内、一处、字矢川村、四至限東杣山、限南加陀賀明神矢川、限西右陀河、限北供御川、一处、字築瀨村、四至、限東高岡、限南供御河、限西河、限北剥山、一处、字下津田原村、四至、限東河俣条梧、限南山、限西山、限北山、一处、字常田村、田八町、在坪付、右件所先祖相伝領掌、而年老乱之間、或荒廢、或牢籠、因茲有相伝領掌道理上、為得孝養、存生之時、讓与即甥養子藤原信良既畢者、除他郡領田地定、

一通 康平七年七月十二日藤原信良蒙国宣任実遠讓状請被立券申文

状云、件田地祖父藤原実遠伝領、而状曰、実遠与信良為舅甥中之上、又為養子、而実遠孫女信良相縁之間、以去天喜四年二月廿三日、所領地皆悉処分信良并孫女畢者、国司資良判云、得替之尅、在洛之間、令互見処分帳、不能探尋真偽、依処分之文顯露、与判者、

一通 治曆三年八月十一日藤原信良壳渡東南院大僧都券文

状云、注進所領新券文、合一所、在伊賀国名張郡築瀨村、四至、限東高岡横尻、限南供御川、限西名張川、限北剥山、件所領元者、実遠先祖所領也、而処分信良之間、故実遠所進文書二百四十余石内百八十石代、東大寺別当大僧都所壳進如件、但至于処

分文者、依有類地、不能渡進者、

一通 延久四年壬七月三日佐保殿修理司信良処分妻三子状

状云、宛行処分事、合在伊賀国、条里坪付等相伝処分目録文明鏡也、右件処分、依有年来之夫妻儀、当麻氏所宛行如件、隨則依有旁理、所処分宛而已者、

一通 延久六年七月六日当麻三子壳渡藥師寺別当隆經券文

状云、当麻三子解申壳買進相伝所領掌合二箇処、在伊賀国名張郡、一处字矢川、四至、限東杣山、限南加陀賀明神、限西宇陀川、限北矢川、一处字中村、四至、限東山、限南矢川、限西宇陀川、限北供御川、右件所領先祖清廉所領、相繼息男実遠伝領、次甥信良伝領、而三子為実遠孫之上、信良得処分文、而依有要用、限直准米二千石、永沾進藥師寺別当隆經已畢、雖須相副本公驗処分帳等度進、依類券文、不能副進者、同年十月廿日国司親房判、承保二年三月廿二日在地証判云、依国司判并券文明白、郡司刀禰等加署名者、在延久六年七月六日三子直請文、

一通 承曆三年十月五日隆經宛行舍弟保房処分状

状云、宛行領処一所事、伊賀国名張郡、右件所領、從馬大夫実遠孫女房之手買得、無他領知者、

一通 永保二年十二月陽明院序下文

状云、陽明院序下伊賀国名張郡司并在地刀禰等、可早任所帶公驗并国司序宣調度文書等理、以藤原保房可令領知字笑川中村二箇所事、副下卷文并国司序宣等者、

一通 東大寺政所下文數四箇度

已上状云、政所下黒田庄下司住人等、可令早隨院藏人所堪、并濟加地子、

一通 五代国司序宣、(親房・清家・孝言・祐俊・遠実)

已上状云、序宣留守所、可早令充徵藏人君所領加地子米事者、
一通 応徳元年三月廿二日宣旨

狀云、左弁官下伊賀國、応令藤原保房領掌管名張郡所領二箇所事、一所字矢川、四至、限東杣山、限南加陀賀明神、一処字中村、四至、限東山、限南矢川、限西宇陀川、(限脱)北供御川者、權中納言藤原朝臣伊房宣、奉勅、件所領宜仰彼國、令保房領掌、但於官物者、弁濟國掌者、

一通 寬治六年二月十八日 宣旨

狀云、左弁官下伊賀國、応任徳元元年宣旨、停止大中臣宣綱妨、令藤原保房領掌管名張郡内字矢川・中村所領事者、權大納言源師忠宣、奉勅、宜仰彼國司、停止宣綱妨、任去徳元元年宣旨、令藤原保房領掌者、

一通 寬治六年四月廿五日 宣旨

狀右同前、

一通 寬治七年十二月廿五日 宣旨

狀云、左弁官下伊賀國、応任度度宣旨并相承理、停止金峯山寺妨、令藤原保房領掌管名張郡所領字矢河・中村等事者、權中納言源朝臣俊明宣、奉勅、件所領如三子陳狀者、延綱領掌似無理致、宜任度度宣旨并相承理、停止金峯山寺如(妨)、令保房領知者、

一通 長治二年九月廿七日保房充行子族二人処分狀

狀云、伊賀國名張郡字笑河庄、処分東大寺禪師実誉・中子者、

一興福寺所進文書

一通 貞觀六年正月十九日名張郡戸主藤原倫滋請在地証判申文

狀云、請口早任実正、令加署判、為後代公驗、私所領田地本券等、中村郷小泉住宅、以去十二月廿八日夜、為放火烧失子細狀、合五箇所、在伊賀國名張郡築瀬・夏美・中村・長屋口郷村等、四至、限東伊勢堺、限南奈知山、(限脱)西黒田、限北剥山者、已上五箇所領地、四至阡陌之内、注見作坪、不載荒廢、是坪付有煩之上、条里之外、可令耕作之田畠已有其數、随開発多少、

追年進國、依無相交他領、不可有孤疑、仍不注委細者、右件田畠山野、元者國領地也、爰倫滋雖大和國宇陀郡住人、依祖母當國大目吉田理規後家淨村姉子、教道讓得中村所領畠一町餘并在家苧桑所従牛馬等、渡居當國之後、買得旁開発、本券等領知年久、更無他妨、而間以去年十二月廿八日夜、不凶之外、彼中村郷小泉住宅、為放火烧失家資財并田地本券等已畢、因茲為請國判、先所請申在地証署也、若件燒亡散在文書後代出来、有成牢箠之輩者、可被科盜犯者、望請、早任実正、被加証署、重請國判、為永代公驗等、燒失不虛言之由、在地郡司刀禰等并國使証判明鏡也、仍加判者、

一通 長久四年十二月十一日國司皇后權大進藤原朝臣寺家牒返牒

狀云、四至、牒、去九月廿一日衙牒今月十日到来称、件杣山為寺家所領、已經數百年也、隨則始自維摩会料、寺家修理材料木等、遂年所造進也、而四至内空閑常荒之處、若有(衍力)有治作之時、國使郡司等在前収公、充責不法之公役、因茲敢無開発之人、既成百年常荒之地、為國無其益、為寺有其損、仍牒送如件、今就牒狀尋案内、名張一郡之公地、皆注箠四至之内也、雖然於御寺事、不可准他所者也、新從境越來開発常荒之輩、令免除雜役、至于當土之人民者、敢不有免限、是則遁避拒捍之百姓等、依入箠如此之庄箇、多致國務妨之故也、今勒事狀以牒、

一通 寬德三年正月廿五日左馬允藤原実遠寄進興福寺寄文

狀云、寄進私領荒野事、合一処、四至、(限脱)東太神宮御領山、限南旧御領杣、限西宇陀川、限北剥山、在伊賀國名張郡、右件処先祖相伝之所領也、而時代及末、無人寄作、既成荒野之地、公私共無益者、相副本公驗等、永寄進興福寺者、

一通 永承元年十二月廿三日國司庁宣

狀云、庁宣名張郡司、可立券進興福寺庄一処、右件地已為常荒經數年、仍任左馬允実遠注文、可為【彼】御寺領之狀、所仰如

件、郡司宜承知、除古作公田并人人私領之外、可立券進者、

一通 永承二年正月十三日御教書（宇治殿下）

狀云、進上伊賀守進序宣一枚、右所成如此、四至不載如何、只此定（仁／天）可候敷者、

一通 永承二年十一月十三日国司序宣

狀云、序宣名張郡司、可早令打燒檢田使并御寺使共山階寺御領夏身村傍示事、右件傍示、以先日打境剥口山口、然而供御料田及古作公田多在其中、仍可有郡内牢籠者、隨定寺家御領、至于古作公田者、任例令沙汰官物、於荒【廢】開発田者、可為寺領之狀、所宣如件者、

一通 永承三年壬正月日興福寺牒

狀云、欲被重請国判、令開作寺領名張杣荒野事、在名張郡、国司判云、件荒野任先例旨可開作、在地郡司宜承知、依宣行之、

一通 康平三年十一月十九日国司請文（寺牒）

狀云、伊賀国牒興福寺衙、來牒一紙、欲重請国判、免除寺領名張杣田畠狀、件杣年來御寺所領也者、為請国判、言上事由於長者殿下之処、可依先判者、国司請文云、於国宰者、依仰事不知国務、公家御定之後可進止者、

一通 承保二年二月十九日藥師寺別当隆經進僧正御房御教書返事

狀云、言上案内事、右一日所被仰下伊賀国名張雅藤藤大夫信良之女房領事、不承子細以前、所買得候也、至于今者、如何為之候哉、於良讚沙汰者、如仰雖難指南、彼女房直請文手跡尤顯然、參上之次、可經御覽、抑隆經為御寺僧之上、已參著一乘院門徒末座、何不及一事候者、件公驗罷預、不令致後妨思給如何、若然者、左右可隨仰旨、更彼所文御寺候之由、所不知給也、今令驚尋之処、件庄住人一兩參上、以片端許所令申候也、不審無極候、本末良桓令洩啓敷、隆經謹言、進上僧正御房政所、

一通 三子仮名消息

狀云、名張者故馬大夫御寺寄進（志）処那礼波、壳事毛志波辺良須、

一通 長治元年国司序宣

狀云、下留所（守脱）、可早差遣国司立券名張郡山階寺御庄事、右件所、任旧可立券進之由、寺家政所牒狀所成遣也、仍加国司判者、任四至可立券狀、所仰如件者、

一通 長治元年七月廿二日国御寺使等立券狀

狀云、立券言上、以藤原倫滋去貞觀六年正月十九日立券案并同真遠寄文、如旧雜役免御庄田畠山野等事、在伊賀国管名張郡内、四至、限東伊勢堺、限南奈知山、限西黒田山、限北剥山者、

一通 天仁三年六月日国司免判

狀云、奉免興福寺御領伊賀国名張郡田畠等并雜役免事、右管名張郡郷郷等、四至、限東伊勢境、限南奈知山、限西名張河、限北剥山、右件田畠者、本自御寺御領也、何況經多年、所勤仕維摩會雜事等也、加之旧券文并前判顯然也、仍四至内除公田四十町外、公事雜役如旧所奉免也、但於所当官物者、可令弁濟国库之狀、所宣如件、

右、就兩方所進公驗、勘決四至理非之処、件論田板繩杣山四至外已

公田也、板繩杣云者、則東大寺領黒田杣本名也、彼四至、（限東名張河、限南斎王登大道、限西小倉立藤小野、限北八多前高峯并鏡瀧、）興福寺所進領主実遠寄文公驗云、四至、（限東伊勢堺、限（南脱）奈知山、限西宇陀河、限北剥山、）宇陀河云則名張河名也、而如東大寺証驗者、自実遠之手養子甥信良伝領、自信良之手妻三子伝領、自三子之手藥師寺別当隆經買領敷、重檢事情、信良者実遠之養子、已非実子、然何信良背養父実（遠脱）之寄文、三子之時輒可壳哉、就中実遠存生之時、去寛徳三年相副本券文、寄進興福寺之由、其狀明白也、随又法務僧正貞觀本券文案加判印給、不可成疑殆、加之勘決四至之処、為各別所、又去承保年中実遠死去之後、三子依有壳買之風

聞、法務僧正且被尋買人隆經、且被尋問売人三子之日、隆經者陳不知案内之由、三子称庄状之券、其返事各炳焉也、推其古跡、誠有所以、況信良并三子公驗寬德以後壳券也、頗難信用歟、是実遠之寄文為寬德三年寄文之故也者、今如興福寺所進貞觀公驗并実遠寄文、国司等免判、去長治元年御寺使国使郡司刀禰等立券状者、板蠅杣四至之外出作、為寺家領、有其理歟、左右之間、可御(仰力)御定、仍勘注言上如件、以解、

天永元年十二月十三日

保証刀禰

矢川村刀禰伴重守

中村刀禰大村(在判)

夏見村刀禰藤原成助

名張郡

前郡司紀則末

当郡司丈部近国

興福寺使

知 事信快

權專当良兼

東大寺使

勾当法師

都維那法師

国 使

惣大判官代散位源

勸学院使

知院事左史生紀守俊

(端裏)「備前守平正盛奉送寺家消息 東大寺上」

「醍醐僧都之任」

此度何等事候らん哉、不審無極候、先々所令申候之臍事許容候、返々所令悦申候也、自今以後雖何等事、可申承候也、抑依東大寺御封沙汰、令參使者候、召問子細令訴申条、座主御房可令洩申給候、委趣期見參之次、恐々謹言、

「天永二年」十二月十九日 丹後守平正盛

謹上 片山都維那御房

78、《書籍頁一六〇四》

〇一七七五 伊賀国黒田莊勘注状〇書陵部所藏文書

之解状所被下也、為古負田之証文、而杣工被返本寺

宣旨之由、被注載、尤無実也、委可被加檢察、又於康和二年 宣

旨者、国見之杣之証文也、称興福寺之杣者、是即国見之杣也、於

件杣者、自往古為東大寺領敢無異論、伊賀守資良之任、造興福寺

之間、所借請於東大寺也、次々国司任□□於□□未返進、依之被

下宣旨也、依出作公田、被雇仕杣工、如本被(脱アラン)本寺、

豈非出作并国見之杣証文哉、

一勘文云、寬德三年実遠寄文案、

右件文、雖為案文、号有方人署判、被用証文之条、寧□□哉、就

中去長治元年七月廿三日司任終之比、相語国司暗立券状云、真

遠朝臣等永承二年□(正)月廿一日寄文案×如旧大中臣則綱寄進

興福寺如件等文書者、真遠寄文年号相違如何、可被注落哉、

一勘文云、国司孝清・遠実免判又了、勸学院勘状板蠅杣四至之外出作

為寺領、有其理歟、

右件四至者、如興福寺文書者、長治元年寺解云、(限東伊勢□(堺

力) 限西黒田山、□(限)南奈知山、限北剥山)又暗所立券四

至同前、又称本文書大中臣則綱所進貞觀之偽書四至如此、而背本

77、《書籍頁一五九四》

〇一七五八 丹後守平正盛書状〇東南院文書三ノ六

文違牒狀可為興福寺領之由、始被勘申、何就証文被記載乎、以此思此、如彼四至者、東大寺官省符黒田庄并伊勢太神宮領被除謀敷、就中真遠之寄文、如四至□□東大寺根本杣山一步無殘、

一勘文云、任寛和二年檢田帳、可為東大寺領敷、

右、件檢田帳之内、本庄并真遠寄文田畠所相交也、然者不可有四至之、随又真遠之寄文不可叶事敷、

一興福寺所進貞觀之文之中矣川村四至云、東限東大寺□□

右、如興福寺申者、任真遠之寄文四至、東限太神宮領、西限黒田山者、件太神宮領之西(二)東大寺領国見大杣、在兩杣山、其鉢興福寺所進貞觀之文之中、矣川村之四至(二)所見也、可被檢察也、而不被檢自他文書、任真遠之寄文、可為興福寺領之、押所被記載也、

一寛徳三年実遠寄進興福寺之後、未致相論、経年序事、

右、興福寺如申者、寄進之後、守資良朝臣以前領知□依□事、借請資良之後、不領知之由所申也、件虚実尤可被糺也、資良之任以往東大寺古負田雜役免也、於官物者便補寺家封戸、即充行杣工食物、是往古之例也、天喜 宣旨、寛和檢田帳并真遠之証文等所見也、又代々国司依負田官物事、常□訴訟、若実(二)申請、興福寺雜役免(八)、不訴申件由哉、東□□□召仕故也、

一伊賀国居住現存大中臣則綱近代寄進興福寺事、

右、就則綱之寄文、興福寺去長治元年寺牒并立券云、大中臣則綱先祖相伝之領、任則綱解狀、欲被立券者、件男現存之上、父大中臣宣綱与保房相論之時、数度対問官庭□□之妨、根(本力)中則綱之結構也、只興福寺証文等委可被檢□、

以前条条事、此注文与両方証文、為被檢察、大略注進如件、

天永三年九月 日

79、《書籍頁一六一二》

〇一七八五 某処分狀〇東大寺文書四ノ七十七
(端裏)「少將殿 ほん所ハ女房之御内ひめこせに」
処分 大和所領田畠事

合

拾肆町陸段半者

在葛下郡

廿二条一里卅五坪一町 字北盧戸

卅四坪一町 同南坪

此坪内東畔本式段、売俊覚院畢、

廿四条七里九坪一町 今築地内西

廿一条一里卅三坪八段 庄ふち南坪

此坪内戌亥角畠壹段、売渡安倍三子畢、

廿三条七里五坪一町 新坪

此坪内東二段大之次壹段未申角二段僧聖弁売渡畢、

廿三条四里卅坪五段 田殿

廿四条六里廿坪一町 八木北

廿五坪五段 長原居坪

七里七坪一町 田部

廿三坪五段 やない田西坪

廿三条七里十坪四段 土屋坪

十一坪二段 サミハリ

廿三条五里卅二坪一町 青木北坪

九里十五坪一段半 隆尋

廿四条六里卅四坪一町 筑後前坪

廿二条一里廿六坪五段 南荒木

廿一条一里卅坪一段 残山

廿四条四里廿四坪一町 田殿

このうち四たんはみたうのためにつねもとにうりたひつ、

ほう元二ねん正月廿七日(花押1)

此坪南畔伍段、替平五子地渡之畢、

六里廿七坪一町 太辻 ほう□(元力)二ねん正月廿七日(花押)

此坪内北五段、極楽寺燈油料住僧決勝売畢、

十一坪一町 南瓜毛

右、任故对馬守処分之旨、平均各所分于六人子族(孫力)也、仍第

四女子分所注渡如件、

天永三年十二月三日

80、《書籍頁一六一三》

〇一七八六 某処分状〇東大寺文書四ノ七十七

□□ 大和所領田島事

合

拾肆町陸段半者

葛下郡

□□条一里卅五坪一町 字北□戸

卅四坪一町 同南坪

此坪内東畔本式段、壳渡俊覚院畢、

廿四条七里九坪一町 今築地内西

廿一条一里卅三坪八段 庄淵南坪

此坪内自東二段大次一段未申角二段、僧聖弁渡畢、

廿三条七里五坪一町 新坪

此坪内戌亥角壳渡安倍三子畢、

廿三条四里卅坪五段 田殿

廿四条六里廿坪一町 八木北

廿五条五段 長源居坪

七里七坪一町 田部

廿三坪五段 柳田西坪

廿三条七里十坪四段 土屋坪

十一坪二段

廿三条五里卅三坪一町 青木北坪

九里十五坪一段半 隆尋

廿四条六里卅四坪一町 筑後前坪

廿二条一里廿六坪五段 南荒木

廿一条一里卅坪一段 残山

廿四条四里廿四坪一町 田殿

この四たんはみたうのため二つねもとにうりたひつ、

ほう元三ね正月廿七日(花押2)

此坪内南伍段替平五子地渡之了、

六里廿七坪一町 太辻

十一坪一町 南瓜毛

こつしまのかみのそう分定にまかせて、六人のきんたちの内、四の
きみにわかちたてまつる、くはしきことは、かのかな文にみえたり、

天永三年十二月三日

件字万歳殿所領田島等、任処分帳之旨、所報等立券進如件、仍在

地平田御庄司等加署判之、

永久六年三月六日

藤原(花押)(裏下司)「成国」

清原(花押)「助依」

藤原(花押)「常国」

専当置始(花押)「久行」

専当当麻(花押)「恒包」

公文平(花押)「則忠」

公文大原(花押)「季方」

公文僧(花押)「能円」

置始(花押)「行吉」

源(花押)「忠清」

81、《書籍頁一六一四》

〇一七八七 某処分狀〇東大寺文書四ノ七十七

こさぬきとの、そう分定なかと、大進との、そう分定、つしまとの、をりのみたうの人々の(う脱力)り券、たしかにあり、あへてほかのさまたけあるましきなり、ことの、のたまひしは、わかよのつきぬへからんこ、をの、わかちきこえよとありしかと、あやしきこと、もあり、わかよもはかなきよなればとて、をの、かきりわかちつ、のちにさまたけなとすへき人あるまし、こまかには、あねのきんたちに、たてまつりたるふみにかきたり、いやいぬのおまへにたてまつる也、又々かくへし、た、しこ、にあらんかきりは、とかくさかしきさはあるましきなり、ことの、かなにか、れたるおもむきのま、に、しるしたる也、た、しそれには、子四人のときなり、のちに六人とか(か脱力)れたる文あり、

天永三年十二月三日

これかひめ君のためには、本券になりぬる也、くはしくはゆつりふみにみえたり、

おうほうにねん八月十三日、(花押)コレハあま

〇コノ花押前出花押1・2ニ同ジ
(花押)これハ中納言殿こはん也、

82、《書籍頁一六一六》

〇一七九一 僧勝俊家地売件〇市島謙吉氏所蔵東大寺文書

請 申屋地のこり肆間直事

合限米陸石(但小合斗定)

わたきぬ壺両(裏)「同於東肆間者、僧永念売渡畢」

拾ひろきぬ十きれ

これは別券有、七尺五寸間式間、徳蔵房地あまり、

右、件屋地のこり要用あるによりて、僧範承永うります所如件、

天永四年二月十四日 僧勝俊(花押)

83、《書籍頁一六一七》

〇一七九三 鳥羽天皇宣命案〇石清水田中家文書

停止所所神人衆徒等濫行之由、石清水宮奉宣命状云、

天皇(我)詔旨(止)掛畏(支)石清水(爾)御坐(世/留)八幡大菩薩(乃)広前(爾)恐(美)恐(美毛)申給(波久/止)申(久)、誤(天)以庸昧(弓)濫(久)受皇凶(多利)、日慎之裏(仁)年序漸移(多利)、爰頃年以來(加多)、神人濫惡(越)為先(之)、緇侶貪婪(越)為本(之天)、或(波)公私(乃)田地(越)押領(之)、或(波)上下(乃)財物(越)掠取(留)、不論京幾(須)、不嫌辺垂(須)、結党(比)成群(弓)、填城(比)溢郭(流)、畜人民(乎)非滅亡(乃美)、兼(天波)同侶同伴(毛)鎮(仁)成合戰(須)、拋学(弓)横刀兵(部)、脱方袍(天)被甲冑(多利)、梵宇(越)燒失(之)、房舍(越)破斫(ス)、携弓箭(天)左右(乃)友(止之)、以矢石(天)朝夕(乃)翫(止須)、餐霞(乃)窓、為之(仁)變戰場(之)、臥雲(乃)栖、因其(天)成軍陳(多/利)、宰吏明(仁)知(止毛)、禁制(仁)無力(久)、憲臺近(久)見(止毛)、糺彈(仁)有憚(利)、遂忘王法(天)已破律儀(留)、譬(波)師子(乃)身中(乃)虫(乃)、自如食師子(之)、任法(天)欲科斷(礼波)神慮難測(之)、成憚(弓)点止(礼波)釈教將滅(ス)、夫(礼)神明(波)保護朝廷(之)、鎮守教行(多末/布越)為垂跡之本誓(爪)、就中(仁)我朝(波)神道祐基(ケ/ル)国、釈家留趾(多ル)地(奈利)、神威(波)依皇威(弓)施威(之)、神明(波)引皇明(礼天)増明(ス)、神自(良)不貴(ス)、依人(弓)貴之、教自(良)不弘(ス)、依人(天)弘(万留)、神人(乃)濫行(乎)見(天波)、萬人切齒(利)、衆徒(乃)威勢(乎)聞(弓波)、四海

反脣(ス)、内教(乃)凌遲(スル/古止)、職(之天)此由(奈利)、以思(ヒ)以歎(支)思食(ス)処(仁)、近日神人淨侶(止毛)為致訴(仁)、度度(乃)制符(越)背(天)、猥昇神輿(天)奉驚公家(留)、是朝威(越)忽諸(乃見/加波)、還(天)不憚神慮(奈利)、自今以後(波)、祭祠(乃)式日(乃)外(仁波)、神輿(越)不可奉動(ス)、又神境(乎)不得奉出(之)、不由此旨(之/豆)非常(乃)輩(良)有(天)、縱雖奉動(毛)、神(ハ)不享非礼(礼/波)、驚動給(布故/止)無(之天)、令勿影向(礼)、国家(毛)可存其由(奈/利)、若禁制(乃)旨(仁)不從(良/武)輩(波)、緇素(ヲ)不謂(ス)、仁祠靈社等(乃)司(乎)任法(天)罪科(越)可行給(喜奈/利)、方今興福延曆等(乃)兩所、互成訴訟(天)趣涉縱橫(礼/利)、無物禁止(久)不奈皇憲(ス)、各施威猛(之天)、只企戰鬪(津)、除此災孽(豆)、無為無事(豆)令護幸給(波牟故/止)大菩薩(乃)厚(支)御惠広(支)御助(爾)可有(ナリ/止)所念行(天奈/牟)、故是以、吉日良辰(乎)択定(天)、参議從三位行右大弁兼勘解由長官備前權守源朝臣重資・散位從五位下藤原朝臣泰盛等(乎)差使(豆)、礼代(乃)大弊(乎)令捧持(天)、奉出給(イハイイタシタマ)布、大菩薩此状(乎)平(久)安(久)聞食(之豆)、神人(乃)濫行(乎)永停(免)、禪侶(乃)惡事(乎)忽罷(天)、社壇惟靜(之豆)、蒸嘗(乃)礼永欽(美)、精舍弥平(之豆)、頭密(乃)学中興(之豆)、天朝(皇敷)朝廷(乎)宝位無動(久)、常磐堅磐(仁)、夜守日守(仁)護幸奉賜(久)、天下太平(三)寰

中安穩(仁)、護恤給(止)、恐(美)恐(美/毛)申賜(波久/止)申、

天永四年四月十五日 作者大内記永実(藤)

【第五卷】

84、《書籍頁一六三三》 *端裏の文書

○一八〇二 某書狀○東大寺文書四ノ五十六

(端裏)「小東庄田文(三)返得之由(ハ)去年返進了、

寛治八年康和四五〇元二嘉保二三永久元年

威儀師殿(は)僧身なり」

追言上

御堂塔等建立之後、定僧房令立御敷、其中一分住僧必可令定充御也、住所不候而無候候故、兼日申置候者也、重謹言、

85、《書籍頁一六六八》

○一八六一 檢非違使新家重房勘狀案○光明寺古文書

「如申狀者、包元相論□□□□妨糺返押苜稻之、使禰宜(在判)」

勘録言上磯部包元与布浜檢校伊福部貞元相論治田一段百八十歩理非子細状、

在志摩国答志郡馭家郷鴨村内字竹依者、

一包元出对文書

一枚、以康保三年二月十日答志郡少領島実雄(加)内□伊福部利

光(仁)沽渡券文(在国郡印判)

一枚、以長久二年十月廿日利光(加)太神宮司判官代大中臣□

松時(仁)沽渡券文(在郡司印判、但自利光名字傍親押書、

□□郡司印判等皆以相違、)

一貞元出帶文書

一枚、以長徳二年十一月三日利光(加)養子甲賀御庄下司字出雲

介家女伊福部貴子(仁)他田島(仁)相加(天)処分(世/

流)文、其状云、件竹依田公驗、為盗人被盜取了、□時訴申

公庭、可致沙汰者、

以前、兩方文書勘録言上如件、抑件田内豎伊福部利光從答志郡少領

実雄之手買得領知、經卅一年、以姪伊福部貴子(天)立養子(天)、以長徳二年(天)他田島(仁)相加(天)処分(世/里)、其状云、年及老耄無貽一子、仍姪甲賀御庄下司出雲介家女伊福部貴子処分已了、但以租米者、滿葉寺造顯數鉢仏菩薩修正二月并燈口仏供料施入、以所当者為私用支者、是貞元所帶口書也、其後過卅五年(天)彼利光松時(仁)放券(世/里)、其券文已以每事有相違、加之縱雖貞元不得理、包元可口(進力)退理以少、故何者、包元祖父曾祖母之時分、充甲放故券壳買已了、其後及于三代孫包元、号子孫、乍口當時領主、以件実雄放券空放券許(天)、貞元口口成争論、苜取獲稻之条、玄隔之論也、以之謂之、口進退(之/天)可勤滿葉寺、時節理致分明也、包元相論之口、敢非一口論、仍勘録言上如件、

永久四年十月十日 使

檢非違使新家重房

86、《書籍頁一六七〇》

〇一八六四 僧久因田地壳券〇根津美術館所藏文書

謹 壳与 字名旧田事

合卷段(在東大寺/河上)之内一段貞尊沽却了、右、依有用々永重国(二)所壳与之状、如件、

永久四年十二月十八日

壳主僧久因

(花押)

大法師(花押)

87、《書籍頁一六七一》

〇一八六七 僧禪徳出举米借文并同解〇根津美術館所藏文書

(端裏)「本文書一枚」

謹解申 請借出举米事

合捌斗【口升】

右件米、以来秋時、加息利、依員可弁進之状、如件、

永久五年三月二日 僧禪徳

(略押)

上司畠大券、質物(二)進之、

「禪徳法師出举状并房地

(花押)」

88、《書籍頁一六八〇》

〇一八八七 僧延寂畠壳券〇東大寺文書四ノ七十三

(端裏)「下河西畠券」

解申読讀(壳買) 畠立放券文事

合肆段者

在名張郡矢川条加波井尻

東限安元作、南限重任作、西限口垣、北限川、

口畠元者、僧延寂之年來領所也、而口用真(直)鼠毛牡壳足代佰五

拾足麻布一口限、大中臣依宗(二)、永年作手壳与事已了、口為後日

放券文如件、

永久六年五月二日 僧(略押)(裏)「延寂」

常房(略押)(裏)「延寂二郎」

安元(略押)(裏)「延寂三郎」

(裏)「残一反之内、中大(八)定藏房処分了、

北大(八)藤四郎処分了、

西式段者沽却了、」

89、《書籍頁一六八三》

〇一八九二 太神宮檢非違使伊勢某状〇光明寺古文書

使制止 田二段三百步事

「案文」

右、件坪田二段三百歩之／中、一段三百（ハ）成生戸田内、一段大内人吉弘私領治田、而為恒頼古作田（エ）藤原兼房避渡、隨兼房今年所作也、雖然橫為字藤太擬麥押蒔之由、伯殿所訴申、停止件藤太妨、兼房（者）麥（遠）可令作之由御外題已了、仍在地刀補宜承知、依件可加制止之、

元永元年壬九月十三日 檢非違使伊勢

90、《書籍頁一六八九》

○一九〇三 坂上常定田地去文○東大寺文書四ノ四十七
常定解 申渡進領田事

合老段者 字藤迫式切

在名張郡中村条

四至 限東庄巖房御領田 限南山 限西杣道 限北殘領田

花巖会田

右件田、常貞相伝所領也、而安道納所御出挙初參石參斗式升之代（と）永所渡進如件、但置本券者、依有類地、新券文渡進、伊為後日沙汰、立券文、以解、

元永元年十一月十三日 坂上（花押）

同時定（花押）

91、《書籍頁一六九二》 *端書のみ

○一九一一 豊後国柞原八幡宮祓祭物注文○宮師文書

（端書）「はらいのさい物註文」

清祓祭物

合三十五種

御神二百七十本（高一丈五尺 各別九十、） 御鉢十五本（高七尺

縵垣 各別五本）

大刀三腰（金造）

御馬三疋

銀人形卅（高一尺） 金人形卅（高一尺）
銅人形卅（高一尺） 鉄人形卅（高一尺）

青人形卅（高同上） 黄人形卅（高同）

赤人形卅（高同） 白人形卅（高同）

豹虎皮三枚 錦卅段（各別十）、

綾卅段 上絹百五十疋

調絹百五十疋 調布百五十段

紙百五十帖 米百五十石

清酒五十石 濁酒十石

御馬秣百五十束 桑木一夜立楮三筋（高二丈五尺）

棕木楮三筋（長同上） 排木楮三筋（長同）

蚤虱皮一斗四升（各七升宛） 九尺家犬皮三枚

三尺鼠皮三枚 馬形七十具

午（牛力）形七十具 散米三石

粗三石 砂三石

菅人形七十具

右、件清祓祭物等、依官符旨、注進如件、

「保安元庚子八月 日」

92、《書籍頁一六九九》

○一九二三 伊勢国大国莊流失田畠注進状○白河本東寺百合

文書八十一

大国御庄注進為去八月廿五日洪水、且流失、且砂埋田畠損亡子細状、

一御庄内麻生曾村田一町、桑畠四段、

一大井川原片畠二町（已白川原）

一兄国川原同畠一町五段（之中）五段桑畠（已白川原）

一大川原畠三町一反半（之中）一反半桑畠（已白川原）

一大国村田三町八段半、畠一町一段（之中）五段桑畠（已損）

(端裏) 「大宅是道上」

□□□

白布一段(但在末名御油三升代)

右件布、進上如件、

保安二年十一月十二日 大宅是道(上)

やまめに候女にたし候すして、ほかへまかりなむとし候を、おさへとりてたてまつり候、件御油三升(か)御返抄たしかにくたしおはしますへく候、

93、《書籍頁一七一〇》

○一九五九 伊勢国大國莊專当解○東寺百合文書ほ

大國御庄專當時光武道等解 申重請 本家 政所裁事

言上三箇条雜事

一以先日田堵住人等訴申、当御庄田養料堰溝破壞改堀并埋田可開発人夫功勞、依無御裁免、或愁叶堰溝役、或偏棄旧作田、令荒廢事、

右、謹案事情、件堰溝加実檢之処、今新令堀溝十町、広深各八尺、令堀此人夫、甲所老段切五六十人、乙所者四五十人也、又古(きを)改堀溝十余町也、而老段切改堀人夫一倍(世/利)、但件溝、庄所当分新旧六町也、因茲御庄司加力所被令堀也、然則為蒙裁下、所注進如件、

一埋田令実檢之処、砂洲高埋置者也、爰件石洲土等、擬曳棄之間、以二三十人(乃)夫令曳之処、僅十余束代、然則老段(加)内、□(かん)人夫可及二三百人哉、件埋田作人等申云、私入若干人夫功勞、雖令開作、無功勞裁免者、無益之由訴申、不随所勘、抑為慰田堵等愁吟、頗令言上者、且有恐不愁者、御庄可令荒廢哉、仍為蒙御定、注進如件、

一他庄并公郷料始新堀溝二所(之/中)一所令堀之間、庄田損失一

一横道村田八町四段半、桑島二町二段三百歩、

一御正作田一町菴類稻伍佰束、雖納御倉湿朽如藁、

一流失在家七家、道房・友行・守次・□末・得重・公元・頼清、

一流死女一人、同斃死牛馬十疋(之中)馬二疋・牛八頭、

右件田島、或崩失或流失、或土高二三尺許置埋、或砂石流居、成白

川原、永所損亡也、抑纔所流殘田、往古之堰溝流失、難□後□不可

耕作者、加之、他所權門勢家神社仏寺庄園領田為耕作、従当御庄之

中、彼流失之堰溝、任先例可堀通之由令然、則擬令堀損之処、田島

仮令二三町許也、是為後日之訴、兼日所言上也、如此之間、田島殘

非幾敷、但実檢使下向之尅、無其隱哉、仍任実正、法進如件、

保安二年九月廿三日 御庄專当藤井時光

同 專当菅原武道

檢 使凡友永(花押)

押領使本塩房(花押)

田堵住人等

伊勢恒正(略押)

清原光成(略押)

太神宮權禰宜荒木田豊平

豊受太神宮權内人大和武次(花押)

太神宮大内人荒木田豊元

凡 友平(花押)

僧 定照(花押)

太神宮司 卜部正光(花押)

* (之中)は、以下に割り書きが続く場合があり、それは採っていない。前後が本行の場合のみ採用。

93、《書籍頁一七〇〇》

○一九二五 大宅是道貢布状○東大寺文書四ノ五十四

段余步、雖不幾、依為田數之内、所注進也、一所為字稻木村刀禰住人等、乍置以往溝口、御庄司在京之間、訴大神宮司、從當御庄田字八段長中心五町許大溝押堀之間、令損失庄田一町三段、敢不可寄作者也、如此令損失、兼又為去年八月洪水、且埋且流失田八町余步也、於流失田者、非當庄愁(乃見)、部内皆同前也、抑為上件刀禰住人等、恣所押堀溝令停止、如元從古溝可令堀充之由、度々雖触訴於司序、不裁定左右、京上已了、因茲、申文所副進也、大神宮司在京之間、遣此申文於彼大神宮司之許、任道理、可堀直之由、召外題、為被下遣、言上如件、

以前三ヶ条訴狀、為蒙能治御裁下、勒在狀言上如件、以解、

保安三年三月十一日 菅原武道

藤原時光

95、《書籍頁一七一五》

〇一九六三 近江国平宗保讓狀〇蒲生文書

讓与 近江国蒲生上郡麻生庄公文職事

合

右件當職者、為平宗保先祖開発之所帶也、而老耄之尠、前後不覺之上者、於彼所職者、嫡男平宗繼(仁)一円不輪所讓渡也、進退領掌、更以不可有相違者也、又御年具(貢)御公事以下、不可有經怠、仍為未代、讓狀如件、

保安三年五月十九日

平宗保(花押)

96、《書籍頁一七二八》

〇一九九三 白河法皇御告文案〇石清水田中家文書

太上法皇被申台山僧騷動由於諸社

維保安四年歲次癸卯七月壬子朔日、掛畏某大神広前(三)太上法皇

恐(美)恐(美/も)申給(ハく/と)申(く)、謬以薄徳(天)、早備天位(れ/り)愚庸(の)身(ハ)此位(三)不可堪(と)思食(天)、逃皇圖(天)卅八年、入釈門(弓)廿八年、然間忝為三代帝王之父祖(天)、已餘七旬春秋之年算(れり)、訪之倭漢(爾)曾(天)無比類、誠是大神(乃)広(幾)御助、厚(き)御惠(乃)所致(なり/と)奉仰(り)奉戴(こ/と)無限(シ)無極(シ)、而世及澆醉(ひ)、人少貞直(天)、諸社諸寺(の)神民禪徒等、不善之事旁有其聞(り)、就中(三)天台(乃)衆徒(乃)訴訟惡行、遂(逐)年隨日(天)綿連(天)無絶(志)、偏崇彼宗(天)、多(ハ)依申請(天)裁許之間、弥以積習(天)、濫吹尤甚(シ)、爰今年五月之比、越前国敦賀郡(三)不慮之外(三)鬪致之輩所出来(なり)、所部人等擄捕犯人(天)、檢非違使序(三)令請渡之後、途中經廻之程(三)、為惡僧等(爾)被奪取(なり)、公家此旨(を)聞食(天)、張本(の)人(を)牒(寺家(天)令召竈之処(三)、台岳(の)徒衆結党(ひ)、成郡(群)(天)、寺家(の)長吏(の)房舍(を)研破(り)、日吉(の)社壇(の)神輿(を)奉迎(天)、吐莠言(き)致擾乱(寸/か)上(爾)、猶又為訴非理(三)欲入洛京(する)由、世以騷動(久)、人以驚走(る)、伏惟(ハ)王法(ハ)如来(の)付属(爾)依(天)国王興隆(寸)、是以仏法(ハ)王法保護(れ)天(こそ)流布(寸/れ)、若非憲法(ハ)何可住持乎、方今雖逃宝錄(も)、雖樂脱履(モ)、幼齡之主(を)愛念(シ)、朝家(の)政(を)扶持(せり)、今(も)今(も)宗廟社稷(の)基(を)繼躰守文(の)君(を)安(せむと/し)天、水月(の)空觀(も)其心(を)乱(り)、煙霞(乃)逸遊(も)其思(を)煩(天)、緇徒(の)惡念(を/も)不顧(寸)不畏(寸)、偏為国家(爾)專為王法(爾)、任其道理(天)、欲行朝憲(寸)、抑我朝(ハ)神国(なり)、鎮守(の)誓願長垂無窮(たり)、神(ノ)不享非礼(され/ハ)、恣以非道(天)致訴(せ/る)党類、縦成忿恚(と/も)豈有受用哉、然則施冥鑒(シ)、加

神力(天)、如此(の)衆徒(の)中(爾)暴惡(の)輩(ヲ)令徵(懲)肅(天)、無事(久)無故(久)、令有給(と)所念行(天な/む)、故是以吉日良辰(遠)択定(天)、官位姓名(を)差使(天)、礼代(乃)大幣(乎)奉出給(ふ)、大神此状(乎)平(久)安(久)聞食(天)、朝廷(乃)威(遠)振(ひ)、僧徒(の)心相平(天)、真言止觀(乃)道、共天地(天)久盛(天)、修習練行(乃)輩、積夏臘(天)常住(せむ)、九禁(乃)居(爾)北辰之輝惟穗(二)、兩院(の)砌(三)南山(の)寿不燾(む)、又甘雨忽灑(天)国土豐饒(爾)、宿霧永斂(天)遐(方力)静謐(たらむ)、恐(美)恐(美/も)申給(はく/と)申、

式部大輔敦光朝臣、依 院宣草進之処、未被發遣使之間、台山衆徒集會祇園、遣勇士等防禦已了、仍不被立使、召敦光返給畢、

97、《書籍頁一七三九》

○一九九九 兼貞珍光時論田勘注案○近衛家本知信記天治二年至五年卷裏文書

恒近所領也、而被禁獄檢非違所別當許、可進上物代、判官代為光永所壳渡也、偏恒近依非可作田島、請申如件者、

嘉承元年六月廿二日 珍為光申文一通

載大藪田四段百八十步、在守良兼朝臣外題、其状云、件田島依有文書理、先日可為国分寺(領脱力)之由、裁定先畢、雖然依有所申理、以為光可為作人之者、

天仁二年三月十七日珍為光申文一通

載池田郷末川・嶋宮兩里坪坪田島四町九段三百四十步、状云、件田島元者日置恒近・平時光等所領也、而前司御任恒近被召禁之間、為弁進庁料、准物代相副本券、所与珍為光也、任先判被裁免矣者、守仲兼朝臣外題云、如本可令為以為光作人、於加地子者、任先例、可令進濟国分寺也、尤不可致遁避者、

天永三年四月十四日守有成朝臣書状一通

状云、主税頭領宮村事、前司仲兼時令免申畢者、而件村任前司時例、可致其沙汰也者、

永久四年五月廿七日今泉御庄預所河内權守惟安下文一通

状云、光時親父為光次第相承雖領作件田等、更無異論、而今貞方入道、以秋行・恒近等之時券致訴処、件秋行等手次券文光時又相伝、仍難知真偽之由、所訴申也者、里刀禰秋任并重恒皆為見聞証人之由陳申、早以件兩人令請祭文、若不請者、可為光時領歟者、

保安四年八月廿二日殿下句(政力)所下文一通

状云、可令任公驗并在地証判領知、舍人珍光時訴申大藪田四段内二段、僧教快仮神威押妨事者、

同年九月廿七日珍光時申文一通

載大藪田四段、守宗兼朝臣目代光直外題云、件田任公驗理、停止教快妨、光時可領知由、政所御下文顯然也、而今泉御庄寄人等背本家御下文、押取所苜置稻条、甚左道也、早任在地証判、可返与件田獲稻之者、

同日同珍光時申請在地証判一通

載大藪田四段、状云、件田光時所領也、而自作田見稻、切破下人垣内持取事明白也、仍在地加署判者、右、光時公驗顯然也、可領作之由、度度預裁判畢、兼貞公驗皆以鮮(詳力)也、可領掌之由、裁断重疊也、

弁決之間、准的難資、用捨可待御定之処、兼貞申云、光時祖父恒近康和三年三月廿一日壳券謀書也、其故何者、恒近男恒松・恒吉・恒行・時光等、以長治二年四月七日夜、依殺害池田郷住人守丸之犯過、被禁固其身畢、守良兼朝臣逆修之間、赦免庁宣并資財雜物収公注文進覽之、犯過以前被禁固之由、何可注載壳券状哉、可被

遺迹也者、光時申云、恒近并聳時光依殺害地黃御齒寄人行恒之嫌疑、被禁固之事者、池田郷住人守丸殺害以前之事也、而兼貞不顧祖子之犯過、不知禁固之前後、為勝相論申出詞也、其刻於時光者、逃隱既畢、恒近一人所被禁固也者、兼貞申云、恒近并子息等之犯過、如光時陳申者兩度也、年号月日覺悟敷、可進証文也者、光時申云、殺害行恒年号月日無心覺悟者、左右可依御定、

一池田郷宮村宮里三坪内三段事

兼貞所進文書
承德三年二月十八日高志助吉壳券一通

載宮里三坪内三段、

狀云、助吉所領也、而平時光永所壳与也者、

長治二年五月廿一日平時光壳券一通

載宮里三坪内三段、狀云、時光領作也、而酒人兼助副本券壳

進事既畢者、

永久二年二月十四日酒人經助所領坪付一通（在庁官郡司等判）

載宮里三坪内三段（兼貞申云、三坪内東副也者、）

光時所進文書

康和三年三月廿一日日置恒近壳券一通内

載宮里三坪内三段、狀云、田島元者恒近所領也、而依被禁獄

檢非違所別当許、可弁申物代、限永年、判官代珍為光、副本

券所壳渡也者、

同年三月廿三日日置恒近作手請文一通内

載田島四町四段三百四十步、光時申云、宮里三坪内三段者、

恒近作手請文四町四段三百四十步内也者、

右、披見兼貞公驗之處、以承德三年二月十八日、自高志助吉手平

時光伝領、次以長治二年五月廿一日自時光手酒人兼助伝領、次以

永久二年二月十四日兼助所領坪付狀、請庁官郡司刀禰等之署記畢、

披見光時公驗之處、以康和三年三月廿一日、自日置恒近手珍為光

伝領、次以同年同月廿三日自珍為光手出作手請文、日置恒近更返領畢、用捨可待御定之處、光時申云、光時公驗、相伝有限領作之間、無人異論、而兼貞自去年春比、号有公驗、所擬押取也者、兼貞申云、光時所進之康和三年三月廿一日恒近放券并同年同月廿三日作手請文皆以謀書也、其故何者、以長治二年五月廿一日、兼貞親父兼助、自平時光手伝領、然即康和三年三月廿一日恒近壳券内、專不可注加時光放捨之田島、且垂遺迹、且可進証文也者、彼此文書之中、加日置恒近署判畢、比校之處、皆以相違、用何可捨何哉、

左右可依御定、

一同郷末川嶋里廿八坪内田三段事

兼貞所進文書

寛治三年十二月十五日当麻正枝壳券一通（非早名在真名）

載末川嶋里廿八坪内西北溝副三段、狀云、正枝作手也、而限

永年日置恒松壳与既畢者、

長治二年五月廿五日日置恒松壳券一通

載末川嶋里廿八坪内三段、狀云、恒松相伝田也、而酒人兼助

限永年壳進既畢者、

光時所進文書

嘉保三年五月日日置恒近申文一通

載末川嶋里廿八坪二段半、狀云、当国例雖有神社仏寺御領田

島、就本所公驗并国凶帳、令致其沙汰例也、而当講師仁朝恣

背文書理、号四至一円田島、猥致苛責之旨、其理如何、任院

宣并文書理、被停止非道責矣者、守左少弁外題云、所訴申之

田島、任国凶流記并田所勘狀、停止寺領、可為私領之者、

康和三年三月廿一日日置恒近壳券一通内

載末川嶋里廿八坪内二段、狀云、伴田元者恒近所領也、而依

載末川嶋里廿八坪内二段、狀云、伴田元者恒近所領也、而依

被禁獄檢非違所別當許、可弁申物代、限永年珍為光所壳渡也者、

同年三月廿三日日置恒近作手請文一通內

載田島四町四段二百四十步、狀云、恒近所領也、而依被禁獄檢非違所別當許、可進上物代、判官代珍為光所壳渡也、偏恒近依非可作田島、請申如件者、

右、兼貞公驗狀者、西北溝副三段所記載也、光時公驗狀者、不注方付、仍召問子細之處、光時申云、光時領田者廿八坪內西北溝東副三段也者、彼此領否無方弁決、尋問國郡、可被裁斷歟、

一同郷字伏見北脇田二段事

兼貞所進文書

康和四年二月三日酒人守道壳券一通

載伏見田北脇一段、狀云、件田自僧延快手所買得也、而限永年日置恒近副伝券所壳渡也者、

長治元年四月十七日日置氏一女壳券（無坪付）

狀云、件田元者、恒近伝領也、而恒近一女所分宛行畢、件一
女白栗毛母馬一疋代、限永年為日置恒行所壳渡也者、

同年□□日日置恒近処分帳一通內

載伏見（田脱力）北脇二段（一丁二段二百四十步內）狀云、
件田島日置一女処分所充行如件者、

同二年五月廿一日日置恒行壳券一通

載字北脇伏見田內二段、狀云、件田一段卷尾僧源然所領一段、
僧延快所領恒行相伝、而限永年酒人兼助壳渡既畢、

光時所進文書

康和三年三月廿一日日置恒近壳券一通內

載伏見二切二段、狀云、件田島元者恒近所領也、而被禁獄檢
非違所別當許、可弁申物代、限永年判官代珍為光副本券所壳
渡也者、

同年三月廿三日日置恒近作手請文一通內

載田島四町四段三百四十步

光時申云、字二切二段者、件恒近請文四町四段三百四十步內
也（と）申、

嘉承元年六月廿二日珍為光申文一通

載伏見二切二段、在守良兼朝臣外題、其狀云、件田島依有文
書理、先日可為國分寺（領脱力）之由載（裁）定先畢、雖然
依有所申理、以為光可為作人之者、

兼貞・光時等申云、字伏見田北脇者字二切云処之異名也、仍
申二切又申伏見田北脇也、

右、披見□□公驗之處、以康和四年二月三日自酒人守道手日置恒
近伝領、次以長治元年四月十七日自一女子（恒近大娘）日置恒行
伝領、次以同年五月廿一日自恒行手酒人兼助伝領（包貞親父）之
由、券契明也、但日置氏一女預親父恒近処分者、長治元年十一月
十九日也、恒行得一女放券者同年四月十七日也、以之案之、処分
以前之田地放捨恒行之条、頗有疑殆、披見光時公驗之處、以康和
三年三月廿一日、自日置恒近手珍為光伝領、以同年同月廿三日、
自為光手出作手請文、恒近更返請畢、次以嘉承元年六月廿二日、
珍為光可為作人之由、守良兼朝臣与判明白也、用捨可仰御定之處、
兼□□□□光時所帶之康和三年三月廿一日壳券并同年同月廿三
日作手請文、皆以謀書也者、光時申云、件壳券相伝之後、可領作
之由、代代国判明白也、專非謀書者、左右可依御定、

一同郷川嶋里卅三坪田二段事

兼貞所進文書

承徳二年十二月十三日珍忠任壳券一通

載川嶋里卅三坪內二段、狀云、件田元者珍忠任所領也、而限
永年壳与僧頼禪畢者、

康和二年十二月十四日僧頼禪壳券一通（非早名、但端書在請狀、

加早名畢、

載川嶋里卅三坪二段、状云、件田元者頼禪所知也、□□□□

(而限永年力) 売与平時光畢者、

長治二年五月廿一日平時光売券一通

載川嶋里卅三坪内二段、状云、平時光相伝領作今依急用、限

永年酒人兼助、副本券売渡既畢者、兼貞申云、件田二段者、

川嶋里卅三坪内西副也(と)申、

光時所進文書

康和三年三月廿九日平時光質券一通

載末川嶋里卅四坪二段(五段内) 状云、件田元者平時光・日

置恒松・同恒行等父恒近、身依被禁獄檢非違所別当許、庁料

葦毛父馬直百疋代也、若件直不弁申者、限永年珍為光可進上

也者、

右、彼此領否、暗難弁決、其故何者、兼貞所帶之長治二年□□□

与光時所帶之康和三年三月廿九日質券比較之処、本主時光署既以

相違、加之兼貞公驗状者、注載川嶋里卅三坪内二段畢、光時公驗

状者、所注載末川嶋里卅四坪内二段也、尋問国郡可被裁断歟、

一字脇内田三段二百四十步事

兼貞所進文書

長治元年十月十九日日置恒近処分帳一通内

載池田郷宮村字脇内田三段二百四十步(一町二段二百四十

步) 状云、件田島一女処分充如件者、

光時所進文書

承曆三年二月六日僧長仁売券一通

載池田郷字垣所乃内西副一段半(在四至) 状云、件島□□

□□領也、而出拳初代日置恒近売却如件者、

永保二年十月十三日信太売券一通(有姓無名)

載字加治菌内二段、状云、件島長仁作也、而先年券文所進也、

爰依有要用、沽却日置恒近既畢者、

康和三年三月廿一日日置恒近売券一通

載字梶治菌脇内九段百八十步、(三丁二反三百四十步内)

状云、件田島恒近所領也、而依被禁獄檢非違所別当許、可弁

申物代、限永年判官代為光副本券所売渡也者、

右、兼貞公驗状者、注載字脇内三段二百四十步畢、光時公驗状者、

所注載字垣菌内西副一段半、字加治菌内二段也、爰兼貞申云、兼

貞所領者字脇内田三段二百四十步也、光時所領者□□菌等也、何

以其券、可領脇内田哉者、光時申云、脇内者所謂垣菌・加治菌兩

所之異名也、被尋問国郡在地者、無其隱歟者、左右可依御定、

一末川嶋廿四坪内田一段事

兼貞所進文書

長治元年十月十九日日置恒近処分帳一通内

載末川嶋里廿四坪水田六町一段、状云、一女処分充如件者、

永久二年二月十四日酒人兼助所領坪内一通内(在庁官郡司刀禰

等署判)

載末川嶋里廿四坪一段

光時所進文書

延久二年十二月十九日葛木末用売券一通

載末川嶋里廿四坪内八段、(在四至) 状云、件田元者、春重

□□□為養子死去之後、依報恩功所充給也、而依有要用、限

永年日置恒近所売与也者、

康和三年二月廿二日日置恒近売券一通

載末川嶋里廿四坪内八段、(在四至) 状云、件田者恒近所領

也、而依被禁獄檢非違所別当許、可進上絹五切代、限永年、

判官代珍為光副本券沽却既畢者、

右、光時申云、□末川嶋里廿四坪内西副二段者、兼貞姑飯名金恒

領也、東副八段者光時領也、而兼貞自去年春比、号有公驗、光時

領八段内一段所擬押取也者、兼貞申云、此田八段内一段、光時祖父恒近、以長治元年十月十九日処不一女既畢、自一女夫時光手、兼貞親父兼助伝領、其後兼助以永久二年二月十四日注載公驗目錄、請□□地刀禰等之署記畢、然即延久康和等□□□古也、何以其反古、可致諍論哉、早任券契理、八段内一段可被裁許也者、但光時祖父恒近处分

*「へと」申「二例のみ

98、《書籍頁一七五六》

〇二〇一三 僧頼智解○京都大学所藏東大寺法華堂文書

御房人僧頼智解 申請 東南院 御室（政所）裁事

請被殊蒙 恩裁、任数年開發領掌理、糺返給房敷地三間跡、為僧能德、令沽却他人、不安愁状、

右、謹檢事情、件房敷地、頼智開發之後、領掌已經年序之間、能德出来、房所三間許跡、依乞請、令借宿処（二）、不慮外称令沽却能德之由、横他人出来、俄令糺際目阡陌、企破取条、全以敢不知其理、件故能德不出請文、随又不行宛文、以何為証驗、企令買領知哉、田地領掌之道、以公驗為宗、空壳買兩人、至于謀計何事如之哉、為亡目頼智愁過斯莫、望請 恩裁、早任道理、被停止能德謀計、被令頼智糺返給者、将仰 正道之貴旨、仍注在状旨、以解、

天治元年五月七日

僧頼智法師

99、《書籍頁一七六一》

〇二〇二四 源某田地売券○白河本東寺百合文書三十五

たしかにうりわたしつ

沽却 領田老処事

合式段者

在佐倍里参拾貳坪中者、

右、件領田、元者自日量（置）則恒之手、所買得也、而依有物要用、限直能米拾肆斛、相副本券文、海正行為永作手所請渡（沽力）也、仍新券文、以辞、

天治元年十二月三日

源（花押）（奉）

100、《書籍頁一七六五》

〇二〇三四 平某置文案○東寺百合文書ぬ

雲殿証文也、

東殿之於公驗者、嫡子太郎（二）渡之、但子孫其数多御故、三方殿之御判（ヲ）申渡之、

存生之時者、其所出者可知之、子孫（仁八）不可伝之、

天治二年三月 日

平（在判）

101、《書籍頁一七六九》

〇二〇四二 紀伊国八幡隅田宮俗別当藤原忠村解○隅田家文書

「忠村俗別当者、不可有他人沙汰状、如件、（花押）」

別宮俗別当藤原忠村解 申請 預所權寺主御房 御裁事

言上 子細愁状

右、謹檢案内、件別宮俗別当之職（ハ）、忠村父故忠延時、若宮（ノ）宝殿奉造始申成（天）候（シ）司也、以先年之比、恣正清希望（シ）申時、彼此理非不知食（シ）天隨解状之旨、成下御坐事先畢、雖然忠村以此由重訴申日、依有道理限、小別当御房申成下御坐事已畢、而如伝承給者、尚俗別当之職、他人（三）可成給由承之、仍為裁定承給、子細大略言上如件、以解、

天治二年七月八日

別宮俗別当藤原忠村

「件忠村訴申俗別当職事、其理明白也、仍加署名、

神人大禰宜王

權俗別当紀（略押）

神 主民 (略押)
別宮別当「僧二

102、《書籍頁一七七三》

○二〇四九 散位源某家地去状○東寺百合文書ツ

(端裏)「しをのこうちおゝみや」

渡与 地老処事

合老戸主者へ東西式丈伍尺壹寸 南北拾玖丈捌尺

在左京八条一防十六町西一二行北五六七八門内

右件地、元者自駿河前司上之手、故甲斐入道殿所令伝領給也、而今
式尺參寸千手觀音老躰料、依尼御前之仰、所渡与伊豆講師円賢也、
但於本公驗者、依有類地、不能副渡、仍為後日沙汰、立新券如件、

天治二年八月廿三日散位源朝臣(花押)

散位藤原朝臣(花押)

たしかに御ほとけのれう二いつのこうしにわたす、のちのさ
またけあるへからす、

(裏花押)

103、《書籍頁一七七四》

○二〇五一 大和国大式莊田堵秦正友解○法隆寺文書九

「任申状、改下文、停之了、」(花押)(院主別当)

大式御庄田堵秦正友解 申請 本家 政所 裁事

請被殊蒙 恩裁、任道理令裁許給、正友養母敷地并

私財物等、横擬力王丸押領条、不安愁状、

右、謹檢 事情、件正友之舍兄延枝自去年五月之比死去、養母以今
年七月十一日死去已了、而間、養母以前彼男死去、就中於正友者、
養母夫長胤去死之後、至于今年十三年之間、為彼養母偏後見、御
領御公事併令勤仕、不令相違養母之意、葬送報恩、随近在地頭知明

白也、付中養母延枝共存生之時、処分与物色目有其数、袖長襖面一。
白布一端・拔出綿一・季鋤一具・提一・金輪一足処分与了、又次延
枝死去之後、延枝之嫡女処分鏡二面、一面(ハ)直四丈絹一切、一
面(ハ)不知直法、雖然処分了、爰沈病患数日、三七日之間雖惱乱、
更以延枝之子共、問訊不通者也、而何母滅後之刻、恣可押妨彼敷地
私財物等乎、因之道理顯然、故随近在地加署判、爰正友同為養子、
年来令勤仕御公事之旨明白也、但延枝死去之後、正友臥病床万死一
生之刻、延枝妻隱夜且壞取口宅、兼又所有私財具等、悉運置傍他庄
不当之由、依正友之申、不意之外、成敵人、如此等以非理偽言、訴
申□□(之事力)甚以大非常事也、且故何者、力王丸父延枝之亡日、
報恩無其勤、何況祖母報恩更以不勤行、而何横乍置孝養報恩正友、
彼力王丸可押領矣、望請恩裁、早任道理、令裁定給者、将仰 正理
憲法嚴旨矣、仍為蒙 御裁許、注在状言上如件、以解、
天治二年八月廿九日 秦正友(申文)

*「一面(ハ)」一箇所のみ

104、《書籍頁一七七七》

○二〇五四 伊勢国大國莊專当藤原時光解○東寺百合文書力

大國御庄專当藤原時光解 申請 祭主裁事

言上二个条愁状

一請被任水便道理、下遣清直実檢使、且不致当御庄領田畠損亡、且
無溝末煩、令堀宛字大堰、往古溝為去□□(九月力)一日洪水依
流失、為堰長末久并稻木横道兩郷住人等、背御庄指南、并不可有
末煩、所々水便、恣従本家御正作田字三坪中、擬令堀通間、田畠
一町余步可令堀損子細状、

右、謹案事情、件溝有三支度、一就字伊加口并令堀充得流運之上、
雖經数代、可無末煩哉、一從宗貞門并平野、指貞恒居住畠戊亥角、
令堀充者、庄領田畠七八段雖令堀損、自經四五十年耳、一副本溝(乃)

北羽多（仁）居竈築堤、令通水（を）無幾煩哉、然而上件未久強背如此支度、成阿儻、一町余步熟田擬掘損之条、為愁不少、望請祭主裁、任水便理、無御庄愁、又無溝後煩、被令堀通者、將以知直政之貴矣、

一請被任水便道理、從當御庄田与公田中、今堀通字長田井溝、為年々洪水流失、庄領田四町余步、可令早損子細□（状力）、

右、從庄田与公田中、自本有小溝、依彼小溝狹、庄方（乃）方一尺五寸公田方一尺五寸、并広三尺長六段許也、彼此相互、無幾損亡哉、然而不可不蒙公定、望請裁下、任水便理無各愁、被堀（令）通者、將知憲法之嚴矣、

以前二个条愁状、為蒙裁定、勒在状言上如件、以解、

天治二年十一月 日 專當藤原時光

105、《書籍頁一七八七》

○二〇六九 備中守藤原某家地壳券○島田文書

「并陸枚（花押）」

沽却

領地壳处事

合陸戸主参尺式寸七分

東（乃）南北式拾丈、同副地、（東西壹丈、南北伍丈、）

西（乃）南北式拾丈式尺七寸（加奧西副離門）、東西壹丈七寸

／南北七丈

東西拾肆丈参尺伍寸

在左京七条三坊八町西二三四行北一二三四五門内、

右件地者、自前常陸介并修学院阿闍梨等之手、各限価直所伝領也、而依有要用、限能米玖佰拾玖石伍斗、相副本公驗、所沽却近江守藤原朝臣 也、仍為後日、放新券文、如件、

大治元年四月廿五日

備中守藤原朝臣（花押）

106、《書籍頁一七八八》

○二〇七〇 某国々分尼寺三綱等解○古文書集一

□分尼寺三綱等解申請国裁事

請被殊蒙 正判裁免、無前例打紙之夫役難堪子細愁状、

副申進駄口付役

右、謹檢事情、始自往□至于近代、未勤申打紙夫役也、雖然當御任大般若經書写打紙之夫、始被經、雖然留守所依無前例、不可勤仕有裁、不勤申、而及近来、從案主所被張行夫役、勤申条、甚以難堪、因茲僧等為神明裁、蒙案主所度々裁文、惣社宝前立申仕不免、就中或不入注文寺々巨多也、乍入被除寺々又同前、限国分寺強被宛行哉、加之、國中雖寺々多、御願□前（ナル）力無如即堂、望請蒙免裁、

大治元年五月二日 都維那法師京快（花押）

寺 主法師宣把（花押）

上 座法師明導（花押）

107、《書籍頁一七八九》

○二〇七二 近江守藤原某家地壳券○島田文書

沽却

領地壳处事

合陸戸主参尺式寸七分

東（乃）南北式拾丈同副地（東西壹丈／南北□（五）丈）

西（乃）南北式拾丈式尺七寸加奧西副離門（東西壹丈七寸南

北七丈）

東西拾肆丈参尺伍寸

在左京七条三坊八町西二三四行北一二三四五門□

右件地者、自備中守之手、限価直所伝領也、而借米代、限能米本斗定陸佰肆拾斛、相副本公驗等、所放与于女院庁官時直也、仍為後日、放新券、如件、

大治元年五月十七日

近江守藤原朝臣(花押)

108、《書籍頁一七九〇》

〇二〇七五 院庁官志摩某家地相博券〇島田文書

相博 所領地老処事

合陸戸主参尺式寸七分

東(乃) 南北式拾丈 同副地(東西壹丈/南北伍丈)

西(乃) 南北式拾丈式尺七寸、加奥西副離門(東西壹丈七寸南

北七丈)

東西拾肆丈参尺伍寸

在左京七条三坊八町西二三四行北一二三四五門内

右、件地伝領之旨、具見次第公驗、而今依為便宜、六角堂別当御房領四条室町地五戸主、相副本公驗等、所相博也、仍新券文、如件、

大治元年六月九日 院庁官志摩(花押)

109、《書籍頁一七九三》

〇二〇七九 東大寺領某莊住人等請文案〇東大寺文書四ノ七十一

(端裏)「□寺役勤仕之由庄民□□明兼預□□」

東大寺のみさうのくしの事、せひにまかせて、もとのこと□□□そ
ま□□ことのまま□□たかひてくしさうし□□けたてま□□

□事、

大治元年六月廿六日はりまのくにめ□(在判)

おののまさと□□

もののへのひさもと(在判)

たかそこのきうの□□
はりまのともさた□□
ふちるののりさか(在判)

110、《書籍頁一七九七》

〇二〇八九 内膳正資清書狀〇東寺百合文書は

以先日所言上御庄領加納田字上柳俣大樋懸所依破損、可令荒廢之由已了、而於樋者、以去七月朔之比、雖令流失候、至于今年殖田者、不熟無極之由(云々)、雖然於御年貢絹者、可令弁進之由、令譴責之處、不熟之由申、田を避棄(云々)、不刈納候之時、隨田堵所為、実檢使(をハ)可申請候者也、但於後年者、可令耕作無治術之由(をそ)田堵所訴申也、是□□御庄一所責乎、傍領主有其數(云々)以此趣、可令申上給候、又所被仰下未進綿二兩□分進□□只今不候者、追可進上、又御年貢絹、隨出来、所令進上候也、恐々謹言、

九月十一日

内膳正(花押)

111、《書籍頁一七九八》

〇二〇九一 内膳正資清書狀〇東寺百合文書と

御年貢八丈絹陸疋(之中)参疋白綾、(加解文進上之、)

右者、今年未進、大國御庄所進如件、

御返抄可給候也、

御庄領田段數損得不審之由、被仰下之条、更不致疎略候者也、須雖申請実檢使、今年不熟天下一同之上、当御庄依為河辺、勝余所、術計不候、豈為田堵住人等有(無力)歎哉、然則不能申下候、従去保安年中洪水以来、任見作、参拾疋御年貢進濟之後、無指未進、又於田堵等者、洪水毎度、雖致損得之訴、所不申上候也、

以明日、依急速事、所罷下候也、其故者、窪田御庄内所令領知候名田十余町、以去月上旬之比、不慮之外、罷入追捕之使、稻悉蒞取之

上、在家十廿家焼払了、而件稻可糺返之由、使所罷下候也、仍為相
会彼沙汰、所忽下候也、以此由、可令申給候、恐々謹言、

十月廿一日 内膳正資清(上)

112、《書籍頁一八〇三》

〇二〇九九 僧某田地壳券〇国立博物館所藏文書

謹辭 壳渡田事

合老段者

在揖里村小池尻

四至(限東ミソ 限南擡行作/限西行末作 限北行事作)

右件田、僧源祐相伝地、而依有要用、八丈絹参疋(三)行末永代常

地壳渡処也、仍為後日沙汰、放券文如件、

又加本券一通、

大治元年丙午十二月十日 僧(花押)

113、《書籍頁一八一二》

〇二一〇六 加賀国江沼郡諸司等解〇書陵部本医心方卷廿八

裏文書

江沼郡諸司等解 申請 留守所御下文事

老紙(被載下可停止京上事)

右、今月九日留守所御下文 到来備、以先日雖有申請京上暇由、依
無其撰不免給、而何背下知之旨、可令上洛哉、早可停止件京上者、

謹所請如件、抑依諸司等訴切、始自去春時、於留守所進上申文兩度

也、件申文不被進京者、条々訴裁許不明也、是已留守所不能進止敷、

須不蒙裁断之剋、雖可参洛之、春(ハ)励農業勤、夏(ハ)令致交

易物弁濟之、此二重頗勤畢、不至収納之期、此及尤中間也、何人民

身暇可被物借(借)哉、但以留守所御威、惣郡司職可被解任者、諸

司等京上有何益哉、裁否分明也者、捨命根欲蒙国裁、所参洛也、田

舎者無故欲企京上事、被垂還迹矣而已、以解、

大治二年八月 日

前掾大江(花押)

菅浪郷司散位大江(花押)

山代郷司散位大江(花押)

南郷司散位大江(花押)

諸田郷司散位藤原(花押)

114、《書籍頁一八三六》

〇二一三〇 前安房守伴広親勘注案〇近衛家本知信記自大治

二年至五年卷裏文書

勘注

東大寺住僧定俊長河庄下司源助員等相論大和国十市郡字夜部庄相

伝理非事

一定俊所進文書十通

一通(載田一町 承曆三年十二月廿日尼仏妙処分慶觀大法師状、

加副文十三枚、)

在十市郡西十八条三里廿坪

状云、件田一町、処分于二男僧慶觀如件者、一男助遠女子藤

原姉子所由僧戒寂等加署矣、

一通(載田一町七段 同三年十二月廿日尼仏妙讓与女子藤原姉子

状、加副文十枚、)

在十市郡西十八条三里十八・廿兩坪内

状云、件兩坪内一町七段、充賜女子藤原姉子畢者、一男助遠、

所由僧戒寂等加名矣、

一通(載田七段 同三年十二月廿日尼仏妙処分一男助遠状、加副

文十五枚、)

在十市郡西十八条三里卅一坪

状云、件七段处分一男源助遠畢者、女子藤原姉子、所由僧戒寂同加署矣

一通〔載田一町 同十二月廿一日女子藤原姉子壳与慶觀状、加副文十三枚、〕

在十市郡西十八条三里十八坪

状云、件家地者、藤原姉子先祖相伝之地也、而依有要用、限直米十石相副本公驗壳与僧慶觀畢者、所由僧戒寂加署矣

己上四通券文或田數不合、或請印有疑、或注毀字、或加點画、然而助員依不進公驗、不能其比校焉、

一通〔載田三段 康和三年五月十二日源助遠讓与僧、家地七段 慶觀状、加副文二枚、〕

在十市郡西十八条三里卅坪

状云、件田三段、依姉子遺言、永讓与養子東大寺慶觀大法師畢、又云、件畠内、於三段者、以先年所請預初五石並夜部稻六束代所充渡也、至殘三段二百四十步者、依為養子、相副本券、除多米常富負名、永所讓与如件、但百廿步者施入西寺了者、

一通〔載田三段 治曆三年二月十四日安芸介大官無名壳与但馬介源助孝状、加副文二枚、〕

在十市郡西十八条三里卅坪

状云、件家地先祖相伝之所領也、而今依有要用、充值直絹廿八疋、壳与但馬介源助孝畢者、

一通 度々政所御下文並御教書〔員十一枚〕

一通 康和二年三月源助遠分配家地便田目錄

一町〔在十市郡西十八条三里十八坪〕
状云、件田故慈母御領也、仍女子藤原氏处分給事先了、而藤原氏相副本券、以先年永壳与慶觀大法師如件者、

一町〔在同条里廿坪〕

状云、件田同御領也、仍以先年相副本券、永讓賜孫慶觀大法師如件者、

七段〔田六段地一段 在同条里卅坪〕

状云、件田畠同御領也、仍女子藤原氏处分給事又畢、隨藤原氏相副本券、永讓与三男慶觀大法師如件者、

三段〔在同坪〕

状云、件田從親父之手所伝領也、而依年来妻室源氏之命、相副本券、永所讓与養子慶觀大法師如件者、

七段〔家地 在同里卅一坪〕

状云、件家地便田等、元者藤原三子先祖相伝所領也、而依有互便宜、以助遠慈母所領城上郡田畠等、去康平四年二月十九日相替先了、隨近在地郡司等証判明白也、而件家地七段、自慈母之手所伝領也、仍相副本券、永所讓与養子慶觀大法師也、□〔而力〕以前坪坪等、依慈母之相伝、非長河御庄本負田之上、重為東大寺得業者、不能勤仕御庄役者、永除御庄負名、所注分配如件者、

一通〔田四町一段百廿步 保安三年十月卅日慶觀讓与定俊状、加副文一枚、〕

在十市郡西十八条三里

廿八坪一町 卅坪一町
卅坪一町 卅一坪七段

同十九条三里
廿五卅六郡四段百廿步

状云、件田畠等慶觀大法師相伝所領也、仍所讓与僧定俊也、但撰修学之御寺弟子可付属之、仍為永代証驗、所充定如件者、寺家別当僧正所司大衆等皆加署名、免於他事者、依非當時之論、委不注載之、

一通 去二月僧定俊申文

狀云、件庄四箇坪者、助遠之親母尼仏妙之所領也、而仏妙存日配分子息等、其狀助遠加証署、若為助遠之領者、母仏妙寧行附屬哉、助遠又加証判哉、加之、助員号殿下仰、打破納倉、運取仏聖燈油料稻畢者、

一源助員所進文書二通

一通 康平四年二月十九日藤原三子祖父助遠等相

博立券狀（二枚）

地七段余步

在十市郡西十六条二里四五九并三箇坪

便田五町一段

在同二里四坪五段

三坪一町

五坪一町

地一段廿步 便田九段

在同十八条三里十八坪

地一段 便（田脱力）九段

在同三里廿坪

地一段 便田六段

在同三里卅坪

地六十步 便田九段三百步

在同三里廿一坪

狀云、件家地便田等、先祖春日宿院別当藤原辰文先祖相伝田地也、而所充行女子三子也、隨則領掌年久矣、今依為便宜要門、源助遠領地城上郡夜部田地等（仁）相副本公驗、限永年所相替如件者、所由刀禰・宿院司・郡司等加証判矣、

一通 〈元永元年三月五日源助遠讓与助員立券狀（二枚）〉

一処 田畠五町八段百廿步（字板敷）

一処 田畠四町（字野部）

在十市郡十八条三里

十八坪一町 廿坪一町

卅坪一町 卅一坪一町

狀云、件田畠元者、藤原三子相伝私領地也、隨年來領掌更無他妨、而互依有便宜、以沙弥蓮寂私領田畠、城上郡十九条一里卅一坪・二里六坪兩坪内二段、同条里十六・十七・廿・廿一四箇坪内一段二百廿步、同廿三坪地二百四十步、二里五坪地百廿步、同郡南郷十九条一里十六坪一町、十七坪一町、十八坪一町、十九坪一町、廿一坪一町、廿九坪一町、卅坪一町、卅一坪七段、卅二坪一町、二里五坪九段二百四十步、六坪九段、七坪一町、廿条二里十二坪七段二百步、互相副所帶券文等并作相博書狀、永替渡事已畢、但件所替得十市郡田畠於板敷者、已賜与源助員也、於同郡字野部者、充行東大寺住僧慶寬大法師了、雖然、於慶寬之後者、可助員領知也、因茲互立券之狀明白之所、為致沙汰、在地刀禰加署判、仍勘記坪付如件者、在地保人并刀禰加署矣、

今、就兩方之文書、相尋庄家之領掌、事非一揆、互有錯乱、故何者、先如定俊所進之券契者、仏妙存生之日、雖致相博、助遠伝領之後、付屬慶觀之由、所見不詳、是慶觀自彼此之手、或買取或讓得之故也、又如助員所帶之立券者、助遠見存之時、雖有相博、讓与慶觀之日、於没後者、助員可領知之旨、已載彼狀、是助員為助遠之末孫、為慶觀之親族之故也、但兩人証文稱有紕謬、互不信用、對決之処、真偽之疑又以難散、然而定俊文書助遠所加之署、頗雖不同、已帶數代之本券、助員立券、助遠所注之判、空書実名、隨無一紙之公驗、加之、慶觀号近親、兼給目錄於助員之由、雖有遺言、慶觀不成其判、助遠為祖父讓与、立券於助員之旨、雖見彼狀、助遠不加作名、然則有券与無券、作名与実名、用捨之間、可有左右歟、次亦納稻事、彼此陳

狀以無理致、定俊稱已講覺樹之所命、下用其稻、助員号阿闍梨聞実之伝宣、運取彼稻、兩人所行一而無謂、只随庄家之理非、可有納稻之許否歟、兩条之事、忝任御定而已、

大治四年三月 日

前安房守伴朝臣広親

*源助員所進文書に〈仁〉一例のみ

115、《書籍頁一八六八》

〇二一五八 宇佐宮公文所問注日記〇小山田文書

(裏端)「大工末貞勘狀、友成任御判可領作之、」
公文所

問注御裝束所檢校末貞訴申同檢校友成申詞記

問友成云、請被殊任道理、裁下給古作田子細狀、在向野郷内字巫田内式段并字大木垣壱所者、右件田島、以去庚和年之比、牛男丸与末貞令相訴申之處、被召問醫師永尋之間、依陳申末貞道理、可領掌末貞之由、御判給了、何彼相論之時、有可友成領知者、彼時出来、可訴申之處、友成母依為放出子也、今父弘永死去之後処分之由愁申、令作之旨、所難堪也、於田島所領道者、致無公驗者、以手次領作之理、所令所領也、何友成年來父放出子〈能〉為男子、不知田島令領掌之条、無其謂者、依妻子細弁申如何、

友成申云、末貞訴申巫田二反島小城垣一反事、年來相訴之間、御定云、末貞・友成相共可蒙神判之由者、神判祭文進之處、末貞方〈二〉出来証利、一〈八〉舅安富死、一〈八〉竊盜〈二〉合〈天〉悉損取、一〈八〉乘馬斃、一〈八〉兄時光〈か〉子死、一〈八〉甥貞時〈か〉子死者、以去年三月十六日注進之處〈二〉、御判云、件田島任神判証驗〈天〉友成可領掌之由者、而背御判旨、所訴申無謂〈と〉申、
(花押)

問末貞云、友成陳狀如此者、子細如何、

末貞申云、友成〈加〉注申証驗事無謂、甥貞時子死〈八〉友成〈と〉件人從父兄也、又竊盜合事、末貞合之後、友成〈も〉合候、又時光娘死事、件女不立神判以前〈与利〉腹痛〈之天〉三年〈と〉申〈三〉死也者、夫成国〈を〉可被召問之、安富死事証〈二〉不候、其故〈八〉末貞〈加〉子共其數候〈とも〉指無咎、又馬斃事、友成馬〈毛〉西方〈より〉乘候〈三〉、宇佐川〈三〉鞍下〈天〉棄候〈八〉不証候哉、兼又寄御判於事〈天〉、件巫田二反内号〈三〉傍島散破取之条、無謂〈と〉申、
(花押)

友成申云、末貞陳申条、謂不候、友成窃盜〈三〉合事、末貞如陳狀〈二〉、末貞合〈能〉後也、又友成〈か〉乘馬宇佐川〈三〉鞍下棄由、申無実也、件馬〈八〉高遠所從〈二〉給之後事〈を八〉不知候事也、但未貞乍置先日証、以後日証〈天〉注申条、謂不候、其定候〈八〉、末貞〈八〉水干裝束〈二天〉御湯殿〈二〉參上〈天〉、清祓仕〈里〉、又無止御鎖之舌折〈天〉、政所〈三〉可勘申之由候〈と毛〉、未勘申候、末貞孫死〈八〉証〈二八〉不候哉、又島妨事〈八〉件巫田内〈仁脱力〉〈天〉候〈八〉妨候也、郡司田所相共〈三〉、被実檢候〈八む二〉、頭然候歟〈と〉申、
(花押)

末貞申云、去年十月之比、友成受病之由、承候〈三〉、友成申云、無実也、神判〈を〉蒙〈と〉依申〈天〉、友成〈八〉竊盜〈二八〉合候也、又末貞〈か〉盜人合〈八〉証〈二〉申候〈八むと天〉友成取候也〈と〉申、
(花押)

又末貞申云、友成〈加〉母〈八〉、以先年之比〈天〉御炊殿一御殿御階參〈天〉、刀〈を〉腹〈三〉中〈天〉自害〈せんと〉仕、依〈天〉貫首宗季宿禰預了者、故御館御任〈二八〉雖訴申、沙汰不候之處、当御任、此沙汰〈八〉申候也、父武国〈八〉雖無指放火殺害、依致濫行〈天〉、永以被解却了〈と〉申、
(花押)

友成申云、末貞〈加〉友成母〈か〉不能〈を八〉、先日相訴申勘狀申書了、而尚今度〈も〉同事〈を〉陳申条、謂不候、但撰〈須留〉所

〔二〕神判御裁定〔天〕、依証利〔天〕裁給事〔を〕重訴申之条、謂不候〔と〕申、〔花押〕以前、彼此申詞、問注如件、

大治五年四月十四日

官人代日下部宿禰〔花押〕

弁官代漆島宿禰〔花押〕

中 原〔花押〕

弁官宇佐宿禰〔花押〕

散位宇佐宿禰〔花押〕

散位大神朝臣〔花押〕

檢校行

〔裏〕「於件巫田式段・島老段者、依先神判証檢〔驗〕、賜友成畢也、至于井平垣老段者、任実檢勘文、停止友成妨、可令末貞領作之、〔花押〕〔公基〕」

116、《書籍頁一八七二》

○二一六三 下総権介平経繁私領寄進状案○櫟木文書

注進 相馬郡布瀨郷証文等事

合五通内

一枚 布瀨郷内保村田島在家海船等注文

一枚 国司庁宣布瀨墨崎為別符時免除雜公事案

一枚 前大蔵卿殿布瀨墨崎御厨〔領脱力〕知時下総守被仰下消息案

在并其返事等、

二通 同大蔵卿殿仰書消息等

右件文書等、若横人出来、号地主有相論時、為証文所令進上也、後之〔々力〕〔にも〕存此趣、可令沙汰之状、如件、

大治五年六月十一日

正六位上行下総権介平朝臣〔花押影〕

117、《書籍頁一八七五》

○二一六九 丹波国大山莊田堵等解○東寺百合文書里

「御室仰也、早免除、〔花押〕」

東寺御領大山御庄田堵等解 申進 申文事

請殊被任 解状之理、裁免給国料材木并度々国事被宛行、数多使

入乱責勘、不安子細之愁状、

右、謹檢 事情、当御庄是為往古官舍分地、代々国司如此無宛行雜

事、而当任国司号 院御願寺料役、色々国役被徵下条、不知為方、

就中傍不輪諸庄園〔二八〕被免除御庁宣明白也、於当御庄一所、被

勘責事大愁也、其故何者、如是横依非道、貧弊民等漸逃散、無庄民

幾者、仍本寺仏性燈油并御年貢物等、及偏懈怠敷、兼又今年干汶、

雖天下一同事、於当御庄者、指無水便、纔作物皆悉被燒亡、或為本

家役勤仕、或為助私身命、不知食物為方、恐若 御本家非蒙恩裁者、

百姓等何有一日廻土之意哉、而今年始無先例国役被徵下条、歎中歎

也、此由令触申国司御坐非非道国事被免除者、百姓等成安土思、弥

本寺役勤仕之、望請、殊垂還迹、不日免除御庁宣執下御坐敷、仍言

上、以解、

大治五年九月 日

文屋〔花押〕

委部〔花押〕

播万〔略押〕

上村主〔略押〕

鳥取〔花押〕

清原〔花押〕

丹波〔花押〕

山田〔花押〕

山田〔花押〕

百濟〔花押〕

案主山田(花押)
下司藤井(花押)

118' 《書籍頁一八八七》

〇二一九六 筑前国把岐浦住人隆実請文〇内閣文庫所藏觀世音寺古文書
音寺古文書

(端裏)「把岐浦住人隆実返状」

謹請來帖壹帋事

觀世音寺公文所五月五日帖同月八日到來僂云々、原庄為寺領經年舒之由、雖令帖送給、彼庄非寺家御領者、誰人欺可申哉、但御寺御領(と)乍申、四至阡陌可有限云々、但隆実之(云力)於別当殿寄奉御公驗之四至阡陌、限東把岐山当下、限南古川、限西檀坂、限北白木山横武者、然則令送給帖状面、御寺御領之中心押妨之由、雖令帖送給、瞻御公驗之面、于本家為言上子細、所加制止也、事於勢家寄奉(公力)巧謀叛、猥非致狼藉、但自檀坂東伊津岐谷為際、寺家之領也、被仰事者、源芳留守寺務執行時、院使相語、偽構給事也、被互神裁之日、(件力)庄古老人等、自檀坂東寺領也(止/ハ)有難申乎、又無国宣府宣、猥加制止之由、令帖送給条、以去大治四年正月九日被賜国判後、以大治五年四月 日、被賜府宣事明白也、且原芳留守背道理、藤帥殿相語奉、依被致非法沙汰、藤帥殿被流罪、宣旨徒成給、誰如然也者、無指書状、何致狼藉乎、然者帖送如件、以帖、

天承元年五月十三日

下司檢校僧(花押)
政所仲原(花押)
公文勾当僧(花押)

119' 《書籍頁一八八九》

〇二二〇一 摂津国水成瀬莊田堵等請文案〇東大寺文書四ノ七十一

東大寺水成瀬御庄田堵等解 申請五節供并畠地子等事
右、於五節供者、從七月盆供(之/天)可令勤仕敷、致畠地副物(モ)依無近(口)為方、以後日令弁濟(口)、仍為後日沙汰、進請文、以解、
天承元年七月四日 水成瀬御庄田堵等

伴(在判)
播万(在判)
僧(在判)
物部(在判)
勝(在判)
高向(在判)
佐伯(在判)
宗岡(在判)

120' 《書籍頁一八九六》

〇二二一五 則恒田地壳券案〇東寺百合文書シ
謹辭 壳渡申田里券文(口)(朽損)
合卷段百八十步

在山城国紀伊郡十条真幡木里拾(口)(朽損)
直能米陸斛伍斗限(口)(同)

右件田、則恒(力)年来所作也、而依有(口)(朽損)用、倉恒成友
限永年、所壳渡申実(口)(朽損)、為後日沙汰、注新券文、以解、

天承元年十一月廿二日 日(口)(朽損)

一男日同(口)(朽損)
三男同(口)(朽損)

121' 《書籍頁一九〇〇》

*付箋部分のみ

〇二二二二 備前守平忠盛下文○東南院文書四ノ五

(付箋)「此下文(乃)狀(爾)下鞆田御庄(爾と)書(ハ)承德(爾)所打取之十四丁八段百八十步也、次(三)東大寺御領鞆田庄家訴申(と)書(ハ)、立券之外、四十餘町也、件十四町八段餘(乃)相論未切以前、殘(乃)四十餘町、募彼威、不隨寺家、仍其時(乃)別當勝覺僧正依被觸其子細於忠盛朝臣之許、忠盛所成送此下文等也、然而家貞等不用之、遂被押籠了、」

下 鞆田御庄政所

可令早致沙汰東大寺御領鞆田庄家訴申、对捍寺領御地子并所役事、副下寺家書狀一通

右如寺家訴申者、当御庄寄人等、乍耕作寺領、逐年或不弁濟所当地子、或不勤仕巡來所役之由者、仍早可隨寺役之旨、度々令下知之処、寄事於左右、所涉為宗之由、重有此訴、何輩所行哉、如此事、雖不令下知、争不存知、不了之甚、責而有餘者、任所當、且合弁濟地利、且可勤仕所役、若有背此旨之輩者、慥注夾名、可言上子細、為加誠也、御庄司等宜承知、勿致重訴、以下、

天承二年四月十六日

備前守平朝臣(花押)

122、《書籍頁一九〇一》

〇二二二四 某申狀○唐招提寺文書

夕不可知東西御堂之由、御定□□
辰基也、加之訴申御社二季彼□□
於奉轉讀二季彼岸七日夜法花□□
祈願料□□、不可及堂□□
堂衆解狀(爾)攀□之花□□
次致□成下御祈禱之由、□□

社司、又雖無指封戸田藪、勵□□

偏奉祈 長者殿下御願円満、□□

社司結構敢無差別、就年來□□

裁断也、具旨併見国司免□□

仍早相断堂衆後濫、勒在□□

天承二年四月□□

123、《書籍頁一九〇五》

〇二二三三 某莊公文寄人等解○近衛家本知信記天承二年卷裏文書

殿政所被免給許敷、不可後例之由、政所御下文之狀明白也、如□度々經沙汰畢、彼庄後(故力)老寄人等、皆存知敷、且可被对問□□檢御庄御公驗狀、南限角河南山峯、北限黒川山田谷者、任此宣□者為宗、彼庄四至内二十八条北畔(マテ)可成平等院御領敷、依□此等事煩、延曆寺所司等并殿下御使本院所司等罷下、決□日御庄下司沙汰人等、依不取出一紙証文、於杣山者、無論為□(平)等院御領旨、裁定既畢、而當時彼庄本家使右京進藤原□(貞)道、募法性寺座主御房之勢、所令致如此非道也、望請□裁、早任先例并方々御公驗狀、令停止件貞道非法無道訴□、将仰道理貴矣、仍注子細、言上如件、以解、

天承二年八月 日 公文僧教仁

寄人等百濟安成

(*以下歷名省略)

御庄司散位源信貞

124、《書籍頁一九一四》

〇二二五一 藤原实行書狀案○東大寺文書四ノ四十(端裏)「新大納言殿把木庄沙汰御返事(并右京大夫返事 長承元年

十一月廿二日「預」

早可令対決文書給也、

仰旨謹奉了、為往古寺領内者、何可致相論哉、如沙汰者申状者全不入之由、所執申候也、只可依文書理之由、度々執啓、非道事無便候歟、謹言、

即時 權大納言〈在判〉

追啓

依昨日仰、遣尋右京權大夫許之处、返事如此、為御覽献上耳、謹言、重啓

此所領へ年来与安樂寺被相論候也、其時觀世音寺訴不候之由へを申候者なり、

125、《書籍頁一九一八》

〇二二五九 權少僧都大神莊相博券案〇東大寺文書四ノ七十七 (端裏)「大神莊相博伊賀庄案文 長承二年」

權少僧都房相博 庄老処事

合拾伍町肆段佰捌拾歩

在大和国城上郡北郷 字大神庄

十八条四里十四坪四段 廿三坪七段 十九条三里卅坪一町 卅一

坪六段 四里廿五坪一町 廿六坪一町 卅五坪一町 五里二坪一

町 三坪内北辺五段 廿条三里十一坪一町 十三坪一町 四里十

六坪南辺三段 十七坪内北辺三段半 廿坪六段 廿一坪一町 廿

六坪一町 五里一坪一町 廿七坪一町 廿八坪一町

右件庄、自故東南院法印御房伝口所領掌也、而今依互有便宜、各相副本公驗等、相博藤原中子所領伊賀国名張郡字中村庄已了、仍為向後証驗、放券如件、

長承二年正月十三日 院司法師

法師

別当大法師

伊賀中村処分帳面書案文

いかのさうは、とうなんるんのそうつの御はうに、みわのさうにかへまいらせをはりぬ、

126、《書籍頁一九二五》

〇二二七三 内膳正資清書状〇東寺百合文書卜

大國御庄専当武道申文進上之、

右申文、相副御教書、可被遣祭主之許候者也、以去年四月十一日俄為戸々給主等、背三百餘个年庄領掌之理、經訴□(於)祭主、庄領田畠二町二反余歩之中、田一町三反六十歩之内、於一町三百歩者、戸方破取、或為戸主押作已了、或為戸預、所当官物令徵納又了、至于二反百廿歩田者、為依御正作田、戸方所不令作也、而間依日々触訴、以去三月廿一日任代々旧領、各可令領知之由、祭主目代外宮權神主雅通奉書已了、因之彼年御年貢可糺返之由、申入候也、從本所以貴所御教書、被仰遣者、若裁定候了、但以去年戸方(仁八)庄田破取文、成祭主判下給之由(云々)、豈為後代公驗歟、庄方(仁八)今年各相論、依難裁定、任代々旧領、可令領知之由、彼目代神主奉書也、因之祭主下文可預之由、度々雖訴乞、無其左右、然則從戸方末代有相論哉、仍可被下賜 祭主下文之由、御書へを祭主之許、可被送遣候、為後代繼文也、

以古民部省勘文案文、令出対証文之日、封戸文因田藉(籍)之状中、不相応之由申、不承引庄函候也、然則新令触民部省候、伊勢国飯野郡十一條五山下里并同条六井於里・七井於里・同郡十二條六中村里・七伊勢外里・八野原里・九野原里・同郡十三條五川原里・六大国里、此九個里坪付段数慥令問請候、可下遣候、省司署判明候者、可承引候也、以此趣、令言上給、且此申文祭主許可被下遣候、且件三ヶ条里々坪々庄領田畠段数明鏡、民部省勘文可被請下候、為御庄規模文

書候哉、又御庄建立之時、省勘文御寺法藏被納之由云々、被尋下如何、謹言、

四月十六日 内膳正(資清)(花押)

進上 善祐御房

127、《書籍頁一九二六》

〇二二七四 内膳正資清書狀〇東寺百合文書京

祭主外題并御書請文等儘以給預候了、抑如外題之趣者、彼此無愁、前後使等相共可令破定之由具也、太略儀不切事候歟、於無愁候事者、御庄旧領田畠、如元令領掌許哉、然則如元可依庄旧領之由、今一度可仰遣祭主之許候、但石丸戸(と)申戸、元並(か)戸(と)申(へ)、祭主領戸也、仍石丸戸田(仁)庄旧領能田四反破取、元並戸同田二反百步破取、閑丸戸(と)申(へ)祭主甥神祇權少副領戸也、件戸(仁)庄田四反百步破取、如此間、自余人々戸強所沙汰仕候也、然則雖度々令破戸更了、庄方別事不候歟、雖然如外題、雖令破定、近來依為熱月、五六人使雖集會候者也、於庄田等者、如先破定戸方令播殖了、庄方御正作田四反許(そ)令播殖候口之、且庄本領田畠(を)不可妨之由、且彼殖田等秋時(仁)庄方(仁)可令蒞取之由、御沙汰可候也、抑於先度者、子細申文之状明白之上、委可言上之由書注、少別当行祐之許所送遣也、然者以彼書狀之趣、委令言上之由、令存知之處、今度御返事狀、中口以御書委不令言上之由、被仰下、因之委細所令言上候也、以此由委可令言上給候、猶々件田畠沙汰、如院宣口(罷力)下(そ)事切候歟、謹言、

七月十日 内膳正(資清)(花押)(上)

128、《書籍頁一九三四》

〇二二八六 備前守平忠盛請文〇東南院文書四ノ五

鞆田庄訴事、重下文謹進上之、不承引候之条、返々奇恠候事也、重

又可召仰沙汰人候也、縱雖非道事、於仰者、更不可忽緒之由、便所存候也、

東大寺修理事承候了、兼可勤仕一事候也、早可仕候事(を)、可注下給候也、恐々謹言、

九月七日

備前守忠盛(請文)

129、《書籍頁一九六三》

〇二二二七 讚岐国普通曼茶羅兩寺所司解〇東寺百合文書工

「可依前例、目代散位藤原(花押)」

善通曼茶羅兩寺所司等解 申請 留守所裁事

請被殊蒙 慈恩、任先例免除之御判并今度国判之旨、裁免給兩寺

在家役、早田口(平)徵并春田分石造之三箇条子細愁狀、

一請被殊任前々度々免除御判旨、裁下曼茶羅寺四至内在家人等、雖

有免除御判、郷分牛皮鹿皮会料米并春田分石造、如此万雜事、不

論是非、兩寺入乱責堪難堪子細(愁狀脱力)、

一請被殊免除有限寺領本園免田兩寺九丁九反余之内、早田三分一耕

作仕(を)平徵被責勘、始自八月八日永代御八講四箇日間御仏供

僧前并彼岸方々仏神事之勤、以懈怠子細愁狀、

一請被殊停止施坂寺之国方別当、雖有二箇度之御外題、尚押執行仕

御寺恒例之御八講、方々仏事等、既以懈怠、寺僧之大愁何、仍子

細愁狀、

右、件三箇条子細、任且度々御判、且今度御判旨狀、被停止給、仍

為蒙 留守所御裁定、三个子細言上如件、以解、

保延元年七月十五日

都維那法師信算

寺主大律師善覺

上座大律師善義

130、《書籍頁一九八二》

〇二三三八 某書狀〇武雄神社文書

たひくやくそく申候らひし事なれば、おせ(仰)のさりかたさに、
たけをのくけん(公驗)たしかにおんつかひつねもとにつけてまい
らせする、又みちのあひたのおそれ候へ者、ひやうし(兵士)のれ
うに下人くしてまいらせする、たしかにとりつとおんかへり候へし、
又やくそくのもの、いそきたふへし、あなかしこく、

二月十日 (花押)

(裏)「保延二年二月十日」 ○印(文不明)十アリ。

131、《書籍頁一九八八》

〇二三四六 東大寺諸莊文書進上目録〇東大寺文書四ノ八十六

(端裏)「雜文書一結(廿枚)」

文書六通目録(合点了、)

撰進 公驗等事

合陸通者(此内、官符宣旨等案文卅余枚者、元是勝真私書文也、但

為沙汰、且為書加、殘符案等暫所不返納也、(花押))

一通 大井庄天平勝宝八歳七月十三日勅書(一枚)

一通 連券、弘仁九年三月廿七日酒人内親王施入文(二枚)

□□ 茜部庄天徳四年十二月廿七日太政官符(一枚)

□□ □部庄大同四年二月廿一日立券文(十枚)

一通 天平勝宝八歳正月十一日国司移(一枚)

已上五通、自上司印藏撰出進上之、此中三通依下遣注文目録二

通、彼庄要書見給候、故取具進上候也、

「撰出時者、法乘房五師許有、未返納、可即納也」

一通 大井茜部兩庄官符宣旨等案文(卅余枚)

已上、自浄土院所送遣也、但大同年中立券文者、雖相尋、不知

在所由、所申遣也、印藏之公驗等中、件書(を)見給文候者也、

右、依 仰、撰進如件、

保延二年七月廿五日 僧覚光(請文)

132、《書籍頁一九九〇》

〇二三五〇 明法博士勘文案〇書陵部所藏壬生文書

(端裏)「借上分米利法事」

勘申日吉社神人等訴申上下諸人借請上分米利法事

右、左大史小槻宿禰政重仰備、左少弁源朝臣俊雅備、内大臣宣、奉

勅、日吉社司等言上大津神人等□□□上下諸人借請上分米事、宜令

法家任契状旨、定利并法者、保延二年四月三日日吉社司等解状云、

請特蒙 天裁、任契状、被裁下大津神人等訴申上下諸人借請上□□

依不弁償、季節御祭欲及闕怠子細状、副進上分米注文一通、右、彼

津神人等解状備、当津神人者、雖無一分之相募、供奉数度之祭場、

其間勞績不可勝計、□□或往反諸国事廻成、或以上分米企借上、是

則非顧私之方計、偏為繼欲絶之神事也、而近年以降、上下諸人借請

神物之後、更無弁償之□、因茲任被契状、加催□□□人申云、自

非院宣者、不可□弁者、借請之日、雖出丁寧之契状、催促之時、既

背□請文、檢之道理、頗乖穩便、縱雖非神物、縱非祭料、借請他物、

何無其弁哉、為訴之甚、莫過于斯、若非蒙裁許者、爭勤仕神事哉者、

就此状歷 院奏之□、仰云、於院中柩候輩者、可有御沙汰、至于自

餘人者、可奏達公家者、望請 天裁、早任契状、可糺返件上分米之

由、被宣下者、將勤仕数度之神事、弥奉祈無窮之宝算、仍勒事状、

謹解、社司廿人加署判、

同年六月日所副進神人等注文云、注進日吉社大津左方神人等、貯置

御供料請負、以領地為質券、各乍出文書、不致其弁人人注文等事、

散位藤原国貞訴故能登高前司請文案二通、散位源国吉同人請文案三

通、僧隆快同人請文案四通、散位藤原貞資、高嶋住人等質券田公驗

案五卷、散位藤原国貞・賀茂住人四郎大夫忠遠請文案一通、但追可

進覽、散位橘成親故肥後前司請文、以後日可進覽、□□右方神人散

位源貞元・同貞元・讚岐守庁宣四枚、同貞元代成元參河守庁宣三枚、右大津神人等米如此等國司借召、不令致弁給日記、所注進之狀如件、謹檢雜律云、負債違契不償、一端以上違廿日管廿、廿日加一等、罪止杖六十、卅端加二等、百端又加三等、各令備償、雜令云、其質者、非對物主、不得輒売、若計利過本、不贖聽、告所司對売、即有剩還之、天平勝宝三年九月四日格云、私稻貸与百姓求利、皆悉禁斷、如有犯者、依先格以違勅論、物即没官、國郡官人即解見任、又云、以宅地園圃為質、皆悉禁斷、若有先日約契者、雖至償期、猶任居住、稍令酬償、職制律云、訟書有所施行、而違者徒二年者、

拋檢此等文、如社司所進契狀案者、負債之輩、或以田地而為質、或限數倍而成契、彼此俱忘禁遏、遁犯科条者也、而負人等過彼期約之年、未致酬報、律条所指、罪狀雖明、至于出舉之利者、格制旁重犯之者、違勅之罪所難遁也、然則各令償本物、不可令致息利之弁、偏思私益、何背皇憲、仍勘申、

保延二年九月 日 從五位守大判事兼行明法博士越前介中原朝臣

(花押)

從五位上行明法博士小野朝臣有隣

同成親故左大弁宰相殿請文、以後日可進上、同成親當任能登守請文、以後日可進上、元越中国庁官田堵等請文、以後日可進上、散位源宗貞物壳四条女借請也文書、後日可進上、中原成行美作当前司庁宣請文返抄等、佐伯時國周防入道侍字江柴沙汰、散位藤原貞資・清原俊任并男三郎借物文書後日可進上、散位藤原恒時大膳進(請使花光)請文、以後日可進上、散位藤原忠恒越前國木田御庄住人檢校請文追可進上、散位藤原恒時、珍貞兼証文顯然也、以後日可進上、若江兼次・肥後介散位大江朝臣質券文進上之、同兼次藏人大夫請文案文等二通進之、正文(ハ)後日可進上、同兼次内匠助請文案二通正文、以後日可進上、同兼次於筑紫筑前國葦屋津為兵藤瀧口被抑取了日記、追可進上、大中臣景元并僧智慶大炊頭入質券文案進上右方神人了、

*追書部分に(ハ)一例のみ

133、《書籍頁一九九四》

○二三五六 豊前國治友成田島壳券○小山田文書

檢校治友成 ウリ進田島事

合 棟野郷カウナ、田式段島一反

右件田島治友成用有依、所ウリ進実也、但後日沙汰也、但如件、

保延二年十二月五日

檢校治友成(略押)

著男太郎(略押)

134、《書籍頁一九九六》

○二三六〇 豊前國八幡宇佐宮公文所問注記○小山田文書

公文所

問注本司秦國門言上御裝束所檢校珍友成申詞記

問友成云、國門解狀儀、請被蒙鴻恩、任沽券旨、賜御判領掌田島子

細狀、在向野郷、田式段字巫田、島壹段小城垣、副進渡文并調度

文書、右謹檢案内、件田島本主御裝束所檢校珍友成得見直、限永

年所沽却也、望請宮裁、任渡文旨、賜御判、為領掌言上如件、以

解者、沽却実否弁申如何、

友成申云、送日之計、依不為方候、件田島所沽渡國門実也(ト)申、

(花押)

保延三年二月十八日 行(花押)

弁官日下部宿禰

散位大神朝臣(花押)

散位惟宗朝臣(花押)

散位(宇佐脱)宿禰(花押)

檢校行

135、《書籍頁11007》

〇二三六八 御牧織手僧隆惠申狀〇造興福寺記裏文書

四子得分西島合四段、而安部姉子田二段（を）自（ハ）耕作仕家地三百歩（をハ）御公役料（ニ）、四子預賜候（ひき）、其五十余年候、隆惠件公事料家地少々取返、御牧御服公役勤仕事及十六年候、四子既以去年十月下旬比死去畢、存生間預候（とも）死去□□□本返取（天）、御公役勤仕申候（ニ）、武常延友進訴申条、還□□為明事子細悦思給候、且以御檢田帳兩人所分田□多少可経御覽、但於彼本券者、河内国長原字先生君（と）申候人（ニ）、八丈手質券四子取置候（とも）、八丈弁後、故□□還宿所返給候也、延友河内国住人武常幼少時（二天）、不知田畠、齊分子細、不知事子細、恣致訴申候条、垂□還迹御庄耳、望請恩裁、早悉兩方□任道理下裁判給、□□仰正理貴、□□□頓首謹言、

保延三年四月廿五日 御牧織手僧隆惠（申狀）

136、《書籍頁11018》

〇二三八九 伊賀国百姓等申狀〇大須宝生院所藏東大寺文書

隨則於目代僧被行追補之事已畢、於如此無実訴、被停止御外題矣、一於熊野岡迫田擬徵取五斗代官物事
右、於熊野岡迫田者、年来之御庄公役田也、而威儀師号有未進押取之後、構私領擬段別五斗米徵取者也、而以去年言上子細、如本公事充行処、以今度御下文、於柚役夫押縛追却（之天）、闕数日役事、為御庄大歎也、望請恩裁、被停止威儀師面々不善使者、併弥仰嚴勢貴矣、

保延四年八月十三日

壬生末友

佐那具友包

大中臣重貞

137、《書籍頁11019》

〇二三九〇 左中弁頭業書狀〇東大寺文書四ノ五十二

白米免事、造系図、兩方申狀大略注付候、而若寺方申事可入事、候、書入之後、申上むとて、先日招頼樹得業、令申候之処、其後左右仰不候、未聞食歟、依不審所言上候也、恐々謹言、

（保延四年）九月三日

左中弁頭業

大僧正御房（侍）

大江延貞

平 則貞

僧 勢儀

石山行延

橘 貞安

日置忠助

苗井貞延

藤原友助

内紀貞成

葛木依元

僧 勝元

138、《書籍頁11034》

〇二四一三 勸学院政所問注記〇東大寺文書四ノ三十九

勸学院政所

問注保延五年七月廿九日春日社權預祐宗代祐清与東大寺大仏殿權堂司僧增賀相論田地申詞記

祐清（權官祐宗代）

右、問祐清云、堂司增賀訴申広瀬郡大田犬丸名内、十三条二里十坪二段・廿六并七兩坪九反・卅五坪二段・十四条三里七坪三反・廿七

坪一反小并一町七反百廿步、為大仏殿白米免田、數百歲間無異論、而俄祐宗号有領主寄文、立彼田地於御榊致相論、依實件子細弁申如何、

祐宗代祐清申云、十三条二里十坪二反(島)・廿六坪四反半(田)・七坪六段(田)・卅五坪二反(島)・十四条三里七坪五段(田)・廿七坪二反(島)并二町一反百八十步(波)彼御社領(志弓)四代相傳之間、九月九日御節供等所令勤仕來也、抑增賀訴申田地六町内二町一反百八十步之外、三町八反半更以不知給(と)申、

增賀(東大寺堂司)

問增賀云、所進解狀并坪坪注文問祐清處、申狀如此、件子細弁申如何、

增賀申云、祐清(加)六町内二町一反半(遠)令領知之由申条、僻(事脱力)也、數百歲之間、東大寺白米免田(止脱力)(志弓)敢無他妨、而以去年十月之比俄御榊(遠)立(弓)、作稻(遠)被苽取畢、件田地(波)十一町内也(止)申、

問祐清云、件坪坪為社領年來問令領知申、雖陳申、如增賀申狀者、為往古白米免由、強訴申、以何証文申神領哉、社司四代傳領由弁申、然者件等時証文定持歟、早可進上也者、件子細重弁申如何、

祐清申云、以領主尼補妙応德二年八月十日寄文并郡司源方寛治二年三月七日除文等、所令領知候也、件田地一町七反百廿步(波)方付之外也、神領(乃)坪坪(仁波)、皆以方付候也者、方付之外(波)更以不致妨候、何浮免(止志)弓)有限神領田(遠)可被押妨哉、就中無指 官宣旨并長者宣(志弓)、恣六町内可被押領哉、極無道事也、又殘坪坪(遠)称加納田(弓)擬押領之条、無其謂事(奈里)止)申、

問增賀云、祐清申狀如此、依實弁申如何、
增賀申云、祐清(加)四代相傳之由申条無謂、善妙繼子主稅允忠遠東大寺別當東南院法印死去以後、信濃得業經幸、号知足院領(志弓)、

以後寄樞門(弓)責勘住人等之處、忠遠相語神主時繼(弓)立御榊(弓)、九月九日御節供(遠)令勤仕之由、申遍照寺法務、補別當(弓)、件得業為寺僧(弓)、以彼白米免田可寄責所哉、尤可然、白米免田不可有、其後神主時經御節供(遠)可勤仕之由(遠)催忠遠、依為免田(弓)得業沙汰(波)留畢、此由(遠)聞(弓)、時繼不致沙汰去畢、正預祐房為權官之時、立御榊(弓)、命覺白米免(志弓)、私(仁)彼御榊(遠)拔畢、敢無其沙汰、郡司源方宛文并善妙寄文(仁)無判行、今以之不可証文(止)申、

復問祐清云、增賀陳申旨如此、重慥弁申如何、

祐清申云、神主時經并經房・正官祐房・權預祐宗已及四代畢、而以論田一町七反小(弓)四町二反大(遠)可令領知哉如何、彼四町二反大(加)内二町一反半(波)御供田也、而件田地(遠)加納(仁)可被取入哉、神慮難量、只可依御定(止)申、

復問增賀云、白米免田往古也、又御社御供田応德二年事也、而年來問無件論、四代相傳無相違御供役勤仕、何自去年有此論哉、有指証文歟、然者可進上証文、件等子細慥弁申如何、

增賀申云、先条如弁申、応德二年(仁)善妙当社(仁)雖寄進(毛)、自去年(弓)白米免供不絶(留波)、以免田内勤(氣留)加)証文(止)申(波)往古田文(仁)候、自余文(波)不候(止)申、又(来脱力)年自御社敢無妨、去年始立御榊(弓)作稻(遠)押苽(留)故(仁)所訴申也(止)申、

復問增賀云、以所進田文備証文、難信用、其故何者、以件田地六町可為加納狀、不被載田文、又於所進坪坪者、社方更無妨由、祐清可(所力)陳申也者、重慥陳申如何、

增賀申云、可為白米免(幾)加納之狀、雖不被載、只以天曆以後田文、御寺証文(止波)可存也、又件坪坪(仁波)、方付(遠)不知(志弓)、早損風損(遠毛)不申請(志弓)、犬丸名(波)往古(与利)大仏供(遠)備來候也(止)申、

復問祐清云、以善妙寄文件坪坪内二町一段半無異論為神領由弁申、雖然增賀陳狀云、祐清申条無道也、彼坪坪者、至于今仏供免也、為勝訴訟以虚言陳申歟、件子細依実弁申、祐清申云、論田一町七段小（波）仏聖田（止）見（多利）、今四町二反大（遠）加納（仁）所擬押篋也、其内二町一反半御供田也、如先条申也（止）申、

申

春日社司散位祐清

東大寺權堂司僧增賀

問注

知院事中原貞清

左京大属高橋清定

別当蔭子藤原祐經

139、《書籍頁二〇四二》

〇二四二八 山城国玉井莊住人解〇東大寺文書四ノ二十八

東大寺本願御庄住人等解 申請 大寺 御裁定事

請被殊蒙 鴻恩、任大殿下 政所御下文并興福寺西金堂下文等旨、

裁定給玉井御庄往古分水被押妨依友条愁狀、

右、住人等、謹檢旧記、自往古始所宛漑分水（を）、石垣御庄下司男依友之相語西金堂惡僧珍勝、以非道横依友押妨之由、於西金堂訴申處、既被追却珍勝身了、随又於大殿下政所注上件子細、令言上處、任往古例、玉井御庄内分水、如元可充漑之由、政所御下文下知旨明白也、而猶彼依友致惡行成濫吹条、所為旨甚以不穩便者、永停止依友非常、任先例、可令充漑分水之由、被□□（言上力） 殿下政所者、將仰 正道之貴旨、弥勤 寺役矣、仍録狀以解、

保延六年六月十日

玉井御庄寄人等

140、《書籍頁二〇四五》

〇二四三三 僧靜俊書狀〇東大文書四ノ二十八

（端）「水事」

玉井庄訴申用水事

右、御消息并証文等之旨令言上候了、件石垣御庄（ハ）勤仕御寺御社役之庄也、而往古以降、河充漑水、為東大寺使被押妨之由、依訴申、遣御寺使所令尋沙汰御也、以此文書等旨、令申殿下之後、可令申左右者、不備謹言、

（保延六年力）七月廿六日 靜俊

【第六卷】

141、《書籍頁二〇六五》

〇二四五四 美濃国市橋莊住人陳狀案〇東大寺文書四ノ十三

（端裏）「市橋御庄陳狀案 在正文」

大教院御領市橋御庄住人等解 申進陳狀事

請被殊任道理、糺定東大寺御領茜部御庄擬押取当御庄内牧領子細

狀、

右、去九月廿九日茜部御庄解狀云、請任見地并文書理、被沙汰返為大教院御領字内牧庄所割取治田敷地合十二町五段事、右謹檢案内、件大教院御領市橋庄（ハ）六郷也、其領地合三百餘町之中（二）、実之内牧郷（ハ）十町許也、以友河為西堺、其榜示見在也、茜部庄（ハ）件友河（ヨリ）西也、度度官符宣旨、皆東限友河者、始自往古御檢定文、至于近代官符宣旨、条里坪付四至榜示皆以分明也、彼此兩庄共以友河所為其堺也、而茜部庄之八条九里十里治田并本在家敷地合十二町五段（ハ）彼実之内牧庄之向也、件在家人等依便宜、出作彼友河以東之实内牧地、所取用其桑也、然間任年之比、当御庄（二）国司被切宛公役之時（二）、為募御勢号宮御領作人也、仍以件出作人居住敷地、即号内牧庄分、所被割取也、但号内牧分之中於宅地一所

者、至于今日為當御庄領、即御寺定使住所也、只以之可被察其美否也、況當御庄（八）元是一円地也、四至榜示內寧相交他領哉、凡文書公驗（二）不依（シ）天付住人偽言、被割取寺領之条、理非顯然事歟、年來雖懷此訴、為住人（二八）依非急事、乍思罷過之処、今年大水（二）宅地桑原悉成大河、見作田等多流失（天）、有限御年貢不可叶之上、住人居所既類已畢、仍所訴申也者、就解狀案事情、美濃國有友河、以件河為市橋御庄之西堺、以件河為東大寺御領茜部御庄之東堺、然則本公驗云、以友河為西堺、又東大寺御庄以友河為東堺者、而先年之比洪水之時、友河之手指御庄之中心、流通畢、隔本堺河之事十餘町許也、其榜示顯然也、然而土民依知子細、全不成異論、任本四至、所弁來御年貢也、爰今年背往代之例、付以友河為東堺之詞、越來當御庄內十餘町、所擬押取也、巧謀計之条、言語不及事也、抑茜部御庄解云、往年之比、當御庄（三）國司切宛公役之時、為募御勢、為宮御領住人也者、件条專無謂、何乍置無止之本寺御庄、可募傍御庄之威哉、又同解狀云、內牧宅地一所迄于今日、為當御庄定使住所者、件条又以謀計也、茜部御庄民、出作市橋御庄內之間、依為便宜、于今所居住也、作偽之旨弥可察之、又同解狀云、今年大水（二）宅地桑原成大河、見作田等多流失（天）、有限御年貢不可叶之上、住人居住所類已畢、所訴申也者、件条專無謂、宅地桑原見作田等流失之故、可押取他御庄領者、不致河成之訴、只相恃傍御庄、可期洪水之流歟、加之本有由緒者、友河之流指入當御庄之刻、何不訴申哉、左道本企、責而有餘、望請 恩裁、任往代之例、為被停止茜部御庄之非道、注子細言上如件、以解、

永治元年十二月 日下司散位藤原道定

藤原遠高
藤原安國

〇二四六七 散位源行真申詞記〇愚昧記仁安三年十一月卷裏文書

惟俊 兼成

散位源行真申詞

右、行真申云、殺害字新六郎友員之事、全不知給候、但自本敵人（仁天）波前奧陸判官郎等字源七郎道正（古曾）候（倍）、其故（波）友員（止）道正（止）波、共兄弟之子（仁）候（仁）、友員（加）道正（加）母并弟道澄等（遠）殺害仕畢、其後又道正（波）□□母并兄友房末高等（遠）殺害仕候畢、如此之間、日来（毛）敵人（仁）候（比志）也、然者件道正（加）所為（仁哉）候（良牟）、道正（毛）友員（毛）行真（仁波）甥（仁）候也、慶智三郎家次（波）道正（加）妹（加）夫（仁）候、同意者（仁）候、□又行真（か）子息（波）四人候（比志）也、太郎（波）先年死去畢、次郎守真（波）左大臣殿御領佐々木御庄（乃）下司（仁）彼殿（仁）候者也、三郎宗真（波）佐土國司（乃）許□候也、四郎行正（波）去保延二年比（仁）奧陸判官□□（下向力）佐々木之剋、道澄（波）行真（加）曾（仁）候（比志）仁、道澄（加）宅（仁）被到著（仁）候（比志）仁、為見參（仁）參（仁）候（比志）遠、可得名簿之由、被申候（比志）遠、本主候者（奈礼）波（遠）申（仁）古（波）曾參候（波女）止申候（比志）加波、子其中（仁）一人（ヲ波）可得之由被申候（比志）加波於一人者、可進（止）申（仁）、件剋（仁）見參（仁波）進（仁）候（比志）後（波）全不令參候也、行真（加）住所（仁）四郎行正・三郎宗真（波）候也、可召進之由候（波）、可遣召候、但宇治入道殿（乃）舍人（仁）候也、隨件住所（波）御領（仁）候也、

又字興定三郎（止）申者（波）、友員（か）郎等（仁）候、全行真（加）從者（仁波）不候、佐々木（仁）波見給候（比志）、友員死之後（仁波）、在所（毛）不知給候、

又友員（加）被殺害候之夜、相具（仁）候（夕留）從者、字伊波（乃）

源太（卜）申男、彼夜雖蒙疵、于今存命（志弓）、成勝寺御領伊波庄内（仁）字清追捕使安貞之許（仁）候之由、伝承候也、被召問件源太、自申事候敷、彼安貞（モ）友員（加）從者（仁弓）候也（卜）申、

永治二年四月三日

143、《書籍頁二〇七二》（裏書のみ）

〇二四六八 物部時貞田地売券〇東大寺文書四ノ七十三

謹辭 申売度進田放券文事

合老段佰式拾步者（裏）「下切大（ハ）藤原依遠（二）書放了、」

在名張郡夏見条 買人守有元

字北栗穴西 売人物部時貞

右件田、元者物部時貞先祖相伝所領也、而依有直要用、限永年作手、父牛壺頭・白布陸丈（か）代所度進実正也、仍為後日沙汰、注子細放券文、以解、

永治二年五月八日

物部（花押）
一男物部（略押）

僧浩巖（花押）

144、《書籍頁二〇七二》

〇二四六九 美濃国茜部莊住人申文案〇東大寺文書四ノ十三

（端裏）「茜部庄四至申文案」

東大寺御領茜部御庄住人等解 申進 申文事

請被任御（公脱力）驗并度々官符宣旨、如旧糺定往古四至榜示内
治田敷地等、旁被押取田地在、次第減少相折御年貢八丈綿（絹力）等、既及闕怠子細愁状、

一東堺友河榜示内、在家敷地旧治田等、為市橋御庄内牧村被耗取事、

副進永治元年市橋御庄陳狀案一通

右、勘大同四年御公驗之處、當御庄西端者、八条七里廿九・卅五坪・九条七里五坪・十一坪也、東端者八条十里七坪十三・十九坪也、而今八条九里十里旧治田跡并根本在家敷地等合十餘町、号右馬權頭領内牧村分所被耗取也、彼此兩庄共以頭露之河流互為東西堺、於河西一円之庄内、何可相交他領哉、早任文書并見在四至、可被糺定也、但康平三年宣旨云、茜部庄住人元八十餘家也、今纔及二三家（云々）、古老住人申云、如此国郡牢箠之比、以処々陸地畠被立一品宮御領之日、友河以東之内牧村畠、件陸地御庄隨一也、而茜部御庄本在家（ハ）件村（二）相向也、隨便宜依出作彼地、為募御勢、号宮御領作人也、以之為由緒、所被分取居住之當御庄敷地也（云々）、凡出作他領、雖諸国普通事、無被取居住敷地之例、况依出作河東可被（取脱力）河西者、自今以後、永可被停止出作也、但依寄事於大教院御領市橋庄、永治元年被言上大教院者、為彼院御沙汰、以茜部庄解被同（問力）市橋御庄之處、陳狀云、市橋御庄（ハ）以友河為西堺、茜部庄又以同河為東堺、然則本公驗之友河為西堺（云々）、彼庄本公驗既相叶見地四至、以友河為西堺者、此外依何別由緒、可領知堺外他庄哉、依理非顯然、擬被成大教院御却文之間、罷彼院進止、被寄進御室御領（云々）、仍市橋御庄陳狀案副進之、可被經進覽也、於四至沙汰外事者、申旨一々無実謀計也、近年比右馬權頭御使行貞（字藤与）於件内牧村立榜所二処也、共友河之東也、若友河之西（二）实有彼領地者、既在東大寺庄中專可立榜示也、而立自河之東地、於河西者、全無立其榜示、只以此一事可被察実否也、但見永治元年陳狀、依違背本公驗四至文、行貞成憚不立河西榜示、又件友河以西（二）号内牧分之中宅地一処（ハ）、于今茜部庄定使居住之敷地、元来全非市橋御庄左右、以如此条々事、可被推迹理非也、

一南堺尾張河内庄家桑原悉流失超成尾張国領事

右、御庄建立以降數百歲間、件大河隨頽寄庄方、於旧河跡者漸々雖成桑原、至于往古河者尚以見在也、以旧河与新流之中河成桑原者、号河成國領為尾（張脱力）國分也、年來雖懷愁、不能沙汰之間、近年度々頻有大洪水、御公驗內九条在家敷地等也、以流失御年貢絹綿、無力弁濟、早限旧河跡、於河成地者、如旧可被返入庄內也、

一西堺平田大路內多被割取、并高椋（樸力下同じ）榜示牢籠未到実堺事、

右、就当庄西堺、以六条以北者、名平田大路、以七条以南者、高椋榜示名之、自戌亥角朴垣榜示辻、到未申角高椋榜示一大路也、士民呼之云平田大繩（云々）、伊豆源前司國房入道被執行当御庄之時、掘取高椋榜示內、擬副加私領鶉郷之由、禪林寺律師（永觀）御任（二）聞驚、被停止庄務畢、其後下遣官使、雖被直立榜示、官使等且怖武威、且被相語（天）不到著実高椋堺（テ）、立榜示畢、而以大同四年御立券文坪付、勘見御庄東西坪並次第之處、槩以十五町也、而今自東堺友河至于西堺之今榜示、纔十一町八段三步也、是則高椋榜示牢籠未正直之故也、又以平田大路為茜部庄西堺、以同大路為平田庄東堺地、彼此兩庄共（二）以顯路（露力）大道、互為其堺之處、件大道以東治田荒地等、所被成彼平田庄之加納也、專可有御沙汰也、

一北堺朴垣并小厚見小路榜示內治田荒地等、為平田庄加納被押取事、右、古老住人申云、小厚見小路者、自戌亥角朴垣辻、到于丑寅角友河之源弘井之馬洗河津云處之東西行小途也、凡件小路者、自平田庄通皮手村也（云々）、而今勘大同御公驗、号今北堺榜示處者、是五条中繩也、件辺（二八）全無東西行之小路旧跡、於实北堺小厚見小路者、即四条北繩也、仍自五条中繩北三町四条六町之內、各々七里八里治田荒地等、自西平田大路至于東友河、為平田庄加納、所被押取也、古老住人申云、字厚見王大夫政則者、厚見郡司

茜部・平田兩庄下司也、舍弟僧定增（ハ）茜部庄別当也、而伊豆源前司補茜部庄司、偏以所從郎等令沙汰庄家、停止政則・定增等之時、政則依為郡司并平田庄司、以件五条中繩以北者、称公田入平田庄加納也、但朴垣內者、件定增別当居住所也、自彼時隱朴垣之名、改云石原垣內也（云々）、件子細見文書等、政則庄司之時檢田帳（二八）、載四条五条坪之田（由力）國房庄司之時宣旨（二）載、國司陳狀（二八）茜部庄田不過十廿町之由、郡司政則申（云々）、仍件加納之条、実政則阿党所為之旨顯然也、然郡司阿党、以往古寺領仏地、永為新立家領加納条、愁中之愁也、

以前条々、言上如件、抑大同御立券并弘仁御施入文云、墾田一百一十七町三百卅九步者、又康平三年宣旨茜部庄住人元八十餘家也、今纔及二三家也者、百廿町墾田八十餘宇之在家、各所殘見在半分也、若無四至榜示御沙汰者、於相折御年貢、無力進濟敷、早被糺直者、所当御年貢更不闕怠敷、仍注子細、以解、

永治二年十月 日 御庄住人等

145、《書籍頁二〇七五》

〇二四七一 園城寺僧朝順等申詞記〇愚昧記仁安三年十一月 卷裏文書

康治元年五月八日問注僧朝順等申詞記

朝順（三井寺住僧）

右問朝順云、去三月中旬罷登天台山之由有其聞、定有由緒敷、件子細以实情弁申如何、

朝順申云、山（仁）罷登事実（仁）候（布）、房一字（仁万／礼）付火（天）三箇度三井寺（於）被燒（多流）年來之鬱（於）散（世牟／度）、滿寺（乃）僧徒（乃）申候（比志／かハ）、任愚意（天）罷登（天）候（比志）也（度）申、復問云、汝等所思企已希代之犯也、結構之輩、定有其數敷、依実可

差申夾名、兼又汝為放火之下手歟、重弁申如何、

朝順申云、造意之首字石見君・蓮教房・伊勢君・金藏房等〔仁〕候
〔布〕、一人張本〔度〕申事〔ハ〕不知給候〔布〕、彼四人〔ハ〕寺
中〔仁〕人望候者共〔仁天〕、結構〔志天〕候也、於朝順者、雖為寺
僧、非当住者、離寺〔天〕松崎〔仁〕十三年居住〔志天〕候〔於〕、
石見君〔加〕相語候〔比志/か〕当日〔仁會〕可登山之由〔於ハ〕
承候〔比志/かハ〕罷登〔天〕房一字〔仁ハ〕放火〔天〕候〔度〕
申、

慶智〔同寺住僧〕

右以朝順陳狀、問慶智之處、申云、慶智〔ハ〕人〔乃〕語〔仁毛〕
不候〔須〕、寺〔乃〕大衆〔乃〕駢立候〔比志/加ハ〕罷登〔天〕候
〔比志〕也、房一字〔仁ハ〕放火〔天〕候〔比岐〕、堂〔仁ハ〕字八
郎〔度〕申僧〔古會〕、唐笠〔仁〕火〔於〕付〔天〕、自岸上〔志天〕
堂〔狐戸〕〔仁〕投入〔天〕候〔比志/口度〕申、

復問云、汝為大衆雖被駢立、結構之間、定有造意之首歟、件子細慥
弁申如何、

慶智申云、造意之輩〔ハ〕小倉〔乃〕蓮藏房并石見君等〔仁〕候〔布〕、
隨從之者〔ハ〕、刑部君・光南房・円禪口・常蓮房・禪門房・太郎房・
正覚房・又太郎房・小綱三郎〔度〕申男等候〔布〕、此外百余人新羅
社〔度〕申所〔仁〕集會〔志天〕候〔比志加/度毛〕、暗夜〔仁〕候
〔比志/加ハ〕分明〔仁〕面〔於〕不見候、僅見知〔天〕候者等〔於〕
所差申候也〔度〕申、

復問朝順・慶智等云、罷登之本意、若指中堂可放火之由、思企歟、
件子細以実弁申如何、

朝順等申云、中堂〔於ハ〕申出者〔毛〕不候、又不思寄候〔布〕、只
房一字〔仁〕揚煙〔天〕、今生之意趣〔於〕散〔世牟/度ハ〕上自僧
正下至于小法師原、皆申合〔天〕候〔比志〕也〔度〕申、

問注

右衛門府生清原口口

少尉大江「成重」

藤原「敦雅」

左衛門府生佐伯「国忠」

大志中原「季盛」

146、《書籍頁二〇八九》

〇二四九七 阿蘇大官司宇治惟宣解〇阿蘇文書

〔端裏〕「返合」かうさのもく口口ねくのけ、(結解)のさうもん

「下 政所

可勘合之、

別当式部丞口口口

「勘合了、

修理序頭惟宗(花押)】

阿蘇大官司宇治惟宣解 申進保延三四五六七八并【五】【六】口

年御年貢惣結解事

合

除甲佐社定

所当

米【仟佰伍拾斛】『定仟參佰捌拾斛』 年別二百三十石

絹【捌仟伍佰疋】『定備式口疋』 年別千七百疋

所濟

米【仟參佰七拾伍石伍斗壹升肆合】『定仟參石壹斗貳合玖夕』

百九十七石九斗三升 保延四年八月【三】『六』日

十二石 同五年三月十日

二百四石四斗九升 同年十月十一日

百口十口石一斗九升四合 同六年十二月日

〔米二百卅四石一斗九升四合連返抄内〕

十石 同年五月六日《○コノ紙接目裏花押接続ス。》

二十石 同年五月廿一日

二十五石 同年六月十八日

百七十七石六斗八口 永治二年二月九日《梶取成貞上内》

五十七石七斗四升七合六夕

《国定也、但京定卅三石三斗三升三合二夕》

同年二月十五日《梶取国貞上内》

五十石 康治元年五月一日《肥後国農料》

六十石八斗 康治元年『三』『六』月廿一日《綱丁永範上》

二百卅石 永治二年四月日《花貞梶取友正請文》

二十石 康治元年十二月廿九日

九十三石二斗五升二合四夕 未返抄

從永治元年十二月至同二年二月《天》度々梶取国貞量米

二百卅四石九斗八升六合内放返抄殘之、

五十二石四斗九升二合 同年未返抄

從永治元年十二月十一日至于同二年二月《天》梶取成貞

度々量米二百卅石内放返抄殘之、

『□□所濟万百九十七疋』

【絹万三百七疋】

千七百廿五疋 保延三年十一月廿六日

綾十端《代三百疋》 八丈十五疋《代五百廿五疋》

八丈十五疋《代三百七十疋》 綿衣十領《代三百疋》

四丈白布十五端《代二百廿五疋》

国八丈廿疋《代各廿五疋》『十疋』『十疋代各廿疋』 綿衣

廿領《代各廿疋》

白布卅段《代各十五疋》

連口一具《代七十疋》

牛鞞一具《代四十疋》

臥鞞二具《代各六十疋》

綿衣十領《別進》

千二百七十疋 保延六年四月廿九日

唐絹□□《代二百七十疋》 上品国八丈十疋《代三百疋》

下品国八丈十疋《代二百疋》 白布二十段《代三百疋》

綿衣十領《代二百疋》

五百十一疋 保延六年十二月 日

唐絹五段《代九十疋》 文紗五段《代百卅五疋》

四丈白布五段《代七十五疋脱》 国八丈五疋《代百廿五疋》

綿衣五領《代百疋》

千六口五疋 保延七年六月十八日

唐絹五段《代九十疋》 紗五段《代百廿五疋》

国絹十疋《代二百五十疋》

綿衣廿領《十領二百五十疋 十領二百疋》 白布十端《代

百五十疋》

五百五十五疋 永治二年二月十六日

唐絹十段《代百八十疋》 国八丈十疋《代二百五十疋》

白布十段《五段七十五疋 五段五十疋》 蘇芳三本

三百疋《銅代准絹御奉加代》 永治二年二月十三日《阿蘇宮大

鐘勸進永算請文》

千三百四十疋 康治元年六月廿一日《綱丁永範上》

唐絹十五段《代二百七十疋》 紗五段《有文四段 代百廿

疋 无文一段》

八丈絹二十疋《代四百疋》 白布十段《代百卅疋》

綿衣廿領《代五百疋》『各廿疋』 蘇芳五本《代五十疋》

球磨紙五十帖 干鳥卅鳥

廿葛三筒

百九十疋 康治二年二月十一日《上》

上品八丈三疋内《一疋代七十疋 二疋代各六十疋》

所有過上

米 絹

一年々所進別進色々物

五百十五疋連返抄内 保延六年十二月 日

紫三千本 干鳥卅鳥 甘葛一瓶子

色革十枚 檀弓四張 合子三百枚〈大 小〉

鉢五口

四百六十疋連返抄内 保延四年八月六日連返抄

桂心五両 甘葛三久里 干鳥卅鳥

紫二千本

又所進物

油一斗〈胡麻七斗代〉 味所三筒 干鳥卅鳥

井笠筵一枚 蘇芳四本 球磨紙五十帖

保延六年四月廿九日〈上〉

千六十五疋連返抄内保延七年六月十八日連返抄内

甘葛廿三筒 干鳥卅鳥 紙卅帖

油一斗〈胡麻七斗代〉

五百五十五疋連返抄内 永治二年二月十二日

蘇芳三本

已上【五】『六』箇年内御米素絹外所進別進色々物等

蘇芳十二本 干鳥百八十鳥

甘葛十四筒 紫革五千本

紙百六十帖 青革八枚

弓四張 高坏二本

唐絹十段〈但例定者〉 棕二口

油二斗 手洗二口

井笠三枚 虎笥二口

臺二本 合子四百枚〈大 小〉

色革七枚 鉢五口

桂心五両 牛鞆二具〈保延五年三月十日米十二石連(返 脱力)抄内〉

綿衣十領 春米五十石

右【五】『六』箇年御年貢、色々別進物并結解注進にて候、

康治元年十二月 日 大宮司宇治惟宣

*最初の端裏書、間に〈天〉二箇所、末尾の仮名「にて」

147、《書籍頁二一〇一》

○二五〇八 石見權守在原貞広申状○東大寺文書四ノ五十二

言上 案内事

右所より言上者、以先日令申候処、田文所進上仕也、先田文〈を〉

御覽合御坐吉候、仍令御沙汰可御内、先田文〈二八〉【坪負】雖白米

免坪負十一町雜役免外浮免負所役令勤仕所也、余処庄々〈二天〉浮

免候者也、如此沙汰、入御心御坐御沙汰可候也、今度之沙汰、偏奉

憑候、吉様令沙汰可御坐之状、如件、

(康治二年) 閏二月十一日 石口(見力) 權守在原貞広

148、《書籍頁二一三三》

○二五二七 僧義豪書状○東大寺文書四ノ三十六

先日為沙汰所召白米免小東庄田文可返遣御、今日午前可檢注之由、

昨日大温屋衆僉議了、仍大切候者也、同庁宣〈牒状也〉下文等〈八〉

御要未畢者、不紛失可置御候、他事期見參、恐々謹言、

(天養元年力) 三月廿八日 僧義豪(状)

威儀師殿

149、《書籍頁二一三四》

○二五二九 僧義豪申文○東大寺文書四ノ三十六

(端裏)「小東御寺家下文十枚(澄心法師起)時高田文案一枚返送了、
天養元年五月十七日」

〔端裏封上(書)〕今小路威儀師殿(□(侍力)) 僧義豪(奉)「

魚網絶久候之間、御消息冷淡、可令召覽御了(耳力)、
御帰向之由承之候、雖須參訟於心事、依一旦愚見、作心於鬼、恐申
候者也、無御不情者、尤大望候、抑所令申候(ハ)先日為沙汰所召
之小東庄尊勝院律師任牒状并代々別当三綱等連署之下文、又時高府
生所帶田文案(一紙)、如数可返給候、近日檢注使沙汰頻御之間、大
切可見事候也、御要猶可候者、後可召御敷、田文八枚(ハ)先給候
了、其残事(ニ)候、誠恐謹言、

五月十七日僧義豪(申文)

威儀師殿

150、《書籍頁二一三八》

○二五三四 僧勝胤房地处分状案○興福寺信円本因明四相違

裏文書

讓与 处分房并敷地事

合肆間参面房壹宇者(在敷地)

四至(限東大路 限南山/限西行善房岸 限北大路)

右、件房并敷地元者、僧勝智之所領也、而勝智離山在家之後、僧勝
胤受病惱不知死生、爰僧勝智口状云、山寺房無益也、仍勝智以山寺
房、勝胤之奈良春日田式段(字燒/田長)相替畢、仍房代田式段(に)
残田壹段相副处分畢、然則房并敷地、勝胤年来之間所領知也、仍僧
朝賀所处分也、敢不可有他妨、仍為後日沙汰、所放处分帳如件、

天養元年八月廿八日 僧勝胤(在判)

僧(在判)

政所

讓与旨明白也、仍加署、

別当法印権大僧都(在判)

151、《書籍頁二一六〇》(*仮名の大きさ宣命書きかどうか不明)

○二五五七 某申詞注進状○永弘文書

者、御外題勘□□□□(状明白也カ)又今始宮□□□□(次作田
カ)等(を)糸永領(と)申事、□□御還迹、仰事□□埋炭由
(を)、宮次陳申事□実也、又栗殖置由、同無実□□、糸永相
伝私領(と)申候人等(と)、恒弘□□□□判、又栗殖候事(ハ)、
末延領内末延舍弟字常樂房之子殖候、以□糸永沙汰人□□使者
(之天)、栗殖堀埋炭不候、且又如先条陳申、度□(々カ)御外
題并勘状等、被批見無隱敷、有左右御定(と)申(す)、
以前、彼此申詞、注進如件、

天養二年六月七日

官人代日下部(花押)

檢校

惟 宗(花押)

弁官日下部(花押)

弁官田部(花押)

祝 (花押)

檢校——(花押)

御馬權祝□□

散位宇佐□□

散位□□

152、《書籍頁二一六七》

○二五六五 皇后宮大夫源雅定書状○醍醐雜事記十三

山鹿庄被分候了、昨日(そ)庁下文成候(志)、無量光院方(ニ)田
七百丁畠二百餘丁、孔雀明王堂方(ニ)田五百丁畠二百餘丁(とそ)

候〈志〉、謹言、

久安元年閏十月六日〈在判／左大将（源雅定）殿御消息也〉

153、《書籍頁二一七四》

〇二五七一 僧能德家地処分狀〇京都大学所蔵東大寺文書

証分家□□

合上司家地老所、在本公驗四至、

右件上司家地老所僧暹祐（ナカク）証分所狀如件、

久安貳年二月七日 大法師能德

（花押）

154、《書籍頁二一七五》

〇二五七三 白錦姉子水田讓狀〇林康員氏所蔵文書

讓行 水田新券文事

合老段大者

在右京二条一坊六坪〈水池尾參段小、紀俊綱壳渡畢、

四至〈限東際目 限南際目／限西際目 限北繩手〉

右件田者、白錦姉子先祖相伝所領也、而今嫡子僧能因〈爾〉限永年

作手、令処分之事已畢、敢以不可有相違者也、於本公驗者、依有殘

地不加渡也、仍為後日沙汰、毀本券文面、勒新券文、讓行之狀如件、

久安二年三月廿日 白錦氏（略押）

嫡女紀（略押）

二男紀（略押）

同仲子（略押）

155、《書籍頁二一七七》

〇二五七六 僧永慶菅野為遠申詞記〇愚昧記仁安三年十一月

卷裏文書

久安二年五月四日問注僧永慶等申詞記

永慶〈近江国甲賀東郡司〉

右、問永慶云、天台山惡僧字七郎被尋召之間、汝遣送伊勢国之由有

其聞、仍被付召之處、有神祇少副親章之許、賜使庁之証文、可召進

之由汝申請了、仍雖遣使庁之召符、于今不召進、加之七郎不來向之

旨、親章所陳申也、件子細依実弁申如何、

永慶申云、七郎〈於〉遣送伊勢国之由無実候也、七郎〈加〉兄為永

申云、七郎可尋進之由有其仰、罷向伊勢国可相尋也、永慶〈ハ〉伊

勢国〈仁ハ〉相知人有其數、慥可令尋擲之旨、可賜消息之由申候〈比

志／加ハ〉任其詞可令尋進之由、消息〈於〉親章之許〈二〉遣了、

其使者〈ハ〉為永〈加〉從者友里・成利等也、子細可被召問彼等也

〈土〉申、

覆問云、七郎有親章之許、仍遣尋之處、親章申云、付永慶之使不可

召進、賜使庁之証文、可召進之由、親章令申之旨、汝先日弁申了、

仍遣使庁召符之處、七郎不知之由、親章所申也、件子細依実弁申如

何、

永慶申云、七郎有親章之許之由、永慶不見候也、七郎〈ハ〉有親章

許之由、為遠〈か〉申候〈比志／於〉承〈天〉申〈天〉候〈比志〉

也、可被問為遠也〈土〉申、

菅野為遠〈七郎舍弟〉

右、以永慶申詞、問為遠之處、申云、七郎〈於〉為尋召、去三月三

日先遣差友里・成利等令尋之處、七郎候之由所申上也、仍為遠第一

度〈仁ハ〉罷下伊勢国〈天〉、令尋之處、友里・成利等申云、親章〈か〉

郎等字官八大夫〈土〉申男〈乃〉七郎〈ハ〉親章〈か〉氏寺〈乃〉

住僧字花臺房之許〈仁〉候之由所申也、仍可擲之由令申親章之處、

最初〈仁ハ〉依永慶之書狀、付為遠令召進者、兄弟也、若同意〈志

天〉迹〈奈ハ〉、尚可後日之責也、有別当宣者、其時可召進之由、

依令申、令申上事由之處、幸被下別当宣、以彼別当宣、令申親章之

処、後〔仁八〕七郎不候之由、今所申候也、可被尋問親章由、同十七日尚為遠・成利等相共罷向親章許〔天〕、可擲給之由令申之處、親章申云、無上之仰〔志天〕、何可致私責哉、前々有如此沙汰之時、櫛田河以東〔仁八〕使者不入來事也、須有上之責、汝等私不可責事也、親章〔毛〕申上事由了、隨重仰嶋々〔於毛〕広〔岐〕一家〔奈礼〕／ハ、相尋〔天〕可申子細也〔土〕、以郎等字甲斐藤次依被申出、為遠等空帰了、於今者花臺房・宮八大夫・甲斐藤次等〔於〕可被召問也〔土〕申、

笠成利〔為永使〕

右、以永慶等申詞問成利之處、申云、為尋七郎〔之〕在所、為永〔か〕使〔仁天〕罷下伊勢国〔天〕候〔比岐〕、甲賀〔乃〕大岡〔仁〕寄宿〔志天〕候〔比志〕／仁、下人來臨〔天〕言談之次、申云、七郎〔於〕伊勢国石手〔土〕申所〔仁〕遣送〔天〕罷帰之由申候〔比志〕／かハ、石手〔ハ〕親章之住郷〔奈礼〕／ハ、以永慶之消息、罷向親章許〔天〕令尋之處、親章氏寺之住僧字花臺房之許〔仁〕候之由、所承也、仍令申親章之處、郎等宮八大夫〔於〕成利〔仁〕相差〔天〕、遣花臺房許之處、花臺房申云、七郎〔土〕申僧、又僧二人所候也、早成利等可擲之由雖令申、成利等僅一兩人也、彼等三人不善之者也、輒難擲得、花臺房擲〔天〕可給之由、雖令申、依不承引、今日以後七郎〔於〕不可令逃之由申含之處、七郎逃〔奈ハ〕花臺房〔古會〕京都〔仁毛〕被召〔女土〕宮八大夫〔か〕申候〔比天〕、依不擲給、空罷上了、第三度〔仁ハ〕為遠・永慶・友里等〔ハ〕雖罷下、成利〔ハ〕不罷下候也〔土〕申、

問註

右衛門府生清原「季兼」

左衛門府生佐伯「国忠」

防鴨河主典少志坂上「兼成」

修理左宮城主典大志中原「季盛」

少尉平「家弘」
大尉源

156、《書籍頁二一八三》

〇二五八三 河人成俊等問注申詞記〇愚昧記仁安二年冬卷裏文書
久安二年七月十一日問注河人成俊等申詞記

成俊

右、問成俊云、法勝寺末寺延命院所司 等去二月十五日解狀云、請殊被裁許、為一官司河人成高舍弟成俊等、以非道今月十四日引率軍兵八十余人、乱入御庄内、恣迫捕供僧三昧住僧并下司住人等、令燒失庄民、令逃散子細狀、右謹檢案内、件成高等、不憚寺家之御威、私召籠三昧快順、致凌礫及数度、如此鼻惡、積習而所致濫吹也、而始自供僧三昧住僧下司等、迄于住人、追捕庄内之間、皆悉凋散畢、因茲為宗 院御祈十二時法花三昧・七日最勝講演香花燈明・十五日百味供養之勤、皆悉断絶畢、爰成高等不顧冥蹟之恐、罪過不輕、責而有餘、若無御裁断者、御祈禱非絶、仏事廢亡、末寺永失敷者、件子細依実弁申如何、

成俊申云、擲取三昧快順之条、全不候事也、又擲下司守房事〔毛〕凡不候也〔土〕申〔爪〕、

快順

右、以成俊申詞問快順之處、申云、大栗山住人安宗依不慮之事、成俊〔か〕押仕之間、安宗逃去畢、安宗〔ハ〕快順〔カ〕妻〔乃〕兄弟也、因茲号彼所縁、快順之許〔仁〕遣從者六人、擲快順妻之間、快順罷出〔天〕候〔於〕、十三日召籠〔天〕、剥取衣裳〔天〕、凌礫仕候〔比志〕／加ハ、為存身命、安宗〔於〕可尋進之由、出請文畢、其後安宗令遲進〔土天〕、快順〔カ〕妻〔於〕遣下人六人擲取〔天〕、經九箇日免畢、其後安宗所出来也、仍成俊・安宗〔か〕牛并板等〔乃〕解文〔於〕自安宗之手責取〔天〕免畢、因之快順年来之妻〔於〕安

宗〔仁〕相具〔天〕追出候畢、其故〔ハ〕此定〔奈良／ハ〕如此濫吹不可絶〔土〕思給〔天〕、此女〔於〕離別畢、其後尚快順〔於〕安宗不見〔土天〕、譴責仕候也、成俊〔か〕從者行里〔於〕可被召問候也、快順〔毛〕妻〔毛〕共召籠候〔比志〕使〔ハ〕行里也〔土〕申、

成俊

右、以快順申詞問成俊之處、申云、快順〔於〕全一日〔毛〕不召籠候也、又妻〔毛〕不召籠候也〔土〕申、

秦恒正〔重房從者、渡与成俊為濫行証人、成俊召進者、〕

右、問恒正云、成俊擲取快順身并妻等之事、依実弁申如何、必弁申〔才〕〔せ〕、

恒正申云、召籠快順事実〔仁〕候也、何箇日〔土ハ〕慥不覚候、又妻〔毛〕一度召籠〔天〕候〔比岐〕、日数同不覚候也、日来快順夫妻共被擲籠〔天〕歎候〔比志／ハ〕承候〔比岐／土〕申、

以恒正申詞問成俊之處、申云、快順不召籠之由、先条弁申畢、妻〔於ハ〕三箇日召籠〔天〕候〔比岐／土〕申、

守房

右、問守房云、為成俊被擲之由、所訴申也、件子細依実弁申如何、守房申云、擲快順之間、守房申云、快順妻〔於〕離別畢之上、法勝寺末寺内也、荒涼不可擲之由、為加制止、罷向之處依其意趣、守房

〔於〕擲取〔天〕、三日三夜凌礫仕候〔比志〕也、因之從者一人弁畢、又上午廿頭・斤定稻三千束・大刀百腰・腹卷廿領・水旱〔干〕并袴廿具・奈岐刀万柄被取畢、又庄民在家十四宇〔か〕内、財物搜取畢、此外前々被責取物等、注別紙進上先畢、彼在家廿〔十力〕四宇内五宇被燒失畢〔土〕申、

以守房申詞問成俊之處、申云、守房〔於ハ〕更不擲候也、守房〔か〕成俊〔か〕從者〔於〕殺害〔志天〕候〔比志／加ハ〕、守房〔か〕舍弟僧五人〔か〕殺害人也〔土天〕、擲〔天〕、成俊〔仁〕給〔天〕候〔比志／かハ〕、請取〔天〕、死人之代下人三人責取〔天〕、二人〔ハ〕

返畢、一人〔ハ〕取〔天〕候也、庄民在家十四宇〔か〕内、財物之事無実也、燒失二字〔か〕内、財物〔ハ〕守房〔か〕運取之後、令燒失候也〔土〕申

以成俊申詞問守房之處、申云、守房〔か〕舍弟〔仁天〕、何可擲守房哉、被擲籠之刻、舍弟等成恐逃去畢、悲泣仕〔天〕候〔比岐／土會〕承候〔比／志〕、只遺迹可候也、濫行張本之輩注進先畢、可被召問彼等也、燒失之在家二字〔か〕宅主〔ハ〕名東御庄寄人也、依逃去、其内財物為自彼御庄沙汰、運置他所之後、為成俊被燒失候也〔土〕申、

覆問守房云、注進之濫行張本之輩、任交名重弁申子細如何、守房申云、成高〔ハ〕所從眷屬數多之者也、成俊〔ハ〕無勢之者也、若干勇堪之輩來集〔天〕候〔比志／かハ〕、成高〔か〕眷屬〔土〕思給候也、成高〔毛〕候〔土ハ〕承候〔比岐〕、成高〔か〕男二人之内、字新二郎〔ハ〕候〔比岐〕、又大二郎紀太・藤大夫正時・六郎大夫藤榮・大夫宗追捕使・凡追捕使三子・追捕使村二郎・草二郎・追捕使景里・重包・正里・行里・三藏房・善行房・觀三房等〔ハ〕候〔比岐／土〕申、

問注

右衛門府生清原〔季兼〕

少尉源朝臣〔近康〕

左衛門府生佐伯〔国忠〕

修理左宮城主典大志中原〔季盛〕

少尉橘〔頼重〕

藤原〔惟俊〕

〇二五八四 問注申詞記〇愚昧記仁安二年冬卷裏文書

〔布〕末利〔加〕許〔二〕不持來候〔卜〕申、

覆問云、弁申之旨、尚以不理給、雖一物何不聞及入己之輩哉、況女

二人男一人虜領之由、已載贓物註文、件子細、以実弁申如何、

末利申云、勘給之旨、今可避申之方不候、鹿毛馬一疋、黒牛一頭〔八〕

国光〔止〕申從者〔乃〕男〔乃〕取〔天〕、私宅〔三〕將來〔止八〕

承候〔幾〕、又鷹一羽〔八〕從者重友取〔天〕候〔布止〕申、

拷七十

刑部重友□□

所差申也、件子細依実弁申如何、

末国申云、西京強盜人全不仕〔と〕申、

寄器

藤井友沢〔末国同〕疑生年十五歳

不知姓千寿女〔友沢乙浜冠者等母〕

乙浜丸冠者〔年十二歳〕

右、問友沢等云、西京強盜之犯、依被盜主指申、召問末国等之處、

如無弁申之旨、汝等寄宿一所、定知子細敷、以実弁申如何、

友沢等申云、件犯全子細不知給候〔止〕申、

□原末利〔丹波奄我庄強盜〕

右、問末利云、去十月廿八日夜、於奄我庄殺害舍兄是宗身、兼又搜

取在家廿六字内財物之条、依実弁申如何、

末利申云、是宗〔八〕雖同父同母之舍兄候、年来之間、是宗為末利

方々不当〔乃〕事候〔志加／八〕、暫〔八〕相忍〔天〕候〔志加／と

毛〕、

右、問重友云、汝私主末利雖承申殺害是宗之由、争申入己贓、已為

隨從者、定知贓物子細敷、依実弁申如何、

重友申云、重友〔か〕取〔天〕候物〔八〕、鷹一羽、又布二段〔八〕

拷七十

問注

右衛門府生清原〔季兼〕

少尉藤原〔国遠〕

平〔清房〕

左衛門大志中原〔季盛〕

少尉中原〔滿遠〕

158、《書籍頁二一八八》

〇二五八七 大和国薬園莊縁松莊田堵等解〇東大寺文書四ノ

二十二

薬園并縁松等御庄田堵等謹解 申預所得業御房政所御裁定事

請殊蒙 恩裁、任早解狀之旨、被免除当年檢田使不置損田不安愁

狀、

右事元者、例損〔八〕壹町置式參段処也、然〔ルニ〕檢田使例損〔二〕

壹町少半計〔リ〕置、極〔タル〕田堵等歎也、抑於田數、損不損〔二〕

可依也、而〔ルニ〕此檢田使〔八〕於損不損、不論善惡左右、田堵

等損田不給〔シテ〕皆得〔ナル〕、田堵等憂何事如之、就中先々檢田

使〔八〕四升米取〔テ〕無餘役、然〔ルニ〕檢田使〔八〕乍取四升

米、日別〔三〕四十余前〔ノ〕饗前〔ヲ〕仕条、此又田堵等〔力〕

大〔ナル〕歎也、次〔八〕先預所全以京上花瓜等役被仰下〔トモ〕

当御任之時〔二ハ〕、田堵等即其役〔ヲ〕無懈怠勤仕矣、望請恩裁、

早理解狀之旨、田堵等処〔三〕損田可給田〔由力〕〔ヲ〕仰下者、將

仰正理貴、以解、

久安二年八月廿五日 田堵等

是吉〔略押〕

(*以下四十一名の歴名省略)

159、《書籍頁二一九〇》

〇二五八八 紀光安請文〇東大寺文書四ノ七十一

(端裏)「□□□□師静寛沙汰之時／□□瀬御庄散所雜色光安請文」

光安申請東大寺水成瀬御庄田事

合式段小内(川成小)

右、件請文元者、自今年始御寺所役(ヲ)可動仕、且依本作人、請進状如件、但仍為後日沙汰、請文状註、以解、

久安二年九月廿九日 紀(花押)

160、《書籍頁二一九二》 *裏書のみ「与家ヲ(家を与え)」に注意

〇二五九五 藤原氏女家地売券〇東大寺文書四ノ七十三

(端裏)「たいくかち」

沽却 南院家地売処事(裏)「於西七尺者僧慶尊□□、於西五丈者僧慶尊渡□□、慶尊ニハ与家ヲ、地ハ取返、改東三間渡慶尊了、西編五間一尺鶴王丸沽却了」

合東西陸丈南北伍丈

四至(限東上野公地 限南川/限西川 限北大道)

右件□□□□相伝所領□□□□限直米□斛□□所沽却散位平国永也、但於本券者、在東南院御房御経藏者、□例可勤仕院家臨時雜役也、仍為後日沙汰、放新券文渡状如件、

久安二年十二月六日

売人藤原氏(略押)

□□□□

161、《書籍頁二二〇三》 *端裏書のみ

〇二六一三 甲斐守顕遠奉書〇神護寺文書

(端裏)「仁和寺宮【返事】外題并【願】甲斐大進書 立券之文(ハ)在備後君許也、」

神野庄申文令献仁和寺宮候之处、成外題所令進給也、仍遣之、又令申給之旨候之故、被相副彼御返事候者、依 御気色、言上如件、

六月十日 甲斐守顕遠

進上 侍從中納言殿

162、《書籍頁二二〇四》

〇二六一五 丈六仏像造営文書〇京都大学所藏兵範記仁平二年二月卷裏文書

御仏御衣木事、就先度寸法、令採進之处、於□□者、依有改定之議、被増寸法□、仍返給候了、承新議、任寸法□(可力)採進之由、先日遣仰候了、彼御牧内袖、不□□山峯遠運上日久、既棄二□□勤、而又七八寸木百切(長三尺)俄可採進之由被仰下、為御牧無術御煩也、不勤進□□木之間、重又被仰下、件葩木運上之後沙汰(ハ)候也、抑化□(仏力)何尺御仏乎、若一尺御仏ならば、

163、《書籍頁二二〇五》

〇二六一九 丈六仏像造営文書〇京都大学所藏兵範記久安六年八月卷裏文書

正体之木早速可給候、御仏之御衣木注文二進上候也、此注文者、普通之躰(に)不似候、仍披露不可候、略定を存候故也、木も板も細々に注候也、袖工おしはからひて、ふたつきにも、みつきにもとりさふらふへきなり、返々此注文、仏師にみせさせ於はしへからず、為道不便候、花車者百葉定候、法成寺様候、又於參上委細可申御事候、謹言、

十一月三日 法眼康助

164、《書籍頁二二〇八》

〇二六二六 僧惠舟奉書〇東大寺文書四ノ四十

二通返遣之、是(ハ)皆所候之書也、十二箇処勅書沙汰也、令尋給(ハ)八箇処勅書四箇処繪図事也、近江因幡庄在其中、件書も於実光許紛失之由被申志かや、此次被仰也、因幡庄文書(ハ)慥候之由被申(キ)、覚仁(モ)其□所申也、早可被返上、無益第一事也、尚八箇庄勅公文書案可被求也、

浄土院付属状、中子書条々申文令申謀書之由如何、真偽無隱欺者、仰旨如此、謹言、

十月十二日 僧惠舟(奉)

165、《書籍頁二二〇八》

〇二六二七 僧晴誉奉書〇石塚書舖待賈文書

「久安三年」
依御消息之旨、杜屋御庄沙汰人令尋問御之处、【申文之】荏曩之公文之名与件沙汰人申名相違、又件実円申(モ)慥下作(トモ)不知候之由申して、旁不審御者、委尋記子細御、御返事可令差御之由、御氣色候者也、不具謹言、

八月廿九日 僧晴誉(状)

166、《書籍頁二二一五》

〇二六四一 伊賀国東大寺封支配注文〇東大寺文書四ノ七

(端裏)「伊賀御封事(覚仁注文)」
伊賀御封支配事

本数三百六十余石

昔(ハ)黒田庄出作便補百八十余石 玉瀧鞆田出作同前
去天仁之比、醍醐権僧正前御任時、鞆田所当之内、四十石被超黒

田出作了、其後及四十年、黒田(ハ)二百廿余石、玉瀧等分百四十余石之中、鞆田村出作請補九十余石、而鞆田住人如昔数、南北杓各半分定(ヲ)便補之由、訴申敷、

久安四年二月廿一日

167、《書籍頁二二一六》

〇二六四四 三春是行起請文〇百卷本東大寺文書二十一号

□□(三春)是行謹解 申請天判事

右事元者、東大寺覚光得業解状之文云、是行丸私宅竹前殿父馬一疋并雜物等(ヲ)召取御坐(ト)候、極(タル)無実也、只对得業(テ)申候事者、竹前殿仰云、得業(ハ)相伝文書有(ト)有(ルカ)、若(爾)申以來見(トオ)候(ト)申(シ)候(シカハ)、得業其文書之有(ト)无(ト)不候、仍是行相伝文書不候(ヌソト)思食候(テ)、御地子代馬一疋戒行房取候(ヲハ)請申畢、其後得業(ハ)全以左右申不候者也、若実申(テ)候(ヲ)不申(ト)申(テ)候者、東大寺大仏薬師如来十二神将鎮守八幡大菩薩当所八所御靈惣(シテハ)日本朝中大小神祇冥道神罰冥罰蒙是行丸身候(テ)、現世貧窮無福(シテ)、後生断三世仏種、仍謹 請天判如右、敬白、

久安四年四月十五日 三春是行(花押)

168、《書籍頁二二三六》

〇二六五六 紀伊国伊太祁曾社神楽免田注文〇伊太祁曾神社文書

紀伊国一宮伊太祁曾大明神御神楽料処免田所見之事
久安四年十月三上十二郷惣檢之時注文(仁)

歎喜光院御領紀伊国吉礼郷田畠

合参拾陸町捌段大四十歩内、被除伊太祁曾御神楽田肆段之、不被向馬鼻、

同久安四年十月日三上郷惣檢注文(仁)、歆喜光院御領紀伊国安原郷田畠合參拾參町玖段大之内、伊太祁曾大明神之御神樂田陸段、被免除万雜公事天役等(於)不被向馬鼻(於)、在庁官人庄官等為後日、公文紀久国・郡司代散位黒部成真・国使散位秦宿禰・御使左弁官史生三善友忠等相共(仁)被逐惣檢事如是、此外金峯山御領小藏庄壹町伍段・布施屋郷一所・田井庄橋本一町・和佐庄七段・中村庄肆段・保田庄貳町・富安參拾余町、当庄山東伍町捌段、皆々被免除万雜公事天役等畢、一年中(仁)捌拾捌ケ度御神樂料処是也、

右、所注之状如件、
久安四年十月 日 藤原左衛門尉国口(花押)

左弁官友忠(花押)

伊太祁曾神官中

○本書室町時代ノ偽作ナラン。但シ文中引ケル久安四年惣檢注文ハ或ハ有之シモノナラン。

169、《書籍頁二二四〇》

○二六六四 東大寺僧覚仁・伊賀国日代中原利宗問注記案〇

東大寺文書四ノ九十

(端裏)「黒田玉瀧兩袖殿下問注記(久安五年)」

問注威儀師覚仁与散位利宗申詞記

覚仁(東大寺權上座)

問覚仁云、伊賀在庁官人等訴申云、東大寺庄々加納公田官物率法段別見米三斗也、而彼寺庄々弁濟段別見米二斗、对捍殘一斗、当国内權門庄牧其数巨多也、然而以院御庄可為例也、初任訴申 院庁、加納田官物段別三斗可濟之由、被成下庁御下文畢、乍見彼例、当寺独致对捍、仍任先例經奏聞、段別三斗可濟之由、被宣下畢、而尚以对捍、未知其理者、件子細依実弁申如何、

覚仁申云、当国内(二)庄牧其数巨多也、然而濟例非一同、当寺加納公田并太神官神戶出作田(ハ)段別(二)見米二斗所濟来、也(己カ)及五百歳、而在庁官人等以何時例(テ)、見米三斗可濟之由、訴申哉、付証文(テ)子細可弁申也、兼又利宗当国数任目代也、以何時例(天)言上此由哉、代々国司每有其訴、寺家皆蒙裁定畢、証文所候也、抑院御庄(ハ)新立也、何故(二)以彼例(テ)往古寺領(ヲ)可被准拳哉(ト)申、

散位利宗

問利宗云、付覚仁申詞、子細弁申如何、

利宗申云、覚仁陳状甚以無証拠、故如何(トナレハ)、国内諸庄国加納田官物非一同之由陳申之条、甚以可謂無道(シ)、東大寺庄々段別二斗可弁(ハ)、如陳申(ク)、可進証文也、国衙(二ハ)度々証文繁多也、近則去保安二年七月三日守為重任、申下宣旨云、東大寺庄出作公田本免之外、准公田率法(テ)可催濟官物者、若有不承引之輩(ハ)、永可追却堺内者、論言如汗、寺家以何有致对捍哉、而尚寄事於左右、对捍官物、仍任先例、当任去年經奏聞之日、可濟見米三斗之由、被下 宣旨畢、寺家暗致对捍、申無先例之由、甚不似公事歟、称寺家之証文、宣旨歟官符歟、尤可進覽也、有改易之状者、非其限、尤任証文可被裁下也(ト)申、

覆問覚仁云、如利宗所進之兩度宣旨状者、東大寺庄々加納田可准公田之由、顯然也、但寺家有証文之由、先条弁申了、早可進覽也、件子細重弁申如何、

覚仁申云、於斗代之事者、度々有相論(リ)、其中(二)去天仁三年(二)於官(テ)、官物斗代(二)為被勘合(二)、寺家証文十三通被召取了、件宣旨案進覽之(ス)、次(二)永保年中国司(不知某)止見米三斗之責(テ)、二斗(ヲ)可濟之由、成進庁宣了、只今不隨身(ス)、追以可進覽也、次(二)寛治・嘉保之比、年々官物結解返合寺家(二)所殘也、段別(二)二斗之由分明也、同追可進也、永

久二年八月廿六日宣旨進覽之、同年五月廿八日長官故左大弁（乃）
卿（御力）下文云、二斗米弁濟（ノ）証文被下宣旨（テ）、所令召官
底也、官使有範參洛、定子細（ヲ）言上敷、国司非法不可承引者、
件下文案進覽之、天永元年官物結解返合、追可進覽也、次（ニ）天
治二年檢田丸帳進覽之、段別二斗之由、在与判、寺家証文大略如此、
追相副目錄（テ）可進覽也、但為重任（ニ）、見米三斗可濟之由、雖
申下宣旨、依寺家陳申、無三斗之沙汰、其後代々国司又以無三斗沙
汰、所詮（ハ）寺家（ニハ）、任先例陳遁（レ）天所罷過也、每度（ニ）
分明宣罷下事不候（ス）、国（ニモ）慥（ニ）三斗（ヲ）催取（レ）ル
納帳（ヲ）可進覽也、隨（テ）至于今日、三斗（ヲ）徴下不及承（ト）
申、

覆問利宗云、如覺仁申詞者、国衙度々雖申下 宣旨、無濟三斗之例
云々、寺口以永久宣旨二斗米為証文敷、件子細依実弁申如何、

利宗申云、覺仁申狀每事渡奸濫、十三通証文被竊官（テ）不被返給
之条、是何故哉、天仁三年（ニ）証文可進由、被下宣旨敷、依此宣
旨、十三通証文被竊官之由、所不見也、永保年中国司止見米三斗責
（テ）、二斗（ノ）可弁之由、被成庁宣敷、件庁宣正文可召也、但依
寺家語、雖被成庁宣、依一任国司与判（テ）、不可失永代公領之官物
（ス）、將不可被宣旨（ス）、次（ニ）如覺仁所進年々官物返合案文
（ハ）、全以不足証跡敷、郡郷（ノ）官物結解作法（ハ）、郡司郷司
加納田司等、先作結解（テ）付税所、税所付目代、目代申国判（テ）
下税所也、国司在京之時（ハ）、加目代判（テ）下税所、而此返合（ニ
ハ）無国判（シ）、無目代之奉行、以何為証跡哉、不及一口之論、兼
又以永久二年宣旨、称二斗米証文（ス）、所司所存違 宣旨狀（タリ）、
寺解（ニハ）見米二斗准米四斗二升三合濟來之由、雖書載（トモ）、
宣旨狀（ニハ）全以不被載斗代之沙汰、只被免除役夫工作料米許也、
是寺領（ニ）依不可切口口用途被裁下敷、甚以非寺家証文、長官左
大弁下文

□□□□□□□□哉、於官物斗代（ハ）、只任宣旨可有御沙汰也、寺
家致所洪（テ）、背国衙下知（テ）致減少弁、豈可為証跡哉（ト）申、
久安五年五月六日

申

東大寺所司等

權都維那從儀師源嚴

都維那 靜憲

權寺主大法師勝賢

權上座威儀師覺仁

權上座威儀師順覺

伊賀目代散位中原利宗

問

案主伯耆大掾紀親元

主税属 中原貞清

知家事刑部録紀則盛

兵部録宗忠行

書吏大管史生安倍成親

大從主計允安倍親兼

170、《書籍頁二二四三》

〇二六六 伊賀国目代中原利宗・東大寺僧覺仁重問注記〇京

都大学所藏東大寺文書

（端裏）「第一度問注 久安五年 六枚」

重問注散位利宗与覺仁申詞記

散位中原利宗（伊賀目代）

問利宗云、東大寺所司等陳狀云、伊賀国黒田・玉瀧兩杣官物率法見
米二斗三斗相論証文事、利宗所進三斗代証文一通、保安二年七月三

日守為重申下宣旨案文一通、狀云、東大寺出作、准公田率法可令催濟官物、若有不承引之輩者、可追却堺内云々、所司覺仁陳狀云、代々国司一旦雖申下宣旨、數百年來弁來二斗、有三斗例者、利宗可進証文也、覺仁申旨、尤以有謂、其故者、為重保安二年申（下脱力）宣旨分明也、而其後柚人相論遂弁二斗米云々、通可依証摺、但次国司憲明初任年、檢田丸帳已成二斗判、即所副進寺家証文之中也、前司時若弁三斗者、新司無程改易哉、以之可有遺迹也者、件子細依実弁申如何、

利宗申云、東大寺領加納公田、依对捍国役者、孝清任去長治三年注子細經奏聞之處、可停廢之由被下宣旨了、為重任去保安二年官物率法、可准公田之由同被下宣旨了、為量任去保延六年可停廢之由、同被下宣旨了、此外当任去天養元年院序下文云、權門庄齒加納田官物、段別三斗可濟之由被仰下了、此外何他証文可罷入哉、但背宣旨狀、無弁三斗例之由、覺仁陳申之條、只所涉之例也、彼憲明任二斗米外題（ハ）、依庄家語、一旦令与判敷、不可准、国衙所進代々宣旨、并院序御下文、因茲可濟三斗米之由、在序官人等所令言上也（ト）申、

覺仁（東大寺權上座）

問覺仁云、就利宗申詞子細弁申如何、

覺仁申云、利宗所進証文、皆先度問注所言上也、然而無寺家三斗見濟例、利宗數代目代也、慥不言上催取之由、然（ハ）寺家申旨無相違之由顯然也、当御任又宗広不致三斗米沙汰（シ天）過了、何利宗強可訴申哉、抑二百人柚工等、弁各段別二斗見米（テ）、以殘一斗之余潤於依估（テ）修理之御材木（ヲ）所取進也、因茲東大寺鑄音不絶之由、世以所伝申也、御任（ニ）初（天）慥被催濟三斗米（ハ）、偏寺家顛倒之因縁也、代々国司等一旦雖申下三斗米之宣旨、其沙汰遂以不然、皆所放二斗米返抄也、兼又寺家（モ）偏以所涉之例（ニハ）、可弁二斗米之由（ヲ）非言上、憲明外題（ニ）、二斗米之由顯

然也、去永久二年被免除役夫工米（ル）宣旨（ニ）、二斗之外可停止之由所見也、同年（ニ）長官故左大弁卿（御力）下文、二斗米之由所見也、被披覽（ニ）無其隱敷（ト）申、

利宗申云、件子細先度問注陳申既了、然而自寺家重同事（ヲ）令注進候（ハ）、利宗又同事（ヲ）所令陳申也、件条々内（ニ）、以永久宣旨、為宗備証文、件宣旨更非官物率法沙汰、其時国司尋国内官物未進、令切充役夫工料米之日、為遁一旦責、件庄民等暫以隱居、仍自寺家付上并長官弁令訴申之處、大仏殿修造之間、為令安堵彼庄民、可令停止件使之由、被僉議事敷、更非官物率法沙汰、委旨見宣旨狀、隨以件宣旨、彼庄民等可弁濟段別二斗之由、依成相論、次国司為重朝臣任（ニ）注子細經奏聞之日、無左右准公田率法、可徵下官物、若不承引者、慥可追却堺内之由、被下宣旨既了、於官物斗代相論（ハ）、已事切了事敷、而当寺所司等、以所涉之例、猶致对捍、凡不能左右事也、情檢案内、件庄民等、偏以寺威致对捍之間、依代々国司訴（テ）、有任（ハ）一切本免廿五町之外、可停廢件加納之由、被下宣旨、有任（ニハ）又准公田率法、可徵下官物之由、數度宣旨明白也、只可依御定事也、何況御任率法、於權門出作（ハ）停止額准米、可濟段別見米三斗之旨、被下院宣已了、守彼狀（テ）、可致沙汰之處、偏背院宣勅定、忝成对捍、凡言語道断事也、左右只仰御定（ト）申、

覺仁申云、利宗披陳之旨、雖多言、全不過前々陳狀、抑背院宣之由、利宗申条、甚以不当也、院序御下文、只限院御庄々被下知之由所見也、東大寺御領更不載彼御下文、抑院御庄々（ハ）中比（乃）建立也、有限公田也、弁濟三斗米之上、額准米糸仕等濟來之【由】田也、而止諸事可弁三斗代之由、被仰下之條、為庄家大切也、当寺御領（ハ）二斗米并額准米之外、全不勤他役、以彼御下文、何可被備当庄三斗米証文哉（ト）申、

問利宗云、所司等陳狀云、丸柱非国領事、副進証文等、

一通 永久四年停止信樂杣坊問注記并殿下政所御下文

一通 保安元年停止春日社坊弁別当下文案（状云院宣者）

一通 保延三年停止国司光房坊宣旨、載停止信樂杣修理職春日御社治部卿坊等、

一通 同四年停止平家真坊光房序宣

一通 同五年停止国役同序宣

一通 同年停止家真濫行忠盛朝臣下文

一通 天養元年目代宗広下文案

右、丸柱者、玉瀧杣之最中、偏往古寺領也、何況文書道理一々炳焉也、就中保延三年 宣旨、引載次第沙汰、其旨如鏡、件比国司光房、一旦雖致其妨、隨 宣旨状、度々成序宣、還停止国人宗（家力）真之濫惡、利宗為目代奉行年尚、今又企停廢、其理可然哉、而又去月六日被召問彼此之日、利宗申云、於杣山者、敢無異論、其内開發田為寺領之条、鞆田・湯船・玉瀧・内保・真木山等、皆是也、丸柱一処何以為国領哉、況宗広沙汰之時、即引載彼村々并丸柱等、已便補御封了、敢不可有他妨、抑傍杣々官物旧例不及二斗、丸柱一処称五斗代之由、不可說事也、以前条々付所司陳状、重以言上、相具分明証文、委可陳申子細者、大略注進、早召問彼此、可被決理非、於道理官物者、或付寺使、或給御使、可令徵催、至于利宗非論者、可蒙裁許、国司是有任限、寺家已永代事也、殊蒙決斷者、弥仰憲法耳者、件子細依実弁如何、

利宗申云、丸柱保子細、先日委令陳申了、任件状可被裁下也、寺家所進証文、具見目錄、国証文注進之、

一通 長承二年六月五日官符状云、可令停廢、

一通 保延六年八月十五日官符状云、丸柱保可停止者

一通 天養元年三月廿九日官符状云、如前、

一通 永久元年八月十一日家俊任序宣状云、遣使任見作可檢注田

島者、

一通 同任件村百姓等一色免請文

一通 同国使成貞朝臣檢注帳

一通 久安四年十二月廿二日東大寺御領鞆田村住人解状云、丸柱新立所也、以何故当村御封内可請募哉者、

寺家（二七）可為寺領之由、証文（一三）令進上敷、国衙（二七）可為国領之由、証文注進之、但寺家以彼丸柱保、可為加納之由承伏了、於今（一八）、可有御定也（一卜）申、

久安五年六月十三日

伊賀目代散位中原利宗

東大寺權上座威儀師覺仁

權上座威儀師順覺

伊賀目代散位中原利宗

東大寺權上座威儀師覺仁

權上座威儀師順覺

案主大学属中原貞親

知家事美作掾惟宗忠安

兵部録惟宗忠行

兵部録惟宗忠行

《書籍頁二二四七》

○二六六七 伊賀国目代中原利宗・東大寺僧覺仁重問注記○

東大寺文書四ノ四

又以非証文、如彼下文状（一八）、大仏殿修造之間、庄民逃隱敷、仍為令安堵（二）、暫止国司非法（一テ）、二斗米事於官底可有沙汰之由、被下知口私下文也、非宣旨非官符、全以非二斗米之証文、天治二年檢田丸帳以何（一テ）為証哉、更非国司判無目代之奉行、只庄民恣載二斗字、以之備（証脱）跡、可謂狂誕、凡背宣旨状、年來官物对捍之由、訴申之条、非普通之議、因茲在序大（二）所訴申也、寺家不進覽一紙之証文（一ス）、任度々宣下状、可被裁下也（一卜）申、覆問覺仁云、所進之証文、如利宗申者、非二斗米之証文敷、疑難頗

以有謂、無弁濟之實、經年序之條、只庄家之懈怠、如保安年中宣旨者、東大寺庄加納田可准公田率法之由、顯然也、以所涉之例、備例之條、政途不可然、件子細、慥以証文重弁申如何、

覺仁申云、天仁三年之比十三通証文被召取官畢、件子細同四年官庁勘狀(二)見(タリ)、案文追可進覽也、永保(乃)二斗米庁宣(ヲ)不可為例之由、利宗申上之條、無其謂、任彼庁宣狀(テ)、寺家于今弁二斗(タリ)、宣(是力)非証拋哉、年々結解(三)無国判無目代奉行之由難申之條、如然事寺家委不知給(ス)、時(乃)沙汰人等不知作法敷、何進謀書哉、永久(乃)宣旨(三)見米二斗准米四斗二升三合令濟由載寺解了、彼時蒙三斗之徵下(ハ)、寧不訴申其旨哉、長官弁下文依院宣被成之由、所及承也、大仏殿修造之時雖被成下、何非寺家之証文哉、修造以後于今無相違、非一旦之沙汰敷、天仁二年丸(帳脱力)之實雖無位所(トモ)、被尋搜(二)無其隱敷、依无位所何非証文哉、可弁三斗米之由、保安(二)雖被下宣旨(トモ)、于今不弁三斗米(ス)、以近來一旦之宣旨、口往年濟例不可廢也、就中(二)当庄加納田、寺領内治田也、然(ハ)依庄民開発(テ)二斗(ヲ)所弁來也、不可准定公田也、因茲代々国司不致沙汰(シテ)、所被棄置也、何今新議可出來哉(ト)申、

利宗申云、黒田庄加納非定公田之由、覺仁令言上之條、可進証文也、謀計之旨、以之御還迹可候也、如長治宣旨(ハ)、彼庄本免廿五町之外、出作公田三百餘町慥(三)遣官使(テ)可催濟所当官物(シ)、若尚不承引(ハ)、件輩可令追却堺内者、国(二)忝帶宣旨(セリ)、寺家非国領之由、同可進証文也、覺仁申詞前後相違、何以庄領(天)官物(ヲ)可弁濟国衙哉、保安・久安兩度可弁見米三斗由被下宣旨了、寺家改易宣旨(ヲ)不進覽、左右可有御定、但於二斗米者、寺家承伏(シテ)無所論、此外准米四斗二升三合(ヲ)以輕物弁來之由、寺家所躰申也、而上彼四斗二升三合(テ)、被徵下見米一斗、何可有其訴哉、国訴依有理(テ)、往今蒙官裁了、兼又寺家(乃)所承

伏之准米四斗二升三合当任五箇年之間無其弁、計積(ハ)及一万石(タリ)、彼又募何事(ヲ)不弁濟哉(ト)申、

覺仁申云、准米四斗二升三合、先例所候也、仍載解狀畢、然而此四五代之間、被止之由所承也、仍不濟也、一国相共(三)准米(乃)沙汰出來(ハ)致弁許也、但当庄加納三百余町也、一年所当千二百余石敷、五箇年相并六千余石也、何及万石之由、可令言上哉、兼又以准米四斗餘可弁見米一斗之由、利宗訴申、甚以無其謂、如元見米二斗准米四斗二升三合結解(ヲ)可造進也(ト)申、利宗申云、覺仁陳狀矯飭揭焉也、以浮言(テ)何可破代々見米三斗宣旨哉、兼又寺家所存(ノ)見米二斗・准米四斗二升三合、尚以未進巨多也、可召当任五箇年結解也、濟否無其隱敷、抑東大寺庄加納田(ハ)四百卅六町也、而三百町(三)減(シテ)相当准米(テ)、五箇年分六千余石之由令言上之條、不知子細敷、將有隱田意趣敷、三百町之外實以不可為加納(ハ)、何(レ)負田(ヲ)可被返国衙哉、早承其子細(テ)可令国領也、相計四百卅六町所当(ハ)、五箇年分及万石(タリ)、見米二斗内五箇年未進所積二千余石也、其(レ)モ存負田三百町之由、致沙汰之故敷、早任本田數(テ)可作進結解也(ト)申、

覆問覺仁云、見米二斗准米四斗二升三合、有巨多未進之由、利宗訴申、事實者所行不穩便、先於所存之所当官物者、可進究濟結解也、兼又寺領所籠之加納田四百卅余町敷、而以三百町称本數之條、理可然哉、件子細依實重弁申如何、覺仁申云、於田數并所当之濟否(ハ)、只今強不可論申、進覽結解之時、無其隱敷、但於准米(ハ)先條如弁申(シ)、存無沙汰之由、所罷過也、沙汰出來(ハ)今年以後可弁濟敷、見米二斗内、尚有未進之由、利宗申上條、實否可見結解也、若有未進(ハ)庄民懈怠也、寺家所不存也、兼又自去々年為訴長吏御沙汰、当任(乃)官物事、殊加催(テ)究濟之由、令存之処、目代利宗忽注出七百余石未進、

如無勤節、寺家(三)所存(ノ)未進(ハ)五十余石也、髓以此旨
對問之庭(二)可申決之由所候也、尤利宗(ヲ)可被問也(ト)申、
利宗申云、去々年未進七百余石髓所候也、先四百卅六石(ハ)寺家
(三)所對捍(乃)段別三斗米内一斗之積也、九十余石(ハ)輒田
村未進也、九十石三斗八升(ハ)寺家(乃)承伏之未進也、(以下五
十四字附箋)「宗広之時、輒田出作准三斗率法徵下、而勝賢不知案内、
以成下文為証、九十余石未進所注出也、次承伏九十余石者、相加築
瀬・薦生定也、」六石八斗(ハ)寺家(三)所除之鹿高・脇利田所當
也、丸柱開発七町、所當米三十五石、段別五斗、并六百五十石一斗
八升也、此外(三)寺家雖申究濟之由、依無結解(返脱力)合文、
真偽難知、早召年々結解(ヲ)官物進未(ヲ)可被落居也(ト)申、
覺仁申云、先去々年末進七百余石之由、利宗注申之条、甚以無其謂、
四百卅六石(ハ)所訴申(乃)二斗米外(乃)段別一斗增米也、非
承伏之未進、何況四百卅六町目録田無実也、玉瀧内五箇村田五十
余町(ハ)不及官物二斗(ス)、不可入田數、非加納之故也、柘殖郷
未進九十余石内五十石(ハ)先注進(スル)四百卅石内(ニ)入畢、
殘未進四十石敷、鹿高・脇田所當六石八斗(ハ)黒田本庄内也、被
返公田之後、可有左右也、次(三)丸柱保田所當三十五石(ハ)極
無道也、田數五町也、所當御封七石八斗也、(段別一斗四升定)惣准
平民之公田被宛五斗代之条、未知其理、又庄未進九十石内、別結解
村々卅六石也、定未進五十余石也、都合未進九十余石也(黒田五十
石、柘殖四十石)七百石未進之由、被言上之条、可謂無実、於年々
結解(ハ)庄官相共相具結解可進覽也(ト)申、
利宗申云、覺仁申狀一々無証拠、不出對一紙証文、暗結構諸謀計(テ)、
以詞申散用、對問之日(ハ)申田數狭少之由、可有檢注之由、申下
宣旨之時(ハ)、寄事於左右、于今不遂其沙汰、然者只任寺家請文定
田數(テ)、官物率法(ヲ)所徵下也、覺仁浮花之陳狀、何有御信用
哉、利宗為或捧 宣旨、或以寺家請文、備証文言上子細、妙詞誰(レ

ハ)、文書(三)不替云々、左右可有御定也、所詮(ハ)東大寺庄領
本免廿五町外、於加納田(ハ)可准公田率法之由、數代宣旨明鏡也、
平民公田(ハ)田(段力)別(三)五斗(ヲ)所濟也、可准公田(ハ)
段別五斗、令徵下(三)有何難哉、然而准院御庄例(テ)、段別三斗
見米(ヲ)可濟之由、當任(三)申下 宣旨了、對捍三斗之条、語
言道斷事也、利宗籌申旨、只此一事也(ト)申、
覺仁申云、當庄公文下司等、或郷司或公民也、仍相具結解(テ)可
參仕之由、雖令下知、恐國衙(テ)所不參也、然而依重召、今明所
參仕也、於田數(ハ)請國檢田(テ)以彼田文致沙汰(ス)、殆不可
有相論、當御任(三)宗広沙汰之時、或行檢田、或行利田、定田數
畢、而利宗之時、尚可檢注之由、雖申行(トモ)、恐苛法(テ)所退
申也、遣清簾使(ヲ)被檢注(ハ)、不可訴申(ス)、官物(モ)隨
堪(テ)雖弁濟、每物(三)減納之間、尚以其未進候敷、任先例有
其沙汰(ハ)、何有巨多之未進哉、自余事等先条弁申畢、可有御還迹
也(ト)申、
利宗申云、當任之始、宗広檢注国内之日、東(大脱)寺庄寄事於左
右、不令遂檢注、經五箇年之後、今申此由、似無証拠、雖出利田請
文、又以不弁其所當(ス)、実否結解狀(三)顯然敷、五箇年之間一
度結解(ヲ)不進(ス)、謀計之旨、以之可有還迹也、申請清簾使之
条尤可然也(ト)申、
問利宗云、覺仁言上云、丸柱者本願勅施入之地、全非他領、永久年
中依信樂杣相論出来、下遣家司有季對決彼此之庭、寺領有理之由、
裁免畢、又一兩国司一旦雖致妨、任道理去与寺家畢、保延三年左少
弁為国司之時、差遣国人家真、擬国領之處、寺家經奏聞、即被下 宣
旨永被停止了、次第沙汰見宣旨狀、而利宗忽致停廢、以外事也者、
子細依実弁申如何、(以下八字附箋)「宣旨正文可隨召之」
利宗申云、件丸柱保田(ハ)更非勅施入、覺仁申狀每事無道也、件
保田如伝承(ハ)、天仁年中之比、覺仁本師始申立別府(テ)令開發

云々、然間永久国司家俊之任（二）切宛雜事致荷責之日、彼保住人等被免国役（テ）、一色（二）五斗官物可弁濟之由、所進請文也、家俊庁宣并住人等請文正文進覽之、天仁之比、以開発之由、所司等忝称官省符之地、進解状之条、殆可謂奏事不実、近則以彼保（テ）称寺領（テ）对捍国事、依遁避官物、長久三年六月五日停止東大寺妨、可為国領之由、被下 宣旨了、保延六年八月十五日官符子細同前、也、天養元年三月廿九日官符子細同前、謂官省符新建（二）、又寺家証文明白也、一通（ハ）東大寺庄頼田村百姓申文、一通（ハ）同寺公文所下文、二通件村（ヲ）寺主勝殿擬押取度々書状也、以如此之証文可為国領之由、所令論申也、兼又覺仁所進昌泰以後官符、全以非丸柱証文、是依為天仁以後之開発也、抑信樂与玉瀧杣材木相論事、□全不可引此証驗、於杣（ハ）無論（キ）寺領杣也、国衙不致相論、以開発之田、所称国領也、保民請文顯然也、不可及一口論也（ト）申、

問覺仁云、如度々宣旨并保民請文者、丸柱保国領之由、顯然也、件子細依実弁申如何、

覺仁申云、件丸柱村（ハ）玉瀧杣中心也、件杣（ハ）勅施入之杣也、其内開発田豈非寺領哉、其旨天養以後証文巨多也、近則去保安四年比国司与寺家（ト）玉瀧杣有相論之日、召

寺家証文（テ）被下法家、被勘決四至了、文書之子細見彼状（タリ）、次（二）開発之後、朱雀治部卿大納言得住人放券、出寺家（手）、為領主知行彼保、令勤仕寺役給、信案庄論（ノ）日、丸柱非寺領（ハ）、何故（二）申請御使、可決理非哉、依同論（テ）被下宣旨、下遣官使景国（テ）檢注地頭、為寺領之由、令勘申畢、天永之比彼保田作人等、俄背寺家（テ）寄進春日御社之日、經院奏之处、可停止社妨

之由、被宣下了、其後大殿下政所下文二箇度成下了、如此度々經沙汰（テ）落居寺領畢、而保延之比少弁任（二）、始致国衙之妨、同經奏聞（テ）可停止件論之由、被下宣旨了、隨二箇度被成進庁宣了、

彼時目代即利宗也、其後于今無其妨、而当御任始（二）、宗広申云、此保代々称有沙汰、可国領之由、令下知之日、寺家捧上件証文（テ）訴申之日、被仰下了、国衙寺家共証文巨多也、暫不可決断、尋披文書之理非之間、准加納田（テ）、可便補当寺御封之由、宗広成給下文畢、尚以懷訴之处、利宗偏可停廢之由、令言上之条、言語道断事也、国衙所進代々宣旨（ハ）新司拜任之時、載豊守所申請也、然而必（モ）依彼宣旨（テ）寺領（ヲ）無被停廢事、於作人請文（ハ）、寺家（二）（モ）所候也、国領（二モ）蒙苛責之日、為遁當時之責（二）、所出請文歟、自余文一々非証文（ト）申、

利宗申云、寺家所進文書玉瀧杣之証文也、於杣（ハ）自国衙全不及相論、尤以無益之証文也、件保田事、如在庁官人申伝（ハ）、覺仁本師殿慶之時、相語国司家俊（テ）、一旦構別府称寺領云々、隨庁宣并作人請文顯然也、倩案事情、当寺領本免廿五町之外、於加納田（ハ）准公田率法（テ）、官物可徴下、若有对捍之輩（ハ）、可追却堺内之由、致度々宣旨明白也、然（ハ）雖為年来加納（トモ）、令停廢（二）国司御進止也、何況今始有有限公田（ヲ）於押入（ハ）、准公田（テ）徴下（ノ）官物、有何訴哉（ト）申、

覆問覺仁云、於玉瀧杣者為寺領之由、証文炳焉也、至于丸柱保田者、為寺領本免廿五町外之由、利宗言上、如数度宣旨者、被保田縱雖為往古加納田、准公田徴下官物、不可為非擲、何況如作人等永久請文者、為開発田歟、但彼保田誠為本田廿五町内者、何寺家□（令力）和議、可請募御封内哉、一々謂為彼国領之旨、似無所遁申、件子細依実弁申如何、

覺仁申云、如利宗申状（ハ）、於玉瀧杣（ハ）往古寺領也、国衙不相論云々、其議（二）候（ハ）、件丸柱村田（ハ）彼杣最中也、豈非寺領哉、隨杣内（ノ）村々（ノ）開発田也、隨開出（テ）皆以寺領也、丸柱（乃）田（ノ）開発以後証文所候也、追可進覽也、偏杣山証文（二）不限（ス）、一々状被披覽（二）無其隱歟、利宗所申之本免廿

五町外、於加納田（ハ）可准公田之由（ノ）宣旨（ハ）、黒田庄斗代相論之間文書也、非当庄証文（ス）、次（二）巖慶相語家俊（テ）構立保之由申条、巖慶寺務之間、依為寺領致沙汰事敷、縱雖成語、何有過失哉、況件比彼村領主治部卿也、更巖慶一日（モ）不領知、在庁等僻事伝申敷、凡寺家所存申（ハ）官省符之地也、如宗広裁定、准加納田（テ）便補御封了、而利宗偏可返公田之由申条、別（乃）意趣也、為寺領内之条、被実檢（ニ）无其隱敷（ト）申、

利宗申云、覚仁陳狀每事謀計也、於黒田庄（ハ）本免廿五町被下宣旨（テ）被免除了、於玉瀧庄領（ハ）不被免本田（ス）、併以所当官物（テ）便補彼寺御封（ス）、寺家承諾經数代了、何非公田之由、可争申哉、

（以下附箋）「利宗申云、玉瀧杣者往古寺領也、丸柱者公田也者、覚仁申云、杣為寺領者、其内丸柱、何非寺領哉、而忠行事宜所書載也、」

172、《書籍頁一二五四》

〇二六七〇 東寺長者御教書案〇高野山文書又統宝簡集百二去廿五日播磨守（平忠盛）大塔可造進之由、被仰下了、只今院宣如此、被尋仰事等、能々相尋、可被注申、差專使、今明内可被念申也、日時勘文、公家若院御沙汰旨分明覚人不候、如何、院司国司下向之条者、无隱敷、件事等、殊可被尋申之、少別当巖深有相障事、暫不可下向、来月三日先可遣目代也、金堂材木可令念採、年来召仕大工為末、物上手也、今度可令造、為出材木支度、欲令下向之処、又今明此寺作事相障、仍於京可出支度之由所申也、然者堂（能）間数、間々丈尺、母屋庇柱寸法同長、慥可被注送、人々僉議、委可被注上也、又如然旧記侍者、可被上也、御消息旨如此、謹言、

（久安五年）六月廿八日
謹々上 檢校阿闍梨（行惠）御房

僧在舜（奉）

173、《書籍頁一二五五》

〇二六七四 度会行末治田売券〇光明寺古文書
謹辭 定永地沽渡治田立券文事

合佰捌拾歩 在二見郷字浜浦者

四至（限東大内人光時領 限南松原／限西内人常房領 限北松原）
直六丈絹壹疋、請了、（花押）

右件治田、從宮掌内人庭近并妻女房兩人之手、買得進退領掌□以降無他妨、而依有要用、限件直絹、永□沽度於豐受太神宮御巫内人光永如件、但於本券者、相交於雜文書之中、不撰出、若後日□来（良／々（者力））、可尋渡也、仍為後代注子細、立券文、以辭、

久安五年八月六日 度会行末（花押）

174、《書籍頁一二六三》

〇二六九一 法橋良□等書狀〇京都大学所藏兵範記久安六年八月卷裏文書

師世朝臣書狀令進覽候之処、明日御春日詣御沙汰之間、妄不御覽、但件事前々皆被仰了、隨師元子細能□事なれ者、其旨定伝覽敷所候也、仍書狀并日記等遣□之、謹言、

三月廿九日 法橋良□

175、《書籍頁一二六四》

〇二六九三 法印某書狀〇京都大学所藏兵範記仁平二年夏卷裏文書

宗利解狀証文案令返進候、正文（ハ）經御覽哉如何、慈德寺陳狀進上之、件処為往古寺領之由、□不諍申、隨則垣内者、凡不可及沙汰敷、得御意可令申上給、

於經成沙汰者、別訴也、隨又經成も今度（ハ）宗利□不可及沙汰之

由、申放候、仍於其解状沙汰者、追可令申之由、寺家所申也、恐々謹言、

四月十四日

法印(花押)

謹々上 甲斐判官代殿

176、《書籍頁二二六五》

〇二七〇〇 藤原氏女家地券紛失状案〇大徳寺文書

立申 紛失状事

合

壱所(六角西洞院面西類、六角面南類、自良角、東西拾七丈、南

北拾丈、)

壱所上野西(限東河 限南宮林/限西小堀 限北小堀)

壱所四条町切革坐棚、自南二番三番也、

右、件敷地并棚等者、藤原氏女相伝之私領、代々無相違地也、爰去

二月九日夜、自六角町至錦少路東西南北三十余町炎上之時、氏女宿

所為火本、結句倉内(仁)火入(天)、材宝重書等悉令紛失畢、其段

在地無隱之間、為後証立紛失状、在地人之所申請証判之状、如件、

久安六年四月八日

藤原氏女所被申、無子細上者、所加証判也(次第不同)

平信守(判)

中原光元(判)

沙弥西道(判)

伊勢守兼久(判)

左衛門尉氏員(判)

兵衛二郎国俊(判)

沙弥道智(判)

出雲房(判)

彦二郎(判)

虎菊丸(判)

僧昌賢(判)

志貴内檢坪付久安目六案文

注進(田參町肆段佰肆拾步、丹付/畠拾七町肆段拾步内、除畠式町

壱段佰參拾步、定畠拾五町式段大、勘合如件、丹付破損、)

志貴御厨田畠内檢坪事(使丹付/少司大(中)臣在判丹付)

合 赤坂東ハナワテ、南ハ大道ヲ限、西ハ□□限、北ハ神田宮

林限、

四条西里外

三坪河 四坪(河) 十四坪(四反小作今年置破 畠六反片作)

廿一坪(河) 廿二坪(田一反 畠七反) 廿三坪九反内(田四

反十步 畠四反小) 廿四坪(田大今畠成畠一反三百步) 廿五

坪畠九段小 廿六坪(田二反 畠七反) 廿七坪九反内(田一反

半畠五反半 荒畠二反) 廿四坪八段内(田二反丹生人給 田二

反半畠一反半) 廿五坪畠二反 廿六坪畠八反

同条一速田里

一坪(田一反半 畠一反半) 二坪(田一反三百步 畠半殘可尋)

七坪(田五反) 十二坪(畠四反小) 十三坪(畠五反半) 十

四坪(畠一反於二百六十步者追可尋) 十八坪(畠大殘荒并河)

廿三坪(畠五反於四反者追可尋) 廿四坪(畠六反) 廿五坪(畠

五反小) 卅五坪(田一反畠六反大) 廿六坪(田小畠半)

二贄田里

六坪(河) 七坪(四反半 郡作可尋) 八坪(田九十步荒畠二

反二百廿步年荒) 十六坪(田七反号笠服注輪 郡司作) 十八

坪(田一反 郡司作)

五条西里外

廿一坪(河) 廿二坪(河) 廿七坪(田大内六十步見作殘可尋

畠二反内一反見作殘荒) 廿九坪(田三百步畠四反三百步殘荒)

卅坪(畠七反半内見作四反殘片作) 卅一坪(百帳畠一町二反内

一丁二反無坪内) 廿(卅力)二坪(畠四反大) 卅三坪(田五

177、《書籍頁二二七一》

〇二七一 伊勢国志貴厨内檢帳案〇大宮司文書

反内見作一反残今年曳 卅四坪畠 (二反荒)

五条河原里

一坪 (河) 六坪 (田大残河) 七坪 (畠一反半於田三百步者可

尋) 十八坪 (田六十步畠一反小) 十九坪 (畠一反半) 廿一

坪 (田一反半 畠一反半) 廿九坪 (畠五反残可尋) 卅坪 (田

一反半 畠七反半) 卅一坪 (田二反六十步 畠五反)

同条二磨里

廿八坪 (畠一反九十步 号原中興輪) 廿九坪 (畠二反号勸音寺論)

七開見里

廿八坪 (田一反 畠四反六十步) 廿九坪 (畠九反四十步)

六条六佐佐里

十五坪田二反

中言寺別当職之年貢、任高橋橋例、十九貫五百無相 違間知行、

賀波池之上四丈一河之内

根藏字キヌマチ一町志貴御厨領之内シウツ (清水) 橋爪式反内御

厨之内

右、件内検帳、任御下文旨、大略注進如件、

久安六年十月廿二日

保宗 (花押影)

別当伴弘行 (花押影)

近正 (花押影)

少司大 (中脱) 臣 (花押影)

178、《書籍頁二二七五》

〇二七一五 佐伯佐長讓狀〇勝尾寺文書

(端裏)「菩提寺別当権別当讓狀并出雲権守証判狀」

ゆつりたてまつるほたいしのす行、ならひにへたう、こんへたうの
事、くたんのてらは、佐長せそさうてにす行し、へたう、こんへた

うも、さたしてすくるてらなり、佐長こなくして、こたいかくのか
み佐光のこをうまれたる、すなはち、とりてこにして、たしかなの
うちをはととし、佐長をちとして、よのすゑに、かのたかしなの
うち、ならひに佐長さたせられうすれは、せしとのに、なかくへた
うしきも、こんへたうの□□□ (しきも力) す行して、くたんのせ
しとのゆつられて、人よのすゑ、さたすへし、されハ、くたんの
せしとのろくさんまいも、ことそうとんも、そのおゝせのまゝにさ
たすへし、又そのしきちの田畠、ならひに、すくのむらのほたいし
の畠、みなくうして、ちしのむき、たんへちにいとせう、まめ・
あつきいと一升、としことに、むき・まめ・あつき、はなせはちし
なさす、ちせうとん、かの畠はあけとりて、われつくりて、ちし
をもんてハ、あふらかゐてす、正二月のおこなゑ、又まいやのたう
みつのみあかし、けたいすへからす、さたさふらふへし、あなかし
こく、みたうすりのときは、むらの人々さにつくはかりの人々、
せんれいのことく、すりすへし、もしけたいせむ人は、さいちにあ
らすまし、

久安六年十二月廿三日しきし

こんのけう佐伯 (花押)

へたう 佐伯 (花押)

所しう 藤原 (花押)

そうけけう散位藤原 (花押)

「件菩提寺別当執行并寺領田畠等、馬大夫佐長朝臣為先祖相伝、次
第無相違、所進退領掌来也、而今任相伝、皆悉被奉讓渡大学禅師光
覚之旨、具具于讓狀、其上猶重佐長朝臣、以詞任讓狀、永一事、不
可令相違、尤為証人之由、慥依被請談、加愚判、不可有牢籠之状、
如件、

仁平二年八月廿八日出雲権守源朝臣 (花押)」

179、《書籍頁二二七六》

〇二七二七 橘清秀田地処分狀〇東大寺文書四ノ七十七

処分 相伝私領田事 (裏書)「大仏殿御油料奉寄進」

合考段者(字小五三昧野内)

四至(限東持法房領 限南同人領/限西アセ 限北教語房領)

右件水田者、橘清秀相伝私領也、代々相伝領掌年尚、而依為嫡女、

橘姉子(仁)限永代所譲与也、向後更不可有異論、但雖可相副本券

等、依有類地、彼本券等之裏(仁)毀畢、仍為後代証文、所処分渡之狀如件、

久安七年正月廿九日

橘清秀(花押)

同嫡男(花押)

同次男(花押)

180、《書籍頁二二七九》

〇二七二五 小槻某田畠付属狀〇東寺百合文書ぬ

(端裏)「乘蓮所帶証文案」

付属 丹生二郎殿田畠事

合(丹生村 太良保二ヶ所 鞍内浦等)

右、付属元者、上件上桑田畠等者、丹生二郎殿譜代之私領也、然而

二郎殿逝去後、古東殿平時信呼合仰合狀云、件田畠者、二郎嫡男為

子不渡、定子孫々彼嫡男、可付属議定畢、仍件嫡男生母并平時信先

年之(令力)付属已畢、然而又件嫡子死去、又尋求彼人之骨内(肉

力)非無嫡子、仍丹生若丸次第相伝文書相副(天)、付属已畢、更不

可有牢籠狀、如件、

仁平元年三月 日

祖母小槻(在判)

繼祖父平(在判)

181、《書籍頁二二八〇》

〇二七二八 平実綱書狀〇京都大学所蔵兵範記仁平二年夏卷裏文書

候哉、抑如先々言上候、不限当御庄、惣國中枯候(天)百姓皆餓死仕、生殘者他処仕(天)候(ハ)、定今年(ハ)御年貢闕候覽、而先定使元宗召問御座(天)米佃未進尋御、可下御未進之輩御佃種子、為令当候也、又御罷野詣御下向雜事伝馬等返抄二枚、進上之、恐々謹言、

仁平元年卯月八日

平実綱(上)

182、《書籍頁二二九二》

〇二七五四 神戸司牒案〇興福寺本信円筆因明四相違裏文書

神戸司牒 名張郡司(衙)

来牒壹紙(被注載下津田原住人包友盜馬実否子細狀)

牒、件馬事、度々自江新大夫之許、依告送給、包友召問之處、陳申之旨、以去久安六年四月七日、大和国宇南殿(と)申庄住人從字六郎別当之手、仁毛母馬限色々直物、買得之後、以去々年七月名張郡住人恒久馬相替畢、今春俄件馬盜馬之由承、然則壳買事、在地近辺人々見聞候哉申(天)、包友立日記、請備在地証署、子細申文書副(天)、以去六日僧都御房(急)所参□(訴力)仕敷、定御沙汰候哉、乞也、衙牒到察狀、以返牒、

仁平二年三月十八日

神戸公文平清道

惣刀禰酒見弘貞

郷長散位物部家友

追捕使馬工宗俊

神戸司馬工祐俊

183、《書籍頁二二九二》 *裏書のみ

〇二七五五 僧範義家地讓狀〇百卷本東大寺文書十七号

讓渡家地事

合玖間者（字今小路「東武間半瑠璃殿方渡了、」）

右、件於家地、年来子共母尼智妙、本公驗相副、永所渡讓了、於自今已後、尼智妙意也、仍讓狀如件、

仁平二年三月廿日 僧「範義」

（花押）

（裏書）「北伍間之内十壹丈壹尺六寸（ハ）、藤原女子二人分ハ上座頼円沽却、之内於東肆間者、僧永金壳渡畢、」

184、《書籍頁二三〇三》

〇二七八一 平宗継家資財等讓狀○蒲生文書

讓渡 先祖私領所職并資財雜具事

合住屋一字□□（付資財物等）

麻生庄公文職 男女下人等

右、住宅同敷地当庄公文職者、平宗継相伝之私領也、雖然伏病床及命終之期、嫡子平宗家（仁）所讓渡也、任先例、御公事敢以不可難渋、為全永代知行、讓狀如件、

仁平三年三月二日 平宗継（花押）

185、《書籍頁二三三二》

〇二七八九 公侯若末塩田処分状案○光明寺古文書

（端裏）「二見御塩田」

処分治田百八十歩事

在二見郷内字御塩田六段半内東方式半

次壹段之東方者

右、件治田元者、故棚揃官長御後見故花松内人之手（より）買得之後、進退領知之程、更無他妨、而當時妻伊勢氏永処分如件、仍相副手次文書、為後代文契、以辞、

仁平三年十月十二日 公侯若末（在判）

件小財物処分明白也、依雇貸筆僧（在判）

186、《書籍頁二三三二》

〇二七九〇 板（坂）上氏家地売券○東寺百合文書ツ

（端裏）「しをのこうちおおみや□□からち」

売渡 私領地売所事

合老戸主（東西式丈伍尺壹寸／南北拾玖丈捌尺）

右件地、元者伊豆講師円賢私領也、而依為後家、所伝領板（坂）上氏也、依有要用、限直能米佰參拾斛（八合斗定）永所相伝藤原盛経也、仍相具調度之文書等、所渡与也、為後日沙汰、新券如件、

仁平三年十月 日 板（坂）上氏

たしかにうりわたしつ、のちのさまたけあるへからず、

187、《書籍頁二三三三》

〇二七九二 いつみか家地売券案○白河本東寺百合文書四十八

ちゝのてより、たまはりたるた、ふたへぬし、ようにしたかひて、のりきよに、うりわたす、乃米四石五斗（本斗定）のちのさたのため、しるしわたすところ、くたんのことし、

いつみか（在判）

ほうもそをわたすとゆへとも、しるす（し力）てとらす（在判）

仁平三年十二月十九日 僧（在判）

188、《書籍頁二三三三》

〇二七九三 常茂書状○東大寺文書四ノ三

殿下并僧正御房更々くはしく不可御坐、只被打損官人（と）

沙汰者、難堪候事歟、近代公边事皆以如此、不可驚候、

去廿五日為黒田庄出作人、官使被打損之由、自国夜前所令申上候也、

若如此事、自春時雖令申置御、一切無御沙汰之事出候了、此儀（に）候（ハ）、本日事吉様（ニ）不令申御（シテ）、只大衆（なとに）事寄（天）御坐（ハ）吉候なん、不知理非止三斗代、於二斗代者、可令究濟□（と）、令申御由、為御使依被仰、以其趣令申候了後、始終無仰沙汰者、小童の為御房官故、為□（其力）さしもなき事を吉様（に）申成（テ）、何様（に）罷成候に□□（たる力）返々不可申尽候、官使二人加連判、所令進解状也、於今者、僧正御房（に）是非左右不可令申候、極悲思給候故也、何方（ニ）も可吉様計申候とぞ思給候に、還惡事罷成候条、可然事候、不違者、於事如此候敷、如此令申候も、無益にハ候やらん、本日令知給申たれば、令聞食給候覽、諸期見參候、謹言、

東上御房
（仁平三年）十二月廿九日 常茂

189、《書籍頁二三三八》

〇二八二六 藤原教子讓状案〇東寺百合文書ヨ

〈教子讓状〉

上かつらのしやうハ、こみやの御かたよりゆつり給へる所にて、かたしけなく候へは、かの御けうやうのために、ない大しんあさりの房せいけんに、なかくまいらせ候、いろくの御仏をこなはせ給へく候、あなかしこ、

きうす二ねん十二月廿日 判

190、《書籍頁二三四二》

〇二八三七 讚岐国善通寺曼茶羅寺所司解〇東寺百合文書め

「可依前例之、

目代―（花押）―

善通曼茶（羅脱）両寺司等解 申請 留守所裁事

請被殊任 前例裁定給、仏寺事料物難堪子細愁之状、右件仏寺事料物等、於一円不被補（之）時者、寺領夏秋時、以檢注地子物令勤仕之、而被一円之後者、彼以起請田官物之内、令勤仕之来処（ニ）、被散在之間、无其沙汰之条、尤似絶仏威之、爰留一円被散在者、如本彼留記取（帳）顯然也、件以地子物、欲令勤仕之、倩案寺社者是雖有增加之例、令无改威之法之乎、望請仏恩、任前例被裁免者、仰 寺威知正嚴之貴旨、弥奉祈 国吏安穩、国内興福之由、仍為蒙裁定、勒在状子細言上如件、以解、

久寿三年五月廿一日 所司等

191、《書籍頁二三四七》

〇二八四四 大乘院領三箇莊下司僧源秀申状〇興福寺本信円

筆因明四相違裏文書

注進 大乘院御領三个御庄下司僧源秀言上事

右六月廿日、於不知国司在庁官人等、私（ニ）源秀之母并兄男妻子四人（ヲ）擲取、庁底打鎖付繩、責堪之条、不当之事也、此不他事、偏法印御房御下文（ニ）、如元御庄可立之申聞之、所張行也、已以住宅追捕明白也、付中件母（ハ）生年八十女也、若 御沙汰有遅々者、定母（ハ）耄毛（老力）之身也、責致之比、早入御心御（天）、早々可御沙汰候也、且預 御下文一紙、且 御使相具罷下、女等可免除之状、如件、

保元々年六月 日 僧源秀

192、《書籍頁二三四八》

〇二八四七 藤原忠通書状案〇天理図書館所蔵文書

御庄々

大嶋（越後国）

塩飽（讚岐国）

巨倉（山城国）

武義（美乃国）

小倉（山城国） 山上（美乃国）

志貴（参川国） 吉田（美乃国）

紙屋（越後国） 真水（巨倉内）

泉殿（小巨倉内） 五条殿（巨倉内）

保元元年七月 日

〔法性寺殿御自筆御返事案〕

宣旨此午時許入滅由、所承候也、甚可憐々々、世間無常、不始今候事歟、

抑处分播磨所々不可相違之由、皆存候也、何況有此仰哉、但其所々、忽不覚悟乎、可注給目錄候也、下文（なとも）可成献候歟、可被委仰下候、以此旨可被洩申、謹言、

193、《書籍頁二三四九》

〇二八四八 後白河天皇宣命案〇石清水文書

天皇（我）詔旨（止）、掛畏（岐）石清水（爾）御坐（世／留）八幡大菩薩（乃）（広前爾脱力）恐（美）恐（美／毛）申賜（波久／止）申、前左大臣藤原頼長朝臣、偏巧暴悪（美）、妄凶逆節（弓）、太上天皇（崇徳）（乎）奏（奉力）勸（弓）、天下（乎）擾乱（志）、国家（乎）謀危之由、云云之説、嗽々多端（志）、然間去七月九日夜、太上天皇偷出城南之離宮（弓）、忽幸洛東之旧院（弓）、占戰場於其処（女）、結軍陣於其中（弓）、頼長朝臣（度）成狼戾之群（弓）、企鼻悪之謀、因茲（弓）同十一日、為禦凶徒（爾）差遣官軍（須）、而依宗廟之鎮護（利）、蒙社稷之冥助（弓）、謀反之輩、即以退散（志奴）、頼長朝臣（波）中流矢（弓）終其命（爾／岐）、是則神之所誅（奈／利）、寔非人之所為（須）、廿三日（爾）太上天皇（乎波）讚岐国（爾）奉遷送（留）、其外党類、或仰刑官（弓）召捕（倍）、或帰王化（志弓）来服（須）、即令明法博士等勘申所当罪名（爾）、抛無首徒（従力）律、各可処斬刑之由（乎）奏（世利）、然而殊（仁）有所念、右

近衛大将藤原兼長朝臣以下十三人（乎波）、一等滅（弓）遠流罪（爾）

治賜（布）、合戦之輩、散位平朝臣忠貞以下二十人（乎／波）、考古

跡於弘仁（倍）、訪時議於群卿（弓）、且法律（能）任（爾）処斬罪

（世利）、夫法令馭俗之始（奈利）、刑罰（波）懲惡之基（奈利）、若

寄重（爾）依（弓）優（志）、職高（加）為（爾）有（波）、中夏（乎

／毛）難治（久）、後昆（乎毛）巨懲（加良／牟）、是為眇身（爾）

不行（須）、唯国家（爾）無私（良牟止／奈利）、即可告申此由之処

（爾）、依憚穢氣（弓）、于今延念（世利）、故是以吉日良辰（乎）撰

定（弓）、參議從三位源朝臣師仲・散位從五位下源朝臣經時等（乎）

差使（弓）、礼代（乃）大幣（乎）令捧持奉出賜（布）、掛畏（岐）

大菩薩、此等状（乎）平（久）安（久）聞食（弓）、干戈永戢（利）、

玉燭克調（弓）、放馬於華山之陽（比）、反俗於栗陸之昔（志弓）、天

皇朝廷（乎）實位無動（久）、常磐堅磐（爾）、夜守日守護幸（倍）

奉賜（倍／止）、恐（美）恐（美／毛）申賜（波久／止）申、

保元元年潤九月八日

大内記藤原信重作

194、《書籍頁二三五二》

〇二八五四 播磨守平清盛書状〇興福寺別当次第裏文書

星田庄解状成外題進上之、於件郷者、故院御時御沙汰候□□御牧内（にハ）不候也、然而宿直人之由書載之候者、加署判所□□（令充）行也、所勞之間、他事不具、謹言、

（保元元年）十月十三日 播磨守清□（盛）

195、《書籍頁二三五二》

〇二八五五 豊前国八幡宇佐宮御装束所檢校大神貞安解〇小

山田文書

「件田畠任証文之理、可領知、

(花押) (宇佐公通)

御装束所正檢校大神貞安解 申請 □□事

請被殊任先祖相伝并父末貞伯父小山田祝故弘永讓狀、賜御裁判、

為貫首国門、従大工友成手、称買得由、無指故押領先祖相伝田

畠子細狀、

在向野郷内

字神巫田二段 畠一段 (字大木垣)

副進 讓狀

右、謹檢案内、於件田畠者、貞安父末貞伯父小山田宮前祝故弘永先祖相伝之所領田也、而以去康和五年二月四日彼祝職并件田畠等、從弘永之手讓得、年来無他妨領知之処、彼国門無指故所押領也、加之当御任(ヨリ)貞安(加)所罷給之葛原郷松延預御用作并上毛郡秋弘預御佃等(ハ)、御上洛之御共称令参仕之由、七郎大宮司殿成阿党、改定他人了、又国門(ハ)七郎大宮司殿為方人(天)、現奇恠不善(天)、当御任之御官不勤仕之人也者、貞安成此訴(仁)何不蒙御裁報哉、望請 官裁、任相伝并弘永讓狀旨、為賜御裁判、注子細言上如件、以解、

保元元年十月廿七日御装束所檢校大神貞安

196、《書籍頁二三五六》

○二八六二 藤原氏女家地店棚讓狀案○大徳寺文書

「丁一六六」

ゆつりわたすしりやうの地ならひ(ニ)たなの事

合地二ヶ所 たな二ヶ所 巨細者見本券

右件しき地たなハ、藤原氏女さうてんの地也、しかるを、手つきせうもんをあいそへて、あこ女にゆつりわたす所しちなり、さらしたのさまたけあるへからす候、よてゆつり狀如件、

保元元年十二月三日 藤原氏女(判)

197、《書籍頁二三六一》

○二八七〇 書狀添狀○武雄神社文書

上大夫国守(か)千疋物(を)取(天)公驗還(志)やる消息申也、

保【延】元二年二月十日

198、《書籍頁二三六三》

○二八七三 平某書狀○東大寺文書四ノ八(二八七二号紙背)

其後不令申候之間、不審思給候、とりつき可(令)申候、旁々差相大事共候(天)、不申案内候、抑黒田御庄之事、何様(か)罷成候、不審思給候、いかさまにても、吉さまのことを承候は、や、又いかてか見参可仕候、恐々謹言、

二月十七日 平(花押)

199、《書籍頁二三八六》

○二九〇九 伊賀国在庁官人等解案○東大寺文書四ノ六

伊賀国在庁官人等

言上 東大寺領北柚出作字湯船・玉瀧両村子細狀

右、在庁官人等、謹檢案内、件出作当国目代利宗沙汰之時、有此沙汰(テ)寺家使(并)国使相共令檢注処、公田其数出来畢、件檢田帳于今顯然、何重可被檢注之由、自寺家可被訴申哉、無道至、以之可有御遺迹、彼檢注之時、不相具寺家使(シテ)、国使許令檢注者成疑殆、尤重可有檢注由、可申請也、彼時寺家使相共檢注畢(テ)、檢注目録(ニ)寺家使加署判畢、而寺家別当(ト)申、預所(ト)云、皆以依為新沙汰人、猥寄事於左右、為不弁官物、令訴申事也、但猶可被檢注之由令申者、早給寺家使、相共今明可檢注候、彼所之習定(テ)如此令申(テ)、過一收納(ヲ)以其(ヲ)為例、不弁官物由所申也、去今年類(頻力)以訴申是也、抑近代如此事、旁如年来無

御沙汰者、以何任式数济物可弁得哉、縦年来無沙汰之所(ト)申(ト)申(ト)モ、尤以可有御沙汰也、不然者、又任旧(タル)济物可被沙汰減也、件村百姓者、皆以有限官物、欲弁济処、沙汰人抑留テ被訴申之条、言語不及事也、仍勒状、以解、

保元二年十月 日 惣大判官代桃原貞弘

散 位惟宗朝臣兼仲
散 位源 朝臣仲元
散 位大江朝臣盛国
散 位平 朝臣祐良
散 位惟宗朝臣国久
散 位源 朝臣行俊
散 位源 朝臣元兼

200、《書籍頁二三八八》

〇二九一一 清原氏田地売券〇勝尾寺文書

(端裏)「渡瀬券忠能一和尚後家売券也、」

謹辞 売渡進新立券文事

(花押) (清原氏)

合老段百歩者、定陸拾歩也、

在嶋下郡中条粟生村十二条一里十一坪東畔本也

四至 (限東畔繩手 限南溝/限西畔道 限北川也)

右件田者、小犬先祖相伝所領田也、而惣持寺三昧供田御地子米依不弁進、限永年出給也、一和上忠能得分參石伍斗代きふしあたる所也、但後家清原氏所分(二)所給也、而貞利殿(三)限永年、所売進也、本券文く(と?)して進畢状、以解、

保元二年十一月十六日 売人清原氏(花押)

201、《書籍頁二三八八》

〇二九一四 某ゆつり状〇尊経閣所蔵文書

(端裏)「少納言のつほねにたしかにくたてまつる」

てつからふてをとらぬによりて、あは殿にかゝせたまつるなり、

たかのてらしきち、本くえん小納言のつほねにゆつりわたしてき、それに殿にさふらはせ給しほとに、三ゐのきみの、ねむころにわたらひて、しにのあつかゐをもしたてまつらむ、いみにもこもらむといひて、をのくちのしのはし一たんはかりゆるしたへ、たうをたて、ほうもんをあんちして、御はうのちのよをとふらひまいらせむといひしかは、さたにまいらせられはゆるしたてまつらむ、さてたかのてらにしたかゐて、所所に□□、われよりのち一さうた人にゆつるへからず、本のてらのたとゆくすえまであるへしと申たるにて、それにわか身けふはすくましくおほゆると申すをきゝて、かけていましぬ、このやうのこゝろにては、さらにくやくそくのきかなはし、又としころ七□□日を三ゐ□へらせたつるかねの本そんぬすみとりて、わかさいこにあらせまいらせさりつるこゝろうくね□□うせなむのちにもぬすめかし、返々もふ□□の事なり、わかめのまへにたにかくふてきにあたるすかしに□□しりぬ、いみにこの□あつかはんには、くたんのちまたくゆるへからず、わかまことの子ならむにてたに、これほとまうなくならむに、せうふんにあ□へからず、いさうた人なりわうこのてらちをたちすへからず、ゆるすとなりゆくこともかいひらし□□そうもんにつかゐつるほとに、身つからゆるしふみはかきつるそ、ゆめくそのふみもちあるへからず、小納言のつほねこのかきをく事たかへ給な、せんしのきみはまこゝろの人なり、わかいみにいりてあつかゐ給はゝさたりのをよはず、それもなを小納言のつほねとひとつこゝろにておはせはの事なり、ゆるしゆるさすは小納言のつほねのこゝろなり、

保元三年三月六日 (草名)

○二九一九 伊賀国在庁官人等解○百卷本東大寺文書二十九号
伊賀国在庁官人等

言上東大寺三綱等訴申玉瀧・湯船村并丸柱二箇条子細状
一玉瀧村事

副進 度度宣旨案二通

返上 寺家度度本解并証文等

右、謹檢案内、件村者是為深山之幽谷、居住之人民、以柚為所業、更不墾四至、不打榜示之所也、仍号玉瀧柚寄人、弁濟官物於国庫、所勤仕雜事於寺家也、事既為往昔之例、寄人全所不成異論也、而自中古之以降、庄園逐年充滿、国威隨日凌遲之間、自本寺号有大衆之下知、招集惡僧、帶弓箭兵杖、為令所澁有限之官物、所擬令凌礫国衙使也、因茲去天養元年之比、注子細經 奏聞之處、幸被下 宣旨、以官使雖被催促官物、惡僧等猥帶弓箭、欲令凌礫官使、鎮好狼戾、弥忽諸朝威、仍重經奏聞之處、去久安四年被下 宣旨、寺家使与国衙使相共令檢注地頭之處、見作百一町百八十步内、治田卅町一段百八十步、出作八十町九段也、云其所当者、治田者段別一斗四升三合者、卅町一段百八十步分四十三石一斗一升四合五夕、出作田者段別三斗者、八十町九段分二百四十二石七斗也、彼是相并二百八十五石八斗一升四合一夕、其内除御封立用百四十一石四斗五升七合之殘、可弁濟国庫之官物百四十四石三斗五升七合五夕也、仍有限所当寄人擬弁濟之處、領主橫破公田率法、恣段別令徵下六斗、所責取之員、不可勝計者歟、令徵取此所当之上、恒例寺役有限之外、所驅仕万雜事也、而間有堪之輩、乍歎弁勤之、不堪之民、拋生土逃脫他境、而寺家存公平、可致沙汰之處、被相語領主、猥申云、玉瀧村官物者、御封立用猶以不足之上、久安檢田又以勘益也、因茲住人不安堵、所不弁官物也、猶申請清廉使、重可檢注地頭也者、仍去年冬寺家使与国衙使、重臨地頭令檢注之處、不作八丁九段三百步、見作百一町百

八十步、阡陌如旧、町段不新、目六顯然也、所当有限、而領主如前々、招集惡僧、可致狼戾之處、奉遇賞罰分明之御時、依不可致濫行、以非拋令結構之旨、甚以炳焉也、其故何者、寺家所進解状云、当庄者官省符一円之所也云々者、為官省符一円所者、自国衙可下行之御封、何令請補柚寄人等作田官物之處、猶有不足之由、令訴申哉、亦墾四至打榜示者、自国衙可下行之御封、強請補官物、年來可過來哉、遺迹之處、寺家之訴訟无其理之由、既以顯露也、豈可被尋百千之理非哉、結構之甚、以是可被察事也、次又副進寬治以往坪付等、全以不足証文、是何事哉、湯船内鞆田村有治田由之証文歟、然者国衙全不申無治田之由、付代々之徵符案、令注申其旨畢、又云、天喜宣旨者、黒田庄自河之西本免廿五町八段百八十步事也、於件所者、墾四至打榜示、国使不入勘之所也、自河之東公田也、柚工等出作公田、於官物者立用御封之殘、全無異論所弁来国庫也、而被相語領主(天)、寺家無道之訴訟、結構之旨、可被察事也、依之玉瀧柚寄人等相議云、国衙之官物、以道理被譴責、領主之非法者逐年倍增、依之難廻安堵計之間、自去年、本寺所司覚仁為南京惡僧之由披露天下之僧、又号補任預所、或時自身下向、或時下遣代官、長時不斷、令張行種々非法、不如只弃生土令逃脫哉云々、仍去正月晦比、七十餘人柚工等、晦跡逃脫畢、去三月朔比、被下遣庁宣状云、停止領主之非法、於官物者立用御封之外、任徵符之旨、令弁濟国庫、於寺役者、任往古之例、无懈怠可勤仕之由、所被下知也、因茲逃散之民遥聞此由、成悦各令帰住、隨堪欲令濟官物之處、如例惡僧等出来、号領主之下知、欲令弁濟国庫之米、猥令押納(天)、或運上京都、或令運越南京之上、覚仁代官所張行種々非法也者、寄人等申云、依国之寬宥、成悦欲帰住之處、又罷蒙如此之非道責、无為方之由、令訴申之處、為遁我之過怠、国衙無道之由令結構之条、誠以不穩便事歟、又寺役懈怠之由、令召問住人等之處、雖逃散他境、於本寺恒例之役者、更不懈怠之由、立誓言所訴申也、是以在庁官人等、倩案事情、云領主者、官物之外

給庁宣、段別或五升或一斗令徵納加地子者、当他国之例也者、有限官物之外、段別一斗加地子之上、令勤仕本寺役者、寄人安堵、国衙無訴、領主安穩、寺役無懈怠者歟、以此旨被裁下、何有異論哉、云在庁官人、何奉破大仏御事、不思罪障深重之恐哉、云寺家、花嚴之門徒何失道理、強被忽諸国威哉者、云国云寺、相共和平、任道理可被致沙汰者、抑去保元元年潤九月廿三日所被下諸国之五箇之条官符中、尤所被禁遏者、如此之寺僧濫行事也、随又久安四年所被下 宣旨云、收納以前私責取加地子事、格制有限之由、所被仰下也、委細見其状、

一丸柱事
副進 度々宣旨等

右、件村者、往古之国領也、而語取国司任終之時判、暫雖号寺領、注子細經 奏聞之日、被下 宣旨、被停廢、于今為国領、更無他妨、而去久寿元二年之比、号近江国信樂岐内、被押取官物、令召仕雜事之旨、經言上之处、猶有御沙汰、以去保元元年、如本所為国領也、適国領如此令掠取之条、凡可被察諸事、狼藉之基、何如之哉、望請国裁、早經 奏聞、申下宣旨、如此被停止非論者、將仰正理憲法之貴矣、以解、

保元三年四月 日 惣大判官代桃原「貞弘」

散位源 朝臣「兼雅」

散位惟宗朝臣「兼仲」

散位源 朝臣「仲元」

散位大江朝臣「盛国」

散位平 朝臣「祐良」

散位惟宗朝臣「国久」

散位源 朝臣「行俊」

散位源 朝臣「元兼」

* (天) 二例のみ (書籍二三九五頁上段五行と末行)

203、《書籍頁二四一一》

○二九二六 東大寺威儀師俊綱奉書○東大寺文書四ノ八 東大寺材木可令停止率分之由、為平三位(範家)奉行所被仰下候也、件御教書并藤井庄預所之請文等献覽之、經沙汰了、早可納置印藏之由、可令下知給候者也、

湯船玉瀧等事、在庁陳状(在副文三通)同献覽之、以御使自殿下令申給之間、御教書(ハ)不候也、何様可候歟、

為山城国文書之沙汰、所司一人可令召進給之由、先日庄之文書を進給、御使(ニ)付(天)令申給了、今明早々可令召進給候也者、依政所仰、言上如件、

(保元三年力) 五月廿日 威儀師俊綱(奉)

謹々上 東南院已講御房

204、《書籍頁二四一二》

○二九二八 某書狀○東大寺文書四ノ七

藤井庄津料材木事、先日資良(山城国司大江資良)付仰了、件子細雖申上、左右無仰之由、令申候者、全可被尋仰之由候者、御使依無候、先此由申也、此仰候(ハ)付使可令申候也、隆国事重御文不可有、只先日子細をもて(ニ)参向之由仰候也、其時のをんかほうにしたかつて、可令御文申給也、謹言、

(保元三年力) 十二月一七日 (花押)

205、《書籍頁二四一八》

○二九三五 威儀師俊經奉書○東京大学所藏東大寺文書

(端裏)「東大寺美濃国大井茜部両庄宣旨送文(保元三年)」
大井・茜部両庄、如元可為寺領之由、宣旨献覽之、慥可納置印藏之由、可令下知給候也、被附記錄所文書等、覺仁之沙汰候、仍如此

被宣下之事、尤覺仁（仁）可令召仰給候者也、抑金生封御年貢米等、納所支配注文令獻覽候、子細見彼狀候、是為御不審候也者、以此旨可申之由所候也、恐々謹言、

七月八日 威儀師俊經（奉）

謹々上 東南院已講御房

206、《書籍頁二四二七》

〇二九四七 僧能惠陳狀案〇東大寺文書四ノ八

（端裏）「大納言得業陳狀等案」

陳申

条々事

一 玉瀧杣工所進解狀事（覺仁執事）

載二箇条

一 領家方新任官司家遠可被停止事

一 御寺材木能惠押取事

右、件杣住人等、自去々年之後、寄事於左右、一切不隨領家之所勘、所謂春夏出居、雖致耕作之愁（營力）、秋冬逃隣□、不濟一塵所當、今年又同存于（其力）旨了、因茲院家修理用途皆以闕如了、一家蒙仰、以之為近來之物歎、全是則非他、前下司延真及与住人同□者、慙以乍官、其身有若亡、不被押沙汰之趣、仍去八月比、内定延真、補任家遠既了、□爰住人等依支度相違、所濟申之、件家遠為下司、成為庄民致非法、為御寺企惡行之時、住人等申訴也、覺仁又可言上事由也、只今不可及訴事歎、何況下司職之領家之進退也、住人等□□被訴於覺仁之□□、覺仁又不可越奏、旁無其謂矣、次覺仁消息狀云、為打止覺仁沙汰、注堂下司云々、御寺預所職者、政所御進止也、更不可依領家之下司強弱事歎、若然□能惠誰以并神任補下司、争輒可停止彼沙汰乎、尤御還迹可候、申□□（之次）□□（御力）寺材木能惠可押取之由、令言上之条、以外不実也、何故可押取乎、

无指証文、以謀叛住人等之說、言上事由、有奏事不実之科者也、一覺仁所押取質馬十九疋事

副進証文二通

一通庄民陳狀（質馬不請取事）

一通御封結解狀（無合夕未進由、御封沙汰人定未注文也、定

末者覺仁目代也、住人皆加判之、）

右、先覺仁消息云、質馬共常雖下知候、未請取候云々、文狀頗以不審、但質馬可返給之由、雖下知、住人等未請取（と）申（天）候歎、若然者、一日比住人等來申云、十九疋馬于今不返給、庄民無役馱為方云々、当庄民申狀与覺仁之言狀既相違、仍重相尋一定於庄家之処、住人申狀如此、委旨見彼狀、凡前後相違沙汰歎、政所（二八）御封未進之代言上押取之由、庄家（二八）造内裏之所課、領家官物之代（二）下知押取之由、付公私打止方々了、不能左右事也、抑件馬事、去七月比被召□子細之剋、御封未進之代押取之由、覺仁申上了、仍未進多少可進結解之由、即被仰下了、其後雖經数月、于今未進結解、何樣可候事哉、有未進者、可進結解、無未進者、□質馬之処、無謂掠取了条、是極訴也、但於御封者、無合夕未進之由、覺仁之目代御封沙汰人宗末丸結解狀進覽之、強返抄其為結解覺仁取籠了（云々）抑当杣者狭少所、住人纔十余人也、然無指故被押取十九疋馬之条、既一庄滅亡了、田舍者以役馱馬為宝千金雜物、庄民之愁歎何事如之哉、早任理可被糺返件質馬候也、

以前条事、言上如件、

保元三年九月十一日 僧能惠

207、《書籍頁二四三〇》

〇二九四九 石部某畠地壳券写〇光明寺古文書

謹辭 定永財沽渡進畠地立券文事

合卷段者

在字阿氣畠者

四至（限東六郎大内人地 限西殘地／限南大河 限北河）

右件治畠地、以去久安五年、從大内人物部清貞之手、買得進退領掌之間、無他妨、雖然、依有直物八丈絹要用、八丈絹疋布壹端代、字所みとの君相副次第手次、沽渡如件、仍為後代新立券文、以辞、

直捌丈絹疋布壹段今行請納了、

保元參年十月十九日 番檢大内人石部

208、《書籍頁二四四三》

○二九六九 東大寺出舉米注進狀○東大寺文書四ノ五十四

保元三年春守時許御出舉米（ヲ）岩松（三）二石五斗預給、

同秋上三石七斗五升成（之／中）（二石五斗（ハ）金峯山上／殘一石二斗五升有）

同年春守時許御出舉米真時（三）二石五斗預給、

「出了」

同秋上三石七斗五升（之／中）

二石三斗金峰山（上） 殘四斗五升有、

友弘御出舉米七斗五升弁進了、

久德御出舉米七斗五升弁進了、

右注進如件、 保元四年二月十七日

209、《書籍頁二四五二》

○二九八一 惟宗康弘書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年十一月卷裏文書

忠信所課法服事、早□（任力）被仰下候旨、可申遣候、□但□（無力）下向脚力、空送十个□（日力）候敷、當時置物（三）不候者、後令沙汰候（に）一定闕如候□（敷力）、雖得御目代名候、無所知□之間、殆及絶煙候云々、如□（此力）所課尤御優免可候□、被定候

裝束一具（も）懸候、□為公御（にも）御大事候敷、

以此旨、可令申上御也、康弘恐□（々力）謹言、

（平治元年）閏五月十四日 散位惟宗□□（康弘）

210、《書籍頁二四五九》

○二九九九 藤原婦子敷地去狀○京都大学所藏東大寺文書

渡与 敷地老所事

合五間者

四至 本券面在

在東大寺北御門東辺

右、件敷地者、自中門衆慶行大（之力）手、教嚴相博、其後教嚴藤原婦子小屋一字相博（シテ）領掌年尚者、婦子僧聖賢為師檀、令祈婦子并教善房今度疫難安隱大平於天王、限永代本券相備、僧聖賢院渡与処也、仍為後日証驗、録新券之狀、如件、

平治元年六月 日 藤原婦子（略押）

女 （略押）

僧重祐（花押）

211、《書籍頁二四六一》

○三〇〇一 大隅国留守所移○島津家所藏臺明寺文書

国留守所移 臺明寺（衙）

欲被早任藏人所召物使解狀致沙汰、 貢御青葉竹、令私用故、不

能調進子細狀、

副進御使解狀一通

移、件 貢御笛竹、任先例可切調進之由、所令下知也、隨差副御使於国扨承、貢御所（仁）令参会之处、解狀如此、如解狀者、住僧所行尤不隱便、且為蒙府裁、且為令經 奏聞、移送如件、以移、

平治元年七月十一日 目大中臣（花押）

權大掾檢前
權大掾紀

212、《書籍頁二四六六》

○三〇二〇 平遠正家地売券○東寺百合文書メ

沽却進 私領地売処事

合売戸主余参丈者（東西伍丈尺 南北拾丈肆尺）

在左京自大宮西自塩小路北塩小路面

右件地元者、源吉貞所領也、而依有互要用、相博領之後、全以牢籠有事无（シ）、而又依要用出来、直米限佰伍拾斛、武藏阿闍梨御房静頭、沽却進既畢、全以不可有他妨、仍為後日沙汰、相具本券等、所放新券文如件、

平治元年八月廿日

売人平「遠口」（正力）「（草名）」

213、《書籍頁二四八二》

○三〇四四 金剛峯寺所司等下文○高野山文書宝簡集四十六

金剛峯寺所司等

可令早免除山上免在家玖拾七字每年一度京上役事

但加里房定

右件一度京上、自被置免家以後、為每年不闕之例、更不及訴、然而諸衆枉依被申請、不顧理非、所被免也、但九十七字之外、自今以後、雖一字、寄事於左右、令致对捍、又所司等、自分免之外、為捍他在家山上免（を）、令致阿党者、慥大師明神可令証判給之状、如件、

平治元年十二月 日

少別当大法師（花押）

【第七卷】

214、《書籍頁二四八五》

*紙背文書（養和元年）

○三〇四八 東大寺上座円尊家地等処分状○東大寺文書一ノ一

処分 家地田畠等事

合

一楞伽院家地拾間者

四至（限東河 限西大垣／限南暹有五師領 限北平姉子領在中垣）

又未申角南北拾式間

四至（限東暹有五師領 限西大垣／限南暹有五師領 限北類地）

一黒田庄内田畠壹町肆段半（副渡本券等／増寿房之負物之代弁之（花押））

一海印寺田壹町壹段（副渡本券等）

一手搔家地七間（副渡本券等）

右、件敷地田畠家地者、為上座大法師円尊所領、年來敢無他妨、仍本券等相具、讓与息男僧尊珍之処也、若背処分状、向後有作非論之輩者、全非子孫、自餘子息等、相共任道理致沙汰、収公彼得分、偏可訪後世菩提也者、為後代証驗、勒子細之状如件、

永曆元年二月七日 上座大法師（花押）

維那法師（花押）（裏）「信尊」

平 姉子（裏）「たいらのあねか事也」

「讓状顯然也、不可有異論耳、」

大法師（花押）

（紙背）

此内、於楞伽院家地拾間并未申角拾式間者、負物之代人々（二）分渡畢、件家地、本者雖東口地、今者成北口畢、自大垣至于覚尹得業領、東西拾玖間參尺也、（東邊東西參間南北拾式間、源中子之負物代弁了（花押））

西端七間參尺、（中将得業分又壹間弁了、）次式間（備前君分）

次七間（伊与君分西二間渡中将得業了、此内東五間渡登美中子了、）

所殘地參間也、

東口拾間之内捌間肆尺、野田判官負物之代弁了

四至（限東河 限西類地、覺尹得業領垣之巡／限南覺尹得業領

限北路）

捌間肆尺之代殘定路也、於件路者、奥地主諸人之分也、路広壹丈
式尺也、

養和元年十二月 日 清原姉子

尼（花押）

僧（花押）

215、《書籍頁二五〇五》

○三一〇二 近江国某既住人等解○京都大学所藏兵範記仁安
三年正月卷裏文書

当御厩者、一年四度御祭、正月以後八度□祭役勤仕之外、更不叶他
役、是御地子以下政所御勤無其□之上、依為四至一円之御領也、若
以前社役之外、社司（ニモ）浦長者（ニモ）乍随所役、申不随之由
者、可蒙東西楞嚴護法天等山王七社冥罰（ヲ）住人等一々毛穴（ニ）、
三日七日内可召蒙□、早被停止件濫行者、□（如）本令安堵、欲勤
□（仕力）御役矣、仍勒状以解、

永曆元年八月 日 住人等□

216、《書籍頁二五〇六》

○三一〇五 藤原景遠起請文○石山寺所藏聖教目錄裏文書
藤原景遠解 申請 天判事

右、石山公文仁快（ヲ）召上御之事（ヲモ）不承及（爪）、又仁快承
御定（天）罷下事（ヲモ）不知給（爪）、而（ニ）仁快（カ）罷下之
時、以景季・遠宗等令捕仁快、將來于景遠許令責勘之由、聞食之条、
無実之至言語道断事也、不可有他証人、被召問仁快、無其隱者乎、

以如此之無実、他事之御景迹所仰也、若景季（ニマレ）遠宗（ニ〇
レ）又他人（ニマレ）仁快（ヲ）召返（天）景遠（カ）許（ニ天
モ）他所（ニ天モ）責勘仕（タル）事有（ヲハ）、日本國中一切神祇
冥道（ノ）罰（ヲ）景遠・景季・遠宗等、一々（ニ）可罷蒙也、仍
勒在状、謹請天判、

永曆元年九月 日 藤原景遠

217、《書籍頁二五二六》

○三一四四 橘恒元起請文○仁和寺文書
橘恒元解 申請 天判事

右自今以後、藤内景遠許（ハ）罷（リ）通（ヒモ）仕（リ）、景遠（ニ）
方（タ）寄（ル）心（モ）有（リ）、景遠（カ）事（ヲ）大事（とも）
思（ヒ）、又景遠（ニモ）語（ハレ）、我（カ）心（ヨリ）モ起（リ
天）、座主御房（ノ）御事（ヲ）忽諸（ニモ）思（ヒ）奉（ツリ）、
腹黒（キ）心（モ）有（リ）、乃至又御房中（ニ）祇候（ノ）人々沙
汰人等（ニ）至（ル）マ天、腹黒（ヲモ）致（シ）、凡（ソ）少（モ）
非常奸邪（ノ）心（モ）有（リ）、監吹不敵（ノ）事（ヲモ）仕（ラ
ハ）、惣（天ハ）王城鎮守万三千七百餘所（ノ）神々、別（天ハ）禪
林寺石山等（ノ）護法善神等（ノ）罰（ヲ）、一々毛孔每（ニ）蒙（天）、
現世後界事不叶（ハ）、人間愛敬无（ク）、所求不遂（爪）、田畠耕作
之間、年穀不登、以病為營、以乞食為依怙、屋（モ）无（ク）食（モ）
无（ク）シ天、道路（ニ）迷（フ）身（ト）成（ラムト）申（爪）事
（ノ）由（ヲ）、諸神々慥（ニ）聞（シ）食（セト）恐（ミ）恐（モ）
申（爪）、仍勒在状、謹請天判、

永曆二年三月廿二日 橘恒元（花押）

218、《書籍頁二五二七》

○三一四七 僧兼賢解○長谷場文書

若宮不斷經來僧兼賢解 申請 御庄政所裁事

言上二箇条愁状

一請被殊任本師快賢大德遺言、年來所令耕作田畠（於）今年始為肥後殿押妨子細状、

右、謹檢案内、故本師快賢大德沈病床、及万死一生之時、私領（乃）田地書別（弓）、讓与肥後殿給時、被仰云、於讓状之外田共者、円如房与兼賢相互（爾）不成妨（志弓）、兩人可耕作之由遺言畢、於証人者、讓状書給禪明房眼前（爾）坐処也、仍円如房（毛）於兼賢之作田者、年來不被成妨、又兼賢（毛）不成妨、是即遺言有限故也、就中於兼賢之自作之坪者、從本師在生之時給（弓）所耕作也、而今年始為肥後殿、讓状之外（乃）由（田力）於被押取之条、且背快賢大德遺言、且似任我意者、法家之習、師長之物、於弟子之請次事、田舍洛陽定方也、本師（毛）存此旨（弓）、円如房与兼賢讓状之外田（波）可耕作之由遺言了、是肥後殿之方可成（加良／牟爾）讓状不入給哉、道理又然也、

一請被同任道理裁定、本師快賢大德存生時所付属小法師字菊賀丸

（加）身於不令服仕子細状、

右、件小法師者、快賢大德存生之時、遺言云、於此小法師者令生長

（弓）、閑伽水可令汲之由遺言了、於実否者、小法師之母女并円如房

被召問（爾）無其隱欺、仍任道理、為被裁定、言上如件、以解、

永曆二年三月 日 僧兼賢上

219、《書籍頁二五二九》 *（ハ）一例のみ

〇三一五〇 讃岐国善通曼茶羅兩寺所司解案〇東寺百合文書力

（端裏）「善通寺解状案」

讃岐国東寺末寺善通曼茶羅兩寺所司等解 申進本寺政所裁事

請早被触国前、任數百歲例、停止兩寺三昧所司等在家廿五家国役

公事、并任本国目錄、欲為寺領志侍嶋一基子細之状、

副進

寺領本国目錄一通

右、所司等謹檢案内、善通寺是弘法大師先祖之伽藍、建立之後、致五百余歲、大師以泥土、手自造立仏像形、書写金光明最勝鎮護国家妙文、以五神筆果四面之額、書曼茶羅、既大師入唐帰朝之後、卜密教相応之勝地、建立一院伽藍、及三百歲、造立手自七躰之諸尊、令安置彼寺給結界嚴重之聖跡也、仍代々国司殊致帰依、往々宰吏專今仰崇、或時令奉加種々巨多材木、或時令奉加住（在力）郡所当、遠偏靈驗揭焉、天下無双之故也、然而当御任在家役難堪故、住僧等皆以逃去畢、纔残止所司三昧、被国事打立、恒例仏事、已以及断滅、加之、志侍嶋（ハ）是往古寺領、大師殊有志思食事、所被寄置也、然而近来被国領之条、甚以大愁也、如此寺領被押取之間、往古仏事難勤仕、又堂塔僧房、雖破壞顛倒、修理修造無力、仏聖燈油雖及闕怠、一鉢底空（天）不能調進、望請 任解状之旨、被致御沙汰者、大師聖籤再感、令寺僧安堵、奉祈朝家泰平宰吏安穩万民与樂之由、仍録子細、言上如件、以解、

永曆二年四月十三日

寺主大（法脱）師（在判）

上座大法師

修理別当大法師

少別当大法師

權別当大法師

僧綱

220、《書籍頁二五三〇》

〇三一五一 僧応順申状〇法隆寺文書九

応順謹 申請新堂院器日免畠事

合参段者 代蔵垣内

右、件器日免畠三段内作疑心故、注文書公券不他処不候由文也、其

故注文書、以解、

若他処公券候（ハ）、七賞（生力）三宝神罰明罰、□毛穴異令加不ら給（ハ）、

永曆二年四月廿三日 僧（花押）

□部勝□

（端裏）「新所□□」

221、《書籍頁二五三一》

○三一五三 紀伊国在庁官人陳狀案○根来要書下

紀伊国在庁官人等謹陳申

高野山御願寺大伝法院所司等訴申当国目代并在庁官人等引卒数

多軍兵、乱入当院領山崎庄内、為上国衙堰、乍置年（来脱力）

堰口、不用庄家制止、令堀失燈油料作島事、

右、所司等四月三日解狀備、恭考旧貫、高野山者日域第一仏土、天下無双仙窟也、大師留全身、遙待慈尊之下生焉、善神垂応跡、遠期後仏之出世矣、誠知功德有隣、善根不朽峯也、鳥羽禪定法皇殊建仁祠於吾山、而修復二季之大會、興秘教於此砌、而崇重三密之紹隆、自爾以降、淨侶守禁戒、修長日数座之密行、高僧学仏法、勤每年春秋之法会、凡云修云学、即国家希代之御願、云事云理、是嚴重真実之御祈也、是故為備彼聖燈供料、被建立此庄園

等畢、件 院宣 官符等、其旨分明也、依之代々国司、皆守彼 綸言、懼此寺領、而当任目代并在庁官人等不触子細、猥自七月廿六日来之間、引率数多軍兵人夫等、乱入御願寺領山崎庄内、令損亡巨多作田島、堀失永代仏領、其理豈可然【哉】乎、大伝法院者、非苗為前皇之御願、專奉祈 太上天皇之仙算、而当任国司乍載 朝恩、勅令輕賤御願庄園之条、謀叛狼藉、何事過之、望請鴻恩、於彼公郷者、如元令用往古之綾井、於今非道井者、永可令停止之由、被下院宣者、弥将奉祈 長生久視之仙算者、在庁等謹案事（情脱力）、件綾堰者、

去年八月為大風洪水、被押流穿堰口已如淵、其流難登得、而彼流之末、澗養作田并五百余町也、堰溝無可堀融之方、動失治術、仍雖令触子細於衙庄、作田五百余町之苗代、無水便不蒔種子之間、在庁等情廻計略之處、乍置有限之水便、点而令荒廢田地者、 綸言抱恐、參期有限之事也、今□堀流堰口存不幾之由、本堰（ヨリ）上（ハ）登（テ）口一段長二町余也、本堰（ノ）跡（ニ）所堀落也、所被損失島地、仮令二段余許也、自件堰辺庄内也、前司季範任中、彼堰堀畢、而彼損失在家十余宇、被堀失作島十余町也、然而不及訴訟、以之思之、損失分不及九牛之一毛、依此最少之作島、令荒廢若干之田疇者、 勅事 院事方々濟物等、何地利可備進哉、只為償一旦之訴訟、豈失永代之流激敷、兼又卒数多軍兵、乱入庄内之条、是無実也、抑国司謀叛狼藉之条、訴申之旨、未知其理、伝法院庄之外、於涉田保者、前司頼憲任伝法院依有可弁之事、成不輸庁宣畢、是以備永代之規模、寄事於左右、令押領之条、尤被糾正道者、慰愁歎乎、然而雖道理有限、于今無奏聞、何国司謀叛狼藉之由、訴申之条、何過怠哉、凡庄每年所当五千余石也、如伝承者、寺用千余石（云々）、於殘四千余石、偏不經公用、被押掠籠畢、因茲庄者広々也、国者狭少也成畢、空不支方々濟物用途之旨、在庁官人等、此二箇任愁緒、只在於斯庄、是一国内所建立也、何依一旦少島地、被失数百町之田地、訴申之旨、全不顧前後、公損未曾有事也、偏為耀庄々威、風猛不恐綸言之末事、尤其罪科難遁、先例不掘堰口之由論申者、衙庄沙汰者与在庁官人等被召対決之處、豈無其隱歟、仍勒狀所陳申、如件、

永曆二年五月 日 散位清原真人実友

散位中原朝臣宗基

散位秦 宿禰盛兼

散位忌部宿禰盛実

222、《書籍頁二五三三》

○三一五五 聖人覺西祭文○石山寺所藏聖教目錄裏文書

維永曆二年歲次辛巳七月朔六日乙丑吉日良辰へに、聖人覺西敬白三世一切諸仏八万法藏十二部經地前地上諸天菩薩聲聞緣覺一切賢聖衆、別白尊界会北斗七星七曜九執廿八宿五者眷属四大天王司命都尉天曹郡尉冥官冥道鎮護国家諸大明神乃至尽虚空界護法天等、兼又王城鎮守天神地紙廿二社諸神、若景遠迹散之後、通消息対面へて善悪へに付へて公御事へヲ申へシ、兼又景遠へカ離寺之間、彼へカ物具一塵へヲモ預置へて不預由へヲ申、上件神祇冥道へノ神罰冥罰近三日遠七日へカ内へに、覺西每毛毎へに可当賜へシ、抑借請景遠高坏暈事へハ、去年夏比へヒ、大和進士田地□□へノ爲へに□□入候宿所へに、垂味へノ房□被借へに依へて所借請也、雖須即返送、彼進士為申請宛文□、可又罷入之由へヲ依被申へて暫借置へて候也、皆人所見知也、爰覺西禪林寺造作之居住時、垂味塗竈戸へヲ鎔無へシに、打開へて種々物へヲ盜取へル、其へに高坏二本へヲ盜取へて、景遠へト同意へシて預置由へヲ申出へて年來買領へて私へに結構へする住房并禪林寺へノ開発へノ菴室へノ地へヲモ可被召由風聞、是歎之中歎愁之中愁、□□依不誤事□□如哉、雖不蒙指仰、御領へノ内へに依祇候、捧所作上分可奉祈公見当二世也、事非虚□□三宝知見給歎、為免御□□立祭文之状、如件、□□敬白、

永曆二年七月六日 聖人覺西

223、《書籍頁二五三六》

○三一六一 明法博士坂上貞□勘文○陽明文庫所藏兵範記仁安二年秋卷裏文書

勘申安樂寿院侍友国与九条殿御所侍友兼相論□□五段余□(事カ)右、被仰云、就両方申詞并所進文書等、可勘申彼□□、今年六月

十八日政所問注記云、問注友国・友包等申詞□□、安樂寿院侍同(問カ)友国云、友包解状云、大副里十三坪田一(四カ)段□□年正月廿二日、自平守清手所買領也、放券進覽之、□□所耕作也、而今年所被押妨之真幡木里卅坪二段□□三木里一坪一段百八十步、友包妻父友行領也、而先年□□券契友包妻へに所附属也、随三箇年之間、所領作□□、妻死去畢、依之友国母子等忽挾異心、所押妨之、被停□□將仰正道之貴者、付友包解状、子細弁申如何、友□□(国申云カ)大副里十三坪四段へハ字定寿房へト申法師領田也、而件法□□父友行出挙物不返弁へシ天死去畢、依之件法師妻云、□□以件田地へ天可弁濟之由、出押書了、進覽之時、田地四段□□友包妻へトモ令死去了、随無一人之子息、然者前何故□□仍友行妻并嫡子友国等訴申也、随即三木里田一段□□本券へハ友包妻へニモ不渡給也、友包所進之本券、不可

問友包云、附友国申状弁申如何、友包申云、地主守清□□可被召問也、兼又友包妻存生之時、相副券契、令讓得□□耕作、何故へに可致謀計哉、尤御景迹可候也へト申、覆□(問カ)如陳申者、真幡木里三木里田地四段へハ友国父友行令附□、附属女子之田宅等、無悔返之地歎、兼又友国所進之□□之状、副渡本券之由、所注載也、件本券可進覽歎如何、□□云、縦雖附属女子へトモ、友包へハ前賀也、又無一人之子息、故へに可領知彼田地哉、兼又元永券契之外へに、今以他□候へト申者、友国所進元永二年十月廿八日壳券云、謹□□手田事、合参段佰八十歩内、へ在三木里一坪内西繩本但論田一段百八十歩、右件田□□中社御封田也、然大皇太后宮膳部文時国年来之作□□直要用、限捌石五斗、殿下雑色山兼光永所沽却先□□(畢、不カ)可有他妨、仍為後日沙汰、立新券文事如件、相副渡□□者、永曆二年三月六日平守清繼母假名書状云、『太所伊□□津保仁太伊太牟古呂久良宇仁天止良礼天の知、天□□礼奴、所の、知、

呂久良宇加伊幾太利志保止者、左米□□和礼良加志良礼志古止仁者
阿良須也、何不加非奈久□□毛宇者宇せぬ礼者、和良者奈知天者、
太礼加者又□□幾利志止幾□□良□□加倍左牟止申保止仁、伊不
加非奈久仁加天宇せ仁志、□□□□毛所乃須古、加倍左牟止伊不古
止毛奈志、所礼仁阿□□无止於知志奈非太无良礼太利志由倍仁、和
礼良毛せ免□□奈志、所の加太仁毛何末者、和礼加志良留倍幾奈利、
一人の□□不留弁の志留倍幾也、宇奈志又留伊志牟の左末太□□止
左良仁阿留末志幾奈利、和良者、奈知天者、古、仁古□□止毛末宇
須倍幾太仁天者阿礼、古の和良者加末宇須、□□伊加奈留宇太倍毛
せ良留、倍末呂久良宇古所宇せ免□□加於止、伊末二人阿礼者、所
礼（毛）志留倍幾仁天古所阿礼者、□□□□（保元元年）正月廿一
日平守清壳渡』友兼券云、沽渡私領田壹事、□□大副十三坪内渡廿
四坪、右件田地者、平守清之先祖相伝□□、然而依直要用、限能米
伍石并細六丈布式段、沽渡紀友□□、仍為後代立渡新券之状如件者、
戸婚律云、祖父母、□□子孫別籍異財者徒二年、若祖父母、合別
籍者□□孫不坐、但云別籍、不云令異財者、明其無罪也、説者異也、
□□悔還者、

抛檢此等文、大副十三坪内田一段者、保元（元脱力）年正□□□□
□（月廿一日）友兼自平守清手買領之由、見所進壳券案、□□□□
申状者、件田者字定寿房領也、而件法師借用□□友行出挙物不弁
償死去了、仍妻女以彼田可

子可伝領也、但守清誰人雖有壳友兼之状、□□守清之文非無不審、
被尋守清相伝、可及□□真幡木里三木里田地四段者、友国父友行
雖□□女子（友包妻）彼母子死去了、無一人子、仍夫友包不可□□
□所訴申也、以之言之、処分女子之物、女子亡者、夫可□還妻之
祖家者也、然則友国相論已似無証抛、□□可謂有其理、仍勘申、
永曆二年八月日修理右宮城判官右衛門少尉兼明法博士坂□□

224、《書籍頁二五四〇》

〇三一六七 殿下織手村岡兼清解〇陽明文庫所藏兵範記仁安
二年十一月卷裏文書

殿下織手村岡兼清解 申請 申文事

請殊蒙 恩裁、任道理被裁下、称右衛門督織手從□□兵衛尉許被

狩召子細状、

右、謹檢案内、兼清者重代殿下織手也、敢不勤他□（役力）、而間先
年之比、故右衛門督為武藏守之時、依相知之□、雇織進御綾一疋畢、
被雇知人者、非兼清一□（人力）、先例□、其後為右衛門督之時、依
無由緒、不狩□（召力）、而至于昨今□被被雇（天）織進御綾（タリ
キ／トテ）、被催召之条、難堪事也、望請 恩裁、早被免除□（狩力）
召者、□（弥力）仰 正道之貴、仍注子細、以解、

永曆二年十一月 日 織手村岡兼□（清）

225、《書籍頁二五四一》

〇三一六八 僧定信島地壳券〇高野山文書統宝簡集六十八

謹辭 壳渡渡進島地之事

合卷段者、（在名手御庄三把谷西国末垣内西ハシ）

四至（限東国末領 南限垣根／西限垣根 北限大道）

右〔件〕地者、僧定信相伝領掌地也、而（ヲ）依要用有、伴武久限直
（絹脱力）參疋四丈、限永代壳渡進所也、仍為後日沙汰之、券文（ヲ）
放状如件、（本券文ハ国末本在者、（花押）（定信）

永曆三年十二月十九日 僧（定信）（花押）

226、《書籍頁二五四一》 *片仮名交じり文

〇三一六九 東大寺仏聖米返抄〇東大寺文書四ノ八十二
御仏聖米弁進廿六年成候者也、一年無懈怠勤仕奉候所也、但平治元

年返抄、永曆元年返抄、二ヶ年返抄等、モトメウシナヒ、チカラヲヨヒサフラハス、

応保元年返抄一枚并所濟文一枚進上、但堂司引付顯然候敷、
應保元年四月七日 僧巖超（上）
（花押）

227、《書籍頁二五四二》 *片仮名交じり文

○三一七七 東大寺仏聖米返抄○東大寺文書四ノ八十二
納仏聖米捌斗捌升捌合事、（單米定）
右、櫟北庄当年御官物之内、預所御佃陸段所當、所納如件、

久行上（花押）

堂司（花押） 應保元年十二月七日

件仏聖米自庄ヒノケ、ウニ堂司之出挙方ケ、ウ納了、但六段所當、

228、《書籍頁二五四三》

○三一七八 高向依重文書燒失狀○吉田文書

応□（保力）元年四月卅日立記

右、事發者□今夜半高向依重私宅（仁）為盜人被燒亡、其分所燒亡雜物色目五間三面萱屋一字・三間蒼代一字・客人料屋一字、戸在七具・二石納瓶一口・三斗納壺一口・二斗三升納釜四口・三斗納手塙一、皮籠入物、袖袴二、綿衣一領・凡絹五疋・荒苧三把・四丈布二端・手筥一口納方々寺□御返抄并相請文書等悉被燒亡、仍為後日沙汰立記、

日記申高向依重

「件私宅被燒亡事明白也、仍隨近在地人々加署判、

紀（花押）

川辺（花押）

※異筆

「此切一段文重未渡了、

中一段（高向）三良丸売了、直米三斛此中切□買
家地參段（字住吉島在八条九里卅三坪之内此内島之西垣筋一段僧
宗□）

229、《書籍頁二五四六》

○三一八三 伊賀國薦生莊杣工解○東大寺文書四ノ三十九

（花押）

薦生御庄杣工等解 申請 本家 政所裁事

請殊蒙 鴻恩、任先例可令沙汰由、被仰下檢注使、非例無為方子細狀、

右、謹檢案内、代代政所御時、雖遇度之御檢注、未於御佃并島等、全無弁段（別脱力）雜米之例、而今度御使、御佃（二八）段別白米一升黒米六升秣二把、島（二八）段別白米一升黒米二升被充徴之条、所不知為方也、加之山口祭・腰祭等神田等皆以被倒了、為當時為向後、尤御沙汰可候者也、人数五十余人供給七箇度、難勤仕之上、非例之御沙汰難堪候、早任先例可有沙汰之由、被仰下者、尤所仰也、

大和（花押）

清原（花押）

高向（花押）

平田（花押）

秦（花押）

法隆寺五師大法師（花押）

寺主大法師（花押）

都那師大法師（花押）

□□□□寺（花押）

□□□□群（花押）

仍勒事状、以解、

應保元年十一月廿七日 御庄工等

230、《書籍頁二五四七》 *片仮名交じり文

○三一八五 某莊田堵等田地進上状○京都大学所藏東大寺文書

大細(ノ)中冬(ノ)比小冬ノホリへ也

下道へ也比峯へ也西ヨコ峯へ也

田半、僧善惠(三) 国末ウリワタス、

烏布六丈

右件田、各々人イハクニシタカテ、進上如件、

應保二年二月十三日

国末(略押)

太郎(略押)

二郎(略押)

三郎(略押)

有任(略押)

国貞(略押)

清貞(略押)

末貞(略押)

有国(略押)

久時(略押)

231、《書籍頁二五五四》

○三一九八 平姉子陳状案○東大寺文書四ノ九十

□□子謹陳申

山村三子訴申作稻等事

本解一通

被本解云、源仁巧无量不善謀計、成阿党之間、相語沙汰人相構

事也者、

□□云、三子申状其(甚カ)無謂事歟、先件源理之所領者、□第証

文字息力牛可令領知之由、御定先了、□御裁定去去年比、善幸法師、

三子等同心(爾)□(取カ)力牛之作田壱町六段穫稻等了、其數六

百余□□(仍カ)有限日別仏聖米既令闕如畢、爰令言上□刻、停止

善幸并姉妹等之妨、力牛令領掌、兼□□寺領田地所苽取作稻等、如

數糺返之、可致□□勤之由、被仰下了、即任仰状糺返之間、六百

束之□□十余束(云云)雖然于今庄家封納、然者玄仁□善(幸脱カ)

謀計、相語沙汰人(と)令言上条、言語道斷事歟、□□憲法裁定惡

言基也、況本寺兩代裁判之上、□□長者宜并興福寺二代下文等了、

更無私乎、□善幸法師去去年比苽取力牛之作稻等刻、令□□長者殿

下解状云、副進在地与判一通者、而件与判文者、三子之所構出謀書

也、然者三子与善幸□□苽取事無隱歟、無故苽取他領之由訴申如何、

□□善幸法師去去年比令殺害御庄住人力牛之養父□□妻女所從等了、

而件三子与善幸同心之由、于今□□在地近辺皆以知見之、若輒被免封

納者、不止後惡□、是大乱也、況仏聖米闕如、誰人之可令闕補乎、

□□恩裁、早任陳状道理、且先日御下文旨、被停止□訴者、弥仰憲

法嚴旨、以解、

應保二年三月 日 平姉子

232、《書籍頁二五五五》 *仮名交じり文

○三一九九 大和国東大寺仏聖免田田堵解○東大寺文書四ノ

三十八

(端裏)「成清所濟」

長屋庄住人成清御仏聖米三段半返抄、定ナヒタルコトナシ、タ、子

スミクラヒヤリタルニヨリテ、定使俊成之モチキサフラハス、イカ

ナルチカコト、サイモンヲカ、サス、ツケヲ納モチキサフラハテ、

仏聖米三段半請文せメトリサフラウ所也、キハメタル无道也、應保

二年ノ十月コロヲ仁ニ(上助(ヒカ))大仏ニクマレカフリサフラハ

ウ、成清スラコトシサフラハス、下人コ、ロニ一堂ヲツクリタテ、サフラウミニサフラウ、定使俊成之ヲサエテシヲトリセメサフラウ、チカラモコ、ロモヲヨヒサフラハテ、後日可弁進請文進上サフラウ所也、但成清田三段半、

成清（略押）
成清（略押）

233、《書籍頁二五五六》 * 仮名交じり文

○三二〇〇 大和国東大寺仏聖免田田堵解○大橋文書

平治元年返抄ハ下作シテウマウシサフラヒキ、庄地ミナシリテサフラウコトナリ、三段半新免人々ノシサフラハウニシタカヒテ、ハカリサフラウマシ、ソコセノ新免庄ニサフラウ、イマタハカル田堵サフラハス、人□ハカルトミサフラハ、ウタカイサフラウマシ、永曆元年返抄成保元年返抄進上候所也、依返抄御書状如件、

成保二年四月十一日 二郎（略押）

234、《書籍頁二五五六》 * 仮名交じり文

○三二〇二 大和国東大寺仏聖免田田堵解○東大寺文書四ノ

四十五

（端裏）「安田御庄住人等為末善成常名二段・為末名一反」

安田御庄住人為末御仏聖米田三反所当四斗四升四合、大炊戒勢本たしかに納了候了、堂司三月五日刀禰〔ホカヘ〕ワキマヘテ候アヒタニ、米上日三月六日也、定使下人クシテ円如房ニテ返抄、大炊戒勢ハナチタフ、返抄定ナヒテ候、ヨリテ神仏カケタテマツリテ、チカイヲタツルトコロナリ、大仏又シロシメシタルラム、モシ納進候御仏聖米（ヲ）納（メテ）返抄ナシトマウサハ、五人子コノワカレヲ、三日七日内シサフラハム、又マヲナエノ三ウタヘシ、カミホトケノニクマレヲカフリサフラハム、謹請サイモノコト、但永曆元年返抄也、

成保二年四月十四日 宗ヲカ為末（略押）

235、《書籍頁二五五六》 * 仮名交じり文

○三二〇三 大和国東大寺仏聖免田田堵解○東大寺文書四ノ

八十二

（端裏）「小東御庄二ヶ年無返抄一ヶ年□□」

平治元年永曆元年返抄（ハ）ヲウテタツ子モトメテ可進上、当寺エタツ子サフラハス、下作シトケナクテ無定、後日可進上、但成保元年返抄者進上如件、

「三ヶ年二ヶ年無返抄」

成保二年四月十一日

小東御庄国里名（上）

236、《書籍頁二五五七》 * 仮名交じり文

○三二〇四 大和国東大寺仏聖免田田堵解○東大寺文書四ノ

八十二

（端裏）「小東御庄重貞名七段之内二段（新免内）」

四月二日守貞住家やけさふらいおわりぬ、平治元年返抄、永曆元年（返抄）二ヶ年返抄やけおわり候、成保元年返抄進上如件、

成保二年四月十四日 守貞（上）

237、《書籍頁二五五七》

○三二〇五 大和国東大寺仏聖免田田堵解○東大寺文書四ノ

八十二

（端裏）「安田庄アハチトノ慶善名□状四段」

安田御庄之内御仏聖米正返抄肆段事

右、件於返抄者、領主具足之住京者、庄許當時不候、仍平治元年永曆元年成保元年三ヶ年无懈怠行永之所進堂司納張（仁）无其隱欺、仍注進如件、

(略押)
応保二年四月十一日 行永(上) 慶善(名)

238、《書籍頁二五五七》

〇三二〇六 大和国東大寺仏聖免田田堵解〇中村直勝氏所藏文書
(端裏)「東羽鳥庄并安田庄領主四人二丁四段返抄夕(マ脱力)ハス」
注進

東羽鳥庄内二町返抄不賜之、但之内未進三段(助則名之内)
安田庄内四段之返抄(不給)

右件返抄等、雖尋乞、領家不賜之、相尋返抄事、全先例事也(と)
申(モ)所不給也、件領主皆興福寺住僧也、仍不及力之状、注進如
件、

応保二年四月 日 僧俊成

239、《書籍頁二五六六》

〇三二二〇 大隅国臺明寺住僧等解〇臺明寺文書

(端裏)「臺明寺住僧解 大符御外題」

(外題)「任次第証文之旨、可下知之、

(花押)「

大隅国臺明寺住僧等誠惶誠恐謹言 申請太宰府裁事

請被殊蒙 鴻恩、任正八幡宮執印故行賢寄文状、依代代国判旨、
停止当郡住人篤房謀略非理沙汰子細状、

副進

調度文書等案

右、謹檢案内、臺明寺無依無怙往古靈嶺、山修山学聖跡、精芦草創
以來、不知幾許、但 天智天皇御宇之時、被定篋竹貢御所後、逕四
百餘歲根本大伽藍也、住僧等雖辺鄙、頭也崇持天台教迹、瑩四教三
觀利劍、密也伝授真言秘術、挹三密五瓶智水、宰府為仏法、盍賜裁

下哉、焉正八幡宮執印故行賢大德、為紹隆仏法、買取篤房之祖父篤
定并檢前篤季之田地当山勝至内、相副本券、当山每年二季彼岸之
勤并燈油料寄進式町陸段田地、又以來年伝領戒勢之田、当山三箇
日夜不斷常行三昧料、藪老所并田地陸段、同以寄進畢、其後七十餘
箇年之間、敢無他沙汰、随代代国司被加免判畢、国衙在庁郡司等皆
悉所承知也、其旨見於調度文書等、而今篤房雖為篤定末孫、不受繼
郡司職、私訴阿多平權守忠景、以彼之武威、乍置相伝郡司、分領半
郡事、僅及四五箇年之間、某計之心甚、欲分取逕多年寺領田、於有
限本券田地之頗広、称新開加作之由、今申成府判、始分取寺田、或
押領四至有限寺領之条、非理沙汰也、誑惑之甚也、就中於彼岸田燈
油田者、臺明寺勝至内也、他領田地全不相交、設雖加作新開、勝至
内全不可有篤房之沙汰乎、而勝至内燈油田老段者、今年春既分取畢、
兼又以為元起阿党、住僧等不令切山木、不令荊野并、於広野所耕
殖物等一一押取、不与山之本人、京都(仁波)本寺叡岳、鎮西(仁
波)本山内山、被崇国内、被祇郡内、雖然聖朝外朝国司郡司、全不
令制止山野草木等乎、以之思之、篤房一人非例非法也、加之篤房違
代代国判、背往古旧記、狩勝至内禁野、殺伽藍辺猪鹿之条、不冥不
頭、有危有過者也、又去去年篤房之所進府解状称、篤房先祖有指宿
願、申請国司、以私田藪寄進臺明寺(云云)、是大無実也、大虚妄也、
其旨見於故行賢寄文状、以一推万、誑惑甚也、宰府依不令知案内、
於彼解状被成 御外題敷、但御外題(仁波)但可付証文(云々)、未
敢定判御外題也、臺明寺公驗寄文証文明白也、篤房者、不帶一帋書
状、不取出可為証文指本公驗、而於四至有限寺領田藪押分取之条、
實以罪科不輕乎、望請 鴻恩、且為仏法且任実正、令停止篤房之条
条非法一一誑惑給者、捧恒例不退仏事之功、忝奉祈 府国安寧之由、
静念誦読經勤行之心、高奉仰 正理憲法之貴、以解、

応保二年五月十五日 臺明寺住僧等謹上

大法師「覺心」

大法師「弁海」
 大法師「教意」
 大法師「範耀」
 大法師「長慶」
 大法師「勝賀」
 大法師「源豪」
 大法師「源耀」
 大法師「頼暹」
 大法師「遍覺」

240、《書籍頁二五七六》

○三二二九 僧巖成起請文○石山寺所藏聖教目錄裏文書
 維応保二年歲次壬午十月八日辛未吉日良辰撰定立申起請事

僧巖成

右件起請元者、於自今以後、若酒一坏之外重坏仕候者、王城鎮守八幡三所賀茂下上日吉山王七社稻荷五所祇園天神別石山觀音卅八所之罰、三日若「ハ」七日之内、蒙加巖成身毛穴、為無恣幸今生者可罷過「と」申、穴賢穴賢、

241、《書籍頁二五七六》

○三二二〇 太宰府政所下文○臺明寺文書

(端裏)「大明寺 大符宣」

(花押)○三二二〇号外題ノ花押ニ同ジ、

下 大隅国雜掌

可任次第証文旨、令停止篤房妨、臺明寺住僧等訴申当寺四至内作田等事、

副下調度文書等

右、得臺明寺住僧等解状称、謹檢案内、臺明寺者、無依無怙住古靈

嶮、山修山学聖跡、精芦草創以來、不知幾許、但天智天皇御宇之時、被定篋竹貢御所後、逕四百餘歲根本大伽藍也、住僧等雖辺鄙、顯也崇持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也伝授真言秘術、挹三密五瓶智水、宰府為仏法、盍賜裁下哉、焉正八幡八宮執印故行賢大德、為紹隆仏法、買取篤房之祖父篤定并檢前篤季之田地、在当山傍示内、相副本券、当山每年二季彼岸之勤并燈油料寄進式町陸段田地、又以來來伝領戒勢之田藪、当山三箇日夜不断常行三昧料藪壱所并田地陸段、同以寄進畢、其後七十餘箇年之間、敢無他沙汰、随代々国司被加免判了、国衙在庁郡司等、皆悉所承知也、其旨見調度文書等、而今篤房雖為篤定末孫、不受繼郡司職、私訴阿多平權守忠景、以彼之武威、乍置相伝郡司分領半郡事、僅及四五箇年之間、謀計之心甚、欲分取逕多年寺領田、於有限本券田地之頗広、称新開加作之由、今申成府判、始分取寺田、或押領四至有限寺藪之条、非理沙汰也、誑惑之甚也、就中於彼岸田燈油田者、臺明寺傍示内也、他領田地全不相交、設雖加作新開、傍示内全不可有篤房之沙汰乎、而傍示内燈油田老段者、今年春既分取畢、兼又以為之為元起阿党、住僧等不令切山木、不令苧野弁、於曠野所耕殖物等一一押取、不与山之本作人、京都「仁波」本寺叡岳、鎮西「仁波」本山内山、被崇国内、被祇郡内、雖然聖朝外朝国司郡司、全不令制止山野草木等乎、以之思之、篤房一人非例非法也、加之篤房違代国判、背往古旧記、狩傍示内禁野、殺伽藍辺猪鹿之条、付冥付頭、有危有過者也、又去去年篤房之所進府解状称、篤房先祖有指宿願、申請国司、以私田園寄進臺明寺「云々」、是大無実也、大虚妄也、其旨見於故行賢寄文状、以一推万、誑惑甚也、宰府依不令地案内、於彼解状、被成御外題欺、但可付証文「云々」、未敢定判御外題也、臺明寺公驗寄文証文明白也、篤房者不帶一紙書状、不取出可為証文指本公驗、而於四至有限寺領田園押分取之条、実以罪科不輕乎、望請鴻恩、且為仏法、且任実正、令停止篤房之条々非法一々誑惑給者、捧恒例不退仏事之功、忝奉祈府国安寧之由、靜

念誦輕勤行之心、高奉仰正理憲法之貴、以解者、如証文者、事為功德、早停止篤房妨、可令勤行恒例仏事之狀、如件、

應保二年十月廿九日

少監惟宗朝臣 (花押)

大監大藏朝臣 (花押)

大監紀朝臣 (花押)

大監大藏朝臣 (花押)

大監菅野朝臣 (花押)

監代大中臣朝臣 (花押)

監代紀朝臣 (花押)

監代藤原朝臣 (花押)

監代御春朝臣 (花押)

監代豐 嶋

監代紀 (花押)

監代藤原 (花押)

監代紀 (花押)

監代清原 (花押)

監代源 (花押)

監代紀

監代紀 (花押)

權大典藤原

242、《書籍頁二五八六》

○三二三七 しげよし田地売券○東寺百合文書ミ

うりわたす田事

入(合力)半者

右件田ハ、ふち井のしげよしかさうてんの所りやう也、しかるをよ
うくあるにて、せに七くわんもんニうま允(三)なかくうりわ

たす所しち也、たし本けんもんハる(い脱)ちもあるにて、そ
へしするにおよハす、よてた人のさまたけあるへからず、仍為後日
うり文の狀如件、

應保二年十一月 日

しげよし(花押)

243、《書籍頁二五八八》 *仮名交じり文

○三二四四 僧理真書狀○京都大学所藏東大寺法藏堂文書
文書神妙したゝめて、令進候、於今者、早御房を令造給て、遣水石
立など、せさせ給へく候、委令期見參候、謹言

(應保三年)二月十日

僧理真

244、《書籍頁二五九一》

○三二五一 大和国北系井莊使解案○根津美術館所藏文書
被分中系井庄七町余、進官【者不】及本庄之沙汰、仍代始(三八)
如此【雖出来】沙汰、注子細也、令言上事之【由尅(二八)】不及沙
汰之狀、言上如件、

應保三年二月 日 北系井【御庄使】

245、《書籍頁二五九一》

○三二五二 大和国宇陀郡神戸檢校玉造有里解○陽明文庫所
藏兵範記仁安二年十一月卷裏文書

大和国宇陀郡神戸檢校玉造有里解 申請 殿下 政所裁事

請特被任解狀旨裁定、有直為非姓他人(テ)、致檢校相論間、去十
二月比、率数多軍兵(テ)、打入神主有里(カ)住宅、追捕色色□
□子細狀、

副進注文一通

右、謹檢案内、彼有直(ハ)故有国之從者也、又有里(ハ)故有国

藤原朝臣□□

之孫有時之嫡子也、而任嫡嫡理、被補檢校職之處也、然間不慮□□、件有直巧謀叛、致狼藉之条、不可思議、言語道斷事也、須□□死去之後、無左右雖可被補檢校職、有里為幼稚無職(シテ)、自然□□也、其間構無実、依氏人申、実正雖不知食、出来有国之手□□暫被補檢校職了、雖然有里任嫡嫡相伝之理、被補檢校之□□有異論哉、就中有道理者、任憲法可致沙汰之處(ニ)、偏巧□□、相具隨兵(シテ)、追却宮本神主之条、古今未曾有事也、兼又去□十一月之比、有里參上 二宮(テ)、備御供祭物之間、俄出来宮内穢□□、預置權補宜延貞許(ヲ)二季御供祭物、今年正月之比、有直□取了、実旁其罪科不可勝計者也、望請恩裁、且為被糺返彼□(供力)祭物、且為被停止如此狼藉、言上子細耳者、任解狀之理、被裁定□、弥仰 正道之貴嚴矣、謹勒在狀、以解、

忘保三年三月 日 玉造有里「解狀」

246、《書籍頁二五九四》

○三二五七 飛驒国調所解○中右記部類第十六裏文書

調所

被仰下御斤相違陳狀事

右国本斤、以去々年大隅前司様(天)副本斤□(進力)畢、彼本斤自国今被召上、件斤(ニ)先進斤可減之由被仰下之、彼先進之御斤之非調所沙汰、大隅前司令樣進之後、無其例□、件斤緒解(天)依被差木釘不足出来□(敷力)、不審之事也、且又本斤一兩(ハ)先例下斤二□分也、而故遠江守自下向之時、本斤一兩□□三兩(ニ)所下行也、件三兩下斤(ハ)彼国司不被置、其後(ハ)以本斤所被准下也、於運上物者、本斤所令運上先例也、大隅前司在京、子□(細力)所知也、且被召問無其隱欺、陳狀以解、

長寛元年六月六日惣判官代藤原朝臣□□

榎井宿禰□□

247、《書籍頁二五九五》

○三二五八 飛驒国調所解○中右記部類第十六裏文書

斤相違事

先進五兩八分、今度四兩一分、
国斤二不同也、

先進五兩 藏人所十三兩二分

今度進五兩(ハ)藏人所十四兩一分

此定候(を)、慥様可令進上給也、五□藏人所定十五兩候由(を)聞食□不足候、先不便候也、十五兩可□可被懸候欺、

直様(たに)分(ハ)不□事也、本斤輕(ハ)不足仕、極道理□斤(ニ)進上也、直早可令進、於□分(ハ)不足仕事(を)相量、可被□上候つる、

五月廿日 散位本上□□

五月廿日 散位本上□□

248、《書籍頁二六〇四》 *仮名交じり文

○三二七七 某書狀○石山寺所藏聖教裏文書

布事承候了、定又到□候らん、今度之御年貢(も)未進只以其可被察候也、謹言、

昨日為梅津殿御共、去夕罷□候也、心閑見參、実大切候、今戸部前羽林相伴、被向□眼之許候也、渡御神妙候なむ申候、殿下元三饗事、

早申上了、可沙汰□候さりとんと□と思給候、催少舍人、于今以□光申事之旨、可下知候欺、

宿直人献也、□事期面□、謹言、

長寛二年卯月一日 □□

249、《書籍頁二六〇七》

○三二八〇 紀円正田地請文○高野山文書統宝簡集四
□(円) 正謹 申請那耶間田事
合大者

□(右) 件田、雖円正年来作田、彼本□(公) 驗已実修房相伝得御
坐(セリ)、□(任) 年来作人申請、可耕作仕□(之) 状、如件、
長寛二年五月廿日 紀円正(花押)

250、《書籍頁二六〇七》

○三二八一 薩摩国新田宮前執印桑田信包請文○薩摩旧記所
收權執印文書

新田宮先執印桑田信包謹言

押書事

右件押書根元者、宮御領市比野浦公驗等、以去年五月中旬之比、為
沙汰隨身令參洛之处、指無御沙汰之間、件浦御公驗等、留守御房(三)
進上畢、然彼公驗依不隨身下向、難遁諸司等勘発者、於公驗者令參
洛、本家申返、如本可令進 宮之状、如件、
長寛二年六月一日 五世王□(ヨメズ) (花押)

先執印當時五大院主桑田(花押)

251、《書籍頁二六一一》

○三二八八 紀伊国神野莊住人等請文○高野山文書又統宝簡
集八十七

謹奉 請金剛峯寺大衆御請文事

右、任御下文旨、神野住人等於自今以後者、御寺御領(トシテ)可
公役勤仕状、如件、
長寛二年七月十六日神野御庄住人等

赤坂助延(略押)

真上久永(略押)

真上友房(略押)
坂上友弘(略押)
高向安則(略押)
国寛守国(花押)
国寛兼永(花押)
長 重元(花押)
長 永次(略押)
長 行友(略押)

252、《書籍頁二六一三》

○三二九〇 讚岐国普通曼茶羅寺所司等解○東寺文書樂

(端)「普通曼茶羅兩寺解状」

讚岐国東寺末寺普通曼茶羅兩寺所司等解 申進 本寺政所裁事

請早被触国衙、任経数百歳例、免除之寺辺三昧所司等在家廿五家
国役公事并往古寺領志侍嶋一基兼又春田十三町糸綿紅花等、宛
懸令責堪(勘) 愁子細之状、

右、所司等謹檢案内、善通寺者、是弘法大師先祖之伽藍建立之後、
致五百餘歳、大師以泥土手自造立薬師尊容、書写金光明最勝鎮護国
家妙文、以五神筆懸四面之額、曼茶羅院者大師入唐帰朝之後、卜密
教相応地、建立一院、造立手自七牀之諸尊、所奉安置給也、所謂大
日如来金剛薩埵請觀世音梵天帝釈毘沙門吉祥也、誠結界嚴重聖跡、
靈驗揭焉勝地也、依之代々国司、殊致帰依、任々宰吏、專令仰崇、
然者保延四年之比、出雲前司藤経高任(二ノハ)以散在寺領被一箇
已畢、又藤中納言任、重被一箇畢、然而此一兩任一箇(ヲノモ)乱、
又散在之時(ノ)往古寺領志侍嶋(ヲモ)被押領、偏背旧例、纔寺
辺(ニ)所居住之三昧所司等(ニモ)懸種々国役、有限奉免之春田
(ニモ)、俄今付巨多之国役、被責堪(勘)之間、自大師御在世之時、
所被始置恒例鎮護国家御願并国吏安穩祈願仏聖燈油之勤諸仏事等、

已皆以及闕怠畢、愁中大愁也、上件条々非例事、為国衙（二八）雖不幾、為御寺（二八）經三百餘歲恒例諸仏事等已闕怠之故、尤可愁可悲、望請恩裁、早任解狀之旨、被致御沙汰者、弥仰大師御勢、奉祈 朝家泰平国吏安穩之由、无兩寺之牢籠、期慈尊之出世、仍勒子細、以解、

長寛二年七月廿日

上座大法師（花押）

少別当大法師（花押）

權別当大法師（花押）

253、《書籍頁二六二一》

〇三二九八 摂津国垂水東牧吉志部村定使藤井貞宗重申狀〇

陽明文庫所藏兵範記仁安二年秋卷裏文書

垂水東御牧吉志部村熊里定使藤井貞宗謹重 進上申文事

請被特蒙 鴻恩、且任度御下文御外題旨、御裁許給、御牧□公文山田助俊・次田成俊等巧謀叛好惡事、為御□築留竹池水切流、又主殿所等、背数度御下文、不□隨□、然彼等（加）所行、為糺沙汰仕、且賜御使（テ）、欲致沙汰□□、

一於熊里領掌者、于今不始、依忝 院宣政所御下文（二）牧役御□□数度也、雖然次田成俊住人等、全以御勢不憚、誤（テ）任御免判（テ）、築留池之水堤、散散切流畢、故何者、熊里（二八）去年九月之任御旨、為朝日原領、作彼竹池之水築留、其時成俊住人等解狀、□□言上子細畢、雖然、其解狀貞宗給預（テ）在狀一一陳申上畢、然□等未蒙御裁許（二）、好惡事之条、実以不可称計者歟、一貞宗有難忍之事、去以二月十九日不図之外、故禪定殿下□□、爰彼人等号当年序、外記大夫之下知、其薨御（おほ）不歎誤（テ）乎、不蒙御裁定罷下（テ）、同廿八日或兵仕構（テ）野伏隱置、又数百□□癸集（テ）堤切日、熊里之沙汰物、欲取籠凌蟻「足十樂」、雖呼招於貞□□、且御死去之思切也、且院宣政所御下文為不成空、

不出相者也、□□

有大訴、故何者、如構申住人等者、実以不隱便事也、当年□（外力）記大夫之下知云、雖令言上子細、不蒙御裁定、只不如以謀□□、堤切覽時（二）、貞宗等（おほ）招寄（テ）、欲快（決）勝負、定出惡事（テ）、隨其過□□云々、若此事実者、御勢不恐之人者、御牧有年序（ト）哉否、□□不然者無実（おほ）申出住人等有過怠哉否、但賜御下文数度、□□非熊里高名、忝 院宣 無止事故也、何年序云、住人等輒可□儲其旨之哉、尤為後々傍輩、可有御沙汰者歟、

一件竹池又熊里領朝日原之御供田申給（テハ）、如年序、公文之不可為私□有限、春日為奉備御供米也、但御供田有数、何其外熊里領田□開作（テ）不弁進御供米、不勤領家公事、任我意（テ）、可私顧用之□□、御外題（三）為專神役、可停止对捍之作人云々、雖然重当殿下□仰令言上子細者也、然如前前、任院宣旨有御沙汰（テ）、彼人等□□他領（おほ）自作仕（テ）、不弁御供米、領家之進退（二）不叶之者、速各停止、□□作人如解狀、被御裁定（テ）下遣御使（ヲ）、被糺御沙汰（ハ）、將仰御公道□□

一牧内公文助俊所行言語道断事也、何故者、故禪定殿下御時、去年□非道（二）押作熊里領田之事、又年来之隱田可糺沙汰之由御外題□仕（テ）、隱田（ハ）沈理、不言上子細、又押取田（ハ）、乍毛却進畢、雖然故□□殿下薨御（テ）、又今年件田押作之条、忝非令忽緒御勢、然□□死去（おほ）非悦思（二）哉、尤可有御遺迹、却進田（おほ）物之見気色（テ）、還□□隱田之過、被糺沙汰者、弥仰御勢蔽旨、仍（勒脱力）子細以解、

田依申請神事宛行畢、隨又領家之役（二）去年十二月（二）、院□□諸人夫宛行（二）、全不承引（シテ）、各致放言、然其後神役領

家勤仕、然是非他、只助俊(か)非道之所行見習也之者、且為後々
□□神役領家役對捍之主殿所等(か)所作田被押上(テ)、如解狀
有御下遺御使(ヲ)、為被糺沙汰、(勸脱力)在狀言上如件、以解、
右条条解狀如此、抑任解狀之旨、下遺御使、一々分明被致御□□者、
弥仰憲法之貴、仍勒子細在狀言上(如件脱力)、以解、

長寛二年七月 日 藤井貞□(宗)

254、《書籍頁二六三一》

○三三二一 僧良仁田地避文○田中教忠所藏文書

(端裏)「持律房弁進相賀田新券文」

謹辞 御供米代所令奉進田地事

合老段者 在字伊都郡相賀御庄内細川

四至(東限正義作 南限小道/西限貞末作 北限武成作)

右、件田地者、僧良仁相領掌處也、然(を)御供米式斛玖斗參升代
院主御房(政所)件田令進上、為後日沙汰、本券相具足(シテ)、放
新券狀、如件、

長寛二年十月廿五日 僧良仁(花押)

255、《書籍頁二六四一》

○三三三四 預所某書狀○東大寺文書四ノ七

進上

餅柒拾枚

右、進上如件、

抑昨日可令進上候之處、築瀬御庄之夫(ヲ)指(テ)候(ハ)、力(ヲ)
かきて候也、謹言、

長寛三年三月三日 預所(花押)

256、《書籍頁二六四二》

○三三三八 藤原武国田地売券○光明寺古文書

謹辞 永沽渡進治田立券事

合百八十步(在二見郷内字御塩田者)

四至(限東同田破目 限南利多寺領田/限西同田破目 限北利多
寺領)

直捌丈老疋加代米式石請了、同(花押)

右、件治田元者、故友近之領財也、而友近之手(より)重友処分得
(天)進退、重友之手(より)武国得(天)進退知之間、更無他妨、
而依急用(有)有限件直物、永所沽渡進伊勢行成如件、然者次第本目錄
相副、新立券、以辞

長寛三年三月十五日 藤原(花押)

257、《書籍頁二六四三》

○三三四一 某書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年秋卷裏文書

逐言上

吳庭庄本解并具書安三通令返上候、恐々謹言、

先日以下家司久行所被仰下候吳庭庄訴申山本御菌領田畠一町八段事、
□尋沙汰候之處、陳狀所進□候也、如陳申者、吳庭庄訴□旨、無其
謂候事歟、就中此沙汰、非当御園候、橘御園□内并舍人等負田等、
為改□□領内之由、雖有同訴、依披陳□□其沙汰不候之旨、山本御
菌□等所訴申候也、況有限雜事免内、多流失之上、又依彼口論、被
押妨候□、弥可為寺家之懈怠候(を)、又自餘領主等

258、《書籍頁二六四五》

○三三四四 豊前国漆嶋某荒野売券○樋田文書

□□□解

沽渡進荒野式段之事

在葛原郷内字稻余しほ

右、件荒野柴嶋種次（仁）、限永年所沽渡候也、仍為後日沙汰、沽券如件、

長寛三年四月十日日本司柴嶋（花押）

本司柴嶋技行（花押）

郡司柴嶋（花押）

259、《書籍頁二六五八》

○三三六三 僧玄巖書狀○東南院文書四付録三

宣旨二通（一通初度午剋到来、一通二度酉剋到来、）

網牒一通等如此、件礼服来廿七日御即位料也、而今日午剋被下初度宣旨之間其状依不分明、勅封藏綱封藏之間、納置之所不知及、若綱封藏候者、無左右僧綱所可被取進、若勅封藏候者、早勅使可下向之由、令申御之処第二度如此所被仰下也者、綱封藏（に）被納置者、早開此網牒、催使綱所、不日令取出（天）、寺家使定、以夜継日、可令進覽給也、若又勅封藏候者、早以脚力夜（の）中（に）可令申上給也、期日近々之間、勅使往反日すくなきかゆへに如此所被仰下也、早々可令沙汰進給之由候所也、謹言、

（永萬元年）七月廿二日

玄巖

今少路威儀師御房

逐申、

為朝之大事、早々可令致沙汰給、期日近々之間、若勅封藏候者夜内々可令申上給、勅使下向之故也、綱封藏候（ハ）、早々可令取進給き分（ハ）、為寺家執行所司早談合、可令致沙汰給也、行惣書状抄所遣也、凡忿々之間、書状狼藉不可令外聞給候、重謹言、

260、《書籍頁二六六〇》 *仮名交じり文

○三三六七 国作友沢白瓜等送状○西園寺家記録裏文書

進上 国作友沢上

みなこ一荷
白瓜一荷

右、進上如件、御官物之少々成（天）候、此之向笠置越可参候、抑先使武沢納官物之納帳、ヒトヘヨ子之定御倉納、已上拾石六斗、又ツイシ子一石一斗、是米等御倉（ニ）一合候（はず）、又御倉稻、武沢之時十束うせ候たり、

永萬元年十一月晦日 御使友沢（上）

式条内私用物

林元二石一斗（十月十九日） 共重四斗四升七合

【共〇】一石三斗二升（十月廿三日）【武井】九斗四升三合

都合

康近口物一斗二升 末成進

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇一井

同取稻一束

案主大夫〇〇〇〇真麻布

261、《書籍頁二六六八》

○三三八二 豊前国漆嶋枝末屋敷讓状○樋田文書

〇司柴嶋枝末謹言

讓渡養子柴嶋種次屋志き壱所事

〇件屋志き壱所、字佐加垣、枝末ちやく子枝行（ニ）、先日讓渡故（毛）、今（ハ）柴嶋種次（ニ）所讓渡実也、仍但為後日沙汰、注事状、以解、

永万二年二月廿九日 本司柴嶋枝末（花押）

郷司柴嶋（花押）

262、《書籍頁二六七〇》

○三三八七 散位足羽友包起請文○石山寺所藏聖教目錄裏文書

敬白 申起請文事

右、梵天王帝尺天衆五道冥宮天王天衆四大天王日月御星二十八宿殊
王城鎮主十八大明神鴨下上八幡三所松尾滔□平野大原(野脱)北野、
別(テハ)当郡(初版「国」)鎮主山王七社王子眷属櫛部兵主三神大
明神当郡鎮主三尾十九所大明神□□八所当御庄大井小井等大明神、
惣日本國中六十余州一万□千七百余所有勢無勢大小神冥道、前(ニ
モ)後日(ニモ)三尾御庄石山寺御領為御本家預所御惡言仕、又事
ヲロカニモ当寺□□候者、又預所(乃)田(ニ)札立点定制止候
田(ヲ)苜取候者□□上件大小神儀冥道罰拔可散位足羽友包自身
上近三日遠七日中毛蒙如拔、

永萬二年三月廿二日散位足羽友包敬白(花押)

263、《書籍頁二六七二》 *別書のみ

○三三八九 犬女出举米借用状○白河本東寺百合文書一一九

ヒノエイヌ

『五斗 にしのこうたい女とのへ きたおもて□』

借請申御出举米事

合伍斗者

右件米、以来秋時加伍把利可弁進、但過八月者、加每月利可弁進、
仍為後日沙汰、注事状以解、

永萬二年四月三日

犬女

中原氏(花押)

264、《書籍頁二六七五》

○三三九六 僧永祐出举米借用状○白河本東寺百合文書一一九

ヒノエイヌ

『九石四斗 クシケノコウタイカトノ、トリ』

借請申御出举米事

合玖斛肆斗者

右、件米、以明年七月日、加五把利可弁進、件七月過者、追月加壹
把利可弁進、但過明年者、自七条南自櫛筒東角地戸主半口式丈伍尺
奥拾丈(ヲ)質券(ニ)差置奉、永可令領掌給、但過明年者、加伍
把利可弁進、仍為後日、不可在他妨、故注書(在力)状、以解、

永萬貳年七月五日

僧永祐(花押)

散位紀正清(花押)

紀清則(花押)

中原氏(花押)

265、《書籍頁二六八〇》

○三四〇六 僧円賀島渡状○尊經閣所藏文書

四至(限東際目 □□限西法乘房領 限北大道)

在平群郡七条六里十二坪之内西辺

□□元者、源姉子先祖相伝島也、而今孫子藤原正行□□取了、
正行得新券、出举稻七束差置質物取了、其後全以不佐汰(志て)成
巨多、仍清原姉子彼稻廿束成年、□絹一領三斛納米捌斗六升五合出
(テ)、彼券取出、而僧円賀公驗文書相具足□(テ)、清原姉子渡了、
仍為後日佐汰、勒兩人署名、放(新)【雜】卷文状、如件、

仁安元年十一月廿四日

僧(花押)

266、《書籍頁二六八〇》

○三四〇七 紀伊国藤原忠村田島処分状○隅田文書

宛行 処分田島等

合

一処 芋生居内家地田島在屋立物等

四至(東限榎堤瀬南限吉野河 西限築垣際 北限田北今延井尻

堀を西辺是垣屋西繩際)

字清元法師〈内〉一町内、畠七段田三段大

四至〈東限是垣西畔但船橋際 南限溝 西限畔 北限田北方〉

次西有、次垣内七段〈内〉田三段畠四段

字池田南正元垣内作五段〈田〉、在又荒、

次東友貞垣内作三段〈畠〉、在又荒、

河南字小犬坪一處作三段〈田〉、四方在畠〈并〉荒、

河南字小芋生重任垣内作三段畠〈在栗林、荒〉、

四至〈東限藤瀬登道 南限上壇 西限上津菅河 北限吉野河〉

字小西垣内延助作六段〈田〉赤墓梨子本六段〈内〉田五段

畠一段、

樋口三段〈田〉、兼行作〈在北西荒〉、

次河東作小〈田 在山〉、

字隅田田并鳥居坪一町字池田大狹畔七段

「於戸たて三段者僧良福沽却了、」

次西堤内字四段田〈田〉四段〈春武替田〉字戸たて作三段〈田西

北南在荒〉

次畠田四段〈兼松作田〉次北迫作一段〈田是正作 北南在荒栗林〉

字して谷二段〈田友枝作〉次南字東中野二段半〈田友任買田〉

字一處みの原荒〈荒瀬北田一段〉迫田〈二〉畠三段

字高藏一處保太作〈荒〉

切山分一處 四至〈東限是正東峯 南限瀧藏堂并東今川 西限峯

北限十角堺□□之

則行居内畠二段 次北是元作田二段

次南〈二〉下三段迫田一段 次北武友垣□□

尾前三段〈田〉貞延作 東谷〈に〉是元作二段

切山八段〈田〉 延国垣内四段〈田〉

是正垣内一段〈田〉 字講瀬武重垣内五段〈畠〉

鳥坪居一段延光作 字木原細野尻田三段〈又四段〉

字十豆野一處〈田一町□段 畠一町在荒〉 四至〈東限峯 南限

切山堺 北限峯 北限高峰〉

字河原一處作二町五段〈田 在荒〉 四至〈東限峯 南限安田池

北 西限黒田山安元垣内西割目際 北限峯〉

右、紀伊国隅田御庄内田畠林等、公文散位藤原忠村先祖相伝所領也、

而於四界、藤原忠頼永所處分渡、如件、

仁安元年十一月日 公文散位藤原〔花押〕

「上件處分田畠等、藤原忠村之所領顯然也、仍加在地刀禰等序判、

別宮別当大法師〔花押〕

上野〔花押〕

僧〔花押〕

丹治〔花押〕

紀〔略押〕

橋〔略押〕

□□

□□

僧〔花押〕

清原〔花押〕

□□

佐伯〔略押〕

池野□〔略押〕

川瀬〔花押〕

紀貞末〔花押〕

預所八幡宮寺権上座兼少別当大法師〔花押〕

267、《書籍頁二六九〇》

〇三四一四 感神院大別当桓円解〇田中忠三郎氏所藏文書

感神院大別当桓円解 申請 延曆寺 政所裁事

請被殊蒙 鴻恩、任道理、且依親父契狀、下 寺牒当社保□□波々伯部村保司職事、

副進 契狀案一通

右、謹檢案内、件保元者、桓円祖父故權長吏行円之私領也、然令寄進当社保之後、為国司被押領及數十年、爰桓円之親父故隆円大別當、以彼文書持明院大藏卿丹波国務之時、□□□(被立券力)之由、多年雖訴申、更無承引之間、為当国所課 故侍賢門院御願仁和寺法金剛院可修造之由、令蒙其宣之日、国司材木巨多令相尋之刻、隆円大別當欲立保(ハ)、可進材木、可成賜庁宣也(ト)被仰之處、隆円雖相尋東西、一支一物不求得、其時桓円以材木六十物、依令進国司、即成賜庁宣畢、是春之比也、同年八月之比、又梅宮社造功被勤当国所課之時、国司又被仰云、国中之大事頻也、如春時色目員可進材木也、不然者彼保(ニ)入国使、可到其沙汰也、其時大別當隆円失計略、又桓円可構進之由(云々)、仍如注文又六十物令進国司畢、契狀顯然也、存其旨、數十年之間罷過之處、去仁平四年十月廿七日夜、不告桓円、繼母廻種々支度、七旬罷成之上、自七月之比、沈重病不知東西、隆円(ヲ)取手令書処分文、押件保(ヲ)藤原氏讓(ト)令書(天)、以同廿八日隆円兄弟三人応円・賢円・基仁等已請寄、令乞桓円判、桓円申云、先不告桓円、蜜令書処文之条、尤遺恨也、其上(ニ)又於桓円者嫡弟也、隨大別當也、於保者尤可被讓之、隨令進立保之任料、約束文已以顯然者也、何可有變改哉、不給保者、不可加判、但親父申狀難背、然者藤原氏存生之時、件保知行之間、更不可到妨、藤原氏逝去之後(ハ)、桓円儘可領知件保也、仍為將來沙汰、專不可加判之由、桓円申之時、件三人力不及罷歸畢、其內權長吏賢円・基仁大別當見存之人也、被召問(ニ)、不可有其隱、如此論申之間、繼母・昌玄等与桓円不快、当社之内上下諸人皆所見知也、繼母(ト)申(ハ)即昌玄之母也、件兩人巧猛惡、雖張行非道、且依恐本所之御威、乍抱訴訟、自然罷過之上、神慮難量之間、不致沙

汰之處、如此令逃脫畢、今付訴申頗有其恐、然而早任道理、桓円可令知行彼保之由、給 御寺牒者、尤仰正道之貴矣、仍勒子細、言上如件、以解、

仁安二年二月五日

大別當大法師桓円

「依解狀之旨、可領知之由、延曆寺御下文被成下畢者、早知彼保、任何可被調勤日別御供役之狀、如件、

小寺主法師永嚴

公文法師(花押)

(*以下法師の歷名省略)

268、《書籍頁二六九九》

○三四二六 源頼信解案○古事類苑神祇部九十一所収嚴島神社文書

散位源頼信解申敬一宮權現卅三社御前□□貢上

伝領三田郷田畠林栗柿桑等伝領公驗立券等代々文書事

合

在高田郡内三田郷代々公券柒枚

讓与進文書等

民部大夫佐伯朝臣影広

一通、水田八十六町一段三百五十步

一通、畠六十八町三段百步

一通、有御庄(ト)時之立券文内百十一町

一通、代々相伝譜代子孫郷司讓与来手次文書

二通、三田風早郷司執行御庁宣

一通、御庄立券之時、為地主、官使史生等供給雜事注文、

右件郷、故成孝朝臣先祖相伝所給也、依為養子、父存生之時、頼信

公驗相共、讓与事实也者、因之為伝領所領、依内□一御宮神主民部

大夫佐伯朝臣影広(ニ)、於公券者讓与進了、依御宮為御領御庄、於

官物畠地小粟十二个月料每月御神樂為饗膳雜事料、貢上如右、敬白、
但大常大臣（平清盛）殿為御壽命長遠所、每年当十二月每月御神樂
料申上了、敬白、

仁安二年六月十五日 散位源頼信（花押）

269、《書籍頁二七〇四》

〇三四三六 平宗盛書狀〇神田喜一郎氏所藏文書

おほいとのお申せと候、なりつなの申候みのくにおほみのまき
のこと、いそき申させおはしまして、しけのくたしふみ、なりつな
にたふへく候、なりつなかりとこそうけたまはり候へと申せと候に
候、あなかしこ、

（仁安二年）九月十八日

（平）宗盛

右兵衛督殿

（端）「（切封墨引）」

宰相中将 濟綱申麻統牧事

宗盛」

270、《書籍頁二七〇五》 *裏書

〇三四三八 太宰大式庁宣案〇東大寺文書二ノ五

（端裏）「宇佐勅使雜事免除府宣案」

庁宣 大宰府在庁官人等

可早免除觀世音寺領碓井封宇佐勅使雜事等事

右件雜事、先例雖不令勤仕、前々自府国、無左右令切懸之間、触事
煩（之云々）者、件役一切不可令支配之状、所宣如件、在庁官人等
宜承知、依件行之、以宣、

仁安二年十月廿日

皇太后宮権大夫兼修理大夫大式口朝臣（在判）

（裏）「追申上」

此事為後日可申上 政所御庁、可御沙汰候者、為彼封極煩大

事（ニテ）候者、能々申大式殿、筑前守可仰下也、恐々、

271、《書籍頁二七一〇》

〇三四四九 肥前国杵嶋五所社司藤原貞門解〇武雄神社文書

「可依口（前カ）例、（花押）」

杵嶋五所社本司藤原貞門解 申請 実檢所御裁事

請被殊蒙 鴻恩、任解状旨、裁定武雄黒髮兩社浮免陸町勘料子細

口、

副進 府国施行等

右、謹檢案内、五所社は当郡鎮守、聖朝外朝之御祈口所也、而於
武雄・黒髮兩所者、其中為第一之靈社、然者口信心令奉仕之輩、必
預松栢之齡、捧弊帛令祈念之口、又含一家之榮矣、仍去年勘料町別
宛四丈白布式口（段）、雖令弁進、尚又宛五段可弁進之由、蒙其責之
条、大訴口、若先々式段（乃）布（与利）外（二）令弁進候（ハ）、
王城鎮守九国口口口公神（乃）罰（を）可蒙候、兼又賜府国施行之
後、全以不口口、縦他社（三）併雖令弁進五段布、只於此兩社者、
垂口推察、可有裁免而已、望請 鴻恩、早任解状之旨、口御裁定者、
弥仰 神威之貴、奉祈安穩大平之由口、仍勒在状、言上如件、以解、

仁安三年二月十三日 本司藤原口口

〇印（文不明）十五アリ。

272、《書籍頁二七一一》

〇三四五二 備前国金山寺住僧解〇金山寺文書

「件樹木伐事、任先例、早可令停止件妨之状、如件、

目代 （花押）」

金山寺住僧等解 申請 留守所 裁事

請被殊蒙 鴻慈、任先司先々司之例、裁免下給、院内林樹木御野

堰料、在庁并百姓等申下御庁宣、被擬切用子細之状、

副進 先々司御任御庁宣一通

右、謹檢 案内、金山寺者は報恩大師建立、観音靈驗地也、毎年毎月日々時々之仏神事行法等巨多、而奉祈聖朝国史留守在庁於松子亀鶴、院内樹木偏為仏陀莊嚴神明嚴饒之料也、全非住僧衣食依怙之料、而或致於猛惡、或住盜心、各切取仕之間、樹木狹少成(天)、僅所殘堂舎之至辺許也、爰伝承之条、在庁并百姓等申下御庁宣、金山林悉可切用云々、无缘貧道无極之上、弥被致在庁於阿儻者、依何片時止意、可勤行仏事等仕哉、望請 留守所(裁脱力)、且為仏法興隆、且為御願成就、被令禁断林切取之輩給者、將仰正道憲法之嚴、弥奉祈御一家繁盛之由、仍注子細、誠惶誠恐謹言、

仁安三年二月廿日 金山寺住僧等上

僧快円

僧相暹

僧嚴雲

273、《書籍頁二七一九》

○三四六六 源義重讓狀○正文書

ゆつゝるためのかうくの事、をん那つ加(女塚)、をしきり(押切)・せらた(世良田)・かみひらつか(上平塚)・見つき(三木)・しもひらつか(下平塚)・こせんのたかんなり、たのさまたけあるへからす、このむねお承候へく候、ハ、百さうさたのそのあてとすへし、たしかにくゆつりおハぬ、

仁安三年六月廿日 源(義重)(花押)

274、《書籍頁二七一九》

○三四六七 源義重讓狀○正文書

下 (花押)

こあまたあれと、らいわうこせのハ、の事をもへハ、にたのみさう

ハゆつりたるなり、ハ、の事、らいわうこせんをろかにあるへからす、それにとりても、こかんとてハ、らいわうこせんかハ、に、みなゆつるなり、ハ、かためニおろかニあるへからす、たかのかす、おんなつか(女塚)・えたかみ志も(江田上下)・たなか(田中)・お、たち(大館)・おすかハ(粕川)・こすみ(小角)・をしきり(押切)・いてのつか(井出塚)・せらた(世良田)・みつき(三木)・かみいまい(上今井)・しもいまい(下今井)・かみひらつか(上平塚)・しもひらつか(下平塚)・きさき(木崎)・丁ふきし(長福寺)・たこう(多古宇)・やきぬま(八木沼)、このかうく志たいニゆつりわたす、たのさまたけあるへからす、あなかしこく

仁安三年六月廿日 (義重)(花押)

275、《書籍頁二七二二》

○三四七七 藤原中子注進狀○東大寺文書四ノ七十三

今北垣内於伍間者、藤原仲子買取畢、但五間之内(三)溝料壹尺留畢方(ハ)、可便宜、本券新券之面毀了、即池料溝也、為後日沙汰注進、

仁安三年十月廿日

買人藤原中子(花押)

276、《書籍頁二七二七》 *仮名交じり文

○三四八四 大山行貞田畠充文○高野山文書続宝簡集六十五

(端裏)「垣内」

充行 所分長田畠之事

合畠壹段小者金剛峯寺御庄内板やかき内大やふ村

四至(東限谷 南限小道 西限推上座作 北限近行作)

又太上中道南田壹段(裏)「之内中道南田売渡紀末行除了、承久三年十二月十八日、丹生家国垣内西半ハ除了」

四至（限東諸永作 西桓絳作 南高力房作 北大路定）
充行 畠之事

合式段、東方者、（佐夜利大柿垣内者）、（裏）「之内南端老段京尊
除了、」

四至（限東光里作 南限垣根 限西常本作 北限明乘房作）（裏）
「之内東前田分專仏御房売渡奉了、破除了、」

右件畠、元大山行貞地也、而橋（嫡）為、大山国貞（二）限永代、
所分わたす、依後日さたのため（二）、泰（券）文はなつ状之如件、
「又加宛行かま力石ナハ定壺口、」（裏）「之内西小專仏御房売渡了、
仍除了、丹生家国西半除了、」
右件田畠、元記（紀）行貞相伝領地也、而橋やう為二、大山国定限
永代、処分わたす状之如件、
仁安三年十二月一日 大山行貞（略押）

277、《書籍頁二七二九》

○三四九二 大和国榎本莊住人等解○興福寺本信円筆因明四
相違裏文書

榎本御庄住人等解 申請 西金堂御裁事

請特蒙 恩裁、被致沙汰当庄田堵友貞丸等（ヲ）殺害并盜取上分
米愁状、

右、去年二月廿一日夜、件友貞丸住宅強盜打入候、而友貞等納置上
分米御藏（へ）逃入、尚追取（て）、友貞并妻子三人則時殺害畢、蒙
雌（疵力）輩男女其數、然後彼住宅并御藏上分米等悉盜取畢、為庄
家惣別大愁候（へトモ）、依指現証（ヲ）不見候、空過年月之間、去
比 政所御童子十郎（カ）父母（ヲ）殺害（セル）者共、被擲召之
内（二）、友清丸（字居志追捕使）件友貞殺害事（モ）我等所為也（ト）
申候之由、内々（二）承候（て）、尋問（ト）仕候（二）、件犯人預
（ノ）稲戸太郎君、政所（ヨリ）預賜（タル）犯人（ナレハ）、私沙

汰（ヲハ）不可用（トテ）、不令問候也、望請 恩裁、早為御堂御沙
汰、令申 政所御（て）、以御使可令問沙汰也、若此御沙汰不候（ハ）、
為後代大愁候敷、以解、
仁安四年二月十一日 榎本庄住人等

278、《書籍頁二七三〇》

○三四九三 尼心仏置文○関戸守彦氏所藏書
（端裏）「鉢臥小塩田券」

きたをの日しりのたは、法けうの御房の御れうにとて、かひたるな
り、たしかにさまたけなくしらせ給へし、よしみねのさかもとの田
なり、
仁安四年二月十一日 尼心仏（花押）

279、《書籍頁二七三二》

○三四九七 興福寺僧基暁解○興福寺本信円筆因明四相違裏文書
伝燈法師位基暁謹解 申請 御寺 政所御裁定事

請被特蒙 恩裁、任道理裁定、為僧暁円無指証人、処於盜犯、引
率衆多輩、成降魔相、打入基暁之住房、擬及繩木、狂惑押取房
地愁状、

副進

在地并新薬師寺住僧近隣（隣）学衆又龍花樹院判行案一通
右謹検案内、盜犯之習者、所被取之物頭（れ）、又可依指証人也、而
間其暁之所盜取鍋（とて）、暁円既取畢、是極僻事也、件鍋者成唯房
（と）申修学者之母尼之鍋也、爰尼并成唯房申云、我等之鍋（と）
取籠（天）、被盜鍋（と）被申之条、極僻事也、能能被見（と）申
時、暁円申云、実（二ハ）不知鍋也、只基暁之所盜置鍋（なりと）
被仰（と）語申、爰暁円之猛惡頭（れ）、基暁不犯事顯然也、是恣非
陳申、被問召成唯房者、更無其隱敷、巨細事等載所進之判行之書、

仍不違委書載、望請 恩裁、早任解狀之旨、被問召成唯房、被停暹
円猛惡者、將弥仰 憲法貴矣、以解、

仁安四年二月 日 伝燈法師(位脱力) 基暁

280、《書籍頁二七三三》

○三四九九 高乃末武島地壳券○筒井寛聖氏所藏東大寺文書
高乃末武 壳渡進島地立券文事
合参段者 (但此内老段除)

在名張郡長屋条字壇村内

四至内 (限東類地 限南中禪房垣除 限西黄道 限北類地)

右件島地、元者高乃末武相傳領掌地也、于然依在直要用、牛母子白
布十段(二)限、永年作手、藤原国貞壳渡進実正明白也、仍為後日
沙汰註事狀、新立券文、如件、

仁安四年三月廿二日 高乃(略押)

但件地券文、不慮外燒亡了、田地以公驗為魂、故立否実狀可為永
代公驗、依請在地証判狀如件、

281、《書籍頁二七三五》

○三五〇三 藤崎宮三郎丸田地壳券案○詫磨文書九

十九坪六反 廿坪九反 廿一坪九反 廿九坪四反二丈 卅三坪
四反四丈

右件田島等、藤崎宮三郎丸先祖相伝私領也、指依有要用(天)、現直
二千五百疋(三)、長浦九郎遠貞(仁)、限永年所沾渡也、於本券者、
依為連券、非放所(仁)、仍立新券、所沾渡也、仍為後日証文、所注
如件、

嘉応元年三月十六日

嫡子橘(在判)

本領主散位(在判)

藤崎宮三郎丸、依沾券眼前(ナル)加署之、

大官司紀行近(在判)

宣 命紀恒門(在判)

官師大法師(在判)

檢校大法師(在判)

飽田郡司散位清原真遠(在判) 政所散位橘(在判)

領家御使大法師(在判)

282、《書籍頁二七四〇》

○三五一一 伊賀国黒田莊官等解○東京大学所藏東大寺文書
勘口江八郎口口口

口(末)友之後家申狀云、卅余ヶ年之間、口口愛三个口全無異論、
隨又彼江八郎貞成為譜代御庄官之上、年來庄民也、隨又彼江八郎之
(所力)從、雖住大神宮領、隔河壱罷過之間、更以不致其沙汰、然
而本領主重時・重貞・重末伝領主彼末友、次末友等死去後、无為方
後家三子之時、厭狀彼押取之条、且柚工極訴、其所以者、極為少名
之上、不令勤仕其口口官物、号公文名、且公文令称申給敷、謀計无
隱、御庄官等先日雖加連判、不称申江八郎貞成道理、以強縁立我道
理、蒙御裁定之条、御庄民訴何事如之哉、爰公文申云、件田者全以
不承負候、極无実也、

次江八郎貞成申狀云、年來无音(天)罷過之處、時貞入道之許(二
テハ)一決負候了、雖然御使新先生為強縁御外題申成以後、此五六
年之間、令耕作之處、依何事於沙汰令出哉、御外題之上、改御沙汰
候(天)、庄民一味令訴申者、不及其力事也、又為成之方(二ハ)、
无指証文、於所当公事者、暗貞成之名承負了、何可令致其訴哉、右
兩人申狀、大略注進如件、

嘉応元年八月 日 御庄官等

刀禰藤原(花押)

大部 (花押)
頭領広階 (花押)
散位藤原 (花押)
専当僧 (花押)
物部 (花押)
執行尊覚 (花押)
公文藤原 (花押)

283、《書籍頁二七四一》

○三五一一 土佐国金剛福寺僧弘

睿解○土佐国蠹簡集一

土州幡多郡蹉跎御崎住僧弘睿重陳

立用荒田本数

伊南式町 一町毎月観音講料 (浦国名 伊布里 限北箕作谷)

一町四季七个月日千手供料 (恒時名 注日 限西切間河

内峯)

在肆町 一町不動阿弥陀供料 (安末名 東限金柄崎 元文名

南限幡峯)

二町正二月各七个月日夜御行并二季彼岸安居料、恒枝名、

石国 油間、

陳云、載先日解状本給田六町之内、僅見作三町也、然件給田万雜公
事不可勤之、檢注使不可向之由、遠 嵯峨天皇御時、近法性寺入道
殿下御時 (ヨリ) 免来处、在先判旨明白也、公文書生等、乍見此旨
責勘料官物、宛万雜公事等、非道難堪之上、重付住僧、立兩給田致
譴責、

284、《書籍頁二七四二》

○三五一四 山城国今紀行遠島地壳券○長福寺文書

(端裏)「御曹司島祈 (新力) 券文也 (嘉応元年十月一日) (花押)」
沽却 島老処事

合式段者 (但直能米式拾壹斛社斗定)

右件島者、今紀行遠相伝之領也、依有直要用、限永年今紀経宣所壳
進也、敢不可有他妨者也、仍為後日之沙汰、立新券文、相具本券文
渡進畢、但西寄老段之所当夏冬式斗者、祝分可弁済、東寄老段之所
当 (ハ) 藁參拾束、正預分令弁済之状如件、

嘉応元年十月一日 散位今紀 (花押)

285、《書籍頁二七四四》

○三五一七 阿保行宗田地荒野讓状○高野山文書又続宝簡集

五十二

(端裏)「野田原南垣内」

讓与 田地荒野事

在金剛峯寺御領荒河御庄内野田原村字南柄内

合老所内 (現作小) 四至 (東限惠大房領 南限大房領 西限河 北

限河)

右件田地者、阿保行宗之先祖相伝之私領也、依為阿保守真鳥帽子々、
彼地 (ヲ) 限永代讓与処也、以詮後日不可有他妨者也、但依為連券、
本券文不相副、仍新券文放処如件、

嘉応元年十月十八日 阿保行宗 (花押)

286、《書籍頁二七五一》 * 仮名交じり文

○三五二五 源某讓状案○石志文書

校本案了、

ゆつりわたすくまいち二いしをすきとも、のちのさま
たけあるへからす、
ゆつり渡石志二郎君 (ニ) 源かさん (在判)

波田并石志区加部土毛事

そゑ進本くけん巻通事

依後日さまたけ不可有、注文如件、

嘉応元年十二月四日 源（在判）

287、《書籍頁二七五二》

〇三五二八 備後国太田莊沙汰人愁状〇高野山文書宝簡集九

「下 留守所

件田畠伍町（田二丁 畠三丁）可為大田庄倉敷之由、被成

院庁御下文之時、下知先了、彼倉敷田畠等為河南庄、不可致妨也、

大介藤原朝臣（雅隆）（花押）」

大田御庄沙汰人実次解 申請 国裁事

請被殊蒙 鴻恩、裁定下給当御庄倉敷尾道村号三調南条内、為擬押取子細愁状、

副進庁御下文一通

右、謹檢 案内、於尾道村者、当御庄倉敷（二）田畠伍町内（田二丁／畠三丁）依申請、令国使実檢之、堺四至可被打勝示之由、被国宣下（天）、相副領家御使并 国使、已被勝示打了、随 院庁御下文状（云々）、依御倉敷并斗張荒野申請（天）、御年貢之白布五十段、本御年貢外所被加召候也、然者、今建立御庄者、有他所便宜之所其数者、何限尾道村、可被致妨哉、望請任 解状理、被替立他所、三調南条庄妨、欲停止之、仍注子細、言上如件、以解、
嘉応元年十二月 日 沙汰人実次（上）

288、《書籍頁二七五四》 *仮名交じり文

〇三五三四 紀伊国紀友貞畠地壳券〇高野山文書又続宝簡集七十 謹奉 壳渡畠券文事

合巻段者（在名手御庄内 字江河村黒田垣）

四至（限東貞行作 限南三如房作 限西已行事作 限北貞行作）

右件畠者、記友貞之先所相伝畠也、而依有用々、乃米參石二、仍樂二壳渡了、依レム券二、本券文ヲハアイクセス、為後日サムタノ、放新券文状、如件、

嘉応二年二月十三日 記友貞（略押）

289、《書籍頁二七六六》

〇三五五〇 某書状〇日下文書

先日令触申候西津庄御月忌事、以供僧所役分、毎年可有御勤仕之由、御領状（二）候しやらん、存知不分明之間、尋申候、仍評定可注之間、驚申候也、恐々謹言、

（嘉応二）六月十六日 （草名）

一心房御房

290、《書籍頁二七六七》

〇三五五三 生石莊田堵賀陽清仲解〇関戸守彦氏所蔵文書

生石御庄田堵散位賀陽清仲解 申請 足守所領事

右、件足守御庄所領也不本山於今者やハん（を）いた志不可候、

一、作田所当（二）おいて（ハ）可弁進仕候、

一、作畠二段所当（ハ）国之沙汰（二）た□□可弁進仕候、於今者、不可御命（ヲ）背候、

嘉応二年八月九日 散位賀陽（花押）

291、《書籍頁二七六九》

〇三五五六 僧文海書状〇百卷本東大寺文書二十六号

差專使仰下之処、川上【石】田二段事、无左右薬師如来（二）寄進候了、但當時増万依不領知仕候、如此申上候とは不可思食候、即得

業御房御沙汰（ニテ）、心均増万相論日、故御前令言上候時、任理増万可領知仕之旨、蒙御定（ヲ）候処（ニ）、心均（ハ）御房常住之上、大切者也、四郎丸（ハ）雖為御房人、彼（ニハ）不可等と各候（テ）、其之由（ヲ）重申上候日、背理被（致カ）心均給候了、仍其後増万之憤、于今不散候、院中之御沙汰（ヲ）おそれ候（テ）、政所（マテモ）、不言上仕候処也、雖然先々様々善根勤仕了、如何致于今善知識（ニ）おもふき不候哉、無左右彼文書（ヲ）可進上候之処、當時求失（テ）候也、出来て候ハ、追可進上仕候、設若件文書自他処出来候とも、彼四郎丸直米既請取候了、彼并子息不可沙汰出候、増万文海なにそ可沙汰仕候処、永薬師如来（ニ）奉加仕候了、即後代之証人（ニ）薬師瑠璃光如来（ヲ）奉為候（ニ）、すきま不候敷、且院中仰重候上、善根本意思給候、以此状為後日沙汰、可証文御候、謹言、

嘉応三年九月廿九日 僧文海（花押）

（裏）「大法師増万（花押）」

292、《書籍頁二七七〇》

〇三五六〇 大江正影解〇法隆寺文書九

（端裏）「雲光房寺主取出券二枚本券二枚繼了、

「桃切北一筋文也雲光房」

謹解 申相替田新券文事

合老段者

四至在本券面之（法隆寺御領也、）

在平群郡坂門郷玖条拾里拾陸坪（北一字桃切）

右件田、元者大江正影先祖相伝私領也、而今依有互便宜、秦仲子先

祖相伝所領字伊賀垣内畠一段、永所替渡申也、但僧源嚴申沙汰仕事

（ハ）【大江正影】依大江正影申付、如是沙汰仕処也、仍為後代放相

替新券文之状、如件、以解、

嘉応二年十月五日 大江（花押）

「上座増喜讓得了、」

293、《書籍頁二七七三》

〇三五六七 吉野参詣日記〇京都大学所藏東大寺文書

注進 吉野参日記事

合 師布施

御弊六帖（次紙） 紙袋六 諸神弊一帖 打蒔等（一升）

經供養布施

熊野参日記

御弊二帖（上紙） 御燈 王子御弊（次紙） 御花米三升 打

蒔（三升） 經供養布施 ヒサツ、政所分

師之布施 白米七斗（本納定） 桶二大小 カレナ桶

約一 袋少々 糯米（五升） 蓑蓋 淨衣等

力者三人 道間之菜料 静進屋沙汰

右、注進如件、

嘉応三年正月 日

勝栗・小豆早可進、（来廿六日可進、）

□陸石松不可催

字智郡可仰下事、

力者二人（綿衣公物可立用、オシミキ□□各可携力ナ桶三口、御菓

子（ミフ（カカ）シヲ）可入

約一（来十三日可上）

白米等ツチ□マ□テヲウクヘシ、

来廿日物友相□□ヘシ、

294、《書籍頁二七九二》 *裏書のみ

〇三五七四 僧惠深畠壳券〇東大寺文書四ノ七十三

畠事

□式段者（字竹垣副）

在名張郷矢川条加波井尻

四至（在本券文）

□件畠者、故乘如房得業相伝□常無他妨、次惠深伝領、而依有□用、限直絹四丈白布老段水□□、永於丈部成房所沽却也、仍為後□沙汰、放新券文之状、如件、

嘉応三年三月 日 僧（花押）

「壳買旨明白也、仍加判之、

大法師（花押）」

「件畠壳買明白之上、有限御判、加署判、

頭領散位藤原（花押）

公文藤原（花押）」

（以下裏）「父馬一疋買事候（シカトモ）、馬ワルク候シカハ、

元主□（返力）畢、若為後日沙汰、注状如件、」

「文永七年（庚午）才十一月廿六日、

二段内南切大（ハ）藤原姉子沽却畢、」

「之内二段之内中大（ハ）定藏房処分了、

北切大（ハ）藤四郎処分了、」

295、《書籍頁二七九九》

○三五八九 某戸主壳券○東寺百合文書へ

沽却 地老処事

合老戸主（東西五丈二尺伍寸 南北九丈伍尺）

右件地者、相伝代々無妨令領知者也、而依有要用、限米百陸拾伍石壳度了、但此地口（ハ）本櫛毛面也、今二人子息（ニ）所分時、防門面成地口、所分与処也、仍丈尺打渡状如件、

承安元年十二月廿八日

（花押）

296、《書籍頁二八〇七》

*テキストに異同あり、要注意。

○三六〇六 土佐国雜掌紀頼兼主殿寮沙汰人伴守方問注記○

書陵部所藏壬生古文書

□□□□□□（承安二年九月力）廿二日、問注土佐国雜掌右官掌紀頼兼

□□□并主殿寮沙汰人允伴朝臣守方等申詞記

□□□宣旨称、左少弁藤原朝臣兼光伝宣、権□□臣資長宣、奉 勅、主殿寮弁申土佐□□□（国力）原朝臣資頼訴申納物非法事、宜令官

底□□責事、

□□云、件油如国司解状者、雖称围下、寮家為京下之□□□也、

件子細弁申如何、

□□国下之条、非新儀、且存先例、且尋濟例□□也、任（代力）々

証文顯然候、中宮大夫家御任久寿二年在庁注文進覽之、件年以后、

更無京下候、近（波）前々司家光之□□□□目録顯然候、仍進覽

之、件任雜掌□□□時參上守方也、又前司雅賢任請取庁宣（天）、於

国所令請取也、使請文同進覽之、当任承安元年同取庁宣、於国（天）

□□畢、件請文進上之、久寿以後一年（止志豆）無京下之例、併□

□所請取也、毎年証文雖有其数、不進覽候、各每任（ニ□乎）所進

上候也、抑当任二箇年中一年（波）請取庁宣、□□□背先例、致此

論之条、尤無其謂候（止）申、

□□方云、就寮□□状問頼兼之處、申旨如此、件子細弁申如何、

□□申云、件油国下之条、如頼兼申状、久寿以後無相違候、□□□

国下者、寮家和与之儀也、是不可為例事也、於大粮□□□依為人食、

參期之時、取庁宣所致其沙汰候也、以和与沙汰□□例之条、無其謂候、

可為国下者何故（仁）、長寛二年宣旨（仁）、可被置月宛哉、今寮（波）

任彼状所切下文也、更非法事歟、又家光任（仁）守方雖為雜掌、長

寛三年五月（仁）以当国□進中宮大夫家御畢、仍諸司納物事、不及

成庁宣也、□□件年中宮日供油被切彼国之時、為弁濟使沙汰(之天)其弁畢、証文(ハ)雖不候(毛)、所請沙汰之召彼国以來、迄當時見在候、被召問(仁)無其隱候、凡(ハ)当国納物家信・隆能・為□三代長官引付顯然候、皆以切下文候也、仍件引付進覽之(止)申、件□司所進証文、云月宛云切帳、配符雖明、京下未詳、随国所進者国下証文也、已存濟例、敢非和与歟、件子細重弁申如何、守方申云、雖無見濟之証、切下文之後(ハ)即京下也、抑国存濟例之条、不可為証、凡当寮納物国、云便補保、云□□隨時□寮家所進止也、年来依便宜雖請取庁□、今依恐難濟、所切下文也、近則播磨国、年来雖取下庁宣、中宮日供依闕如、混合大糧米切下文畢、且(波)保延

六年永治元年康治元二等勘文并請文(仁)見(天)候(と)申、問賴兼云、就守方申重便申如何、

賴兼申云、国下之条、濟例有限之上、寮無論之由承伏畢、此上不可申左右歟、但和与之由申、無其謂候、久寿以後国司□數人雜掌又同前、一人雖和与、數代何張行、只可有御□□候、又中宮日供所濟由、申詞云、無指証文云、長寬二年庁宣目錄同三年分油於国(天)進濟之由見候、何故於京都(弓)可致其弁哉、是勿論虛言也、又当国参期二月也、而被宛五月畢、以之思之、如月宛者可国下之由顯然也、国所進証文者、以寮使請文為宗、長案国付(波)併年預□止也、不可備証文歟(止)申、

不法器事、

問賴兼云、件条如寮家申状者非新儀歟、如何、

□兼申云、件条久樹以後無相論、以宣旨斗請來候畢、寮使請文□然候、進覽畢、爰去年始出此論之条、尤無其□候、以本寮斗可納(ハ)、何年之間不致此論候哉、尤矯飾候事也(止)申、

問守方云、就賴兼申状弁申如何、
守方申云、件事請使禪子丸不知案内、三四箇年之間、□宣旨斗所請取也、而備中・土左両国雜掌(仁弓)賴兼候之間、以土左例備中油代欲令勘減之時、經次第沙汰(弓)落居候畢、且(ハ)中宮職御油相論之時、具陳申畢、件案文

副進之、子細詳候歟、於大糧米者、雖為宣旨斗、至于御油者、寮家本斗(三)所納候也、備中庁宣之裏書(仁)□增減見候也、仍為証文進上之(止)申、

復問云、斗増減事、以備中庁宣備土左例、雖理不洽、他国有沙汰之由、人見故(知力)歟、但無見濟之文、頗有承伏之疑、又中宮職日供相論寮解非裁判文、何以備証扱哉、如何、

守方申云、依土左相論、備中庁宣副進之条、雖不当候、訴訟同事候、又賴兼両国雜掌候間、代々(ハ)彼国以本斗下行之处、以禪子丸土佐例、令減之間、所副進也、又中宮職御油相論寮解、雖無指裁判、子細具見候之間、同所副進已、且又加賀・長門雖有此論、被下問宣旨之時、弁申子細畢、仍其後寮斗定所造進勘文也(と)申、

問賴兼云、就守方申子細弁申如何、
賴兼申云、器事土左国帶詳証文、不可知他国例、但備中庁宣案裏書状云、下行七十八石(云々)、斗増方不下行也、是則無先例故也、故其代切進中宮日供之時、斗増之条、依為僻事被止其催畢、不可為証、是備中雜掌依申兼行由、粗所弁申也(と)申、

復問云、如守方申者、禪子丸不知案内、以請取例、称濟例(云々)、禪子丸之外、使用宣旨斗之条□証扱乎、如何、
賴兼申云、件条成庁宣(天)給寮候畢、寮使請文

判行各別也、所詮者帶庁宣下向国、任何請取畢、更無其訴、然者使

替否事、国全不知給了（之力）候也（と）申、

申

土左国雜掌右官掌紀頼兼

主殿寮沙汰人允伴朝臣守方

問

右史生 高 橋 貞 職

左少史 中 原「周 業」

297、《書籍頁二八〇九》

〇三六〇七 主殿寮年預伴守方解〇書陵部所藏壬生古文書

（端裏）「〇〇〇職御油非論事」

〇〇〇〇預少允伴朝臣守方解 申進 陳狀事

〇〇〇〇頼兼為掠備中嘉応二年寮納油未〇〇〇非 論、令難濟令月

料 中宮職御殿油三斗不当子細狀、

〇〇〇〇雜掌去八月廿六日解狀稱、謹檢案内、主殿寮納〇〇〇大粮

米百廿石也、其内於油者、依為重色〇〇〇〇後年分、仍当年分去年

進濟畢、更无一分未濟、〇〇〇分〇進彼三斗者也、於斗者任例以宣

旨〇（斗力）下者也、寮使年来全不成異論、請来已久、近（ハ）前

〇〇〇〇之時、全无此論、而今年始稱有斗增、令切其分之〇〇〇過此

哉、是則前任備中之時、去嘉応元年〇〇〇無道間、不知子細沙汰者、

為通當時苛責、隨寮之〇〇〇〇十二石餘、雖成下庁宣、在庁依无先

例不下〇〇〇、其分其比同雖切渡 中宮職仕所、依〇〇〇〇被止〇〇〇畢、

今又付土左国所切進也、凡器之条全無新儀、云封〇〇〇〇諸司納物、

守先例所下行也、仍雖一所無致論所、只取主殿寮始有此無道、仕所

使者不顧此子細乎、苛責之間、亡国雜掌已失計略、於中宮御殿油者、

可切渡無論見納、〇〇〇〇〇何求無道斗出、可宛其料哉者、就之案之、

頼兼〇說旁以不当也、故何者、先当年分無一分未進、於斗者〇〇〇〇

〇宣旨斗奉下云々、此条於油者、任寮器、諸国云京云国下濟之、於

大粮米者、以宣旨斗濟之、而頼兼々帶〇〇雜掌之間、為令難濟、去々

年未濟能米十四石四斗〇〇〇〇之論也、然間借上友連代有利不知子細、

土左当〇〇司之時、云油代云大粮米、就国斗令請取畢云々、以彼例忽

令致此議歟、有利（ハ）前司時下向借上也、有利依不申斗事、〇不

申之、備中借上有末（ハ）、以当斗年来勤入〇〇〇之間、備中在庁就寮

斗延下畢、且依濟例、且任庁宣狀也、然者以有利之例、争可失代々

并傍国濟例〇哉、又頼兼以宣旨斗、令減下之由、稱申畢、当年分有

未濟之〇、無其隱歟、但於前司未濟者、彼友連依無此訴、寮不致〇

汰事也、（是）一、次前々司時、有利為当寮使、更不下向之〇也、彼

時寮年預（ハ）親父正方也、同時弁濟使（ハ）即守方也、彼此云京

濟云国下、就寮器令奉下畢、為勝當時之訴、忘守方沙汰（元）、令引

載証拠之条、未曾有之申狀也、（是）二、次嘉応元年備中油代未濟庁

宣之事、弁濟使資忠成下未濟之間、頼兼改奉弁濟所之刻、件未濟以

麦可下行之由、同申成庁宣畢、尚持焔庁宣可京下之由、令催促之間、

相替土左之刻、以土左之所当可弁濟之由、令語延畢、令存非道之由

者、彼時争不出此論哉、（是）三、次以雜掌之非論、申成寮家無道之

条、尤可有遺迹之事也、仍度々庁宣案副進之、委細載備中陳狀畢、

巧出諸虛誕、〇令成両国非論之条、其咎難遁、御殿油者、是切下文

之弁也、庁宣者、又国司之勸也、致非論之因、豈可及庁宣之沙汰哉、

然者於 中宮日貢者、尤可被濟也、為勝无道之論、備中斗只一口之

由令構申之条、奏事不実之申狀也、縱雖帶一口斗、背諸国濟例、任

頼兼自由、豈可令棄置流代之器哉、評定之处只可仰正道也、仍大略

陳申之狀如件、以陳、

承安二年九月 日 年預少允伴朝臣守方

298、《書籍頁二八一三》

〇三六一二 入道西念讓狀案〇薩摩旧記所収比志島文書

入道西念讓渡

□摩国満家院内限四至字八郎大藏義平处分事

四至（東限由須（乃）木（乃）中尾大路 南限土土呂木限満家

迫／西限面松并結松行元頂乃藤山 北限千加尾峯頂）

右件所領田畠、入道西念之相伝謗誦私領也、然而其内子息等三人、令处分之内、自土土呂木上、限四至阡陌、限永代可領掌之由、大藏義平所讓与也、以此手次讓状、調備公驗、無他人之妨、可領知也、子息等各一味同心、任处分帳、可領作之状、所讓渡如件、

承安二年十二月八日 本領主入道西念（在判）

299、《書籍頁二八一三》

○三六一三 肥前国武雄社司藤原貞門解○武雄神社文書

「於上分田許□□先例之、（花押）」

武雄社本司藤原貞門解 申請 実検所御裁事

請被殊任解状旨裁定、武雄黒髮而社上分田陸町自往□□今、為浮

免募来処、今度初定坪、可立用□□村田所令下知子□□□

右、謹検案内、当社は御庄第一之鎮守、 本家預所之御□所也、因之件上分田為浮免、以得田之内、古今所募来也、而□定坪（天）、不裁損田、可立用之由、被 仰下（云々）者、度度之御実□又當時之御実検、亦以同御沙汰也、然者垂御還迹、不准□□、任先例可立用之由、被仰下者、弥仰憲法之貴、奉□千秋之御宝算矣、仍勒在状、言上如件、謹解、

承安二年十二月廿日 武雄本司藤原□□

○印（文不明）十六アリ。

300、《書籍頁二八一八》 *裏書

○三六二四 阿闍梨某家地壳券○東寺百合文書メ

（端裏）「あさりの聖御房」

沽却 私領地壳処事

合老戸主余肆丈者（東西伍丈式尺 南北拾丈肆尺）

在左京自大宮西自塩小路北小路面

右件地、元者前武者所平遠正所領也、而依有互要用、相伝領之後、全以無他妨、而又依要用出来、限直能米佰伍拾斛、沽却藤井季兼既畢、全以不可有他妨、仍為後日沙汰、相具本券等、所放新券文如件、

承安參年三月十一日

阿闍梨大法師（花押）

（裏）「東口一丈一尺字寺主（三）放了、

此内八尺（八）西口字佐藤太（三）放了、

定残三丈三尺（八）江志王殿放進了也、」

301、《書籍頁二八二〇》 *末尾別筆のみ

○三六二九 大江三子田畠处分状○百卷本東大寺文書八十五号

充行 大江三子田畠等事

合式段者

在中村条字墓原北通成名内

四至（限東大垣根末員作 限西類地／限南興久乍 限北印嚴作）右件田畠者、大江三子相伝私領也、而依故法蓮房遺言、持善房相義、永所处分与也、敢不可有他妨、仍為後日沙汰、立新券文、所处分与如件、

承安三年六月十二日 大江三子（花押）

「件田畠依三子命所处分与也、仍加署判之、

御庄公文藤原（花押）」

「たたしはたけ大においては、にし一通かへたなり（花押）」

302、《書籍頁二八二一》

○三六三一 平貞能書状○東大寺文書四ノ四十二

仰旨謹承候了、抑伊賀国名張郡築瀬事、前々皆随国衙罷過之由候者、

依被申付国司限候、為檢畠雜色男所下遣候也、而美東大寺領内へに於懸候処者、争承不申へと案内如然可致沙汰候哉、極恐思給事也、但殿下御任并当前司任へ二も勤仕国役之由顯然候、仍存其旨令沙汰候者也、抑先日依笠置寺訴、度々申上事由、又蒙仰候了、更御辺御事一塵不可忽諸候、又雖不然候、全不可致疎略候事也、然者東大寺御領於黒田御庄内所者、全不知給候、只随国衙口所候者、為承子細候、使者男下遣給也、且又以此仰旨、可触申国司候、又国司許可尋仰遣候、然者、以此旨可然之様、可申上給候、恐々謹言、
七月五日 左衛門尉平貞能へ上

303、《書籍頁二八二一》

○三六三二 池尻瓜送状○東大寺文書四ノ八十四

(端裏)「池尻瓜啓」

進上

瓜六十二伊け志りのみしやう

右件瓜事、

承安三年七月十七日

【僧□□】

304、《書籍頁二八二一》 仮名交じり文

○三六三三 語為行戸主売券○東寺百合文書せ

西院へ二 かしら戸主半事

藺十二束みわのつね行に売わたす所也、若明年【十月】内さまた

けあらは、香所前戸主半一年毛作たまふへき状、如件、

承安三年八月四日 語為行(略押)

305、《書籍頁二八二八》

○三六四二 某御教書○東大寺文書四ノ九十二

(端裏)「御教書」

大夫史返事御覽了、宣旨已成了者、官使持下之条、早可被尋盛信也、案文可遣、是為見衆徒也、

去夜亥刻、為衆使淨嚴到来、【明日】廿六日一定発向云々、枉理今暫可延引之由制止、淨嚴終夜下向了、返々不便、但其以前源嚴付便使申旨如此、若延引敷、大衆近日以外興盛云々、不弁東西若衆等、企下向へらむ、不便々々、

重寺解大切也、源嚴差專使遣召了、貴房明日可被忽參、正月御幸一定云々、食堂懈怠築垣及寒了、大衆騒動每事歎思不少者、仰旨如此者、

十月廿五日 僧源源へ奉

306、《書籍頁二八三二》

○三六四八 僧元勝田地売券○田中教忠氏所藏文書

謹解 申売買水田立新券文事

合卷段者

在平群郡法隆寺之北山田へ字長面

四至へ限東際目 限南際目 限西山 限北山岸

右、件田地元者、故快義相伝私領也、弟子僧良勝相伝之後、弟子元勝相伝之、而間更以無他妨領知之処へ爾、依有要用、限直米捌斛伍斗へ十合升定、僧榮善院売渡処也、於本券文者、依有類地、不能副渡、仍毀破券文面畢、為後代証文、放新券文之状、如件、

承安三年へ癸巳へ十二月廿日 売人僧(花押)

弟子僧(花押)

買人僧

「直米如員捌斛伍斗請納了、 僧(花押)」

307、《書籍頁二八三三》

○三六四九 東大寺工食下行日記○東大寺文書四ノ五十三
□工食事〈承安三年十二月〉

十二月目二日

日別七合〈二天〉三座合二升一合之内四合二个所□分、 残一升
三合明宗房取、

且々米一斗大豆五升令下行了、

一日二升一合下、一日〈ハ〉不枋〈ハ〉不下行、

二百人〈ニテ〉大豆五升可下行由仰下了、

御庄升定、十二月廿日、

廿日までは令沙汰了、但日別二升一合例飯之内一 日八合米風信、
公物可取一斗四升四合也、

308、《書籍頁二八三三》

○三六五一 僧兼賢置文案○長谷場文書

僧兼賢謹言

改書字房前小田子細事

右件田、寄猴之託宣云、依令耕作前田、本師香禪御房、成怨〈弓〉
令付病惱給也、件田尼上渡進給〈ハ〉、日内令平癒病患〈弓〉、不
可有害〈云々〉、仍書渡文〈弓〉、尼上〈爾〉雖渡進、不加証判、其
故〈波〉、令除癒病惱、命生給畢〈波〉加証判、永可渡進、虛言〈奈
良／波〉無益也〈登〉思故也、而其後雖經數月、不令平癒病患、於
今者決定必死也者、死去畢〈波〉、兼賢之門跡之中、可令耕作件田、
尼上所持之渡文、全不可用也、付中彼渡文者、只名許〈波〉雖書
付、不加証判、仍不能証文者云〈之力〉状如件、

承安三年閏十二月七日

僧〈在判〉

309、《書籍頁二八三四》

○三六五三 下道延貞子戸主売券○白河本東寺百合文書二十九

沽却 八条朱雀巷所事

合戸主半者〈直波向〈商カ〉布六丈一切ノ子ソテノ綿一口也〉、

在自八条北自朱雀西角中也、

右件巷所、相伝無他妨者也、依但直要用有、藤三弟の藤太所沽渡也、
延貞子の二王前売所也、敢不可有他妨者也、仍為後日沙汰、売券□
□注進、□券文、売渡如件、

承安四年二月二日

下道延貞子

二王若〈略押〉

祖母共〈略押〉

三年前、不可有相違、有若相違半、可弁者也

○原文下道延貞子以下、本文ノ前ニアリ。恐ラクハ錯簡ナラン。
因テ今改ム。

310、《書籍頁二八三四》

○三六五五 物部力寿丸解○東大寺図書館本春華秋月抄一所収

物部力寿丸解 申請 尊勝院御房御裁定事

請被特蒙 恩裁、任解状旨、裁許給櫟本御庄田八段子細状、

右、謹檢案内、下司申云、件作人申可分給七段田之由、所殘田一段
〈を〉、力寿丸雖賜預、尚一段〈を〉作半所給也、情思事情、随申万
事悉雖沙汰仕、寄事於左右、偏下司令避田之由顯然也、付彼是力寿
丸全無致懈怠、而下司触事成阿当之条、極難堪事也、望請 恩裁、
力寿丸預給二段田公事之料殘、欲令進上六段田、抑力寿丸雖住遠所、
以六段之由、出公事料之後、何可有過怠哉者、御裁定所只御還迹可
候也、兼又不蒙御裁定、而永被召上相伝私領者、愁之中愁、何事過
於斯哉、仍注子細、言上如件、

承安四年二月 日

物部力寿丸

311、《書籍頁二八三五》

○三六五七 僧覺顯書狀○東大寺文書四ノ五十二

住人等身心不逮、代々訴申候也、以外非例之事にて候をかく申候也、

依指事不候、誠久不申承候也、何等事御坐哉、

抑佐保田住人等、既同寺井料事訴申僧都御房候也、如御沙汰之時、以七郎房沙汰令申御也、御房御時(二八)以非例之沙汰、不可為証拋之由、被仰候き、若令尋申給事候者、得御意、可然之様(に)可令申給候、是(ハ)苦事(二)候、毎事期見參之時耳、恐々謹言、

〔承安四年〕十九日 僧覺顯

312、《書籍頁二八三六》 * 仮名交じり文

○三六六〇 散位中原業長書狀○殿島神社文書

如此令申候者、自然令思食出給事候歟、故木寺法師御房(に)朝夕令祇候間、御参入之時、度々候会(天)、雖見参仕候、取別不申承候、空罷過候(ハ)委細御覚悟や不候哉らん、但安芸国高田郡三田長田公驗案文(を)、故法印御房みせあはせ奉せ御事候き、件文書主にて候を、外記大夫業長と申候者はかく申候(二)、思食出事御座歟、件文書事自当初可奉申合候之由、心中雖存候、彼法師御房(仁)参絶候(に)しか(ハ)、自然乍存、空送年月候者也、而御神令催御座時主候にや候らん、件所を御神領(二)寄進候はんと思取候(天)、且本文書等をも委細御覽せさせ奉候と、奉申合候はやと思給候(ハ)、且天下(二)乍候、今(万て)御神を不奉拝候、心うきに不懸候便(を)尋候て、向方無入之間、夜前参着(天)、既奉拝御宝前候、しかはかりめてたくおはし万すも、世(二)候けりなど、年来本意遂(天)悦思給候者也、御神御引導にや候らん、此国造にしも尋会候て、如此令申候を、なれ(ハ)れしきを不憚候共、左右令申候事者、一者奉仰御神、一者任懸望候也、恐々不宣、謹言、

〔承安四年〕九月廿九日 散位中原業長(状) 謹上 民部大夫殿

313、《書籍頁二八三八》 仮名交じり文

○三六六三 散位中原業長書狀○殿島神社文書

「外記大夫業長書」

入道殿御参詣候ける由、依下人説承候、一定にや候らん、然(ハ)高田郡事、令申上給哉如何、不審之餘、所捧拙状候也、依御示現、令奉寄候了、於今者、奉仰神眷候之外、他事不候、恐々謹言、

〔承安四年〕十月廿六日 散位中原業長(状)

謹上 民部大夫殿

314、《書籍頁二八四四》

○三六七〇 紀伊国紀実俊申文○紀伊統風土記附録一栗栖氏文書

紀実俊謹解 申請 国裁事

請被蒙 国恩、裁免直川保河南島久重名内松門名島本作棄作一町

餘・開発一町餘・常荒二町餘并五町、且依為四隣牛馬放食地、

且依為洪水深底朽損地、備永代証驗、殊為存国益、被免除萬雜

公事、所当税代表并济段別無利二斗代、而弥致荒野開発、追年

取進梶取返抄、子細愁状、

右、謹檢案内、五畿七道之習、諸国庄公之例、荒野者雖千町無益也、

開作者雖一段有利者也、然件河南島島者、依為離島人跡希通地也、

然則自往古以来、東則田井田屋、南則栗栖湯橋、西則紀三所神宮、

北則菌部六十谷、為如此等四隣村々庄々牛馬、被食損、且又為洪水

深底水損第一、不中用地之故、所作地利有名無実也、然故成実朝臣

為村刀禰之時、為存国益、相語合壁神宮岡前等之住民、雖致耕作、

依所当公事難堪、或作人者聞懲(徴力下司)所当(天)、乍作毛棄捨

之、或作人者見懲雜役(天)、雖慰誘不作之、依之島島自為荒廢地、

國損甚顯然也、爰紀實俊且為恐國威、且為思相伝、擬耕作件島之處、當時刀禰紀範成、依所當公役難堪、可放名之由、内々歎申之条、道理顯然之故、罷蒙憲恩、為存國益、乍恐所言上子細也、寔荒野與開發、於所當之有無、豈无御憲察哉、加之一任之善政者、萬代之美名也、何無國裁哉、望請國恩、早垂御還迹、件河南島島内松門名棄作本作開發常荒等合伍町島、殊為例存國益、弥致開發、限於永代、停止萬雜公事、追年并濟段別无利式斗稅代表、而可取進梶取返抄之由、被裁下給者、弥仰正道之國恩、倍勤開發之所當耳、仍勒在狀言上、以解、

承安肆年十二月 日 紀實俊（申文）

（裏書二）下留守所

於新作島者、可并濟無利式斗代、於古作者、任先例可隨國役也、判

315、《書籍頁二八四五》

○三六七一 紀伊國紀實俊申文○紀伊統風土記附錄一栗栖氏文書

「於新開發者依請之、御判」

紀實俊謹解 申請 國裁事

請被蒙 國恩、裁免直川保河南島久重名内松門名荒野開發島肆町、

且依為四隣牛馬放食地、且依為洪水深底朽損地、備永代証驗、

殊為存國益、被免除萬雜公事交分等（天）、所當稅代表段別式

斗代（爾）、追年取進梶取請文、子細愁狀、

右、謹檢 案内、都鄙之習、庄公之例、荒野者雖千町無益也、開作

者雖一段有利者也、然件荒野島者一方大河也、三方古川中島也、故

為四隣庄公放牛馬被食損、且又為洪水深底、水損第一、不中用地（天）、

所作地利有名無實之故、比鄉隣庄人民等、敢無開發耕作之志矣、爰

實俊且為存國益、且為思相伝、件島荒野令開作之處、無其優恩、因

准古作、被徵下所當公役者、何勵開發、倍存國益哉、寔一任之善政

者、萬代之美名也、豈無 國裁哉、望請 國恩、早任解狀旨、件河

南（衍力）南島松門名島肆町免除萬雜公事、稅代表為段別式斗代（天）、追年可取進梶取請文之由、被裁下給者、弥仰正道之國恩、倍勤開發之所當耳、仍勒在狀言上、以解、

承安肆年十二月 日 紀實俊（申文）

件島令開發荒野、為松門別名、所當稅代表式斗令納下、至萬雜公事并保司役、可免除之由、國判顯然也、仍加在序与判矣

散位紀朝臣（在判）

散位藤原朝臣（在判）

散位秦 宿禰（在判）

散位忌部宿禰（在判）

散位中臣朝臣（在判）

散位秦 宿禰（在判）

（裏書）直川惣新大夫

直川介大夫

永穂中小大夫

湯橋新大夫

田屋介大夫

316、《書籍頁二八五〇》

○三六八〇 筑前国上八村住人津守三子解○宗像神社文書

「所申有其謂者、如本可令領掌之、

大宰司宗形（花押）」

上八村住人故工武元妻津守氏三子解 申請 宮裁事

請被特蒙 鴻恩、且任相伝領掌理、且依解狀旨、如本可領掌由裁

定、上八村内与柳坪内式段字并手副齒早田陸拾步・同島地一所、

為甥故宗三郎大宮司近弘以去年春被割取子細愁狀、

右、謹檢案内、件田島者三子親父故礼介時任之所領也、而彼時任（か）

子息者娘三人也、其内於大娘者、時人存生之時死去畢、次中娘父死

去之後、不經幾程死去又畢、於三子者母共存殘之間、無他妨任相伝

旨、領作來之處、母又死去之後、依無他子無相別、併令領掌之間、

不慮外彼宗三郎近弘以為故中子之息男旨、可領掌之由、雖致時時沙

汰、依無其理、更不蒙裁許之處、不図去春之比、件兩坪島地一所別

給条、伊辭多端之間、適件近弘以去年十一月之比、死去無者、三子之外、可誰人領掌哉、望請 恩裁、任道理為被裁斷、勅在狀言上如件、以解、

承安五年四月二日 津守三子(上)

317、《書籍頁二八五六》

○三六八八 伊賀国黒田莊丈部俊弘等連署

請文○東大寺文書四ノ八十八

謹請 御下文事

右、於寄人事者、先政所御時、於下司沙汰、兩方寄人不可仕之由請文(ヲ)令進上候畢上、重蒙 御定候畢者、雖自今以後、永中門法花兩堂之不可寄人仕之状、謹所請如件、

承安五年五月廿四日 藤宗真(花押)

同末利(花押)

丈部俊弘(花押)

318、《書籍頁二八五六》

○三六八九 安倍利宗起請文○東大寺所藏東大寺文書

謹請 進天判起請文事

右、起請文元者、先政所御制止之後、若兩堂寄人(ニ)罷成候者、当御庄之鎮守大宅子(ノ)大明神(を)始奉、惣六十余州之大小明神之罰(を)八万四千毛孔每(ニ)可蒙之状、如件、

承安五年五月廿四日 安倍利宗(花押)

319、《書籍頁二八六一》

○三六九五 前齋院(五辻頌子)寄進状○高野山文書宝簡集

二十三

かうやのれん花乘院に、みなへの庄なかくまいらせつ、つたはりき

たるふみとも、みなとりくしてまいらす、すゑのよまで、つゆのわつらひあるへからず、とはの院又この庄つたへさせたまひたる、こ宮の御れうにも、かならず御くとくになるへし、こまかなる事は、あの御かたにかきて、くせさせ給へと申す、そのまゝにたかはするへきなり、

320、《書籍頁二八六一》

○三六九六 大和国杜屋莊燒米等送状○東大寺文書三ノ四

進上 (承安五年)

燒米六升

瓜茄子一籠

枝大豆枝小角豆

根芋 已上

右、進上如件、

燒米殘三升(ハ)當時為方候者、追以進上仕候(ト)各申上候、

良無術候(ウ)、

七月十四日

社(杜)屋御庄

321、《書籍頁二八六一》

○三六九八 嚴実書状○東大寺文書四ノ四十六

(端裏)「□□□役入請文案 承安五年□□」

息長庄申文献之、子細何様候事哉、恒例公事可被免除之由、不当之訴(ニ)候歟□(洩力)可令申給之由候也、

□□山自善法寺二□□進候、件庄絵図公□□令撰進給之由所候、□□返納候也、謹言、

十月廿一日

嚴実

威儀師御房

322、《書籍頁二八六二》 *後半、仮名交じり文

○三六九九 東大寺僧頭実書状○東大寺文書四ノ四十六

所被注下候之東大寺文書内、越後国加地庄文書一結(卅通、)自岡崎殿文書中者撰出候者、進上候、又頭実自故御房所預持候之讃岐国原・金倉兩保庁宣正文二通進上之、此外之文書當時不見候也、但水成瀬庄・飯野庄等文書慥候文書之由、令覚悟候之处、不候之由、被御(仰力)下候、尤不審候、若白川御房(仁)候(し)雜文書等中にや候らん、数十通之文書さのみ可被引失之様、察候也、六郎(仁)令相尋候とも不知給候之由、令申候也、以此旨可然之様可令言上給候、恐々謹言、

〈安元元年〉八月四日 僧頭実(上)

323、《書籍頁二八七五》

○三七〇六 伊勢国末塩田壳券案○光明寺文書

伊勢国末同藤則(仁)

永壳渡進字御塩田事

合百八十部者、

俱依当用在、八丈絹式疋四丈(仁)壳了、

四至(限東同地壑 限南大沢 限西同地壑 限北クルカ)

右件田、元者依国末之手、藤則(仁)永壳渡所実也、但不可他サマタケ在、為後代、注文書、以申所如件、

安元元年九月十日

伊勢国末(在判)

324、《書籍頁二八八〇》 *あるいは人名か?

○三七一五 後白河上皇院宣○東大寺文書四ノ四十四

田井庄濫行人財修房事、久福房(久仁)令參上、令申上子細、可定之由候也、其旨可有御下知候歟、仍執啓如件、

「安元元年十一月廿日 右近中将光能(奉) 謹上 東大寺別当法印御房

325、《書籍頁二八八五》

○三七三一 伯耆局議状案○東寺百合文書よ

(端裏)「矢野例名相伝証文案」

根本領主伯耆局議右馬権頭隆信状案」

はりまのくにやの庄と、むめのこうちひかしのとうみん四へぬしのやちをハ、むまのこんのかうの殿にゆつりまいらせ候、いまハたのもしき人(二ハ)まこなからもそれをこそおもひまいらせ候へ、女院のちやうの御くたし文ハ、申給ハらせ給へく候、さらにくたのさまたけあるへからす候、あなかしこく、

あんくゑん元ねん十二月十六日 在判

むまのこんのかうの殿

326、《書籍頁二八八九》

○三七三六 伊与内侍議状案○徳禅寺文書

伊与内侍議大姫御前状

わかさの国名田之庄のゐんの丁(斤)の御くたしふみ、国司の丁せん、く(脱力)ゑんともくして、ひめせんのゆつりまいらせ候、この庄は相伝のりやう、つのくにのまの庄にかへて申たて候、ゐんせんに、志そん相伝してしるへしと候へは、またく他のさまたけ候ましく候、さてあまきみのいきて候はんかきりは、わかさたをかせ給候やうに、ひとへにしらせさせおはしまし候へと候、又さたのものともさうゐ候ましく、かくれならぬことの日にそへてまさり候へは、おのつからのこともそとて、かく申候なり、あなかしこ、

〈安元二年〉二月六日

あまはん

327、《書籍頁二八九五》

○三七四九 肥前国武雄神社本司藤原貞門解○武雄神社文書

「如解状社尤有其謂者、早可依申請之、(花押)」

武雄社本司藤原貞門解 申請 実檢□(所力)御裁事

請被殊任解状旨、奉免当社上分田參町子細状、

右、謹檢案内、件上分田自昔至于今、当御庄内(ニ)全依无同名田、

以得田(天)御庄内(乃)田堵等名田内(を)不云多小、随所望(天)

浮免(ニ)募来之处、今年始(天)定坪(天)、不云損否、可募申之

由、有御下知(と)沙汰人等(云々)者、於当社者、御庄第一鎮守

本家預所下司(乃)御祈禱所也、尤可有御奉免也、然者申請之旨、

非新儀、既經年序、仍任先例、以得田為募浮免、勒在状言上如件、

以解、

安元二年三月十日

本司藤原貞門

「有旧跡限之上、又以御外題明鏡也、仍五人等加署之、

別当源朝臣

別当藤原朝臣(花押)

別当橘朝臣(花押)

惣公文僧(花押)

○印(文不明)十一アリ。

328、《書籍頁二八九七》 *漢字仮名交じり

○三七五三 紀守時出挙米進上状○東大寺文書四ノ七十五

(端裏)「南郷惣寺米解文」

進上 三法少々

御出挙米三斗

右、自南郷御庄進上如件、抑昨日相慶等相共國中相尋候(とも)、あ

ろち秦楽寺田原本辺尋候(とも)、凡不候也、秦楽寺にて米七合斗の

二石尋得(天)候也、此米六斗内東殿三斗西殿三斗進上、下遣(天)

候、文書二枚返進上、文書不候(とも)米進上、随員出挙候、返抄

太ふへきなり、田舎(ニ)出挙不候也、出挙主(ニハ)、守時文書(ヲ)

入候たれば、此御文書(ハ)、可叶(やう)不候也、又時延名田直米

未進三斗在(て)、仰候事(ハ)、結解文(ハ)前日かきて給たるニ、

後日米三斗召も候なは、結解文進上日三斗あけて候(を)、文(ヲ)

なをし候さりけり、然(ハ)未進(ハ)不候也、

四月四日

紀守時

329、《書籍頁二八九八》 *漢字仮名交じり

○三七五四 紀守時出挙米進上状○東大寺文書四ノ四十三

□□□(ハ)小麦カル候時(ニ)三ハイリ候□□

進上 いろこ二□□定

莖一枚 まこも一枚

御出挙米一斗 麦五升

右、自南郷御庄進上如件、

安元二年四月十四日記守時

御出挙事及力不候、一日八合斗米二石取(天)候ひしハ、六斗ハ一

日東殿(ハ)進上了、今一石候(ハ)西殿(ハ)進上仕(と)思給

候、□量(天)候也、今(ハ)及力不候、文書返□上文書不候(と

も)、随米候可進上仕候、麦出来候(ハ)麦なんとなにかちへなんと

し□こそは令進候(め)、又尼御前御か□□□事返々御大事コソ候、

又何様□□、すたればミわの市にて買得候也、明後日之間可進上仕

候、

330、《書籍頁二八九九》 *漢字仮名交じり

○三七五七 紀守時出挙米進上状○東大寺文書四ノ八十四

(端裏)「南郷出挙米解文」

進上 麦一斗

御出挙米二斗

い□□□古〈くほて十〉

又三くほて

右、自南北（郷方）御庄進上如件、□（例方）神祭料かつをハ、田舎市（ニハ）凡出不候也、又白米六斗事出挙（ハ）、いまた取糺不候也、

安元二年四月廿四日 紀守時

魚（モ）あちさは諸市（ニハ）候、其外魚不候也、

331、《書籍頁二九〇〇》

○三七六一 紀守時出挙米進上状○東大寺文書四ノ八十四

（端裏）「南北麦解文」

進上

麦六斗 筭一束

之中相繼名御作半麦三斗

之中大殿名御作半麦三斗

右、進上如件、

五月十四日 僧信恩（上）

米一斗三升（守時沙汰）

橘 いちこ おほよす候ぬなり、

332、《書籍頁二九〇〇》 *漢字仮名交じり

○三七六二 紀守時出挙米進上状○東大寺文書四ノ八十四

進上

麦六斗 菩提上

雜紙二十帖 直麦【米】一斗八升五合

右、進上如件、今年麦（ハ）みなまいり候おはんぬ、延貞名包延名おの候をは、いかやうに沙汰仕候へき事（にか）候らん、仰下させ

了、延貞名（ニハ）すこしも候ぬなり、包延名（のハ）御免（や）候へき、いかにも御はからひに候へし、

五月十九日 僧信恩（上）

333、《書籍頁二九〇四》

○三七六八 僧林秀田地去文○法隆寺文書九

□林秀去進田地事

合卷段者

右、件田地元者、林秀相伝領掌之私領也、而今依要用在、永□別当御房（ニ）永去進畢、仍後代為沙汰、去文放進状、如件、

安元二年六月 日 僧林秀（花押）

334、《書籍頁二九〇八》

○三七八〇 佐伯友貞文書紛失状○成實堂所藏東大寺文書

佐伯友貞解申請相伝私領田券文紛失在地御証判事

合参段者

在名張郡黒田庄出作中村之内溝江（古川）

四至（限東侍從殿際目 限西福勝房大御房領 限南中溝 限北

九郎殿中際目）

右件田地者、友貞自僧頼範院之手相伝得領掌来処也、雖然、為負物之質、置三郎房文海院許之間、去安元々年十二月五日、敵人郡司俊方等押寄（天）、殺害文海院、焼失於住房之尅、質券焼失紛失畢、而負物如員弁進、不可失公驗、仍為後代証文、請在地随近証判、欲備永代券文、若自今以後、於取出彼本券等之輩者、可処殺害盜犯人也、故録状以解、

安元二年十二月 日 佐伯友貞

335、《書籍頁二九一二》

○三七七八 僧定覚送状○東大寺文書四ノ八十四
(端裏)「二見南郷上状解」
進上 佐田御房 僧定覚

下女ハ明日まい(ら脱力)せ候、
進上

雜紙七十帖内(卅帖ハ久行ノ房御方進上、)

京殿紙(ハ)昨日令進了、

右、進上如件、抑国絹(ハ)田舎市(ニハ)一切不候、麦(ハ)お

令進候(ハ)、奈良辺尋可御候、

右、進上如件、

安元三年五月十六日 僧定覚

336、《書籍頁二九一二》 仮名文交じり

○三七八九 僧定覚送状○東大寺文書四ノ五十二

進上 たわひと進上

笋宗清十本

貞末廿二本

麦六斗

右、進上如件、

五月廿一日 僧定覚

このおへか太ひとのぬのことハ、あめニコそ那い□き万事し久す
、

雜紙 あたるハ

京殿五十帖(參斗七升五合)、御房(の)四十帖(參斗麦)

一束(ニ)七升五合 合六斗七升五合

進上 佐保田殿(ニ) 僧定覚

337、《書籍頁二九一三》

○三七九〇 僧定覚送状○東大寺文書四ノ八十四
(端裏)「□□人 麦塩解文」
進上 口付是守上 麦六斗 お志お五升 おつくたたふへし

おんなし所のれうニ
右、進上如件、

安元三年五月廿八日 僧定覚

338、《書籍頁二九一三》

○三七九一 僧定覚送状○東大寺文書四ノ八十四

進上 佐留木曾□□

三荷

麦六斗

こにんのあしき万いてせ候、ひとりの(ハ)とりたかへて万いりて
候也、寺主御房(ニハ)すくの□とハあるか万て□す□しと申上お
はし□すへし、さては十郎房よしのよりい万たたり候す、くたり
□十四五日のあるたニめてさゝることも候へし、たかう時(ハ)
いせちおるさゝゐえず、た□万いらセル【のみ万いら】せめす時、

五月十一日 僧定覚

二見庄解文

進上 □□殿 僧定覚

339、《書籍頁二九一四》

○三七九七 春日某消息○高野山文書宝簡集二十三

すへのよまで、たちろき候ましく候、又とかうさまたけわつら

ひなと候ましく候、大本はうのひしりの御はう、よくくはら

かひおほせられをかせ給へし、

みな(南部)の本さう新さう、かうやのれん花せう院に、まいら

せさせおしハます、御ふみ御券とりくして、まいらせさせおハします、大師いかにあはれとおもひまいらせさせおハしますらんとおほえ候、大本はうのひしりの、おほせられをきたらん定にたかハす、へのよまてあるへきなりとおほしめして候なり、あまりことなるやうなれと、よにはさることのみいてき候めれば、心つきて申をき候なり、ねうはうの御ころは、人のしのまゝにおハしますことの、ころよりほかに候へハ、すへにもおもひかけぬ心したる御うしろみいてきて、あらぬようにさたしなして、ねんくはかりこそまいるへけれ、みさうをまいらせはなせおハしますこと候へからすと申すこといにてこは、それをまたくもちゐられ候ましきことなり、人にとらせつる物をたに、とりかへすことやハ候、ましてほとけにまいらさせおハしましたんところ、さるさたあるへうも候はねとも、あまりしたゝめんれうに、かくかき候はんと申て、かき候なり、このうへは、つゆのゆるき候へからす、それにとり候て、よにおハしまさむほとは、たうしまいらせはなせ給ふことは、え候ましきなり、このみさうな候はても、あしく候ひぬへければ、もしことみさうなとしたゝまりて候は、たうしもまいらせはなせ候なん、又おハしまさゝ覽つきの日ハ、いかにもくゝてらのさたにて候へきなり、わかみは候ましきよのことなれば、候をりによくく申て、かきをきさふらふなり、又申をくへきこと候ひけり、くまのの権へたうたんそう(堪増)しもつかさ(下司)になり候ことは、めんより申させおハしましたりしかは、しもつかさにハなしたひて候なり、てらへまいりなんのちは、たれになさんと、てらの御ころなり、たんそうなるへきゆへありてなりたるにハ候はぬなり、をやのへたうなりたりしかハとて、それをゆへにて、めんにも申てさふらひしかハ、ゆへありなしによるへからす、めんより申させおハしましたりしことなれハ、なしたひて候なり、ほとへ候ひぬれば、あないしらぬ人にあひては、わかたつたへしるへきたうりにて、院にも申て、

なりて候ひしそなと申なして、思ひかけぬ券めかしきものもとめいたして、うたへすること候なり、したいはこの定なれば、よくくゝてらにも心えさせ給へとて、申をき候なり、あつかりしもつかさにつけても、むつかしきこと、いかにも候へからす、とは院の御れうによくしをかせおハしましぬれば、たいくのみかとも、たいしにおほしめさむすることなり、をのつからすへのよにみたらこといてきて、てらのかたにも、又ことくゝにも、わつらハしきこともしあらんをりにハ、てらよりかみにうたへ申させ給へきなり、おまへにてこらんせさせつゝ、かきて候なり、

安元三年六月廿二日

(奥裏)「春日殿御文」

340、《書籍頁二九一六》

○三七九八 三位局消息○高野山文書宝簡集二十三

(端裏)「カスカトノニハコノ三位トノハア子ニテ候ケリ、コレハカスカトノノ御ヲウトニ三位殿ト申テ宮ニ候ハセ候女房ノ文也、」

ひさしくおほせられねハ、おほつかなく候ほとに、うれしくこそ候へ、いつかのほらせおはしますへく候、けさんにそ、かやうのことも申候へきに、まつ申候なり、みなへのことは、れん花せうめんまいらせさせおはしましたにしかは、なにしにかたかへおほしめさん、御よせふみはまいらせさせおはしましたにき、御券はさた有しも、みさうにて候へは、もんその宮に候はぬもあしく候ひぬへければ、みくらにおかれて候なり、かうやのものさはかしくのみきこえ候へは、しつまり候なんには、申させ給はんにこそはより候はんすらめ、こゝせんのしおかせおはしましたらんにてたに、よもたかひ候はし、まして御みつからの御ふみなと候へはさうゐ候はしとこそはおほへ候へ、なにこともほらせ給ひて候はんに、こまかには申候へし、

【第八卷】

341、《書籍頁二九二〇》

○三八〇七 皇嘉門院讓狀○書陵部所藏古文書

(端書)「□(吉良力)重政西条讓狀(大式入道殿□嘉女院御筆)」

女院の御ふみくしてまいらす、たしかに(花押)

さらの西条、せんしこせんにたしかに(花押)たてまつるもとは、中将のうへにたてまつりたりしかとも、は(衍力)かなくなられにき、おさなこより子にせられたりしにあはせて、さやうおもはれたりしかは、たしかに(花押)せんしこせんにまいらす、これをしりて、あのみ日などをんせさせ給へ、なほかたこと人(花押)ゆめ(花押)さまたけらるまし、あなかしこ(花押)く、

治承元年八月廿二日(花押)

342、《書籍頁二九二一》

○三八〇九 藤原氏女家地棚讓狀案○大徳寺文書

「丁一六五」

ゆつりわたすしりやうの地ならひにまちのたなの事

合地二ヶ所 たな二ヶ所

いさいほんけんに見えたり、

右、件しき地ならひにたなとうハ、藤原の氏女さうてんのしりやうなり、しかるを嫡子さゑ門大郎に、手つきせうもんをあいそへて、ゆつりわたす所しちなり、更たのさまたけあるへからす候、よてゆつり状如件、

治承元年九月廿七日 藤原氏女(判)

343、《書籍頁二九二五》

○三八一七 山城国長福寺縁起并資財帳○長福寺文書

(端裏)「長福寺縁起」

長福寺縁起

稽首和南白、兩足尊言願主比丘尼真理自幻稚之昔、唯有仏道修行之志、更無世間榮耀之望、仍遂剃花髮荷持木叉、当庄中卜有縁砌、建立一堂舎、安置古仏等、仁安四年(己丑)二月廿二日(己酉)、嘸蘭城寺信暹阿闍梨開眼、自即日置三口僧、兩人供僧(觀金尊空)一人住僧(妙覺)、始修長日例時懺法畢、件古仏皆是先祖奉造立之尊像等也、無指安置所、動為雨露被濕、且悲此事、令遂彼願也、嘉応二年(庚寅)十月三日(己酉)嘸權少僧都澄憲供養了、然則雖似弟子之新造、即稱曩祖之素意、豈不隨喜乎、居処者分段旅宿、全不足希望、華落旧居雖逢炎上、敢不勵造之微志、唯在此仏闍之故也、抑一族之中以不違背我遺誠之人、可為当庄領主也、背遺誠之輩、不可(為脱力)領主、又於仏聖燈油等田並供僧住僧田並恒例講筵用途田等名者、後代之檢田並使等雖勘出段步加作開発、更不可収公、可任僧侶之進止、又於供僧職者、一期之剋扱其器量、可讓門弟也、但所領田並者、外命有待所資也、然以清浄心捨入之、僧徒諸共住発菩提心、利益有情心、互為善知識可訪後世也、不善之輩努力不可入寺門、時代臨末、僧徒多好惡行、仍為向後誠之、凡代々本家并供僧等、雖一事一言、真理現存没後不可違背、違背之人、付冥付頭、可有其過也、奉勸請大梵天王釈提桓因四大天王北斗七星琰魔法王五道大神、別(天ハ)當伽藍鎮主松尾大明神惣日本國中諸大明神、殊(二ハ)八幡賀茂山王七社祇園北野等(乃)冥衆、所定置之田並并供僧等田堵、於成相違之輩者、始自本家預所至于田堵住人、早蒙其罰、於現世者、可当不祥厄会、於後生者可無三途出期、若仰信起請之人者、出家門弟在家子息、上件神祇冥衆等可令守護給、仰願以此仏闍之行業、遙及慈尊出世、仍為向後書縁起文如右、是以梅津御庄領之新庄田七町肆段式百歩・上御庄田老町肆段大・深草名參段大、永限永代々、所寄置仏聖燈油恒例講筵供田等料也、田並坪付如奥委注矣、是則真理

滅後之本家料、返々所書置也、存生之時者、可在我進止也、又風雨等大事出来之時、供僧等各不顧住房、可參御堂而已、

「所定置如之、尤隨喜次第相承之輩、雖及七代、不可奉背此仰者、加署畢、(花押①)」

一 每月一日惣社仁王講事

米參斗陸升

一 每月一日御堂仁王講事

米參斗陸升

一 仏性【燈油】事

三石六斗 每月御仏供料〈月別三斗定〉

三斗六升 毘沙門御仏供料〈月別三升定〉

已上參斛玖斗陸升者

一 每月講筵仏經事

四日

法華經一品

十五日

摺写阿弥陀仏參拾鉢

法花經一品 阿弥陀經一卷

十八日

觀音經一卷

已上料米伍斗者

一 每月講筵仏供事

一斗二升 四日舍利講料〈月別一升定〉

四斗八升 阿弥陀講料〈月別四升定〉

一斗二升 觀音講料〈月別一升定〉

一斗二升 地藏講料〈月別一升定〉

一斗二升 釈迦講料〈月別一升定〉

已上玖斗陸升者

一 每月講筵僧前料事

一石二斗 舍利講請僧二口僧前料〈月別各五升〉

一石二斗 阿弥陀講請僧二口僧前料〈月別各五升〉

一石二斗 觀音講請僧二口僧前料〈月別各五升〉

一石二斗 地藏講請僧二口僧前料〈月別各五升〉

一石二斗 釈迦講請僧二口僧前料〈月別各五升〉

已上陸斛者

一 百種料事

三石 正五九并三箇月舍利講百種料〈月別一石定〉

一石 【九月一日】十二月七日 ■菩提講百種料

二斗 同講導師布施料

二斗 同講請僧二人布施料〈各一斗定〉

已上肆斛肆斗者

一 修正月事

二石 壇供餅料

三斗 燈油二升五合料

五斗 大導師布施料

三斗 初夜導師布施料

四斗 請僧二口布施料〈各二斗定〉

六斗 仏供并僧前牛王紙料

已上肆斛壹斗者

一 二月十五日涅槃講事

五斗二升 五十二種料

一斗五升 大仏供料

三斗 捧物代

已上玖斗七升者

一 二月廿二日上宮聖靈講事

三斗三升 三十三種料

一斗五升 大仏供并御汁物料

三斗 捧物代

已上七斗捌升者

一忌日事

三月十五日「七日のあみた候へは□□ニなる」

九升 自十二日被始行懺法三ヶ日仏供

料（日別三升定）

一斗一升七合 同懺法燈油九合料（日別三合定代米合別一升三

合他）

六斗 同懺法請僧二口供米料（口別三斗定）

六斗 同懺法請僧二口布施料（口別三斗定）

三斗 仏供養導師布施料

三斗 僧三口并預一人僧前料（加仏供定）

四斗 請僧二口布施料

已上式斛肆斗七合者

六月廿二日

三斗 導師布施料

三斗 僧三口并預一人僧前料（加仏供定）

四斗 請僧二口布施料

已上壹斛者

七月四日 「不可止」

一石四斗 自六月廿日至于七月四日二七ヶ日法

花供養法供米（日別一斗定）

五斗（「四斗」）四升六合 御燈油【四升二合】「二升八合」代

七斗 壇敷淨衣代

三斗 四日仏供養導師布施料

三斗 同日僧三口僧前料（加仏供定）

四斗 同請僧二口布施料

已上參斛陸斗肆升陸合者

七月十五日

三斗 導師布施料

三斗 僧三口僧前料（加仏供定）

四斗 請僧二口布施料

二斗一升 七ヶ日懺法仏供料

二斗七升三合 同懺法燈油二升一合料

「元明□□の日う七日なる」

一石四斗 同懺法請僧二口供米料

一石 同懺法請僧二口布施料

已上參斛捌斗捌升參合者

七月晦日「これも三日候へハなり」

三斗 導師布施料

三斗 僧三口僧前料（加仏供定）

四斗 請僧二口布施料

已上壹斛者

九月十八日「これも千卷候へは七口なり」

一石 千卷觀音經轉読供僧二口供米料（口別五斗定）

四斗 觀音經二百九十六卷轉読供養僧二口供米

料（毎月卅三卷定口別二斗定）

三斗 導師布施料

三斗 僧三口并預一人僧前料（加仏供定）

【四斗】 請僧二口布施料

【已上式斛肆斗者】

件忌日仏等經并誦經物事、自代代相伝本家

加被送遣之、

十二月廿三日「これも三日になる」

三斗 導師布施料

三斗 僧三口僧前料（加仏供定）
四斗 請僧二口布施料

已上耆斛者

一 二季彼岸事「これ三人七日ふん乎」

四斗二升 二箇度仏供料（日別三升定）

五斗四升六合 同燈油四升二合直（日別三合定／代米升別一斗三升也）

升也、

二石八斗 同僧前料（供僧二口定也／度別一石四斗／日別二ヶ度分一斗一口分也、）

度分一斗一口分也、

一石二斗 同布施料

已上肆石玖斗陸升陸合者

一 盆供事

一石二斗 盆鍋肆拾口料

但此外菜分鍋四十口、又件菜自当御

庄之所出、至手鍋捌拾口者、田堵深草

所進也、

一 香事

代米參斗者

一 十二月晦日御金口事

米參斗者

一 正月五日弥勒講（加賀局忌日「□□」）

米伍斗者

一 并米肆拾七斛玖斗式升式合者

料田伍町捌段式佰陸拾歩

所当地子米式拾玖斛參斗七升（但段別伍斗定）

延定政所斗肆拾陸斛玖斗捌升捌合肆夕（斗別六升定）

一 神田事（御堂惣社）

田肆段者 五節供并二箇度祭用途料

一 燈油田事

伍段者（宗友名田内あけうかさた）

一 井料田事

式段者

一 修理料田事

參段半者

一 用途料田事「執行佃三段」

耆段者

一 供田【畠】事

耆町 供僧二口各五段（長日例時饑法供米料）

五段大 阿教房衣食料

已上三町五段二百四十歩「これ定」

畠五段【二百歩】内 二段二百歩（慈性房 十葉法師一段小

時里一段【恒安二百歩】

二段（觀練房） 一段（仁教房）

已上田耆町伍段 畠伍段式佰歩者

一堂敷地事（このやしきみたうをときみつかかみのやしきへわたしつれハあとハ本けのかたかへしまいらせつれ、みたうのさたにハあらず、本けれうになりぬ、）

合肆段參拾歩（限東大堀 限西古路 限南大堀 限北小堀）本庄

畠也、

一 都合田畠玖町參段參佰式拾歩

田捌町玖段捌拾歩

畠耆町玖段式佰七拾歩内（本庄畠玖段式佰參拾歩 新庄畠耆町肆

拾歩）

新庄坪付

友重（清）名（丁二反百卅歩内【三】二段【二百廿】百四十歩

所當慈性房方可弁濟之、）

梨本三反六十歩内〈取出六十歩〉 酒殿坪七反半〈取出四十歩
此内一段惣社修理田〉

奈義淵一反小 同坪百四十歩内〈取出八十歩〉

宗友名〈丁三百十歩内欠三百十歩〉 妙覚方

狐墓反三百歩内〈取出小〉 北樋口坪三反三百歩内〈取出二段
七十歩〉

小田二反二(三カ)百歩内〈欠三百歩定二反〉

井尻反百歩内〈欠十歩定反九十歩〉 南樋四反卅歩内〈取出卅
歩〉

新重国名〈丁二百十歩内欠百歩定丁百廿歩〉 執行分

窪田二反卅歩 同北坪一反小

梨子本三反小内〈欠六十歩定三反六十歩〉 同北坪二反百卅歩内
〈取出小〉

南樋口百八十歩内〈欠四十歩定百四十歩〉 中寺反

「くにすゑ」 「これはあしけれハあ□□御なしよういこへ

な□」 但菜菌反

本重国名〈丁一反(六反)八十歩内五段供田入寺〉 【供僧頭阿方】
〈六十歩執行分〉

六条口九反三百歩内〈取出反小南五段 供田如元杭〉

菜菌坪反八十歩内〈取出八十歩〉 南坪二反六十歩〈取出小〉

梨子坪二反六十歩 小田三百歩

恒光名 小田四段惣社神田 元西教房給田

安吉名〈七反百九十歩〉 供僧尊念方但内五段供田

僧毛野七反百九十歩〈開発十歩内五段供田〉

「なりきよ」

国末名〈丁四段【廿歩】二百十歩■●■

【内安光給四反供□尊堂分二反半修理田反□執行分】

五条四反二百十歩内〈開発卅歩〉 同南坪四反七十歩内〈取出七

十歩〉

同南西坪四反二百九十歩内〈開発半 取出二百九十歩〉

同北坪【三反半】四段取出半 「建仁二年」預所佃、但今修
理田也、

上御庄「いまハ□よさき」「今重包名」正行名〈九段三百【廿】■
四十歩〉〈水便難島分二一反残〉〈建仁元年二取出田小加定〉

執行分 小そきたり

野神二反〈古乍〉

上田三反〈古乍〉

汰分〉〈古乍 百歩四斗代〉

次上田小内〈荒百歩四斗代〉 石橋東一反〈小【四十歩】取出〉

「さたつき明」「この内一反のそく」

智尊名【六反小内五段供僧尊空房】〈一段小供僧頭阿分〉

町田五反【四反三百卅歩】〈限東溝 限西貞行友重名田安世 限南
智尊上田安世 限北御稻田〉

【上田卅歩】〈限東安吉名田 限西貞行名田安世 限南正行名田安
世 限北智尊町田安世〉

古川上一反小〈供僧頭阿方〉

裏書「これをハみたう」

御堂之勤等被改沙汰置、云二季彼岸云御忌日懺法等、皆悉被成
供畢、但於所被宛田島者、一切不相違云云、委細被注別番矣、

文治貳年十一月 日

都合

本田【捌玖町玖段捌拾歩内】「この内一反小のそきおハぬ、けんき
う元年九月廿七日しむミたうへなし候」

除田【壹】二町【半】二段

「一丁 二御供僧供田〈各五段〉」

井料二段 修理田【三段半】四段〈元預所佃〉

井料二段 修理田【三段半】四段〈元預所佃〉

井料二段 修理田【三段半】四段〈元預所佃〉

神田四「五」段〈元西教房給田〉【用途料田一段】〈元下司免田〉「下司給一段」

定田【七】六町捌段【貳佰陸拾歩】〈内新庄田五丁三段廿歩上御庄田一丁四段三百四十歩〉

(消)「三十四石」

所当米參拾陸斛捌斗陸升肆合内〈除三石六斗八升六合四夕執行得分也右内各除一斗定〉

延定伍拾捌斛玖斗捌升貳合肆夕内

〈除五石八斗九升八合二夕四才定米五十三石八升四合一夕六才本斗政所一斗六升延定云々〉

田率藁〈段別三束定〉

【貳佰參拾陸束壹把七分】二百四束

畠坪付并所当事

友重名一反半〈野島〉

酒殿一反〈奈義淵南〉

宗友名一反小内〈小野島〉

狐墓小〈野島〉

新重国名二反百四十歩内〈二百歩野島〉 地子二斗

中寺一反

小田三百歩

本重国名一反八十歩〈野島〉 地子七升二合

六条口二所へ一所百廿歩 一所六十歩 狐墓二百六十歩

「このうち一反小いわう之分」

十樂法師屋居二反百廿歩内一反〈限東国包名田岸 限西路 限南路限北末成名畠中垣〉

都合老町貳拾歩内

吉畠伍段貳佰肆拾歩〈地子五斗陸升陸合陸夕〈段別壹斗定〉〉

野島肆段佰陸拾歩〈地子貳斗貳升貳合捌夕〈段別五升定〉〉

并御地子七斗捌升玖合肆夕

政所御斗延定壹斛壹斗捌升肆合壹夕〈但斗別五升延定〉

一田堵伍人 湯四人〈四日新重国 十五日十樂法師 十八日正行 廿二日国末〉

掃除一人〈友重〉

件負名等、毎月湯四箇日〈但人別一度〉掃除并万雜事無闕怠可勤之、仍於本家方万雜事者、一切不可勤仕之、

右、所注置如件、「これらあなかしこあなかしこ、たかへさせ給な、これをたかへん人はさらにわかのちをつかせ給まし、よくよく仏かみ申をきたりゆめゆめさうあるましく候、この内これやすはたとある二百ふハのそき候、」

仁安四年十二月 日

但仁安四年伽藍造畢、并遂供養、以本庄新庄領田

畠、雖寄置仏性燈油種種仏事用途等、治承元年之

比、重巡思慮、御堂相折造改了、仍令加近江介殿判

給、兼又預所等令加署之状如件、

治承元年十二月 日

(花押) ○花押、①ニ同ジ 下御庄預所 藤原朝臣仲親

上御庄預所散位源朝臣邦方

七たいにいたるまで、たかへまいらすへからず、

○紙目毎ニ裏花押アリ みなもとのうち (花押)

344、《書籍頁一九三六》

○三八二五 高階氏女菩提寺讓狀○勝尾寺文書

(端裏)「菩提寺讓馬大夫後家尼高階氏自筆狀」

ほたいしは、こ馬の大夫のうちてらなり、それをこ大学のせんし殿は、あかこよりこのあまてらへ、とんとりやしなゐたてまつりて、ひとへにわかこのことくにおもひまいらせしかハ、ゆつりまいらせ

られたりつるに、まことに御このことく、馬の大夫のけうやう□□
□せさせ□□(候給力)へれは、このあまめ、さこそは、けうやう
せられまいらせんすらめと、たのもしくおもひ給つるに、このあま
八八十五となり給を、うちすてうせさせ給ひぬる心うさ、かなし
さ、もうすましく候、うせさせ給ふとて、くちをしうさきたてま
かりぬるこそ、よに心うくおもひ候へとて、後の殿たのみまうした
る人なり、ほ大しは、後の殿に馬の大夫のゆつりふみとて、くして
なかくしらせ給へとて、たてまつらせ給へと、かへすくゆいこん
しておはします事なれハ、たしかにまいらせ候ぬとして、きをゐま
うすへき人候はず、たしあまかめはたらき候はんとは、あまさ
たして□□□をも、かちしをも、まうして候はむ□□□あなかしこ
く、

治承二年四月六日

あまかのちくのちのけうようも、こ御方のおほしめしたりしこと
くにせさせ給ふへきなり、あなかしこ、

件菩提寺別当職、任故大学禅師御房之御遺言之旨、□可令讓進郷君
給明白他、仍在地加証署、手次後家尼御前御自署也、

職事甘南(花押)

惣職事佐伯(花押)

権檢校佐伯(花押)

別当佐伯(花押)

僧(花押)

件菩提寺執行別当職、任本願故馬大夫佐長後家尼公禅妙支配旨、郷
禅師君可令知行領掌、更不可他妨、仍加判、

(花押) (預所行兼力)

345《書籍頁二九四一》

○三八三二 僧仁玄申状○東南院文書五ノ十三
伝燈法師位仁玄解 申請 寺家政所御裁事

請被殊蒙 鴻恩、任代代相伝公驗理、令停止寛□□□(珍已講)

并定佗等无道妨、可仁玄領掌之由、仰下字法用□□、

右、謹檢案内、件庄(ハ)定雅相伝所知也、而仁玄相伝之由□(緒
力)等顯然也者、任理可領掌旨訴申之處、於寺家可対□□数度雖被
仰下、各於不参対、寛珍已講(ハ)賜白川法印御□□、全以不可
及対向(云々)、凡相論道(ハ)及対決被成裁許、是常例□□、申請
(天)雖一兩年領掌、即時被押妨定佗畢、又定佗賜□□寺法務御判
申上之条、又以同前、覚仁等蒙御勘当□□不住之間、以強縁申請御
判、雖企知行、仁玄致沙汰未□□、仍為絶相論、於仁玄者、長吏
二代之間注子細、任道□(理)□□決所訴申也、而令輕仰、不参向
(シ天)、恣巧非論之条、不以世間□□、相論道、不謂親疎貴賤、及
対決是例也、何限寛珍已講□□強縁、只暗可企領掌哉、尤可有御
還迹事也者、於今者□□対向、任道理欲蒙御裁報者、望請鴻恩、
早任公驗相□□停止彼妨、可仁玄領掌旨、被仰下者、将仰 正道
貴旨矣、仍□□如件、以解、

治承二年五月 日 伝燈法師□□□(位仁玄)

346《書籍頁二九四四》

○三八三四 源俊通書状○東大寺文書四ノ四

(端裏)「藤井庄領家少輔入道(源俊通)書状(黒田材木津料不可取
事、侍從僧正坊)」

東大寺材木事、重仰畏承候了、於藤井庄所被押取之材木、早給注文、
如数可令返上候也、

件御庄、左衛門尉宗清自 院給預之時、不論神社仏寺権門勢家材木、
併取津料、其時当寺別当忍辱山僧正御房也、被仰云、南大門修造料
材木、為宗清被押取不安事也、汝(ハ)彼庄本主也、早可返預之由、

所祈念也、是為散自他之遺恨也、如彼御祈念、返給(テ)候(し)かハ、大喜悅候(き)、宗清之時、其數取置(テ)候(志)材木(ヲ)、併返上仕候(志)かハ、僧正自今以後、以不被抑留、可為悅之処、本預(か)所取置之材木(ヲ者)被返送之条、不可説也(ナト)被感候(き)、大仏殿材木(ヲ)、雖一支可己用之義(ヲ)思寄候(ら)さり上(ニ)、自出家(モ)申上事(モ)候(ハ)さりしハ、証文令進(ニモ)不及(テ)罷過候(ニき)、わ津らわしき事一切不聞候(き?)、故小野法印補別当之後(ニコソ)、津料事被触(テ)候(し)かハ、若沙汰者(ノ)尚抑留仕候(か)とて、無左右下文(ヲ)書(テ)付使(テ)遣候了、今度証文(とて)、自出家取出(テ)給状是也、其後又自彼法印之許、津料(ハ)尚取なる(と)被示送(テ)候(し)かハ、返事(ニ)申候(し)様、此事(ハ)怖別当之御威、又為一旦之会尺、虚下文(ヲ)献(テ)、ちかひさまに下知(テ)材木(ヲハ)貪(と)思食にや候らん、内心之真偽大仏定令見給らんと申て候しに、さしかへして、担任たる津料にハあらず、官食料(に)立篋一具(ニ)木(ヲ)一支取(ナルソト)候(し)かハ、此証文(トテ)続(テ)候三月八日状(ハ)件返事(ニ)候、其後召上津目代相尋之間、申云、法勝寺材木(モ)被免(テ)候(と)也、官食料許(ハ)河守か食料(ニ)一支(ハ)取候也、忍辱山僧正御房御時【は】(モ)、東大寺材木津料(ハ)不引候(し)かとん、任例官食料(ハ)不及沙汰候(き)、其御時節(ニモ)、此程事(に)し(ハ)被仰出候(ら)む、此別当(ハ)こまやかなる神妙の沙汰人にて御座之由、承候(ハ)、此程の事(ハ)被申ニコソ候(メ)レト申候(し)かハ、於東大寺寺者官食料(モ)不可思寄、河守(ハ)取(モ)領家(カ)取定也、大仏殿材木雖一支蓬屋ノ修理(ナト)加(テ)ハ、非作鉄城、努力々々(ト)下知候(ニキ)、其後諸筏師(ハ)皆悉号東大寺筏(テ)、空罷過候(ケ)レハ、為御庄、其損無極候、又搜真偽之間、喧嘩(ニ)候(ケ)リ、仍東大寺柚沙汰人書送文一通(テ)、津(ニ)留(ヨ)、件送文(ヲ)続置(テ)、

別当之許(進)ト申(テ)、小野法印・普門法印之任(ニハ)、如此沙汰之候(し)なり、御任もさやうに候(ハ)能候敷、送文不候(ハ)、自今以後も喧嘩不可絶候也、

此折帛状(ニ)頭惠法印寺務之間被触之刻、中務少輔延俊之返事、及子々孫々不可令致妨之由下書置、可取率分之由、責勘(ト)書(テ)候(コソ)、乍身(モ)ゆかしうたてく覚(候)、頭惠(ニ)追從之余(ニ)、人モセメ、又子々孫々の詞(ヲ)書置(テ)、大仏(ハ)ハスカシタテマツリ候らん、入道法師(ヨ)、ナンチら頭(ヲ)剃(テ)候(ら)らん、又永俊書状(ニ)、早々經院奏、可被仰下(ト)申(テ)候(ハ)、何様可被奏須にかあらん、何故大仏材木(ヲ)抑留せしとハ思そと申答にや可候、何様(ニ)院奏(ハ)可經(ソ)ト可令問給候、津沙汰人丸(ハ)東大寺材木(ハ)他人の(カ)と尋分候(ハ)んハ、各寺家強非愁候敷、安事(ニ)候送文(ヲ)付候(ハ)し、抑件庄(ハ)附属安芸国司仕(テ)、雖不知庄務候、付折帛状、大仏(ヲ)すかし万(イ)らする所行(ヲ)陳候也、又他人申候(ハ)、可被尋芸州(ナト)可申候(ニ)、仰(口)て候(ハ)、争委不令申候哉、先日以宿曜師慶算令申案内候了、又々以使者可言上候、恐々謹言、

治承二年

六月廿日

仁口(ヨメズ)(奉)

347、《書籍頁二九五九》

○三八五三 大式入道讓狀○書陵部所藏古文書

(端書)「大式入道讓狀(治承二年七月十八日)」

女院の御くたしふみはさきにはやくなりにき、なをくたのさまたけあるまし、あなかしこく、

中将のうへにゆつたりしとくんと物とんは、みなせんしこせにわこそはあのおうへもおもはれたりしかとん、心ならぬやうなる事とんのみきこゆれば、まつかつくきらのにしかたひさ(カカ)しの

てうと(う脱カ)は、せんしこせんにしたしかにくゆつり候ぬ、たれんくさまたけさせ給まし、ゆめく、

治承二年七月十八日 沙弥(花押)

中務権大輔藤原朝臣(花押)

348、《書籍頁二九六二》

〇三八六一 東大寺領某莊住人解〇東南院文書五ノ十三、右、以前雖令言上於子細、重所令□□□□使既有寺家之請文之上、於京都可致其佐(沙下同ジ)汰、申請処(ニ)、未無其弁佐汰(ト)申(シテ)、自目代之所既於人夫繩者、先可弁進(ト)申、令責勘候処、官使定罷入御庄内候(ハ)、百姓住人等一人不令安堵候者歟、望請 恩載(裁)、此由令御還迹、早速被致御佐汰者、弥仰 正道之貴、以解、

治承二年九月三日

御庄住人等(上)

349、《書籍頁二九六八》

〇三八七六 僧淨昭田地去渡状〇中文書
渡 紀伊国伊都郡志賀郷内
くるミ谷之名分内田事

字火口古河合半、四至(東限ミへ、南限溝/西限明白也、北限大河) 一セ町田六十步、四至明白也、合二百四十步(ハ)寺免田也、

西垣内のみをきた百步并の小島牛鋤之定、

有井田一段并屋敷四至(東限門なへて、南限溝/西限谷、北限大

河)

合四所者

右件所者、僧淨昭之相伝所也、而能陣(ニ)渡、彼子細者、三郎か許文を、あてかはの北庄司殿より能陣に給て、淨昭にたふ所のかハ

り也、為後日沙汰、本券依有類地、放新券文之状如件、

治承三年(己亥)四月十五日 下司大法師(花押)

三郎女之嫡女嫡男国覓万歳

350、《書籍頁二九八六》

〇三八九五 行蓮書状〇巖島神社文書

一日心閑見参候条、尤喜悅無極候く、抑彼法橋昨日被来て候ひき、仍子細能々申候了、先留守所下文献覽之候、且下(可カ)被下遣候也、猶御庁宣者、今明便宜之時可令申沙汰候也、恐々謹言

(治承三年カ)十二月七日 行蓮(上)

謹上 安芸民部大夫殿

351、《書籍頁二九八七》

〇三八九七 安芸国司下文〇巖島神社文書

重仰 「到来十二月廿二日」

在庁等中(ニモ)又彼所々住人等(モ)、若有無四度解事者、以此仰状、委可下知也、

(花押) 奉〇目代花押二同ジ

下 安芸国留守人々等

可早止国使、為一宮神主沙汰、粟屋郷・三田郷等事、右、件式箇所、彼神主各依有由緒、令賜御庁宣了、仍止国使可為別納之由、先日粟屋郷沙汰之時、被仰下已了、而今為国使令致譴責歟之躰有其聞、事实者甚以無謂、早止国使、可為別納之状、重所仰如件、以下、

治承三年十二月十一日

目代———(花押)(奉)

352、《書籍頁二九九二》

〇三九〇七 円位(西行法師)書状〇高野山文書寶簡集二十三

日前宮事、自入道殿（平清盛）頭中将許、如此遣仰了、返々神妙候、頭中将御返事、書うつして令進候、入道殿安芸一宮より御下向之後、可進之由、沙汰人申候へハ、本をは留候了、彼設他庄ニハふき被切へきよし、以外沙汰候敷、是大師明神令相構御事候敷、入道殿御料（ニ）百万反尊勝タラ尼一山（ニ）可令誦御、何事又々申候へし、蓮花乘院柱絵沙汰、能々可候、住京聊存事候て、于今御山へ遅々仕候也、能々可御祈請候、長日談義、能々可被入御心候也、謹言、

（治承四年）三月十五日

円位

353、《書籍頁二九九二》

○三九〇八 紀貞広処分状○高野山文書又続寶簡集四十九

（端裏）「さきのおの事」

「奉施入御影堂（花押）」

宛行処分帳事

合老段（高野政所西伊揖栢本中サキノヲ下）

四至（限東山 限南八郎殿作／限西光貞作 限北小谷口）

右件田者、紀貞広先祖相伝之田也、然る（ヲ）子息女紀大子所宛渡也、於本券者、住宅焼悉（失）之時令焼了、為後日沙汰、新券文如件、

「奉施入御影堂（花押）」

治承四年三月十八日

筆師（花押）

354、《書籍頁二九九四》

○三九一三 皇嘉門院惣処分状○九条家文書

（端裏）「御惣処分状」

養和元年九月廿日自女院被經 院奏之勅報也、即端（に）続加之了、後代龜鏡何事過斯哉、可神秘々々、

（附箋）「月輪殿判」（花押）

（附箋）「後白河院御本」

これらみ候ひぬ、このケんにはたれかほとかく申候へき、なにこともいかてかやうにさふらはむには、おろかに候へき、まいられたるおりは、かまへても申候はんとこそおもひ候へ、たゞいまものさはかしきやうなることのあるとて、なにかと大将の申候さたし候ほとに、よろつとゞめ候ひぬ、おほせられむことは、こころのおよひ候らんことは、いかてかおろかに候へき、

（符箋）「皇嘉門院御本」

さいそうこんかう院

山し路 そつか あうみ よせ人

いか おほうちのにし ひんかし

あさうた をとは

いつ みつのミくりや 井た

すわう やし路 ひこ つほう

布こ うすきへつき ひせん おほた

地下

九条のたういへ地くら

山し路 くせ いつみ おほいつみ

つのくに ゆかしま たかひら くらかき

おはり もり みかは き良

むさし ふなきた本 新

いなけ本 新

しもつき みなき

ひたち こつるきた みなみ

みの うたのちよくし よひ いはた

わかさ たていし本 新

のと わか山

ゑちこ しらかハ たは をはたのよてん

たは（こカ） かやの山うち さと

たちま こしてむ たち
いつも はやしき いはみ おほへ
きのくに しもつのは あは かわゝた
ふこ つもり ひせん よか

ひんかし九条

いはくら

いつミ つのくに あふみのとねり

あふみの□ちき

これらはいつこもよしみち(良通)のおさなかりしに、みなたてまつりてき、それをさいそうこんかう院ハ、一の人のしられむこそよかるめれといふ人ともありしかは、いへにとりて、一の人しらるへしとて、まつ殿にと申たりしか度、ゆくすえまで、たれも大事に思われむことかたし、大將は心さしもあ覽、又申おきた覽事などは、すえまでもたかへられしとおもへは、□ゆつりにまかせて、すえまでもし覽は、よかりなむとてもと、したゝめたりし定に、いつこも、みなよし見ちにたてまつりつるなり、まつとのたとへ□たうをハわれし覽などいふ事ありとも、もちゐらるまし、この定に、ゆめくたかふまし、おほい殿のおハさんほとは、なに事もさたし候へし、のちハかならずよくよしみちみなしらるへし、

ちそう四年五月十一日

二の中將かねふさ

たちま かみゝち いわみ ますた

しむゑんほういん

かすかのたう

ひせん かよう

ゑちせん いまいつみ

おなしとし月日

これらはをのつからひかこともいってくることもそとて、かきてたてまつる、さる事もあらは、このまゝにたれにも申さたし給へし、二の中將のたつひめ君は、おほい殿にたてまつる、我こと思ひて、なにこともさたさせ給へし、やかてよしみちも、我ことおもひて、おなしようにいとをしうせらるへし、

355、《書籍頁二九九八》

○三九一八 藤原氏女田地売券○東寺百合文書レ

謹辭 売渡進私領田新券文事

合老段者

在山城国石井郷鳥羽手里式拾七坪東繩本參段内中老段、右馬寮也、右、件私領田元者、藤原氏女之先祖相伝私領也、年来領掌之間、全無違乱、而今依有要用、定於能米式拾斛(十合升定)紀国元(に)、限永年所売渡実也、敢不可有他妨、但於本券文者、依有類地不副渡、仍為後代証文、立新券文、以解、

治承四年七月十九日

藤原氏(花押)

(裏書)「幸治相伝文書也」

356、《書籍頁二九九八》

○三九一九 小野姉子田地売券○筒井寛聖氏藏東大寺文書

謹辭 申売渡進田地立券文事

合老段者

在伊賀国名張郡築瀬御庄(字クラモチノ内マロイウ)

四至(限東類地 限南有久作/限西林花田 限北有久作)

右、件田地元者、小野姉子先祖相伝私領也、而依有要用、出挙物米式拾石參斗七升、但此者文書四枚内半利平戊、其代尾張恒成限永年作手、所渡進明白也、仍為後日沙汰、放新券文如件、但於名(二)者放了、

治承四年八月十六日 小野（略押）
夫伴（略押）

357、《書籍頁三〇〇二》
○三九二九 沙弥行蓮書狀○嚴島神社文書

重申
御庁宣（二八）国判之上（二）端裏（二八）令申加大納
言殿御判候了、是為御証文也、恐々謹言、

奉獻

御庁宣二枚事

右、奉獻如件、此内於春木・市折者、永為神領為令備御文書、載其
子細、於右狀所者、奉免候也、於其代之公田所当米者、又止国衙収
納使之責、為御社司之沙汰、可令勤濟給之由、見狀候、兼又粟屋郷
者、芸州當時熟所行蓮給之了、而件文書可令伝領之由承之、仍無左
右所令申補也、故何者、行蓮者当御任一廻之沙汰也、貴殿已為御社
司及多年之星霜者也、然者以此一紙之証文、可被伝万代之公驗也、
抑行蓮仕眼代之職、經四十餘廻之年月、兼行數国、及五旬有餘之算
了、而為国為人、更不致為歎之事、何況於神社仏事之事哉、就中 入
道太相国御辺御事、殊可抽愚忠之由、弥以所令存候也、仍可然樣令
披露給者、所望可足而已、恐々謹言、

（治承三年力）十月十八日 沙弥行蓮（上）

謹上 平民部大夫（景弘）殿

358、《書籍頁三〇〇八》

○三九三九 法印某書狀○石山寺所藏聖教目錄裏文書

絶久不令申案候、実指□不候之故□、世間不静候、誠諸人怖畏候歟、
但還都□由披露、又以大慶候歟、
抑房州濫行事、先度□為座主沙汰被尋下候□時、付中堂執行可令停

止□由、仰遣之處、件事全非中堂之沙汰、不知之由所申候也、雖然
遣使者、可召上□由、令沙汰之處近來惡

間不用候歟、返々淺猿事共候也、雖然猶其沙汰□候、同以此旨可加
制止候也、□庄解若（ハ）如寺解候者、□沙汰次第□□□□子
細令申御使候了、恐々謹言、

（治承四年）十一月廿日

法印（花押）

359、《書籍頁三〇一九》

○三九六〇 參議藤原頼定讓狀案○書陵部所藏文書

□件屋地庄園等、散位藤原頼房為嫡子之□為最愛子、仍永所付属如
件、（在判）

治承五年三月十五日

參議正三位藤原朝臣（頼定）（在判）

法印權大僧都（在判）

為証人加愚判了、且如此、若達天聰事出来（ハ）可為
証人（文力）耳、

360、《書籍頁三〇二〇》

○三九六三 関東兵乱并三合祈奉幣宣命案○書陵部所藏壬生文書

「関東并三合御祈」

天皇（我）詔旨掛畏（岐）某太神（乃）広前（爾）、恐（見）恐（見）
毛（申賜（者久）都、申（久）、謬以幼稚（豆）忝（久）守洪基（留）
日慎夕惕（志豆）如履薄氷（志）、而明年曆相当三合（豆）、去春閏
在二月（利）、術家所告（呂）、畏途不少、又関東（乃）凶賊逆心不
息（須）、西海（乃）間（爾毛）頗有乱法之聞（利）、如此（乃）凶
類（於毛）即時（三）誅滅（志）、又明年（乃）三合（乃）厄（爾）
依（利豆）可來（良牟）災禍（於毛）、未萌（爾）令消除（め）給（者

牟申（波）、太神（乃）広（支）御惠（美）厚（き）御助（爾）可在物（奈利／と）所念行（奈牟）、故是以吉日良辰（乎）拵定（弓）官位姓名（乎）差使（弓）、礼代（乃）大幣（乎）令捧持（弓）奉出給（布）、太神此状（乎）平（久）安（久）聞食（弓）、苳宰考槃（志弓）民無菜色之愁（久）、年静謐（志弓）人誇艾安之俗（弓）、天皇朝廷（乎）實位無道（久）常磐堅磐（爾）夜守（り）日守（に）護幸奉給（弓）、玉躰安穩（爾）天長地久（に）無為無事（の）御代（と）鎮護（の）誓（乎）不愆（須）護恤給（と）、恐（美）恐（見毛）申給（者久と）申、

治承五年五月十九日

361、《書籍頁三〇二七》

○三九七〇 米請取状○京都大学所藏大東文書

山へむの東しやより

米一斗五升

たしかにをくりまいらせな李、

治承五年七月廿八日

362、《書籍頁三〇三〇》

○三九七九 能宗奉書○高野山文書寶簡集二十五

去四日御文、今日八日到来、委令申上候了、

荒川事、実神妙之由候也、今一事ハ定其沙汰候歟、且又可申遣左少

弁許候也、又々重御珍菓等、令取進候了、以外之御志也ト候也、御

状事吉々申上了、恐々謹言、

（養和元年力）二月八日

能宗（奉）

363、《書籍頁三〇三五》

○三九九八 後白河院庁公文所問注記案○東大寺文書四ノ五

（端裏）「東大寺黒田庄（院庁）問注記案（正文在藏人左衛門権佐光長之許）」

養和元年八月十八日問注東大寺所司伊賀国在庁等申詞記

源兼信（伊賀国在庁）

右、問兼信云、去三月日東大寺所司等解状稱、去年十二月南都滅亡、今月一日先所領庄齒如元可令寺領之由、被宣下之處、至于伊賀国黒田庄、国司尚不承引、重所停廢也、国解之趣、黒田庄本免之外、寺僧無指故掠領數百町公田云云、言上之旨、詐偽之甚也、故何者、彼庄本田之外号出作新庄者、寺家自元依寄得地主券契、八十人杣工等以此地為居處、永被免国役、一向勤來寺役、尚於所当官物者、依為寺工之負田、不准餘公田減官物、於二斗代之内、分其所当先便補当寺封戸、其外纔以所殘所令弁濟国庫也、子細見于所進官符国判等状、而為徵納件官物、国使乱入之間、寺役動及闕怠、所濟為国雖不幾、為寺極煩也、依為年来之愁、別当顯惠法印知行之時、御封便補之殘事、触訴子細於国使之尅、次第依有便宜、令成奉免庁宣之上、為断向後之牢籠、經奏聞之處、承安四年一向可為寺領之由、被成下庁御下文畢、于時法印任旧以出作所当内便補御封、以所殘并新庄所当、永所定宛常住学生百口供料也、募其供料、於鎮守八幡大菩薩實前、扱一百人学侶、披三十座之講筵、法味添三所之莊、惠日有再中之慶、加之嘔六十口僧徒、三箇日之間転読三部大般若經、彼是共為每年之例事、遥契後仏之出世、捧其講誦之薰修、偏祈法皇之御願、事非聊爾、何忽失墜乎、随則件出作等本自是寺領也、不似一向之公田、又已蒙庁裁畢、何称僧徒之押領乎、国司乍知此子細、去年秋比以後背庁御下文、猥令停廢之条、非啻輕吾后之御威、亦非奪百僧之資縁乎、罪障之甚、只在斯事、伏思事情、昔聖武皇帝之施一万町之水田也、曆五百歲而未改、今我后法皇之賜百学生供料也、隔七箇年而豈變、古今雖異、帰依可同者歟者、件子細依実弁申如何、

兼信申云、先黒田本庄停廢之条、以外無実也、去正月依惡僧之謀叛、

雖被下没官之宣旨（毛）、別（天）加優免、不檢注四至內（須）所免除所當也、就中如元可為寺領之由被宣下之後、弥不及沙汰（須）、其旨寺家所進去四月廿日（乃）留守所下文（仁）見（多利）、件本庄（波）田數廿五町八段百八十步也、黒田・安倍田・大屋戸、此三ヶ村（仁）有（利）、全不令停廢、又新庄（と）申（波）、本自為國領（弓）弁濟官物（志）、所勤來國事也、自承安四年之比、所号新庄也、非旧庄号（須）、至于出作者、官物段別三斗（於）弁國衙（弓）、雜事（波）所叶寺家也、以件地利便補東大寺御封（志弓）、以其殘（波）所弁公方濟物也、而前々司信広（乃）任（仁）、別結解（仁）申請（云々）、奉免寺家之条、彼任中（仁）不承及（須）、次（乃）守信平（之）任（仁）、有前司庁宣之由、始（弓）所承也、仍彼信平朝臣經奏聞、可停止彼妨之由、被申成院庁御下文畢（多利）、任其狀（弓）当任國司申請官符（弓）、所被停廢也、承安四年（仁）被成院庁御下文、奉免之由、全不承及候（須）、被付國（弓）候（波牟於波）、盡存候哉、此沙汰之時（仁古曾）始（天）出来候（倍）、就中不被注田數、不被定四至榜示、暗掠領數百町田畠畢（多利）、仍御奉免之由、在庁等不令存候（と）申、

大法師參曉（東大寺所司）

問參曉云、以汝之解狀問在庁之處、弁申旨如此、子細弁申如何、參曉申云、本庄不停廢之由弁申之条、以外（乃）偽言也、改定庄官（志弓）補任他人（志）、入收納使（弓）徵取官物并引出物、以庁小目代（弓）使（と志弓）不入寺家使（須）、過之（多留）停廢（波）何樣可候哉、新庄出作等同前（仁）候、又國司庁宣并庁御下文（於）不触留守所（留）事、本自為寺領（弓）更無相違、其所当段別二斗也、立用当寺御封之外、以所殘之少分（弓）弁來國司（留）、而其少分所当依有事之煩（弓）、信広之任（仁）成奉免之庁宣（天）、令施入畢（多利）、任其狀別当法印顯惠經院奏（弓）、宛百学生料、被申下庁御下文畢（多利）、依無新立之儀（天）、不触留守所（須）、又信

平任（仁）被停廢之由、在庁申（須）、諸無実也、寺家更不承及、又承安二年庁宣同四年庁御下文（仁）不載田數之事（波）、本自寺領顯然之故也、寄事於左右、押取數百町田地之由、國司申之条、甚矯饒也、名張一郡往古寺領二百八十九町二段百三十步（薦生出作外）、代々立券檢注國衙注文等顯然也、件等証文十通進之、其內去天治二年國檢田目錄（在國司判）件狀（仁）寺領田數已以顯然也、而押籠數百町之由、為令經院奏（仁）注加無実田數之条、尤不当也、又以阿拝郡寺領田申加新庄內之条、甚不当也、即是天平勅施入以下無相違之寺領也、全非名張郡內（須）、此沙汰之時不可出来事也、為加增田數所混申也、今在庁（加）申候築瀨村田畠（波）、彼二百八十九町（加）內也、今如在庁所進之安元庁御下文者、顯惠法印（乃）申下出作田數之外、有出作敷、若然者可停廢之由顯然也、然者彼外無其出作、已不可寺領停廢之由（乃）証拋候敷、又本庄（乃）三箇村名字前後相違、不足言事也、前陳狀（仁波）玉瀧・板蠅・黒田（と）注申、何以阿拝郡玉瀧可書加名張郡本免廿五町內哉、隨又今度陳狀（仁波）黒田・安倍田・大屋戸村（と）申、變々之条、似不知子細（と）申、兼信申云、如先条弁申（久）、寺家所進之留守所符云、黒田庄田外云々、以之思之、本庄不停廢之由已以顯然也、本庄作人兼作出作之間、依催其所當（弓）如此訴申敷、又注加他郡田事（波）、惣自寺家依成妨、所注申候也、又以安元庁御下文備進証文事（波）、承安庁下文（仁）依不被載田數、可停廢之由（乃）証文（と）在庁（波）存候（比弓）備進候（奈利）、又所司所進（乃）証文檢田帳等（仁）候敷、田數增減追年不同、然者不足証拋、以御使被実檢（仁）、無其隱敷、又築瀨村（波）全非出作、新庄內往古國領也、而出作內（仁）申加之条、甚以不当也、去承安二年十月十二日并承安元年七月一日宣旨（仁）、可國領之由已以顯然也、而彼出作新庄內（仁）欲掠加之条、尚以不当也、尤可國領地也、又三ヶ村名字相違之条（波）、先条解狀（能）目錄（仁）雖書加（毛）、後注文（仁）注直（弓）令進候（と）申、

參曉申云、本庄不停廢之由、在庁陳申、諸無実也、於出作新庄等者、懸郡司(弓)成徴符(志)、至于本庄(波)改沙汰人(弓)徴官物(利)、責取引出物畢(幾)、又阿拝郡田(波)天平廿年十月廿七日成官符(弓)勅施入内也、何始(天)致其妨之由可申哉、又去保安四年明法勘狀(仁)、天平以後為往古寺領之由、見其狀(多利)、随又応和・天徳(仁)免除正税(弓)、為一色不輸之寺領(利)、而依致寺家妨(弓)注加之由、今在庁申条、甚不当也、次第証文顯然也、三个村名字前後相違之条(波)、為申煩寺領(仁)、如此所混申也、又築瀬村(波)黒田庄(乃)往古出作内也、天治二年国檢田目錄・嘉承元年官庁下文・天承二年(乃)宣旨・長承元年国司庁宣・同年官使勘狀・永曆二年庁宣・承安二年庁宣等皆以顯然也、而承安元年国衙(仁)雖申下宣旨、同二年永可奉免大仏舍那之由、被成庁宣畢、随(弓)承安四年庁御下文内(と志弓)、以奉免之官物(弓)学生料并三十講供料(仁)所宛用也、輒破庁御下文(弓)停廢之条、甚不当也(と)申、兼信申云、玉瀧事(波)、寺家(仁)申天平勅施入(仁毛)地二町墾田七町一段也、其後寄事於彼施入田、掠取百餘町田地之条、甚以不当(奈利)、応和天徳(乃)宣旨(仁波)田畠事(於)不被載、只材木(乃)沙汰許也、其後代々国司皆以玉瀧田地為公領、所令徴納所当也、凡(波)伊賀国四郡也、其内於名張一郡者、已掠領畢(多利)、又至阿拝半郡、同以掠領、所殘二郡或太神宮御領、或諸院宮及殿下御領也、然間国司進止(乃)国領地、如無段歩、為在庁乃輩、無可致沙汰之地、当国之有無、只可依御定、且子細国司所進之兩度陳狀并折紙等(仁)見(倍弓)候、所詮遣御使、被披檢寺家訴申田地(仁)国司披陳無其隱候歟(と)申、

(弓)又以施入、天徳三年(仁)地主元真又以施入、如此買集(多留)地(於)以(弓)、天徳応和(仁)可免正税之由、被成国判畢(多利)、仍為一色不輸之寺領、于今無牢籠、件等証文進覽之、委細証文之次第見保安四年法家勘狀(多利)、是即勅施入之本庄也、此外鞆田村為玉瀧庄内(弓)勤仕寺役、其後保安四年停廢鞆田、彼法家勘狀(仁)、即件村沙汰寺家道理之由顯然也、且依為権門于今被停廢畢(多利)、仍為一色不輸庄領之上、被著負寺家御封(留)尚為大愁、況始(天)寺家掠領之由、在庁訴申、諸謀略也、阿拝郡寺領僅百余町、可及半郡哉、当任以前代々国司不致如此之訴、始(天)当任国司致此訴之条、甚以不当也、就中為增名張郡田數、以阿拝郡寺領申加承安新立之条、矯飭之至、無其隱、且天平神護二年国郡勘定(仁)、田數八十町四段二百七十歩、其後天徳(仁毛)彼本田上(仁)開発田畠五十町也、応和(仁)任旧例(弓)開発所当可免除之由、国判候也、件等証文進覽之(と)申、

覆問參曉云、黒田庄出作新庄等、於雜事者叶寺家、至于官物者便補当寺御封之外、弁来国庫之由顯然也、而承安二年国司信広之任、公田并出作所当官物奉免寺家之由成庁宣畢、仍彼寺別当法印顯惠經院奏、同四年十二月十三日被成庁御下文畢、其狀云、且依文書理、且任国司庁宣、永以当国名張郡黒田庄出作并同郡内新庄等、可為当寺領云々、不触子細於留守所、不堺四至、不遂立券、不限田數、暗依欲押領一郡、去年九月十一日申下条事官符、今停廢之由、在庁所弁申也、如申狀者非無其謂、若是寄事於左右、寺領之外欲掠取国領歟、就中件庁御下文被下在庁官人之由見其狀、不取施行符、不經次第沙汰之条、疑殆旁遺、非無不審、且又如寺家申狀者、名張郡寺領田二百八十九丁余云々、如在庁申狀者三百五十六町六段二百七歩也、二百八十九町余之外不可訴申歟、次築瀬村事、為出作之由雖注申、去安元々年并承安元年、限彼一村可停廢之由、別被下宣旨畢、以之思之、如在庁申狀、彼出作之外、別国領歟、就中寺家所進証文者、去

治曆三年八月十一日藤原真遠限直百八十石、令奉進于別當僧都云々、又永曆二年八月・承安二年三月、其時国司被成免除庁宣畢、以之案之、地主真遠治曆年中始申国司免判之由顯然也、若非寺領歟、疑殆多端、次又玉瀧杣事、件杣非名張郡内、已阿拝郡也、寺家本自雖不訴申、載而在国司之陳狀、於杣外作田者勿論国領云々、就中如寺家所進天平官符者、地二町墾田七町一段屋八宇板倉七間云々、此外若为国領歟、件等子細依実弁申如何、

参曉申云、件田數新庄出作并(弓)二百八十九町二段百三十步(波)、矢川条(仁)五十六町七段二百五十步、中村条(仁)百十七町九段二百卅步、夏見条(仁)四十町四段六十步、佐久田条(仁)十三町五段三百步、築瀨条(仁)六十町五段三百步、已上此五ヶ村(乃)所在安元二年寺家檢注(乃)定也、是即天治二年国檢田帳・長承二年東南院檢注・承安元年築瀨勘定(於)引勘(仁)無幾之相違、国司(乃)注申(須)国司館田・在庁名田(波)、新庄内(乃)重書也、即寺家注文之上(仁)国司館田并在庁自名(波)是(奈利と)押紙畢(奈利)、又於安富名者、古山庄(乃)他領也、築瀨之条(乃)上(仁)、當時注加三十余町之条無実也、此旨即見承安元年国衛勘定(多利)、仍別田數不候也、又於不触国衛之条者、往古寺領工名田之上(乃)官物許(於)被免之上(仁)、承安二年(仁)被成国司庁宣畢、然者国衛(仁波)何不存知候哉、彼二百八十九町余内御封負田百十町并常荒川成神社仏寺庄官給免村々并料運賃等(お)除定学生供米寺納定僅二百石許歟、为国非支(須)、為寺至要也、忝承安四年給庁御下文畢(多利)、大仏炎上之折節不奏事由、強企停廢之条、付冥顯(天)其恐候歟、就中以阿拝郡往古寺領、今承安新立(仁)申加之条、謀計之甚也、又件玉瀧・内保・湯船・真木山等(波)天平勅施入内也、官符宣旨代々国判等旁以顯然也、国司所進之証文中(仁)、天平官符相副(多利)、自乍捧勅入之官符、申加承安新立之条、是非理致之所及、不似官長者申狀事歟、言語道斷之事也、凡承安四年庁御下文之

外(仁)、無掠段歩公田(志)、寺家申二百八十九町(波)皆以帶証文(須)、国司(乃)申五百町(波)虚誕也、本願施入一万町水田、昔(波)皆公田也、勅免以後四百余歲、未被下改易之宣旨、縱雖承安新立、豈忽有改易哉、続日本紀第十云、天平元年十一月矣已太政官奏、寺家神家地者、不須改易勅許者、往古寺領雜免之上(仁)、被寄少分官物畢(多利)、今停止国司之濫訴(志弓)、任承安御下文(天)、重欲蒙庁裁(と)申、

覆問在庁兼信云、黒田本庄不停廢之由雖陳申、如寺家申狀者、已差申証人畢、又至于出作新庄者、院庁御下文并国司庁宣、不触留守所、不取施行符之間、不承及之由雖弁申、如在庁所進安元々年前国司信平申請庁御下文狀者、件出作顯惠法印為別當之時、被成庁御下文畢、件下文田數之外、尚自寺家致其妨歟、若然者、宜令停止者、而去年九月申請条事官符之時、雜掌解狀云、前司信広之任、更構取国判云々、其外有院庁御下文之由、不書載之、寺家設雖不触留守所、在庁定存知歟、令弁申旨前後相違歟、件子細依実弁申如何、兼信申云、本庄不停廢之由、先条申候畢、且寺家所進之留守所下文(仁)、不停廢之由顯然也、又承安四年庁御下文事(波)、被成下之由(於波)雖承及候(毛)、依不見其狀(弓)不知之由(於波)申候歟、条事官符(毛)被下候畢(幾)、又安元庁御下文狀事、子細先条申候畢、所詮(波)、承安二年(仁)寺家偷語取国司信広庁宣(弓)、不載田數(志弓)、為掠領一郡(仁)申下庁御下文畢、因之国司信平以後、依無可国領之地(弓)、拜任之後、朝(仁)各申辭退、当任(仁毛)如此之掠領(於)不被止候者、徒雖有国郡之名(毛)、專可煩封家納官之濟物、裁許只可有御定(と)申、

申

伊賀国在庁源兼信

同 盛良

惟宗俊守

東大寺所司

勾当大法師參曉

問注

公文左衛門番長笠俊兼

主典代散位中原朝臣盛職

散位中原朝臣職国

西市正中原朝臣政泰

散位中原朝臣景宗

364、《書籍頁三〇四三》

〇四〇〇〇 伊賀国黒田莊出作田數勘合注文〇東大寺文書四ノ六

(端裏)「国司隆職申田數當時勘合注文」

国司隆職申田數事

矢川条

国司陳狀云、五十四町一段六十步者、

長承二年東南院檢注四十九町九段

安元二年寺家檢注五十六町七段二百五十步

今彼此勘□(合力)之處、国司所申者、長承檢注所增四町二

段六十步 安元檢注所減二町六段百九十步

中村□(条)

国司申

長承二年東南院檢注百十八町二段

安元二年寺□(家)檢注百十七町九段

□□□□□□□□長承檢注所增一町六段百五十步 安

元檢注□□□□町八段百廿步

夏見条

国司申五十二町七段百八十步

□(長) 承二年東南院檢注卅七田(町)七段

安元二年寺□(家) 檢注五十町□段百廿步

今彼此勘合之處、国司所申者、長承檢注(爾)所增□四町□

段三百步 安元檢注(爾)所減一町一段二百□

築瀬□(保力)

国司 五十四町二段六十步

同保下津名張卅七町四段百廿步

已上九十一町六段百八十步者

抑於此村者、東南院依為領主、勤本家領家兩方課役、仍為省住
民之煩、不入寺家使、就承安元年国衙徵符、可弁進所當官物於
寺家之由、東南院院主令申請了、而件徵符田數七十四町一段百
八十步也、此内於七町二段者、越出作内了、又除比奈智押作并
神領六町三段百廿步了、仍定田六十町一段百八十步也、
今以之勘合国司申狀之處、承安元年徵符(爾)所增卅一町五

段

此外国司陳狀云、

国司館田三町四段

在庁名田廿三町七段

安□(富) 名十一町二段

已上卅八町三段者

件卅八町不注其在所、不審尤多、若是以已所注申之矢川・中村・
夏見・築瀬四箇条之内昔之立用□(田)、為増田數之長、重書
之歟、儘可被糺出其所在也、如文書之面者、已是無足之田也、
但於安富名者、召問子細於庄官之處、非出作新庄□(内力)、
為古山庄内之由所申也、

以之案之、寺家出作并相交公田、(今出作外別号新庄是也)彼
此都合田數如安元二年寺家檢注并承安元年国衙築瀬徵符者
二百八十九町二段百卅步也、此内□(寺力) 封負田百町、残
学生供田百八十餘町也、国司陳狀所注田之四箇村、定都合三

百五十六町六段二百四十步也、仍国司所申加六十八町六段餘也、

365、《書籍頁三〇五〇》

〇四〇〇九 山城国賀茂別符莊所役注進状○京都大学所藏東大寺文書

注進 賀茂別符御庄所役等事

合

一御卅講饗膳 御寺宿直 填 瓦木事

已上以官省符之所役三分一所勤仕也、

一畠所当物事

於夏所当者、七月七日索餅之料所被宛行也、□□所出者預所之進止也、抑九十三年之間、無他預所之由令申上之状、以外僻事也、

即常法房已講・円樂房五師・法慶房已講、官省符預所也、近者助上座了義房已講又雖為同預所、全於別符庄、無冬所当物之沙汰者也、

以前条々、若以虚言恣構申無実者、奉始 大仏八幡、惣六十餘州普天率士大小神祇冥道之罰(ヲ)連判之輩身上、各可罷蒙之状、如件、

養和元年十一月七日別符御庄職事津守武貞

津守行永(判)

藤井為近(判)

366、《書籍頁三〇五一》

〇四〇一一 山城国禪定寺四至注進状案○禪定寺文書

「平等院公人等殿下御所へ申状案」

禪定寺口領山一千町之四至事

四至(東限近江国堺綾槻尾 南限国分寺山太讓葉峯/西限公田北限大津尾)

□(右カ) 件山宇□□□□□□御時□□□□□□田原三百余家悉毎年□山□□□□□□被召間、今(ハ)号券門(ニ)件領□□□□□□□□往古子□如件、

又次古四条宮并知足院殿下御時、禪定寺□山被促四至事、

(大坂ト云)

東限古都 長尾山田路

四至(ヒラキカ尾ト申ス)

シカコサ)

西限高尾小イチ井谷峯 北限カケ谷槁高峯在御方至□

限丑寅新女院御庄堺在□□至

右、大略注進如件、

但委証文□□所也、

入道俗名忠俊

養和元年十一月廿一日禪定寺下司入道寂西

367、《書籍頁三〇五五》 *裏書のみ

〇四〇一四 清原姉子質地去状○内閣文庫所藏大和国古文書

分渡 家地事

合捌間肆尺者(裏)「但東口也」(裏)「但北口西ハシ二間、文法房

売渡畢」

在東大寺楞伽院内(裏)「又西五間參尺秦中子放与了、」

四至(限東河 限西類地源中子領垣之巡 限南源中子領 限北路)

右件家地者、故上総君(尊珍)相伝之私領也、而清原姉子依年来相親伝領之、而故上総君今春書□(分力)件家地、為質券多中子許置

之、又保元之比負物巨多也、仍兩度負物之代、書放件捌間肆尺、期

永代分渡多中子畢、於本券并手繼者、依為連券不能副進、仍裏書了、

為後日之沙汰、放新券文之状、如件、

養和元年十二月十八日 清原姉子(花押)

尼 (花押)
僧 (花押)
(裏)「四けむかあたいは、かつかつうけおはりぬ、
(略押)」

(略押)

を存候也、毎事期後信、謹言、
(養和二年カ) 四月十二日 僧 (花押)
〇四〇一七号外題目代花押二同ジ
謹上 長野武者殿

368、《書籍頁三〇五六》

〇四〇一六 藤原行遠田地相博状〇内閣文庫所藏伊賀国古文書
謹贖渡 田地新券文事

合佰捌拾歩者(裏)「之内半、紀姉子壳渡了、」

在名張郡中村条西野田水口

四至(限東大溝 限南道/限西教業房領 限北勢楽領)

右、件田元者、去則行田半、教業房得業田墓原老段(お)互依有便宜、贖渡所明白也、但為後日証文、新券文放状如件、

養和二年正月廿三日 藤原行遠(花押)

369、《書籍頁三〇五八》

〇四〇二〇 僧某書状〇金剛寺文書

天野山金剛寺免田四町八段所当随示遣、所令成進外題候也、有限公領雖不能目代之進止、且(ハ)長野兼作并天野谷等為留守所之沙汰、仍幸(ニ)所令奉免候也、件所当私(ニ)こそはつくのひ候はめ、雖自今以後、便宜事不可致忽諸候事歟、抑先日以使者、所令申候材木注文献覽之、頗雖無心候、已及老嘸之間、相尋無常所之處、不慮之外(ニ)或人數地(を)少分所分給也、仍折節云飢饉云世間不落居、旁雖有其憚、當時為躰、追日憔悴、餘命在旦暮、仍如形亡屋一字、念欲【採】取立候也、此間材木等可令採置給候、於山出人夫者、隨堪可令■雇献也、且(ハ)貴殿(も)二十人者、何不令雇給哉、自山出河之行程、何許候乎、日別二歸歟、若(ハ)三歸歟、委可承候也、尚々此条御恩之至、不可申尽候、今月晦比、可入人夫之支度

370、《書籍頁三〇五九》

〇四〇二一 祈年穀奉幣宣命案〇書陵部所藏壬生文書
(端)「今度幣帛依□□□奉納遅引了」

祈年穀(三合) 天麥 地震 兵革 疾疫/飢饉 諸社恠異被載辭別)

天皇(我) 詔旨(止) 掛畏(支) 其大神(乃) 広前(尔) 恐(美) 恐(美毛) 申賜(者久/と) 申(久) 国(者) 以民(豆) 為寶(志)、政者以農(豆) 為先(須)、因茲(豆) 自東作之始(利) 至西収之終(末豆/爾)、風雨調和(志) 稼穡豐衍(奈良/牟) 事(者) 大神(乃) 厚(支) 御惠(美) 広(支) 御助(爾) 可在(奈利/と) 所念行(豆奈/牟)、故是以吉日良辰(乎) 択定(豆)、官位姓名(乎) 差使(豆)、礼代(乃) 大幣(乎) 令捧持(天)、奉出給(布) 掛畏(支) 大神、此状(乎) 平(久) 安(久) 聞食(豆)、百穀新饒(爾) 三農誇業(天)、天皇朝廷(乎) 實位無動(久) 常磐堅磐(爾) 夜守日守(仁) 護幸奉給(天)、国家泰平(尔) 人民凱樂(爾) 守恤給(倍止)、恐(美) 恐(美毛) 申賜(者久/止) 申、

養和二年四月廿四日

371、《書籍頁三〇五九》

〇四〇二三 野寺僧弁慶申状案〇東大寺文書四ノ四十七

野寺住僧□□事

言上三箇条

一請被殊任解状旨、裁下給野寺院主職補任子細状、

右、謹檢案内、於件寺内者、弁慶之父故清元入道開発之地也、堂者即□□也、清元件堂（を）壞上開発之地建立之、其寺内田島皆悉令施入、永順聖人（を）院主（トシ／テ）預居畢、且件永順与清元親族之間也、依之弁慶幼少之時、付永順蒙其教訓、然聖人弟子雖有其教、弁慶是有由来入室之弟子也、爰聖人臨終之尅、琳慶申請房中之聖教本尊仏具資財等、余弟子等之中全不可取領、只為処之流通物可附置本房（云々）、如此加制止、一塵（毛）不散、附置本房、雖然四十九日後悉以多仁御庄自房（三）運取了、以少僧一人付本房、雖号院主代、堂舍破壞、修造全不加工、何況師琳慶彼永順聖人調度文書流記施入帳等、指無讓狀押取、田島領掌、并寺内僧達雖進退仕、□（破力）壞修造之□敢不与力、師弟共為所全無益院主僧也、有樹木者菓子悉他所持運、有竹林者無殘切取、院內非□、偏不知荒廢、如此經年來之間、往古本堂已顛倒、爰弁慶勵微力令修造、以去々々冬供養已了、如此等修理之間、敢以不致助成、然件琳慶已逝去了、其後件代少僧忠寬称琳慶相伝是云々、指無其讓、於□保政□（所力）補任院主職之条、誠以奇異第一之事也、爰弁慶注子細令言上之処、任道理□□保政所賜下□之処（二）、件忠寬貢巨多任補料、又賜下文之、既有授（矯）飭者、是則非事於他、偏与田公文湛与之所行也、所以□何件忠寬与湛与共琳慶之弟子也、依之同意致沙汰之処、當時保司代彼此对決之庭、猶弁慶有理□裁許之間、湛与申条言語道断也処（も）破壞（志）住僧一人無□全無大事、堂舍修造勤致勤厚、弁慶全非大功云々、誠湛□□阿党□□□□尤可被御遺迹也、致初後夜之勤、統仏法踵先跡、不懈當仏事、奉祈 聖朝安穩天長地久国吏泰平御願円満、祈請率土豊饒万民与樂、住僧等全無要事申公文、所行之旨其如何、望請、垂推察、被下憲法裁許給者、将仰正理之嚴旨矣、

弟子余弟子等（三）一物□□分運取、其子細上条注上了、爰□事情、琳慶存生之間、令領掌了、今者逝去之後也、如本欲令附置於本房、且者彼先師聖人御遺言也、望調（請）任解狀之旨、□□□置者、将仰正道之嚴旨矣、

一請被任解狀旨、裁許給施入田島并清元入道私領田島等子細愁狀、右、□案事情、当院住僧□件施入之田島（と）云、清元之田島（と）云、以之随分（三）令耕作、以地利物所济国衙、其余分私用仕（天）、助生命經廻寺中仕者也、然院主相論之間、弁慶与住僧等一意（二）云、其阿党公文湛与□□島上取（天）自下人預蒞取青麦、□（無力）益（三）費人、是偏寺内住僧等（を）以令追却、自今以後、公文湛与之阿党、別所荒廢也、住僧等（之）離山也、若可然者、清元入道之田島并寺中田島、一円住僧等均分令耕作、別結解欲令所济（矣）、望請、任解狀之旨、蒙裁報者、将仰憲法之□（貴力）（矣）、

以前三箇条子細之狀、陳達如斯、任一々解狀之旨、被裁下給者、弥祈禱重祈禱御願円満之由、丁寧令致、且浮跡之住僧等、静意居住、仰仏天三寶威勢、奉祈聖朝国家（矣）、仍為蒙憲法裁判、注事情言上如件、以解、

養和二年四月廿八日 僧弁慶（上）

件三箇条、弁慶可為進止之由、留守所裁判明白也、仍無他妨為令領知、在庁与判之、

散位土師（在判）
散位土師（在判）
散位土師（在判）
散位中原（在判）
散位賀陽（在判）
散位土師（在判）
散位賀陽（在判）
散位賀陽（在判）

散位日置 (在判)
權介大江 (在判)
權介多々良 (在判)

依所見実、在地随近刀禰司等加署判、

越智 (在判)
清原 (在判)
越智 (在判)
賀茂 (在判)
榎本 (在判)
佐伯 (在判)
藤井 (在判)
土師 (在判)
源 (在判)
源 (在判)
源 (在判)
藤原 (在判)

院内住僧等同加証署之、

僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)
僧 (在判)

(裏)「以弁慶補任院主職之者、件田畠任申請旨、於別結解可令寺僧所當、早弁慶復可令寺内住僧等支配之状如件、

御判
任遺言状彼聖教本尊資財具等、可付注渡之状如件、
御判

於弁慶院主職早田畠聖教仏具資財等可令領知之状如件、

目代———在判」

372、《書籍頁三〇六五》

〇四〇二九 僧源順園池壳券〇寶鏡寺文書
沽却 私地壳处事

合

在藪池 (從大宮西 南北肆丈壳尺 / 從今辻子南 東西玖丈)

右、件地者、僧源順之相伝私領也、而依有要用、直上品八丈絹拾壳足沽却了、但限永年從僧源順手、源実友 (ニ) 所壳渡実也、敢不可有他妨、仍為後日沙汰、相副手継文書、立新券之状如件、
寿永元年六月十六日 僧 (花押)

373、《書籍頁三〇六五》

〇四〇三〇 東大寺御油莊田堵注文〇東大寺文書四ノ三十三

注進 東大寺御油御庄田堵等

常内六人 川西四人 稻本七人 (之内庄本三人、根成カキニ三人、カチケノコオリノ内ニ一人) 南ヲチ (ニ) 四人 北ヲチ (ニ) 六人 和田庄三人内二人ハ高市コオリノ内ニ一人ハカチ上コオリニ候 常内内田堵一人 (カチケノコオリニ在)
之 (ハ) 庄々 (ニハ) 注 (シ) 候 (トモ) 常内一庄内 (ナリ)
寿永元年六月十九日 真相房 (上)
常内御庄御油 (東大寺下司)

374、《書籍頁三〇六五》

○四〇三一 兵部錄忠祐書狀○東南院文書六ノ七
御寺御庄々水馬役事、御注文(二)加愚判之条、難進止候、本司下文被成下候之時者、無左右可施行候、不然之外者、尤可有其恐候、但以先々如令申候、五箇庄之外者、未奉其 宣候事敷、更非忽緒之儀候、恐々謹言、

(寿永元年力) 六月廿三日 兵部錄「忠祐」

375、《書籍頁三〇六七》

○四〇三七 興福寺政所下文案○東大寺文書四ノ二十三

(端裏)「興福寺政所御下文 使寺丁為延」

東大寺領水馬(は)被免云々、仍於御寺御使者、東大寺領事不可令口入之状、依政所仰、下知如件、

寿永元年七月十五日

在判(中小路法橋)

376、《書籍頁三〇六九》

○四〇四二 主水正清原近業書狀案○東大寺文書四ノ四十一

(端裏)「水主正」

散在諸郡、不似一國事候、參入之間、且々以可言上候也、近業恐々謹言、

(寿永元年力) 八月四日 主水正清原近業

進上二条殿

東大寺散在免田間事、其後寺家住(注)申候哉、相待此御沙汰、暫猶豫候也、於五力庄者、依今度仰免除候了、於免田等類者、任先例可令催促之由、令存候(ハ)、一國之水馬濟、依此事被抑留、是非一司之訴訟、已朝家之陵遲、尤御計可候也、

諸郡諸郷皆以号彼寺免田寄人等、其所々又捧此御教書案、追欲召戒之水馬使之由、所訴申候也、依此事相待裁報候、可被計仰候敷、

彼國水馬自往昔至當時、不論權門勢家神社仏寺領、為在家門並役、可令催勤之由、每年被宣下候、免除庄々、皆本所帶証文候敷、兼又不(符力)依先例勤否、可免除候哉由、今年被仰下候者、是限一國五力庄候敷、免除田等、

377、《書籍頁三〇七一》

○四〇五〇 藤原宗末起請文○東京大学所藏雜文書

□進 宗清私領□□

合式段半者

在名張郡矢川□□

四至(限東道際 限南為成領際/限西溝際 限北貞宗領際)

右、件田元者、源宗清相伝之私領也、而今藤原宗末負物之質(二)

本券所置也、但其券寿永元年四月中旬追却之時、取失畢、若後日件

本券取出□□可処盜人也、仍為後日沙汰、所立紛失状如件、

兼又件券宗末乍持不持(ト)申候者、当国当郡鎮守、殊(ハ)宇奈

根大家子大明神、別(ハ)大仏八幡之罰藤原宗末身每毛穴可蒙罷候

者也、仍請申起請文如件、

寿永元年八月廿五日 藤原宗末

「件券文紛失之状明白也、於券文取出之輩者、可処盜□□、仍御庄官等可署判之、

刀禰□□

馬工(花押)

頭領藤原」

378、《書籍頁三〇七五》

○四〇五七 任官宣命案○書陵部所藏壬生古文書

天皇(我)詔旨(良万止)勅御命(乎)、親王諸王諸臣□等天下公
民衆聞食(と)宣、正二位行權大納言平宗盛朝臣者、朕(加)為舅

之上〔爾〕儲宮之時〔乃〕大夫〔乃〕勞〔毛〕有利、又□穩〔天〕最可褒美〔爾〕相当〔利〕、仍内大臣□〔尔力〕任賜〔布〕、又宣〔久〕繼々〔仁〕可奉仕〔爾〕依〔天〕、從二□〔位力〕權中納言藤原良通朝臣〔乎〕、權大納言〔乃〕□□〔官尔力〕正二位行權中納言平時忠朝臣・藤原頼盛朝臣等〔乎〕中納言〔乃〕官〔尔〕正三位□□朝臣〔乎〕權中納言〔乃〕官〔爾〕正三位藤原朝臣基家〔乎〕參議〔乃〕官〔爾〕任賜〔者久止〕勅御命〔乎〕衆聞食□宣、

寿永元年十月三日

内弁權大納言実房

宣命使參議通親

作者大内記業家

奉行職事右大弁親宗

379、《書籍頁三〇七九》

〇四〇六七 建部成国田地処分状〇東大寺文書四ノ七十四

〔端裏〕「田一段 かまいしにいふ」

処分渡田地事

合式段者

在名張郡中村条内〔字釜石〕

四至在本券面

右、件田地者、建部成国相伝之私領也、更々年来領掌之間、無他妨、然間嫡女松隈永年処分渡事分明也、仍相副本券〔ヲ〕、為後代証文、放処分帳之状如件、

寿永二年【式年】二月六日 建部成国〔花押〕

四至成国名限東 限南高坏之岸

限西成垣名 限北溝際

380、《書籍頁三〇九一》

〇四〇八五 大和国平田莊公文所陳狀〇興福寺文書
平田御庄公文所

弁申 当麻寺住僧俊慶倫覺等訴申兵士役事

右件兵士事、去十九日〔三〕自近江国野路御宿所被仰下候折紙御下文等如此、為開御不審進覽之、仍為令申其散用、任交名、所令加催候也、但器量之輩内、入不入事者、公文所等所不知給也者、任先日免文之旨、於彼当麻寺者、為 政所御領之由、可令申散用之状、如件、

寿永二年四月廿三日

平田御庄

公文僧覚深

平 惟 重

僧 弁 嚴

381、《書籍頁三〇九二》

〇四〇八六 大神宮奉幣宣命案〇書陵部所藏壬生古文書

天皇〔我〕詔旨〔止〕掛畏〔支〕伊勢〔乃〕度会〔乃〕□□□□下都磐根〔尔〕大宮柱広敷立〔弓〕高天原〔爾〕千木□□□□辞定奉〔留〕天照坐皇太神〔乃〕広前〔爾〕恐〔美〕□□□□申〔久〕、謬以幼齡〔天〕忝膺大器〔天与利〕以来〔太〕、一□□□□四廻〔毛〕德惟輕菲〔爾志天〕政隔重華〔都〕、然間今□□□□惶〔志〕近日變異頻呈〔留〕兢惕之至〔利〕、寤寐□□□□運〔乃〕咎徵〔なりとも〕縦自然〔の〕妖孽〔奈利止毛〕未萌〔爾〕消□□□□攘退給〔倍〕、抑東海東山北陸等〔乃〕無道〔乃〕諸国□□□□輩〔ら〕烏合成群〔豆〕、暴乱猶甚〔久〕、抄掠多端〔志〕、人民□□□州県非穩〔寸〕、因茲〔天〕北陸道〔遍〕先遣追討使〔弓〕□□□□衙勅命〔留〕官軍〔波〕羈旅無恙〔久〕前途遙〔爾〕達〔利〕、□□□□民烟〔乎〕劫略〔世留〕伝〔於波〕必加神兵〔弓〕、不移時剋〔寸〕皆□□□□恙□□□□陸地〔爾弓〕戰〔之波〕、

獵徒〔乃〕逐走獸〔弓〕如得獲〔久〕、海路□□□□風〔乃〕加勁
草〔弓〕如振威〔久〕、官兵〔波〕弥乘勝〔利〕凶師〔波〕□□□□
□伝頭都市〔へ〕或〔波〕束手軍門〔之〕無孽遺〔久〕殺戮〔せ〕
む〕何□□逆徒〔乎毛〕可征伐〔奈利〕、早悔邪謀〔之〕嚮風〔比〕、
各進貢賦□□〔らむ〕、夫本朝〔者〕神国〔奈れ波〕何神〔加〕王法
〔乎〕守給〔波佐〕良牟、就中神宮〔者〕衛護〔乃〕誓殊弘〔久〕
予一人〔者〕欽仰〔乃〕誠最薦〔志〕、如凶類〔於波〕掛畏〔き〕皇
太神〔乃〕広御恤〔尔〕可在〔奈利〕□□所□□、故是以吉日良辰
〔乎〕扱定〔弓〕官位姓名〔乎〕差使□□□□、弱肩〔に〕太纒
取懸〔弓〕内外〔乃〕宮〔爾〕礼代之御幣□□□□□□〔乎〕相副
〔弓〕持斎〔利〕、令掛持〔弓〕奉出給〔布〕中〔乎〕内宮□□□□箭
御饒鈿御鉾御錦盖御鏡御装束御□□□□□□一段唐綾一段火
取玉一顆作花三枝□□御馬各一疋〔乎〕牽副〔弓〕進給〔布〕、外
宮〔爾者〕御弓□□□□蓋御鏡御玉佩御床桶御線柱唐錦一段唐綾
一段□□□□三柱銀鳳一羽彫馬一疋〔爾〕古御馬一疋〔乎〕牽□□
□神此状〔乎〕平〔久〕安〔久〕間食〔弓〕天下泰平〔爾〕□□□□
朝廷〔乎〕宝位無動〔久〕常磐堅磐〔爾〕夜守日守□□□□□□
□桑田〔者〕雖變〔止毛〕、曆数無疆〔久〕、椿年□□□□□□丹折
之趣〔乎〕玄応掲焉〔尔〕護恤給〔へ〕恐□□□□□□、

寿永二年四月廿六□

大内記藤光輔

「使参議正三位行左近衛權少将源朝臣通親□

上卿權大納言宗家 行事右中弁光親 右□□□□

左官掌国成

職事官内少輔親経」

382、《書籍頁三〇九四》

〇四〇八八 石清水奉幣宣命案〇書陵部所藏壬生古文書

草難大内記本〔へ〕石清水□□□

不居、而依清大外〔記脱力〕難追□□□

天皇〔我〕詔旨〔止〕掛畏〔支〕石清水〔仁〕御坐□□薩〔乃〕

広前〔爾〕恐〔美〕恐〔美毛〕申賜〔倍〕止〔申〕久、東大□□□

皇御世〔爾〕大菩薩〔乎〕知識〔爾〕奉唱〔天〕奉□□去治承四

年十二月〔爾〕事起、不凶〔爾〕自然〔爾〕□□□□堂舎〔波〕為灰

燼〔利〕、仏像〔波〕焼損〔多利〕、□□□□□數大坐〔古止〕夜

〔毛〕昼〔毛〕無隙〔久〕無限〔志〕、然間国家□□□繁〔志弓〕干

今不被謝申〔須〕、畏懼之至〔利〕歎襟□聊〔志〕、近日致修複〔志〕

奉造固〔り〕給□□広恤〔爾〕可在〔止〕所念行〔奈利〕、故是以

吉日良辰〔乎〕扱定〔天〕「官位姓名」正三位行權中納言藤原朝臣実

宗從五位上行橘朝臣清正等〔乎〕差使〔弓〕礼代〔乃〕大幣〔乎〕

捧持〔弓〕奉出賜〔布〕、掛畏〔木〕大菩薩、此状〔乎〕平〔久〕安

〔久〕間食〔天〕、殊加科力〔弓〕助成仏事給〔比〕、天皇朝廷位無

動〔久〕、常磐堅磐〔尔〕夜守日守〔尔〕御□□□□恐〔美〕恐〔美毛〕

申賜〔波〕久〔止〕申、

寿永二年五月十七日

383、《書籍頁三一〇〇》

〇四一〇一 島津莊別当伴信明解〇入来院文書

「於伴山田村者、任相伝之理、可令領掌信明之状如件、

前越中守平〔花押〕」

嶋津御庄別当散位伴信明解 申請 留守所裁事

請被殊任且解状之旨、且依先相伝之理御裁許、御庄御領薩麻国薩

麻郡内山田村者、信明先祖相伝之所領也、然不慮外信明父信房時、

同国佳〔住〕人忠景企無本尅、被押領取以後、不領知不当愁状、

右、謹檢案内、件所領者、信明先祖相伝所領也、然代代領掌間無他

妨、隨無異論人、然薩麻国住人故忠景、企無本、權門御領云御庄国

衙召物云、押取尅、忠景舍弟忠永件所領押取間、如此依無本、被(官力)宣使失了、其後字仁六郎大夫兼宗彼郡為弁濟使職、有限地頭職(遠)、指無雜怠、不蒙本蒙(家力)裁、不知地頭、恣押領条、言語不及事也者、恩裁被停止兼宗非道沙汰、依先祖相伝之理、為被御裁判、子細言上、以解、

壽永二年八月八日 別当散位伴信明(上)

384、《書籍頁三二〇七》

〇四一一五 五福法師田地壳券〇水木直箭氏所藏文書

沽却 田地事

合老段者(但中宮寺之御領也、在四至坪付等本券面、)

右件田地元者、五福法師之年來主公自了仏房之御手、最後給仕故、永代(二)処分賜処也、而依有要用、于源守友本券相具足メ、本納米肆斛永代(三)沽却了、敢不可有他妨、仍為後日沙汰、放新券文状如件、

壽永貳年(癸卯)潤十月廿六日 五福法師(略押)

385、《書籍頁三二〇八》

〇四一一八 僧永善田地相博状〇三宅文書

謹相博 田地新券文事 (端繼目裏)「□□□□(花押)」

合老段少者

在伊賀国名張郡黒田寺東辺(字後田)

四至(限東延成領 限南千楽領 限西大溝 限北同千楽領)

右件田元者、僧永善之相伝私領也、而僧理詮(と)互依為便宜、東塔南房老處、父馬老足白布式段□□寺僧理詮所相博也、但雖安部貞光(二)沽却手次有、実正(八)永善之相伝之處也、仍為後日沙汰、相副本券文、放新券文之状如件、

壽永二年十一月八日 僧永善

(花押)

386、《書籍頁三二二五》

〇四一四八 源頼朝書状〇神護寺文書

(端裏)「かまくら□□御ふミ 若狭西津」

(花押)(源頼朝)

若狭国西津(ハ)たかをの御領にてあむなるなり、それ(を)やうく(にい)ひて、百姓などあむとせぬよし申すなり、藤内朝宗(ハ)これよりおほせなとかふらぬひか事などハす(ハ)からす、いなむらとかやいふものゝさやうにあんなる、とゝむへきなり、あなかしこ

四月四日

387、《書籍頁三二二五》

〇四一四九 源頼朝書状〇神護寺文書

(端)「文覚聖人御房 頼朝」

此庄者相伝之所候、而日来平家知行之間、人領多以押入候云々、頼朝か之時又其定候ハ、平家之僻事を可直之儀にハ不候歟、【然者】人の歎も不便候、只如本々庄許(ヲ)高雄(ニハ)御沙汰候へき也、人之煩(を)不願してそのまゝにてハえ候ましき(三)候と也、

四月【一】八日

頼朝

「壽永三年」

388、《書籍頁三二三一》

〇四一六一 源頼朝書状案〇崎山文書

逐申

返々もゆあさの入道をは、人いかに申とも、うたせ給ふ(ハ)からす、いとをしくしたまふ(ハ)候也、

「正文有淨智許」 『宗重』

ゆあさのにうたうと申候ものは、もんかくはうにつきて、もとよりこゝろさし候ものにて候也、さためてかやうの時は、きのくになんとにそ候らん、御つかひをつかはして、京へめしてあむとすへきよし、おほせふくめて、めしもつかはせ給ふへく候、又たうせうのおんはうなんとたつねまいらせてお(は脱力)しまさは、かやうにゆあさの入道かことをは、かまくら殿よりかやうにおほせられて候と、ひろうし申たまうへく候、かへすくもたうせうの御房ちからのきはたつねまいらせたまふへく、ゆあさの入道にももんかくはうの申させ給へは、はうしんあるへきよし候など、ひろうしたまふへく候、恐々、

〔元暦元年〕二月四日

在御判

九郎殿

389、《書籍頁三一一三》

○四一六二 散位知義書状案○書陵部所藏壬生文書

主殿寮年預事、公人等訴於公庭、可被対決事候、随(て)本自為頭弁殿御奉行、御沙汰事也、就中此事大事候、尤可為職事御沙汰候也、仍度々□内候事也、可令申頭弁殿給候、恐々謹言、

〔元暦元年〕二月十三日

散位知義

390、《書籍頁三一一三》

○四一六三 散位知義書状案○書陵部所藏壬生文書

基方等事、何等(にも)非寮頭一身之進止、於公庭可決兩方理非之由、度々沙汰、其上頭弁殿御奉行守方支歳末年始公用了、於于今者、非私之進止、早可□□止給事候也、

守方次第 極大事難申、随又日来(も)經院奏之由、守方申候敷、其条何様 能尋御沙汰可候事敷、可申此旨之由所候也、恐々謹言、

二〇(月)廿九日

散位知義

391、《書籍頁三一三六》

○四一七一 關東御教書○里見忠三郎氏所藏文書

神野真国事、委令申上候了、御定候(ハ)、故侍從僧正御房一期之間、愛染王供、宰相中将寄たりけれハ、一期すきなん後者、なんてう宮の御沙汰のあるへきそと、御氣色候也、丹生野八郎光春か狼藉いたす事ハ、九郎御曹司(ニ)申て召上へき事、申上候(ハ)、尤さあるへしと御氣色候也、恐々謹言、

五月十八日

左衛門少尉大江(広元)(花押)

〔元暦元年〕

文覚御房

392、《書籍頁三一四〇》

○四一八五 一院御座作手等解案○白河本東寺百合文書一八八

「為平家領之由有其聞、仍雖点定、依院宣、免徐了、不可有濫妨之状如件、

前齋院次官藤原(在判)」

一院御座御作手等解申請 庁裁事

請被停止次官妨、備進御年貢藺田四段少事

在塩少路南朱雀東角二段大

八条坊門北防城西々面南一段

同次一段大

右件御領、前待賢門院御蒔藺田也、仍自宮御時、被奉渡院御方、已及数十年畢、而福原之時、件田内一段大(三)、新中納之(言)家待二人押居(テ)候(キ)、然而還御之後、即被追立畢、爰次官称彼等居住之跡平家領、故押領之条、以外次第也、抑平家不審(ヲハ)、次官被奉誠之由承及之处、乍聞令申子細、尚召筆作人等妻子之条、

難堪事也、早可停止濫妨之由、為被仰下、注子細言上如件、

元曆元年七月廿四日 御作手平得寿丸（判）

393、《書籍頁三二四八》

○四二〇六 物部正友寄進狀○東寺百合文書メ

寄進 阿弥陀寺御仏供料田壹処事

合壹段者

在山城国紀伊郡飛鳥里

右件田元者、当伽藍建立故諸陵属物部正元相伝所領也、而後家比丘尼下野氏領常（掌）年尚、而間当伽藍之阿弥陀如来御仏供料所令寄進也、但件田者領家（三）所当米参斗每年追年所令弁濟也者、無他妨所寄進也、仍為後沙汰放証文之狀、如件、比丘尼下野氏（略押）
元曆元年九月十日

嫡男物部正友（花押）

次男同 正資（花押）

394、《書籍頁三二五一》

○四二一一 梶原景時書狀○神護寺文書

未申承候之處、如此事令申候之條、憚思給候、極恐候、抑宗先生宗資申候人（一）、年来相知候之上、内々縁候て申事の候を、未入見参之由申候（天）、付友景て申候也、任道理可御沙汰給候、先施面目候敷、
備中国足守郷を御知行之由承之候、其内に相伝の所領田畠を、別結解（一）、二可申請候也、任文書之理、可御沙汰給候、若僻候は（二）、無相違可沙汰進候也、恐々謹言、

（元曆元年力）十月十八日

刑部丞平三（花押）

進上 高尾聖人御房（政所）

395、《書籍頁三二五三》

○四二一五 僧隆寿解案○松田福一郎氏所藏東大寺文書

僧隆寿□□請 黒田御庄下司公文并庄官等裁事

□□□案内、凡於黒田御庄□（出）作畠者、自往古千（于）今、无□□□□、而於隆樹私領鹿臥畠（二）、作人始可有公事之由申出、□未曾有事也、若隆樹之畠尚可当公事者、庄内出作畠併可□□事敷、余人畠（二）不当□□不可当隆樹畠、就中件国延之名本田畠□□之内、本庄屋敷畠三反田大 □（中）村条坂本三反・中切三反・□□□敷（□□八反半）矢川条長坂□□（□□延本名）外永勝入 田有其数、既及町、何則光可致□□哉、凡黒田庄習者、以三四色斤公事令勤仕、遂不知隆樹作人未□□、以出作六反（野□□均本□反）山□□□公事令勤仕、尚強背先例庄例、可被仕□□（公事力）者、（祖□作）国延□本免畠二反、有大野長坂畠四五反、若有名越訴者、於隆樹畠者、可越木任□□、倩案事情、於黒田御庄出作畠、以□□事所永財也、望請 恩裁、各各垂還迹、任道理被令裁定者、将仰□（正力）道不朽矣、以解、

元曆元年十月 日 僧隆樹

「如解狀者、則光丸訴申極非例、件畠全不可当公事、為□後

396、《書籍頁三二五四》

○四二一七 源末友田地壳券○古文書集五

謹辞 沽却進田事

合佰式拾步者（在山城国乙訓郡唐沢里十三坪地子拾升参升也、但油、）

四至（限東御供田 限南溝／限北繩手 限西仲興寺）

右件田者、源馬丞末友先祖相伝所領也、雖然依有直用要、錢七貫文（仁）限永年清原江太殿（仁）壳渡進所実也、全不可有他人之妨、仍後日為沙汰、証文狀如件、

元暦元年十一月五日

源馬丞末友(花押)

397、《書籍頁三二五六》

〇四二二〇 宇佐貞時讓状案〇永弘文書

□□□□□□状之裏加署之、

辛嶋郷司貫首漆嶋□□(在□)

貫首漆嶋並□(□□)

貫首漆嶋則□(□□)

貫首漆嶋恒高(在□)

貫首漆嶋近房(在—)

貫首漆嶋並近(在—)

貫首漆嶋宿禰(在—)

貫首漆嶋並房(在—)

漆嶋近安(在—)

漆嶋並恒(在—)

漆嶋安房(在—)

散位宇佐宿禰貞時謹言

五男宇佐貞成(仁)ゆつりわたす山元寺か相伝私領田島等事

在宇佐郡葛原郷内

田七段之内五段(字小深田)二反(字□□)一所字四らう垣

一所(ひちオリ)一所藤五郎垣一所字□□一所字王太

垣一所字江木垣一所本矢禰垣在之御□□

右件田島等、ゆつりしやうのむね(仁)まかせ、□□さまたけなく、

宇佐貞成りやうちす□□かため如件、

元暦元年十一月 日

散位宇佐宿□

398、《書籍頁三一五八》

〇四二二六 河内国通法寺愁状〇一誠堂待買文書

河内国古市郡之内、壺井御堂通法寺者、故伊与入道(源頼義)殿御願、且八幡殿父母御前御墓所者、此御堂之辺也、而去年当前司時、乍成免判、彼御堂之燈油・仏聖料田(ヲ)押妨(テ)、或追捕寺中之僧房、被成散々候之処、隠住僧等候之間、於去年者件寺領田島三町許乍蒔種子荒捨候畢、然之間以去年十月之比、捧八幡殿之御下文、鎌倉殿令參候、件次第(ヲ)中上候之処、早速御沙汰候(天)、当国司池大納言(平頼盛)殿成御教書、且任八幡殿御下文之状、浮免四丁三反之被成庁宣候畢、而彼浮免四丁三反内、纔(三)三町余作田候(ニ)、被配兵糧米七斗餘、被責勘候、或寺僧之住房(ニ)押入(テ)、被質物等取候畢、是則被令輕御威事候敷、且為判官(源義経)殿御(ニモ)、御先祖代々御願候、速可令免除之由、可被仰下候也、且又任八幡殿御下文并鎌倉殿御教書、浮免四丁三反同御堂敷地四至内等、任先例為御堂領、不可有他之妨之由、欲成御下文給、又為御堂守護、賜御ハタヲ、四至内可立候之由、令存候之処、如前東浅生谷・南石川境・西□牧□□山・北島峯限之状、如件、(折返シ)件兵糧米早可免除之状、如件、

(花押)(源義経)

〇本書折紙ニシテ文章亦稍疑ハシキモ姑ク元暦元年末トシテ収メ後考ヲ俟ツ。

考ヲ俟ツ。

399、《書籍頁三一六一》

〇四二二三 藤原親能下知状案〇永弘文書

(端裏)「□□□□□□あん」

□□のたいみやうさいら□□らのこと、

□□で、そのむねをそんす□□のしんくわんかいさうたゆなり、た□□この事、□□(かカ)まくらとのねんらいの御けん□

く□つるいらにいたるまで、こ□く□へからず、もし又ふれ□く□のくミはなすへからず、てい□□(れば力)おほせにて、下知如件、

元暦二年二月 日

□(斎)院次官藤原朝臣(親能)へ(ありはん)

400、《書籍頁三二六一》

○四二三四 源頼朝書状案○熱田神宮文書

関東右大将殿御書

藤内朝宗上洛之時、委申て候し、見参に入て事に申うけ給はり候たるよし、かたり申候事、返々悦恩給候、抑故奉忠すいふんほうこうちうある仁に候しあひた、よりともかよに候はんほとハ、いかにもふひんへニあたるへきか□□して候つるへニ、しやうしのならひいまはしめぬ事□□なから、たかひせられて候らん事、真実なけき入て候、ことに熱田大明神おふかくたのミたてまつりて、心中ひまなくせひ申候しうゑに、しかしながら、ともたのきたうかんのうして、いまはふしきのいのち、いきてかくて候へハ、一せつそてのきなく候、そのあとのせいはいおかふりたきよし、申され候ける、まことに候へ、ちきやうのふんおちうしてまいらせられ候へ、よきさまにはからひ申へく候、兼又十郎藏人吉曾冠者京へ打入之由聞候、御きたうの事大官司のもとへも申て候、子息等によくよく申へきよし、きようくん候へく候、又すゑの子息一人まいらせられ候へ、心やすくたのミ候はん、又そんなるむね候て、かやうに申候也、あなかしこく、

401、《書籍頁三二七五》

○四二四七 梶原景時室消息写○三条家古文書

こつこのさう(木津庄)のこと、さりふみ(去文)ニハをよはぬこと

に候、ゐんせん(院宣)をはくたされ候うへには、たか(誰)さへ(支)申候へき、かつはをうな(女)のみに候へハ、しさいしらぬことに候、ゆひそ(由緒)候は、かちはら(梶原)もかまくら(鎌倉)とのにも申さたし候はんにも、そんなし候はんをはしさいしらす、さりふみにをよはぬに、それ候はすとも、ゐんせんのうへには、たかさへ申候へき、いかにもくはからひこさた候へし、あなかしこく、

402、《書籍頁三一七六》

○四二五二 清原某田地売券案○白河本東寺百合文書三十五

沽却領田壺処事

合老段者

在佐倍里参拾式坪中

右、件領田、元者自日置則埴手、藤井正伴(力)所買得也、而依有直要用、限錢伍貫、自正伴御(後力)家□源元景、相副本券文、ウリ渡処明白也、為依後日沙汰、注新券文、以解、

元暦二年五月二日

ウリ人清原(花押) 同チヤク女(花押)

403、《書籍頁三一八一》

○四二六六 後白河上皇院宣案○御池坊文書

「後白河院院宣」

粉河(寺脱)領栗栖庄依武士妨、寺僧等触訴鎌倉使者、成給下文之由所申候也、其間子細若可聞食也候らんと所言上候也、泰経恐々謹言、

元暦二

七月三日

大藏卿泰経

謹上美作中将殿

【第八卷、補遺1】

404、《書籍頁三三一—三五》

○四四三七 僧光定書狀○伝述一心戒文下所収

承和元年正月六日夜憶伝戒事、得夢之相、彼夢之状、左衛門藤原佐、被皮衣与高田太史並立、又立彼辺人、不知其名、三人並立、下情佐被皮衣（手）称（豆）好（之止）靡其上見了、又此三人当東近衛門面、赴於東、南北通道辺三人前下情立、亦下情面赴西、又自内裏如先人走来衛門之中、東面密召下情、赴於内裏、以右手指、指於内裏、召除髮、除髮名則下情憶捨三三人、而赴（止）思、於内裏当衛門三十許人在之、夢了義真大法師遷化、法弟失途、猶夫伝法之首、求於雪山授戒之師、尋於迷津、雖有一乘、而不被弘、雖在戒珠、而不被精、遂使智光無明、照禅思息寂行、然円澄大法師、久住於東岳、心染於師風、慈悲稍深、非違物情、掌衆之官任延曆寺、伝述一心戒文一卷、上閣門辺、於是恩許実在、補任既畢、勅使一登、囂声固停、徹旨一唱、諸舌雲卷、天台之宗、亦更興隆、一乘之戒、再三開発、狀許宗興、阿衡鴻能、情賀実深、身悦極高、敬以為一衆之首、恭以為伝戒之師、不任慶賀誠、捧拙賀之書、謹上 閣下、誠賀誠敬謹言、

承和元年三月二十四日

法師光定

謹上 藤原大納言主（閣下）謹空

【第九卷、補遺2】

405、《書籍頁三四四—三四》

○四五〇〇 清和天皇宣命○座主宣命

天皇（我）詔旨（止）山中（乃）法師等（爾）白（太倍／止）宣勅命（乎）白、大法師円珍（波）故座主義真大法師弟子（爾天）、勤学年久、加之以遠入巨唐（天）、真言止觀（乃）業（乎）兼習（利）、故是以座主（爾）治賜（不）事（遠）白（太倍／止）宣勅命（乎）

白、

貞觀十年六月三日宣命使少納言兼行侍從和氣朝臣彝範

406、《書籍頁三四七八》

○四五六一 僧齋然誕生記○清涼寺釈迦堂本尊胎内文書

（表）

承平八年正月廿四日の

ひつしの□□□のときにん（む）

（裏）

まる

はた二丸

407、《書籍頁三五六—三五〇》

○四六一四 散位藤原守仲讓狀○徹島文書

讓与 三田郷并別符重行名主事

大掾藤原守滿

右、依為七郷之内重郷且別符、田島券文相副所讓与也、於大領職者、国司御下向日、令子細言上（天）、所補任状如件、

長元四年六月三日

散位藤原朝臣（花押）

408、《書籍頁三五六—三五九》

○四六三〇 讚岐国粟安富解案○東寺百合文書

裏書

曼陀羅寺无止徹跡之上、近来企修造聖人有申請事者、地利之弁無闕怠可弁申也、是且者要須善根之源也、

但蒔麦作畠押取条者、无其謂欺、寺家承知、地行餘分、儘可充給作人也、

惣大国佐伯（在判）

據 凡（在判）

府老 凡

力）令愁訴之、

惣大国佐伯（在判）

府老 佐伯（在判）

散位凡宿禰（在判）

府老 綾凡（在判）

目代散位惟宗（在判）

目代散位安八宿（在判）

多度郡粟安富解申請 留守所裁事

請被任先年畠不苻取実裁、可令留作田植申、食料麦曼茶羅寺聖人
畠夫苻取地子物代表、不安愁状、

右、安富依畠地不毛、以去年本住僧長勢乎請申（天）蒔置侍麦也、
而作植侍田已五町也、而不知所進、不知光郡府申成來從畠被苻取由
也、木安日內被裁留状言上如件、若叶裁無者、御田者夫置給也、仍
此由注（天）申文、以解、

康平五年五月二日

安八安富

410、《書籍頁三五七三》

〇四六三九 興福寺大和国雜役免坪付帳〇興福寺・天理図書
館文書

（表紙） 大正十三甲子年九月

『百拾七枚内表紙共』

応永十五年写

興福寺録高反別記

雜役免東諸郡

409、《書籍頁三五七二》

〇四六三七 讃岐国曼茶羅寺僧善芳解案〇東寺百合文書二

曼茶羅住僧善芳解申請 留守所裁事

請被任郡司判定旨、裁下給為僧行遠、年來寄作地子物每年合夕不
弁申（天）、押作（と）尚云々、郡司愁申次、以件行遠令造田
者、又不可強作由郡判乍見、尚亦擬作不安愁状、

副進 郡判并所令造進寺領田二段三百步去文

右、件寺領之内、従本為永年寺領（と）／天、更無他妨、而件行遠
押作（天）每年（仁）判地子不弁申、仍今年寺家耕作并可地子弁申、
他人（仁）充行（とスル）裡（仁）、如此成論申（天）不令進退、
仍言上如件、望請留守所裁、任郡司所定、被裁下件田、仍注事状、
以解、

治曆四年四月八日

僧善芳

裏書

件寺領田皆免所當之田也、任郡司与判、偏隨聖人之最而（命勿

興福寺

大和国庄□□□□（々田畠二千方）三百五十七町九反三十五步

内東諸郡添上山辺城下東十市東城上宇陀并六箇郡田畠坪付

合千二百五十六町八段十八步

不輸免田畠二百一町三反

五十二町八段

本願施入田畠

百四十八町五反

国議不輸免田畠

雜役免田畠千五十五町五反十八步

三百四十五町□□□□（二百七十八方）步 神社仏寺諸司□

□（要劇）田

畠地子各□□（勤力）家雜役勤寺□□（家力）

七百十町四段百步 公田畠（官物弁国宰雜役勤寺家）

九十七町七段二十五歩内

一本願施入田畠五十二町八反

二十七町八反 田村庄

十町 糸井(南脱カ)庄

〔以下、中略〕

反 二里八坪三反百步 三里十一坪五反

已上一町八反二百步

十市庄同郡東郷十九条二里廿九坪三反半

三里十四坪六反

都合四町五反二百三十步

仁平三年十一月六日 尾張(在判)

是(ハ)別紙(ニテ)九条庄坪付有、(ヒラニ)被置(タルヲ)

是(ニ)写(テ)置ナリ、何庄(ノヲ)中条(ハ)庄(ハ)

被負越(タル)ニカ、モシサレハ九条庄之所(ニ)被置タルハ、

件庄々ヲ被負越タルヤラムトテ、被置所ヲモ書付タルナリ、

東伊与庄廿三町六反三百廿步

不輪免田島十四町六反

公田島九町三百廿步

〔以下、略〕

411、《書籍頁三六六二》

○四六四一 讚岐国曼茶羅寺僧善範解案○東寺百合文書ユ

修行僧善範解 申進申文事

請被特蒙 鴻恩判定給、可奉修治漫茶羅寺并大師御行道所字施坂

御堂等之子細之状、

右、善範為仏法修行、自生所鎮西出家入道(シ/天)年来之間、五

畿七道之間、交山林跡、而以先年之比、讚州到来、有事縁、大師之

御建立道場參詣、大師入滅之後、雖經多歳、依無修理破壞、動為風

雨仏像朽損、仍修行留(天)自始康平元年乍修造(天)、本堂別堂并

施坂御堂如本建立、雖修理勤念之不忘、末法当時邪見盛也、仍難勸

進知識、起道心人尤希有也、因之自去延久元年於漫茶羅寺并同大師

御前跡大窪御寺兩所各一千日法花講演勤行、本懷不嫌人之貴賤、又

不論道俗、只漫茶羅寺(仁)致修治之志給人可令御座給料祈禱也、

此間今年夏程祥房同法申云、仁和寺松本御堂為件御寺修造、令下向

給由(云々)仰天臥地、歛喜悦身無限、如此等間、善通寺所司智暹

等数人隨身、於号新别当仰事、寺院到来、僅候寺領島地子麦徵取、

修理工氏近等責惱、住僧責勘程、修治之勤悉懈怠、望請御室裁定、

如此等被人之非道停止、致修理之勤、仍注事状、言上如件、

延久三年八月十三日 僧善範

裏書

件曼茶羅寺所領田島地子物等、專善通寺之三綱所司大衆進退

任意、更不可徵取彼寺住僧善範聖寺納仏聖燈油、修理造作食

料、可令充用也、專不可他用、故判、

阿闍梨(在判)

412、《書籍頁三六七六》

○四六五五 山城国八瀬刀禰乙犬丸解○青蓮院吉水藏菩薩釈

義紙背文書

八瀬刀禰乙犬丸解 申請青蓮房僧都御房政所裁事

請被殊蒙慈恩、任本免除道理、事子細令申大僧正御室給、早令免

除俄杣夫役充責凌、不安愁状、

右、乙犬丸謹檢案内、年来之間、為彼里刀禰職、尤偏所被免除雜役

也、然今年始俄充負杣伐夫役、所被責凌轢、甚以非例尤深、只寺家

下部等上下之間、供給等勤仕之、於此杣条者、為愁不知之、又子童

太郎丸、為彼里交衆、勤仕座役、主酒肴事六度也、然秦重行无指座

役酒肴之勤、常論企座条、甚无其謂、如此所(ハ)、以座役功勞、所

号座土也、望慈恩、任道理、子細令申徹大僧正御室給、且被免除件

杻役、且又被停止件重行非道座論、如本道理、被令著座者、將仰正道之貴、弥知御威之強、□(勸力)事子細、謹解、

寬治六年九月三日 刀禰乙犬丸

413、《書籍頁三六八一》

○四六六七 僧成譽奉書○高野山文書寶簡集十七

(端裏)「中門建立文」

中門被建雜事等委聞食了、而大工之条、其御山(に)不動堂(と)云聖人、高名之塔造(云々)問合件人、被左右哉如何、若不可叶者、早可被申子細、從此為下遣也、来月灌頂僧供米事、從此仰遣沙汰人之許、可令運上者、御返事如此、謹言、

(永久三年)八月廿一日 僧成譽(奉)

414、《書籍頁三六八三》

○四六七三 某書狀○東寺本東征伝裏文書

今月廿一日御札、同日申時到来、仰旨謹以承候了、抑所被尋□(仰力)遣之白臘、敦賀唐人許尋遣(天)、從此可令申案内候也、今相待□坐(志て)、京御返事(者)可令申御也、於国者、此一兩年唐人(更)不著岸仕□者也、是非他事、国司御苛法無期由令申者、不罷留候也、返々付□(使力)不令進上之条、尤遣恨思給候者、今明之間、左右可令申候、可令相待御也、馬足米事、京都令申上御事、子細承候了、早々御庁宣(を)可令申□(を)□

415、《書籍頁三六八四》

○四六七四 某書狀○東寺本東征伝裏文書

白臘三十筋、隨尋得候、念令上候也、乏少候(へ者)、重又別唐人尋遣候之處、不候之由、所申送也、仍候まゝに進上之、乏少之甚、且恐申候、且又所耻、且□候也、雖何等之事候、於堪事□奉仕之志

存、且給候者也、抑□日所被下給之每月御菜并別塩等、以件費殿注文初可令進之由、令下知候之處、海人等□、所令進覽候也、令召問御坐、一定可被仰下候、内浦所保塩如□京都御用不可候事也、早々如前□(を)□

416、《書籍頁三六八四》

○四六七五 大江則遠書狀○東寺本東征伝裏文書

追申

前日所被進上候之提辛横様(なる)辛横三合許可令進候也、

謹言、

此間何等事候哉、不指□(事)候之間、久不令申、抑常事候(と)如思食候世間□事、水沢罷成候之上、如此事等、可令申国前候、我之上事、不令申候也、今年【収】納所千石許、可令申当御也、依奉憑候、所令啓候也、

又此間京洛不別事候也、右大弁 殿若御前御発心地之間、殿所令渡御也、

又侍(字)中五(と)申者、以(去)九日夜、大藏丞郎等之妻(を)時々【撫搦】懷抱之間、件(夫)男聞相待(天)、所射殺候也、件女一所同□、件事近衛殿留守之間、とのともと□はたら□□はに侍殿少々、

又来月九日御忌可候也、右大弁殿(へ)殿可令渡御之、頭弁殿(へ)近衛殿(二)可(令)渡、右衛門権佐殿大宮殿(二)可令渡御之由、中御門殿(にて)可御忌候也、

又冠者男事、不指事候、留国之条□無益事候、經廻之間、殊令芳心、返々所思給候也、便人候者、可(令)念上洛御□殿御辺事、并京中之事等、□不審思食候、又々可令申候也、他□併追以可啓上之状、如件、不備謹言、

六月十一日 散位大江則遠(状)

謹々上 御目代殿（侍御中）

417、《書籍頁三六八五》

○四六七六 安房守某書狀○東寺本東征伝裏文書

去十六日御消息同廿二日拝見、数日伊鬱悉散了、

木工事実言語道断候事也、不温顔之次者、不可申尽候、一昨日自安

房荷四五駄到来、長匏三百帖・葛布三端進上之、別様之上、乏少無

極、定処奇恠敷、但不身過失候事敷、所進之外物等、不残一分、皆

悉令濟年料率分方候了、只諸事可令察御、

於馬者、兩三疋国（二八）雖令勞飼、依無益不取上候也、勞飼来秋

可令引 院貢馬、

418、《書籍頁三六八五》

○四六七七 安房守某書狀○東寺本東征伝裏文書

（上下同筆）□□

可下知候、早可仰遣左右也、

樽僧事承候了、可令沙汰候也、

忌日事無仰以前、所令沙汰候也、僧前相儲候、講師可請中室伊豆堅

者之中候也、題名僧六口之内、持泉房之替可請候、但彼御房何比可

被上洛哉、不被坐者、堂事共（二所）方外あしけに見候（めれ）、事々

以後便追々可言上之状如件、

五月廿二日 安房守（花押）

419、《書籍頁三六八五》

○四六七八 安房守某書狀○東寺本東征伝裏文書

追申

丹波（にこそ）大卿一所（加美拝師）罷預候了、今日下遣沙汰男

候了（字中□清永）三郎童乳母夫也、件所丹後境云々、若申触事候

（ハ）可令聞入御也、謹言、

○以上三通同筆ナリ。

420、《書籍頁三六八八》

○四六九一 散位某奉書○東寺百合文書京

（端裏）「尺合□」

絹三疋之内、四丈尺合候、

御庄田堵私京上仕（に）、御年貢之事、遣申処、随□得候（とて）、

尺小々不足絹随送候、所令進之上也、以此由、可令申御房給之状、

如件、

十月四日

謹上 勝敵御房

○長承頃力。

散位（花押）（奉）

421、《書籍頁三七〇三》

○四七〇二 僧行源解案○余瀬文書

一六郷御山夷住僧行源解 申請 満山大衆御署判事請被殊蒙鴻恩、

任開発理、賜 御判、為後代証驗、令請継弟子同法等致無（其）

勤給年来私領田畠等子細状在六郷御山夷石屋下津留字小柿原

四至（東限山 南（限脱力）耆闍谷／西限山 北限楽善房中

垣）

右、彼石屋砌者、本大魔所（天）大小樹林繁、所絶人跡也、而行源

以先年之比、始罷篋件石屋之間、時々励微力（天）、切掃所在樹木、

堀却石木根、開発田畠之後、至于今日、全無他妨、所耕作来也、依

之於所当地利者、偏致毎年修正月之勤、以残物者助已身命、既經年

序也者、任開発之理、賜御判、為擬後代証驗、注子細以解、

長承四年三月廿一日 僧行源

件田畠者、本行源往古開発私領也、仍全無他妨、令耕作之旨、

【然】尤明白也者、加署判、

本山住僧五人

大先達大法師〈在判〉三人

屋山長石屋住僧〈在判〉 三人先達大法師〈在判〉

墨土石屋住僧 先達大法師〈在〉 四王石屋住僧〈在〉〃〃

小石屋住僧三人 先達大法 大石屋住僧〈在〉二人 先達一

夷石屋住僧〈在判〉六人 千燈石屋住僧五人 先達二人

422' 《書籍頁三七一一》

○四七一四 源為義書狀案○根来要書中

は、かそらうのかくこひ候へは、むかへにまいらせ候、そのうちこのほせさせをしまして、又むかへさせをしまして、すへし、くはしくハ、この御房にまうし候ぬ、

御文くハしくみ候ぬ、おほせ事候事、きはめたる道理に候、もとも為義こそハ、さたつかまつり候へき事にて候へ、此あひたハしらせをはしまして候らん、院のきそくのあしく候へハ、よには、かりて何事もしらぬやうにて候也、いかてをろかに半さふらハん、くはしくハこの御房まうさせをしましハん、ちかまさか事にをき候てハ、さなくて候なん、そのゆへハ、のりよしきはめてひさうの物にて候さためてそら事とも申つけ候ハ、為義も心えぬ物におもハれまいらせ、又ちかまさかためにも、よしなき事にて候なん、けをこさうとたのミまいらせて候に、すこしも心えぬ物に半、いかてかおもはれまいらせ候ハん、あなかしく、

二月五日 在判(源為朝)

423' 《書籍頁三七一一》

○四七一五 源為義書狀案○根来要書中

くハしき事、又く申候へく候、又いかなる事候とも、をの

つから心うすおほしめさん事半、こまかに仰つかハすへく候、あなかしく、

先日御返事委承候にき、抑あふかの庄事、なをく親正にあつたふへく候、河北方を可預給候、親正にもさまてふかくの沙汰ハ、つかまつり候ハし、又そのよしハみなめしおほせ候ぬ、たくとくあつたふへく候、こまかに半ちかまさ申候へく候、あなかしく、

(永治二年カ) 三月六日 源〈在判〉

聖人御房

424' 《書籍頁三七一一》

○四七一六 源為義書狀案○根来要書中

その地なにか候覧、ひさしくこそ申候はね、よろつひとへにたのミまいらせて候なり、よくくの又せ給へし、女院御前に御心にいり御恩候へきよし、ら今年除目にならすよろこひつかまつり候へき由、能々祈念せさせ給へし、さてハ神宮の沙汰のれうに、待近正まいらせ候、これにおほせつけて、さたをさせ給へし、返々よくくのりしてたふへし、あなかしく、よろつ又々申候へく候、

八月廿二日

在判(源為義)

高野聖人御房

425' 《書籍頁三七一一》

○四七一七 源為義書狀案○根来要書中

わかさはさもさふらひぬへくハ、あけさせをしますへし、御文こまかにみ候ぬ、何事もひたふるにたのミまいらせて候也、さてハおもひかけぬ事にかかりて候、そのいのりしてたふへし、又女院にいとほしき物におほしめせといのらせをしますへし、ゐんへまいらんとおもひ候、まいるはかりいのりてたひおはしませ、何事

もくよくくのりしてたふへく候、あなかしく、

十月廿三日

在判

426、《書籍頁三七一四》

○四七一八 大式尼奉書案○根来要書上

吉川庄事 大式尼奉

この御ふみまいらせ候、みてらのほうさうにをかれさふらふへし、年くハかりまいりさふらい、なをすへいかとのおほえさふらひつるに、かくみてらになりさふらひぬるには、めてたくうれしくさふらへ、とりつき申候ものまで、ふかきちきりになり候らんと、かへすくたのもしうおもひさふらふ、あなかしく、この御さうよりは、学すのわたのまいり候な、いまひところよりハ、こまのものまゝいり候か、

427、《書籍頁三七二二》

○四七三三 仲行奉書○京都大学所蔵兵範記仁平二年正・二

月卷裏文書

私申

庄事且行事下知候了、御所之辺此間別事□、大衆宇治へ二宿之間、罷成候也、不便事□□候、

御所勞事、返々□□候、猶々□□入候也、如件々々、謹言、

428、《書籍頁三七二四》

○四七四一 良遠陳狀○興福寺本信円筆因明四相違裏文書

伝燈法師良遠謹陳申

出雲御庄田堵助元陳狀非理子細狀

一助元去二月廿九日陳狀云、恒久之田四段一年毛へ二助元買取所耕作也、而買田作稻蒱納事者八月内、恒久へ加へ逃亡者十月比、

案之於官物者并濟畢敷、処庄齒之習、皆九月之内無未進所弁也、有地主付年毛弁官物、有傍例之由非抛也、所以者未稻蒱取之時、若売主逃去者、有地主作田へ三立四目、買主官物請文仕者、有其謂、恒久現在之時依稻蒱、取請文不仕者、以上助元之所進陳狀也、

又此外助元口狀云、件売主逃亡人恒久へ加へ自手地主悉徵取官物、又買人助元へそ被責勘、於兩方為取官物所責勘也、へ是一、又口狀云、件田買取年毛之刻、即地主知へ天恒久へを於面形所被売也、仍件直米地主許相副助元之使者、所送遣也、へ是二、右良遠陳申云、先助元進覽陳狀、其上又口狀之条、謀計炳焉也、旁構詞謀計甚也、先立四目、不取請文事者、件田恒久売之由、恒久逃亡以前、全以不知給、逃亡以後始所知承也、其前依不知立四目、不取請文也、次恒久於面形令売之由口狀条、件恒久四段所當米惣二石八斗也、而去年官物之内、米二斗三升恒久所弁也、

429、《書籍頁三七二六》

○四七四七 美福門院令旨○根来要書上

美福門院御文へ大納言阿闍梨筆へ

おもふやうありて、今日よりして、こにしたてまつるなり、仏の御しるへにやあらん、かくおもひそむることハ、高野のてんほうんに、こころをかけまいらせて、いかでもとおもへとも、女のつみのふかさハ、御山へもまいらぬこころうけれハ、ひとへにかく申つけて、わかかハリとおもひて、てんほうんにあらせんれうなり、このこころさしたかへらるまし、かうやの人のこなとハおほかれとも、をなしこころなることもかたきに、中将殿おなしこころにてあはれる人なれば、かたくにおもひよりたるなり、なかくひしりにしたかひて、ひろく衆生をみちひく心ありて、おこなはせ給へ、おほきになりたまハさらんさきに、いかにもなりなハ、おもひこころさ

すこともしられらんかくちをしけれハ、かくてたてまつるなり、のちのよのことのおそろしけれハ、ひとへにそのれうとおもひてそ、かならずくうけとふらはせ給へし、又わか身のけむかい、ひしりてしにてあらまほしきかはりと、ふた心なくおもふ也、

仁平四年二月五日

430、《書籍頁三七二六》

○四七四八 刑部少輔某去渡状○田中英一氏所藏文書
わたしたてまつる丹波領所事

合田畠

右、件所領故修理大夫よりあひつたへて、三代のあひたあへてたのさまたけなし、しかるをいま事のひんあるによりて、本券ならひに立券らをあひくして、新小將殿の御つほねに、なかくわたしたてまつる、すゑのよにもさらにくたのさま(た脱)けあるへからさるかたち如件、

仁平四年十月一日 刑部少輔(花押)

431、《書籍頁三七二七》

○四七四九 清原友次畠売券○内閣文庫藏沢氏古文書
謹解 売買畠事

合老処者

四至(限東峯 限南田際 限西少尾正中石 限北大道)

在大和国宇陀郡笠間郷之内寺垣内之東畠也、

右件畠者、正遠之先祖相伝之所領、清原是次買畢処也、而友次所領久の木山替(カウ)東少谷のこるか故、新券文立状如件、(裏)「寿円真賢渡了(花押)」

久寿三年三月七日 清原友次(略押)

(花押)

432、《書籍頁三七三〇》

○四七五五 修理権大夫雅□書状○京都大学所藏兵範記保元二年冬卷裏文書

小弓御庄開発方申文一通進覽之、国司(尾張)寄事於新□(制力)、無左右可停廢之由云々、而昔開□四十六箇年罷成、新制宣□大治元年以後庄可停廢之由、聞候之由、御庄司所申上候也、近日竈居之間、如□宣旨不知給候、何様候事哉者、以此□令申上給(天)、依実可成下政所御下文候敷、不然者定国使猥致沙汰候者敷、恐々謹言、

十一月九日

修理権大夫雅□

謹上 甲斐判官代殿

433、《書籍頁三七三一》

○四七五八 某書状○京都大学所藏兵範記仁平二年二月卷裏文書
依不指事候、久不令申候、何事候哉、抑知足院御領直米内山内庄廿石、今明内令奉下、請文可取進之由、所被仰下候也、雖下知御庄、任急速事、難相叶候者、於京都可相支度候也、而来四月入道殿之侍所大盤料米内、自□柿御菌々所被下行候也、依宜作事也、彼御領地直山内所課廿石内、任大盤料米員数被便補、所残不足米(ハ)承見数、令奉下(と)思給候者也、相計可仰□□

434、《書籍頁三七三二》

○四七六二 散位藤原盛致書状○陽明文庫所藏兵範記保元三年五六月卷裏文書

上品高麗一段先日進上候了、

謹請

国兼運米事

右、任御書之状、一々令沙汰候了、如別給物令沙汰付候者也、

抑去年歳末令進解状候了、不及御覽事やらむ、可然様可令申給□(候力)、盛致恐々謹言、

正月廿日

散位藤盛致

435、《書籍頁三七三三》

○四七六六 右中弁某書状○京都大学所藏兵範記保元二年冬

卷裏文書

小造紙二帖進借、一帖者江次第也、書物候、一帖者秘抄、但宗(とハ)少弁之作法、然而少納言事粗見、仍進借之、事見參可申承、謹言、

十二月三日

右中弁

436、《書籍頁三七三四》

○四七六九 大和国広瀬荘白米收納日記○東大寺新収文書

(保元二年)十一月十一日、四段、シラタウノミヤウ、マサユキ四段、タラキミノミヤウ、マサユキ四段、アワチノキミノミヤウ、キヤウサン、十二日、五段大、タラウキミノミヤウ、マサユキ、十四日、一段、リキウシカミヤウ、シチラウ、一段、トウコミノミヤウ、シチラウ、廿三日、三段、タラウカミヤウ、廿九日、二段、ナカトノミヤウ、ノフサト、卅日、三段□□十二月七日、一段、リキウカミヤウ、ユキトシ、一段リキウシカミヤウ、モリサタ、二段、テラシノミヤウ、ユキサタ、十六日、二段、アワタラウカミヤウ、モリサタ、十六日、一段、トウコカミヤウ、シチケイ、十七日、一段、トウコカミヤウ、アリサト、十九日、二段、さウシカミヤウ、サタユキ、正月六日、一段、シロキミノミヤウ、サタユキ、廿二日、一段、□□、二月十八日、一段、シウクエハウノミヤウ、ロクラウ、センノウ、三月十八日、一段、ヒノクマミヤウ、モリ、四月廿三日、アワタラウカミヤウ、一段、モリサタ、キリリウシカミヤウ、一段、

シチケイ、アリシヨウハウミヤウ一段、□(ハウ)テラシノミヤウ、ユキサタ、廿七日、一段、トウコノミヤウ、ユキサタ、五月廿四日、一段、アワタカミヤウ、シケサタ、

六月廿日、二段、サフラウハウキウチン、

已上十二丁六十歩

ホウクエン(保元)三子ン七月十四日、二段(リキウシノチヤウケン)ミヤウ、(サタユキ)、十九日、四段、サフラウハウノミヤウ、マサスエ、廿日、三段、ヒノクマノミヤウ、ユキキヨ、廿四日、一段半、シラウタイウノミヤウ、マサユキ、廿八日、一段、アワチノキミノミヤウ、スエサタ、八月一日、一段、アワタラウカミヤウ、シケサタ、一段、(三升四合)クトノミヤウ、シケサタ、二日、四段、タラウカミヤウ、クワシン、三日、一段、クトノミヤウ、シチラク、七日、クトノミヤウ一段、ユキサタ、二段、ケウホウハウノミヤウ、ソウケン、九日、二段、ナカトノミヤウ、マサユキ、十日、三段、コクフンノアマキミノミヤウ、コムカウ、十三日、一段、井ヤウチンノミヤウ、廿一日、ナカトノミヤウ、マサユキ、三段、廿一日、シラウタイウノミヤウ、三段、マサユキ、廿八日、一段、(□□ユキサタ)カミヤウ、一段、ホウンハウ、九月九日、ヒノクマノミヤウ五段小、クニサト、ヒノクマノミヤウ三段、ヨシスエ、二段ハウクワウタノミヤウ、クニサト、十六日、四段、クエンナイノミヤウ、ツ子カタ、一段半、ライチンノミヤウ、ツ子カス、廿二日、二段、アワチノキミノミヤウ、ユキサタ、廿四日、三段アワタラウカミヤウ、シケサタ、一段、チシヨウハウ、一段テラシノミヤウ、ソケサタ、廿六日、二段、リキウシノミヤウ、ユキトシ、サウサウハウミヤウ、二段、ハケユキトシ廿八日、二段、□□クノウシノミヤウ、サタユキ、十月八日、二段、ヨシミチ、一段、タラウカミヤウ、九日、二段、ニウシノミヤウ、シワタ、十四日、二段、アカサノミヤ

ウ、サタカケ、十五日一段（「テラシテ、テラ」）テラシノミヤウ、スエサタ、十七日、一段、□トウコノミヤウ、ユキサタ、〔半□□〕ケラミヤウ、ユキサタ、廿日、一段、シラウキミミヤウ、ユキサタ、ミシン二升、廿四日、一段小、にンケイ、廿八日、一段、トウコノミヤウ、シチケイ、一段、〔ラウ〕シラウキミノミヤウ、ユキサタ、一段、テラシノミヤウ、ユキサタ、一段、リキウミヤウ、ユキサタ、二段、トウコノミヤウ、ユキサタ十二月三日、一段、フンサタワノミヤウ、トククワン、五日、七段、アワチノキシノミヤウ、スエサタ、九日、一段、ナカトノミヤウ、マサユキ、二段、シラウクイウノミヤウ、マサユキ、十三日、半、サフラウ、廿日、三段、アワタラウカミヤウ、モリサタ、二段、シラウキミノミヤウ、ユキサタ、廿一日、一段、イ■ナハにウタウ、廿一日、五段大、井ヤウチン、廿三日、一段、サフラウハウノミヤウ、マサスエ、廿八日、六段、サタユキノミヤウ、ケイクワンハウ、正月廿八日、五段、ナカトノノミヤウ、マサユキ、二月十三日、一段、ヲウクエハウノミヤウ、センノウ、三月八日、二段大、サチユキ、十五日、三段、エンクワウハウノミヤウ、チヤウノウ〔クワシン〕二升、□、一段、□□一段、マサスエ、五月二日、半、□□段、エンワウハウミヤウ、□□一升、ウルウ五月十四日、一段大、□□キヤウノウ、六月十六日、二段小、

ヨシスエ、三段半、アリサト、三段、タラウ、十月三日、一段小、にンケイ、六日、一段、にウタウノミヤウ、キヤウエン、七日、一段、コクフンノアマキミ、十二日、八段、フクシヨウハウノミシン四升、十三日、一丁二段、スエサタ、十九日、二段、アカサカノミヤウ、廿五日、半、サフラウ、卅日、二段大、チクシノミヤウ、シケマサ、十一月七日、フクシヨウハウ、八段小、タラウ、クワシン六升、十一月十二日、三段、アンシヨウハウミヤウ、マサスエ、十

八日、五段、マサユキ、廿八日、一段、フンサクワン、十二月六日、にシノミヤウ、三段半、スエツ子、十六日、二段、センシヤウウホウハ、廿五日、四段、にウシノミヤウ、ノフツ子、九月二日、二段、クにサト、十四日、二斗一升、フィシヨウハウ、十八日、ヒノクマノミヤウ、三段小、

〔七月十三日ユシナホアクシヨウハ〕十四日、一段、にウシミヤウ、シケサタ、十六日、二段、マサスエ、十九日、二段、にウシノミヤウ、スエツ子、廿四日、三段、コクフンノアマノミ、廿五日、一段、フクシヨウハウミヤウ、タラウシラウタイウノミヤウ、一段半、マサユキ、廿八日、にウシノミヤウ、四段半、シケサタ、タラウカミヤウ二段、サハタニヨシミチ、八月二日、ヒノクマノミヤウ、八月十三日、一段、ヒサユキノミヤウ、一段半、ヒサユキ、三日、四段、クエンナイノミウ、ツ子カス、一段半、サワノテラキミヤウ、シケノフ、十七日、二段、マサスエ、廿四日、二段、ケハウ、ヤスユキ、十七、三段、サタユキミヤウ、廿六日、半、ヒノクマノミヤウ、アリサト、廿七日大、モリ、

○本文書ハ二八九二号文書ニ続クモノナルベシ

437、《書籍頁三七三七》

○四七七〇 僧常智解案○余瀬文書

□常智謹解 申請 夷石屋大衆裁事

請被殊蒙鴻恩、当山之修正田之証文（を）従行善房手、任被讓（ユヅリ）与本意、証判（を）賜（天）、件修正田（を）領知、欲致恒例不変之勤状、

右、謹検案内、於件修正田者、雖善哉房卜地、既行善房常々荒山（を）切払（天）為田地（天）、耕作来之間、依大衆僉議、年来修正（を）被勤仕之処也、然行善房既及老耄、不知餘命幾之事者、於常智房者、

且嫡弟之上且舍弟也、何況於当山功劳多重(天)、年舒久積□、仍件修正田(を)常智(二)被讓与之処也、望請大衆裁、且蒙鴻恩、且任被讓与証文意趣、大衆証判(を)賜(天)、備永代公驗、件修正田(を)領知(之)、欲致不私之勤矣、仍注子細、言上如件、以解、

保元二年十二月廿九日 僧常智(在判)

住僧廿二人

438、《書籍頁三七四七》

○四七九九 法橋某書狀○陽明文庫所藏仁安二年夏卷裏文書東北院御領尾張(小弓庄)勅旨□解狀進上之、子細紙上尔□長候、使者男可執申、可令念申沙汰給候、□苛責候之由所申上□(候力)、恐々謹言、

二月八日

法橋□□

中宮權大進殿

439、《書籍頁三七四八》

○四八〇四 肥前国司庁宣案○河上神社文書

庁宣 肥前国留守所并河上宮一宮

仰下 二箇条

一五八月流鏑馬事

右、於流鏑馬・相撲・村田楽・一物者、以国内名々、令勤行之事、先例有限之処、為彼神事有名無実之由訴申之、事実者、附冥顯其恐不少者也、早社家国衝相共、彼可令勤行流鏑馬以下神事之由、可充催諸郡名々等、一寺社燈油免事

右、件燈油免者、町別老斗伍升被充置処也者、於彼油者、社内(仁)収置之、可致其役矣、

以前二箇条、任先例可令勤行之旨、所宣如件者、在庁官人及社官等

宜承知、更不可違失、以宣、

応保二年三月廿三日

大宰權少式兼大介橋朝臣(在判)

440、《書籍頁三七五三》

○四八一〇 僧源清書狀○余瀨文書

雖被仰、思念事(仁ヨテ)不可有放□□夫(ハ)尤在謂、但一年許源清(仁)預(也)、世間(ヲハ)御覽(セト)申云々、如意趣沙汰階(天シ)間、雖約束巨多候、本斗初二升(そ)御恩、於自余物、權現知見令給、無一恩、又為源器鏡房真偽申候者、守護天等知見可候、雖多諸事、不能注進寧器鏡房所行之躰、誠惶誠恐謹言、

長寛三年九月 日

僧源清(在判)

441、《書籍頁三七五四》

○四八一二 高松女院令旨案○根来要書上

高松女院御筆令旨(永萬元年八月十四日)

忽ちこのよしかハのさうハ、かうやのてんほう院に、なかくまいらせつ、さてはからひて、すゑのよまで、よからんやうにさたしおくへし、とハのゐん女院の御れうに、めてたき御くとくになりぬへからんことゝも、さたしをかるへし、かくてやかてたうしもまいらすへきに、しハしとおもふとありて、はかなきよハおもひなから、さてやむこともそとて、かきをくなり、かくかきをきつれハ、たかふへからず、あとさたせられん人に、かうくと申て奉申いたして、てらにをくへし、ハかなくならん又のひよりハ、てんほうゐんに、さたあるへきなり、

永萬元年八月十四日

442、《書籍頁三七五五》

○四八一四 僧昌覺申狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年秋卷裏文書

入室之弟子得付屬之上、賜預故法性寺大殿下度々長者宣御立券之狀、并故闕白殿下 長者□(宣力) 寺家政所下文等、蒙 御裁斷、年來之間、知行仕之處、□忽章玄背如此等之旨、俄可蒙御裁定候哉、隨昌□(覺) 年來之間、故大殿下令申 御祈候(天)、殊御哀候(テ)、□不過失候、何今高天寺等可及 御改定候哉、若又□之孫子可知行彼寺等候者、昌覺之弟子寬玄□□隆壽之存日(ニ) 預処分(ニ) 孫子也、尤可知行仕候也、就中寬玄(ハ) 年來之間、故禪定殿下御祈禱勤仕(天)、淨行三時之行法于今未退轉候、以此等之旨、故兩殿下之御□定、易不可有 御改定之由、六波羅内大臣(平清盛) 殿(ニ) 可令申御候、子細且又年來之間知食事(ニ) 候(ハ) 乍恐所令言上候也、恐々謹言、

十一月十七日

僧昌覺(上)

○平清盛仁安元年十一月十二日内大臣二任沙翌年二月十一日太政大臣二任ズ。

443、《書籍頁三七五六》

○四八一七 僧円印書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年夏卷裏文書

下 長者宣、其憚不候歟、其故所々皆任道理、以前宣下改定候了、如此訴訟、不依人任道理、聖代吉例、近來南京沙汰候歟、但彼僧都弟子得業(ハ) 大夫殿御家人被坐候、若其憚思食歟、又円印不思食捨、只召彼氏文書、且被尋明法、□任道理御沙汰候(ハ) 兩方尤大望候者歟、就中為彼得業極少官、雖非此事、被蒙御恩事何幾哉、於円印者只此一事許候、偏後世事思給候之間、国助道□資縁念誦読經退轉、既成後世之妨、仍非一世二世訴候、垂御哀□御功德候事歟、彼得業被去申候(ハ) 極又大悲候者歟、諸事難尽紙上、恐々謹言、

七月十五日 僧円印
佐女牛殿(侍)

444、《書籍頁三七五七》

○四八二〇某書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年夏卷裏文書
去年御年(貢脱力) (掛深十疋四丈上有智十三疋) 已上六丈絹□□所令存候也、于今遲々条、尤為恐□不少候、但無故于今非未進候、(美濃) 上有智庄為員(貝力) 小野住人無□□候了、住人一人不殘、隨不熟実□為方候、掛深又一不熟同前、仍其□□由故入道(忠道) 殿下(尔) 令言上候了、仍于今所致懈怠候也、而此仰尤恐□候、相構(天) 可致(忿) 沙汰候、可然様□□計御沙汰候也、
但上有智三十疋条極僻事(ヲ)、如此□□度々頼賢注申候也、一切不候事也、故前御時沙汰切候了、一度も卅□

445、《書籍頁三七五九》

○四八二七 安芸守藤原能盛書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安二年十一月卷裏文書

跪以承候了、楹原紙今年最下品候之由、沙汰人等令申候(には)、半分過返遣候了、見納内金泥一切経料紙令下行候也、雖然、此程御覽可令召進候、只今小預男等召集候也、雖自今以後御辺事、争致疎略候哉、能盛恐々謹言、

十一月廿五日

安芸守能盛

446、《書籍頁三七六一》

○四八三三 某書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安三年三月卷裏文書
守御庄者、如知食此兩三年夫僧良觀押妨之、雖極訴同□御勘当之間、無申達方□□處、近來南都事等、或□□公家皆正直御沙汰出来、年□□外道事等、悉改定候了、即此御庄其非道隨一也、円印道理之由、

御□□聞及、定皆所存知候也、□□時節相応之比候、雖而依通□□不指出候、且是偏御辺御沙汰□□候故也、抑良觀被妨根元、□□領家并長谷寺僧都下文乱□□、仍相尋領家全不成下文者、□□又僧都自大夫殿嘗相得承之、行可令申□□之由御消息(を)遣、其御返事不沙汰□□仍安堵之間、次年又捨領家□□□僧都威勢押沙汰仕条、尤非

447、《書籍頁三七六六》

○四八五一 某書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安四年夏卷裏文書六条院御封事、謹以承候了、当国本自濟物日夕所出不幾候之上、近年春官御所所同御封并初齋宮寮納米等相并千余□(石力)被增加之間、夫□□候也、其上又伊与美濃两国分春官御封、被省宛国作事、件所当(ハ)不足、御封(ハ)增加、誠淺猿事也、如此重色御封使等、加水□(火力)之責之間、無治術候也、非六条院御封、一所方々濟物等、心外(ニ)難濟候歟、然御封使等下向当国候了、国中有様無隱之見知候也、就中去年去々年共以旱水口

448、《書籍頁三七六七》

○四八五三 淡路守平經正書狀○陽明文庫所藏兵範記仁安四年夏卷裏文書
開道寺・道通寺事・謹以承候了、早相尋在庁、可令言上子細候也、但此間日次不□之間、于今不下遣目代候也、何様にも下向之後、文書到来之上、可左右候事歟、以此旨可然之様、令計申上給候、謹言、
八月四日 淡路守經正(上)

○平經正仁安二年七月淡路守二任ズ。

449、《書籍頁三七七三》

○四八六五 大藏権少輔基兼書狀○高野山文書宝簡集九

(端裏)「大田御庄御年貢布事(十月十九日)」

此旨被申て候し書狀ハ、一日令進覽候了、謹言、
備後国大田御庄御年貢六丈白布御馬御牛衣料、送文(ヲ)成副候(天)、筑前守(平貞能)之御許(ハ)令送遣候之処、御厩舍人等、称非本尺之旨、不令請取之由(ヲ)被申候(天)、庁(ニ)所被返遣候也、此御庄建立之後、此二三ケ年令進濟給定(の)以鉄尺、布令送遣候畢、何様可候事(にか)候覽、早可仰左右給候、恐々謹言、
十月十九日 大藏権少輔基兼(状)

謹上 主馬判官殿

450、《書籍頁三七七四》

○四八六六 大藏権少輔基兼書狀○高野山文書宝簡集九
此返事御覽之後可返給、恐々謹言、
今朝 入道(平清盛)殿(ハ)參仕候之処、以源左衛門尉(源季房)仰云、大田御庄御年貢布事、御庄建立以後、此二三ケ年、以鉄尺令進濟了、而今年始(夫)申非本尺之由、御厩舍人等件布(ヲ)不請取、不当事也(ト)筑前守之御許(ハ)仰遣(ト)、御定候(れハ)、以其仰令申遣候之処、筑前守返事如此候、恐々謹言、
十月廿一日 大藏権少輔基兼(状)

謹上 主馬判官殿

451、《書籍頁三七七四》

○四八六七 大藏権少輔基兼書狀○高野山文書宝簡集九
昨日被仰下候(し)大田庄御年貢布進納之間、鉄尺本尺間子細、以御教書、一行可仰給候也、令致沙汰候故也、且以御教書之旨、筑前守(ニモ)可令覽申候也、恐々謹言、
十月廿二日 基兼(上)

謹上 源左衛門尉(季房)殿

452、《書籍頁二七七四》

〇四八六八 大藏権少輔基兼書狀〇高野山文書又統宝簡集百四十二

大田御在加納開発、庁御下文進上之、如此御下文へハ、庁官雖令持参候、事へニ触てわつらはしきやうに候へは、内々私に所令進上候也、件間の牒(榜力)示などの事をも、先日光臨おほせあはせ候しかハ、昨日八条殿、又夜前六波羅殿に参上仕候へ天、奉尋候しかとん、御他行之由へ承候へ天、空罷帰候了、使間事、随仰可致沙汰候也、委細見参へニ可申承候、恐々謹言、

十二月一日 大藏権少輔基兼
謹上 主馬判官殿

453、《書籍頁二七七四》

〇四八六九 筑前守平貞能書狀〇高野山文書宝簡集四十七
「筑前守貞能返事」

御馬御車牛衣布事、子細承候了、召問沙汰者義次候之處、申云、去々年去年任庁送文取納て、令下行御厩舍人等候之間、非本尺之由訴申て、義次を依令偏頗之由嫌申候、今度布召御厩舍武廉、御使共へ令見て、令下宛候之處、申鉄尺之由へて、付御使武廉令持参候敷、然者此条可令計御沙汰給候者也、恐々謹言、

十月十二日 筑前守貞能(平)

454、《書籍頁二七七五》

〇四八七〇 左衛門尉源季房書狀〇高野山文書宝簡集九
あんの丁のへんそ、おほくらのせふのふみ、かへしまいらせ候、

謹言、
おほたのみしやうのみねんくのこと、きのふ申あげ候ひにき、すな

はちおほくらのせふのまいられて候ひしに、おほせられ候ひにしに候、けさかく申されて候ひつれハ、みけうそかきてつかはし候ひぬ、ちくせんのかみにもいへと候ひき、おほせつかはし候へし、たたしおほくらのせうかく申つかはさんと申されて候へハ、さてや候へく候らん、おほせにしたかひ候へく候、恐々謹言、

十月廿二日 左衛門尉季房
主馬判官殿

455、《書籍頁三七八四》

〇四八八七 僧良仁房地処分狀〇大東急文庫所蔵文書
处分渡 四間老面之房并敷地事
合老所者へ字

在大和国添上郡大楊生郷之内忍辱山北谷
四至等在本公験面へニ

右、件於四間老面之房并敷地者、僧良仁院之師資相伝所領也、然多年領掌間、无他妨、依為年来同法、僧清勝へニ永以処分渡所也、仍為後代之証文、手読相承次第注置、立新券文狀如件、

養和□□(式年力)正月六日 僧良仁法師(略押)
問弟僧清勝

【第十卷、拾遺】

456、《書籍頁三八一》
〇四九〇五 神祇官勘文〇尊經閣所蔵文書

神祇官

勘申諸神立社并祭祀之始及祈年等祭始又忌火膳御贖等始事
一賀茂大神

旧記云、御祖久須玉依媛命始遊川上時、有美箭流来依身、即取之挿床下、夜化美男相副、既知妊身遂生男子、不知其父、於是為知

其父、乃造宇氣比須、令子持坏酒供父、此子持酒振上於天而云、吾天神御子、乃上天也、于時御祖神等恋慕哀思、夜夢天神御子云、名将逢吾、造天羽衣天羽裳、炬火祭鋒待之、又飭走馬、取奥山賢木立阿礼著種々綵色、又造葵楓蘘蔽飭待之、吾將來也、御祖神即随夢教令彼神祭、用走馬并葵蘘蔽、此之縁也、因之山本坐天神御子称別雷神、又云嵯峨天皇弘仁十年三月甲午、勅山城国愛宕郡賀茂御祖并別雷二神之祭、准中祀者、

一 石清水神

旧記云、貞觀二年為国祈請大并奉移於石清水宮云々、

同七年四月十七日丁卯云々、其詔戸云、天皇〔我〕詔〔止〕〔旨〕掛〔毛〕畏〔支〕石清水〔爾〕坐八幡大菩薩広〔爾〕新宮構造〔天〕種々神宝并礼代〔乃〕御幣〔乎〕令捧持〔天〕、使木工権助從五位下和氣朝臣彝〔イ〕範〔ハムトシ〕〔天〕奉出給〔止〕云々者、然則社立始見此詔戸文、又同二年始祭者、

一 平野神

旧記云、延曆年中立件社貞觀元年十一月九日祭者

一 大原野神

旧記云、文德天皇嘉祥四年二月乙卯、制大原野祭儀一准梅宮祭、

貞觀元年十一月十三日甲子、大原野祭如常云々

一 松尾神

旧記云、大宝元年秦都理始造神殿、立阿礼居、齋子供奉、天平二年預大社者、

一 稻荷神

件神社立始之由慥無所見、但彼社禰宜祝等申状云、此神和銅年中始顯坐伊奈利山三箇岑平処、是秦氏祖中家等菘木殖積也、即彼秦氏人等為禰宜祝供春秋祭等、依其靈驗、有被奉臨時御幣、相次延喜八年被贈太政大臣藤原朝臣修造始件三箇社者、

一 河合神

件神社立始祭始之由無所見、但依天安二年八月七日大政官符預大社、又去延喜元年十二月廿八日大政官符備、得神祇官解備、件河合神是御祖別雷兩神苗裔神也、加之此神靈驗顯然、貴賤婦仰、奉大神幣帛之時、先奉此神云々者、左大臣宣、奉勅、依請者、預相嘗祭云々者、

一 木嶋神

件神社始又祭始之由無所見、但彼社祝申云、去天安二年八月七日預四度官幣、又去寛平五年九月十五日預「相」嘗祭、自爾以降社祝祭奉仕者、

一 春日神

旧記云、貞觀元年十一月九日祭件神、

一 大倭神

旧記云、崇神天皇六年云々祇、先是天照大神倭大国魂二神並祭於天皇大殿之内、然畏神勢共住不安云々、又依〔以力〕日本大国魂神、詫淳名城入姬令祭、

一 龍田風神広瀬大忌神

旧記云、天武天皇四年四月癸未、遣少紫美濃王・少錦下佐伯連広足祠風神于龍田立野、又遣少錦中間人連大盖・大山中曾禰連韓大祭大忌神於広瀬川合者、

一 住吉神

旧記云、昔神宮皇后〔乃〕自新羅還給〔志〕次、住吉大神奉誨皇后〔天〕宣〔久〕、我荒魂〔乎波〕穴門〔乃〕山田〔乃〕邑〔仁〕令祭〔与〕、吾〔加〕和魂〔乎波〕大津〔乃〕淳中倉之長峽〔爾〕令坐〔云々〕、仍得神語随欲而祭云々、

一 大国主神

旧記云、神代上注云〔云々〕一書云、大国主神又名大己貴神云々、是吾〔加〕幸魂寄魂〔サキタマクシタマ〕也、今欲何処住云々、吾〔波〕欲住於日本国三諸山、故即嘗於彼処云々者、

一 氣比神

旧記云、神功皇后十三年春二月丁巳朔甲子命武内宿禰從太子、令拜角鹿箭飯大神云々

一 氣多神

旧記云、高野天皇神護景雲四年云々、差使奉幣帛能登国氣多神云々

一 香稚廟

旧記云、貞觀十六年大宰府申云、香稚廟官每年春秋祭々、其樂舞人裝束去宝龜十一年大武正四位上佐伯宿禰今毛人所造也、年代久遠不中用也、以府庫物可宛由、於太政官処分也、依請云々、

一 祈年祭

桓武天皇延曆十七年九月癸丑、定可「奉」祈年幣帛神社云々、

一 神今食月次祭

同天皇同九年六月戊申、於神祇官曹司行神今食能云々者、

一 鎮魂祭

旧記云、天照大神閑天石戸隱坐之時、忌部遠祖太玉命根掘天香山真賢木（以賢木祭神之由此也）種々幣取垂捧持、中臣遠祖天兒屋根命袴申、猿女（サルメ）公遠祖天（ノ）鈿女（ウツメ）（ノ）命日影為纒、取竹林手石屋戸伏船踏登、動揺而為神樂、八百萬神一共咲之（十一月鎮魂此由也）、于時天神詔、吾今隱居天下將闡、天鈿女命何以為樂、八百萬神亦何咲之、天鈿命勝自汝命貴神坐焉、故歛喜樂耳、太玉命出鏡眇之、天神大恠、臨見之時、手力男神在前隱立石屋戸、掖取御手曳出、太玉命儲出頭繩控度御後（出頭繩此由也）、啓曰、真（莫力）復入坐、于時天下照明、万妓自息、神擁然者、以是觀之新嘗會神態之前日、供奉件鎮魂祭、其神所行事立廻賢木、其中伏船、御巫祭此『船』上、以金付木歌合舞檉、猿女亦舞、只似義、良有以也、

一 大嘗祭并御禊事

旧記云、天武天皇二年十一月丙戌、祭云々、御禊之由無所見、

一 新嘗祭

旧記云、用明天皇二年夏四月乙巳朔丙子、御新嘗於磐余河上云々

一 御贖事

旧記云、去弘仁五年六月、依聖躰不預、同月七日己丑、行御贖物、其後六月十二日從一日至于八ケ日御巫行事、每日供奉、仍謂御贖者、

一 忌火事

旧記云、垂仁天皇之代倭姬皇女為伊勢大神御杖代、于時依隨大神詫宣、從大和国向伊勢国、到老志郡齋片樋宮發『從』彼宮乘三隻船、向佐志津御船暫留、爰日夜鳴聞於葦原、倭姬皇女遣人、不見視、有一隻鶴守八根稻穗長八握、可謂瑞稻、倭姬皇女使人荏採、欲供御食、即折「枝」木刺合出火炊彼米、供奉大神、始從此時神大神之嘗祭發、故每至神態鑽火炊爨、謂之忌火、良有以也者、

以前、被式部大輔大江朝臣維時仰云、件等諸神社立始又祭祀之始及祈年月次神今食鎮魂大嘗新嘗忌火膳御贖等元發宜勘申者、曳勘旧記如右、但立始社之由慥無所見、就中天武天皇四年冬庚辰天皇御葉云々、何能保社稷云々、又云同天皇同年乙亥神社造始者、仍勘申、

天曆三年五月廿三日

大史直実

伯 王

權少副大中臣賴

大副大中臣朝臣

大祐大中臣

少副齊部宿禰

權大祐中臣

少祐齊 部

少史卜 部

權少史 部

457、《書籍頁三三八三六》

○四九四一 神祇大副大中臣某書狀○東寺文書百合外

請 御消息事

右、具以見給了、下文事甚希有、奇恠侍事也、件下文事以誰人□□申乎、又別当と云人、是誰人乎、隨□(慥)□□可違乱者也、專此□(間)一日令□(庁)下文之外、不□(成)下文侍者也、件下文慥可被尋給者□(也)、早以此由可被遣□□(仰也)、人間事猶未□□、何況於仏事□(乎)、□還迹耳、說□□□謹言、

「治曆四年」四月五日 神祇大副大中臣(花押)

458、《書籍頁三八三八》

○四九四五 伊勢国大國莊司解○東寺文書百合外

「下檢非違使奉成、如解狀者、件兩条事、令愁申之旨、尤可裁□(定)、任実正道理、毎事弁□□(定可)□□、不□□□(阿容)之、祭□□□(花押)」

東寺御領大國莊司解 申請 祭主裁事

□(可)祭□(主)言上□(二)个条子□□□□

一請□(被)殊任 公驗理裁定、当□(御)庄□□四坪伍段・三大□(分)里三坪壹町・拾坪□(壹)町、為下人□□□□田致妨之日、前祭主言上之尅、各々□□□(不批交)公□(驗)、□後、庄司□所下向之間、立榊、□□孝末等相論、不安愁□(状)

右、謹□案内者、当御庄□(田)畠、是□□、去□□□(弘仁三年)十一月□(月)廿七日奉 勅施入官符、以承和八年□□(荒熟)実檢官符、□(兩)度下國司□□(已来)、為□□(東寺)□□□、無□□(他妨)、而藤原有孝有任等構謀計文書、□□□□(擬掠領之力)尅、□□□(注)子細、□□□□(祭主訴)申之尅、各々甲乙人□□□(之公驗)与寺家公驗、□(可)批交之由、御下文使(二)

檢非違使奉□□(資)□□隱公驗、不致沙汰、彼祭主下御座之後、庄司他行□□(之間)、□相論立榊、神主訴申□□(奉資)□□□□押蒞、□(企)左道也、望請恩裁、任代代□□文代代祭主司外題、停□□□(止神民)乱行、将仰□(憲)法、仍言上如□(件)、

一請被□□数代領掌道理并□□□□(度度官符)、□□構成願寺妨、任延曆廿二年正月七□(日)勅施入□□□□(欲領掌東寺)本田六十六町之内見熟十五町、十五条三岡前里五町五反・十六□□□(条多氣二)井内里・三疋田里・五相可里□□

副進官符請文次第文書等

右、謹□□□(檢案内)者、東寺桓武天□□(皇御)願、□□(鎮護)国□(家)重宝御□(誓)願、□天下祈禱限一寺不□(少)、就中、无道□□□□障、可墮落无間獄起請、新触懃行者、子孫繁唱、□(三)世共可蒙□□(利益)勅旨眼前也、及奸偽百姓不□此□□勢、豈無裁定哉、望□被恩裁、停□□□□(止成願寺)横妨、将仰正道之貴、奉祈御願矣、以解、

永保元年八月廿三日庄□□

庄長執行執別当(円順)(花押)

459、《書籍頁三八七一》

○四九九八 大中臣道衡処分状案○光明寺古文書

(端裏書)「四瀬殿処分券」

二女子志の七殿(二)所うふんす
あおつのむら為光かいかいつ四段五
国房いかいつ三段五 南田三段三

くさへたのた三段又やへのた五段まや尻
二段則房いかいつ かつかへ安岡(か)いかいつ七段

お、畠壹丁内西五段□しかむのかりや畠二段田尻田二段あくみのあり垣三段五有弘一段三又あくみのとう志二段

伊勢池町田壹段 ふつゑの畠一段 小俣畠二段 又野はたの畠二段
本文書者ちくり大夫のもとにてせうまうにやけたり
かんらく二ねん十一月一日

大中臣道衡(衡力)(在判)

○貞永二年二月三日の池町田相伝系図ヨレバ、道衡ハ平安末ノ人ニシテ「かんらく」ハ私年号ナルベシ。

(参考・光明寺古文書) 池町田本領主

大中臣道衡—男道宗—男道家(改名道国)—男当時小勾都

—女子—男吉重—男満犬—僧智善

貞永二年二月三日注之

460、《書籍頁三八七七》

○五〇〇五 大和國小東莊下司僧教助陳狀○堂本四郎氏所藏

「檜の朽葉」所収

謹条々陳返申 東大寺往古白米免田小東御庄住人等為春日社司祐宗

被押妨白米免田一町七段百廿歩間之無実謀計愁狀

副進已前自社被遣下坪付案一通

一、今度相具陳狀、所進上祐宗之坪付案、已前遣下御庄坪付(ト)已以相違、何非一准、豈非謀計哉、

一、本領主尼禪妙申誰人哉、若是善妙歟、件尼実社(ニ)奉寄文(ツ)、実名不可僻字書、随寄文不入、尤謀書也、

一、奉寄応徳二年之由申条非也、仏供田一町七段七段之外田畠三町餘、募春日節供沙汰之時、領主者尼善妙孫子主税允忠遠也、件男生年五十九、応徳已後至于今年五十四箇年也、爾者忠遠(カ)五六歲齒程也、仍不可有官、不可俗名、豈是非謀計哉、

一、代々名主以所当地利致御供勤来之由申条、無実也、四町八段田畠知足院相論之時、忠遠(ト)四位神主時常(ト)雜事申間、御仏供田一町七段百廿歩之外、名節供料許也、忠遠一人(シテ)四町餘(ヲ)領知之間者、方々無煩、今件所領散々(ニ)売買之間、領主等七八人出来、坪内申(テ)仏供田(ニモ)責徵節供、豈不非道哉、就中段別官物(ヲ)徵事、祐宗之時始申也、

一、教助四町八段之内抽出田一町七段百廿歩、号御仏供非也申条、

彼御庄之習、於畠者自往古更無他所役、於田一町七段餘者、自往古奉備大仏白米之由、依為沙汰人注申也、於仏供田之外田畠地子者、早可有御定、又以往古田文等、為御寺券契明白也、若教助陳申中一事一文無実謀計申上者、惣春日四所大明神大仏尺迦如来、必可令罰給也、若此旨(ヲ)令信用御者、早可令裁許給、春日之大明神者為護東大寺興福寺佛法、垂跡往古如来也、何大仏白米田(ヲ)非道(ニ)令収公給哉、依称縁信祐宗致非常謀計也、

五箇条陳狀如右、謹言、

保延四年十一月廿八日下司僧教助

461、《書籍頁三八八四》

○五〇一九 源歛乃丸田路売券○大徳寺文書

(端裏書)「さいゐんのふみ 文書七枚」

沽却 田老町式段 路有式段半事

在 西院小泉御庄之内(未申角)

右件田、源歛乃丸作手田也、而直依有米要用、限永年内舍人大中臣朝臣季時(ニ)口入スル相博之使付菅野末延(ニ)髓手次文書等新券文、所渡申如件、但不可(有)他妨者也、

久安三年二月十七日 源歛乃(花押)

「かんのうのうりけん」

462、《書籍頁三八八四》

○五〇二〇 僧晴誓書狀○水木直箭氏所藏文書

髓尋事子細御之間、御返事遅々之条、尤恐思食者也、

法務 御房御返事献覽之、善祐注申坪更非大乘院御領、早付領主可令沙汰給也、於出雲御庄内東大寺負田者、追年官物無懈怠、於雜役者、依為進官令勤仕御寺、全東大寺(ニ)無勤仕例之由、所令申也、

委旨見田堵等陳狀、季細事等令參上給之時、可令申給之狀如件、

九月十一日 僧晴誉（状）

謹上 理勝房得業御房

○晴誉、二六二七号（久安三年八月廿九日）二見ユ。

（本文窃盜罷入ノアタリノ裏ニ）

「白綾式疋 綾綿衣一領 狩衣袴一具
白布六丈 絹小袖一領 抜出綿一領」

463、《書籍頁三八八六》 *別筆仮名書き

○五〇二五 近宗三郎丸文書紛失状○東大寺史料編纂所文書

（端裏書）「二石三郎口入行永」

立粉失状

東大寺寺領敷地内領地事

在手搔大路北辺敷地四間

四至（東限定房御領 西限煮入道地／南限大路 北限禪花房田）

右、件敷地者、元中禪房相善房兄弟各武間、年來領也、而先年比、

自彼兩人手、賈得之処也（西式間現米六石七斗 東武間七石）之内

西老間者橘姉子賈渡畢（花押）然間去仁平二年三月晦日夜、窃盜

罷入三郎丸家、犯用財物之次、地券失畢、是以為備後代公驗、所立

紛失之由也、若後日件本文書持出之輩者、偏可用其夜盜人者也、仍

為永代沙汰、乞在地証判、所立紛失状如件、

仁平三年十二月廿八日 近宗三郎丸（略押）

「件夜盜人犯用明白也、仍署判、

本地主

「ちかむねの三らう二うりわたす」

（裏）「同本地主僧教元（花押）」

「件夜盜人犯用明白也、仍証判、

大法師（花押）（裏）「行超」 僧（花押）

僧（花押）（裏）「教観」 僧（花押）

（花押）

僧（花押）

僧（花押）○東大寺印十四アリ

464、《書籍頁三八八八》 *裏文書

○五〇三〇 平姉子田地売券○上野国立図書館所藏文書

沽却 売買新券文事

合七段者

在山辺郡十三条五里九坪（西辺）

四至（限東中垣 限北公田／限西中垣 限南公田）

右領田、元者平姉子先祖相伝之所領也、而今依有要用、限価直米肆

拾七斛、売與興福寺住僧長海事既畢、雖有本券依有殘地、不能副渡、

於有進官三段者、所附西辺也、為無後日之相論、勒売買之署名、所

立新券文之状如件、

保元二年卯月十九日売人平氏「たいらのあねのこ」

買人僧

（裏）此内於參段進官者、雖被付西辺、支配參人之日、老町（仁）

平等被付畢、追段別可勤件役也、不可異論之如件、此之内西六段

（二八）兵庫莊三段宛之平等（三）支配之、同 東（虫損）段（二

八）長福進官二段在之、平等（三）四段（三）支配之、 □□（虫

損）（二カ）斗宛也、

自東五段目一反者、字五郎沽却（□実名安□繼カ）

自東六七八段目參段者処分藤原仲子了、

於西端式段者処分藤原牟尼丸了、

465、《書籍頁三八九二》

○五〇四〇 内藏氏田地売券○東大寺新収文書

売進 所領田事

合式段小者（在中村条塚本西）

四至（在右本券面）

右件田、内蔵氏相伝之私領也、而依有要用、見直米陸石（三）限、
矢河大夫殿限永年之作手、御公驗相具、永所売渡進也、仍新券文如
件、

応保三年四月三日

内蔵（花押）

466、《書籍頁三八九六》

○五〇四五 治部権少輔藤原某売券写○尊經閣所蔵藤井貞幹
影抄文書

沽却 私地事

合

（東西式丈伍尺 口四条面／南北拾丈壹尺 東堺ノヨリ也、）
在左京四条二坊十三町

右件地者、年来之私領也、而依有直要用、限上品八丈絹拾伍疋、所
令沽却雜色里影也、敢不可有他妨、為後日沙汰、依有類地、立新券
之状如件、

仁安二年十二月廿九日

治部権少輔藤原（花押影）

この地東西口壹丈をそへて、わかちわたしつ、あたひ八丈のきぬ拾
疋、よね式こく、ちの斗の定なり、るいちのあれは、しんくえんに
かきくはふるなり、

同四年正月廿日

坂上氏（花押影）

467、《書籍頁三八九六》

○五〇四六 某消息案○仁和寺文書

このふたかうは、二条殿々みやこせんにたてまつりたり、くハしく
かき【たる】た□ふみにゑもんすけはんせられたるふみはこ□に

候也、たツねとらせたまへ、

仁安三年三月廿日

（在判）

いそきてかみこそあやしけれ、されとそれにハよらるま
しく候、

468、《書籍頁三八九八》

○五〇五二 某讓状案○仁和寺文書

わかみのあるをりにたに、しとけなき□とものあれハ、ましてなか
らんのちも、おほつかなけれハ、かさねて申おくなり、いちハしの
庄のうち、へふのかう、宇ちまきのかう、これふたつにおきては、
たく女にたてまつりつるところなり、これ□りのち、いかなる文い
てくるにても、それニおきてハ、もちゐらるましく候、ことものな
かにも、たかへられん人ハ、ふけうのうちにてそあらんする、

承安元年七月廿七日

（在判）

阿闍梨伝燈大法師寛兼（在判）

469、《書籍頁三八九九》

○五〇五三 小野為遠田地売券○長命寺文書

（端裏書）「上野公本文」

謹辞 沽却進先祖相伝私領田地新放券文事

合老段者 直能米参斛請畢、

在蒲生下郡桐原郷拾参条拾七里参拾式坪之内（東繩本頭也、）

右、件田地、元者下毛野為貞之依沽却、小野為遠年来領作無他妨、
雖然東塔南谷住山者増善房之負物為為遠所借請実也、而者相具彼買
券、限永年増善房（二）所弁進頭然也、但為遠捨物御庄之寄人也、
雖然、彼田地以後日号捨物、不可一切云煩、兼又不可有他妨、仍為
後日注新放券文、以解、

承安元年十一月九日

売人小野（花押）

470、《書籍頁三八九九》

○五〇五四 某消息○僧綱申文裏文書

かのこきのみさうのちやうの御下文、帥のふせんまうしいたして、まいらせさふらふ、御所のつくしのみさうくみなのちやうにこさたさふらひて、おのくあつかりそとも、けふあす人いそきくたし候なり、たしかにさふらはむものさうくしく候はむ、いそきくたさせおハしますへく候、あなかしく、

○他ノ文書ニヨルニ本書ハ承安元年通子宛ノ消息ナリ。

471、《書籍頁三九〇八》

○五〇六五 源頼朝消息○尊経閣所蔵文書

(花押)(源頼朝)

よろこひて承了、何事もいにしへ二候はさらむことを、いまをはしめてこそ、しきちをもよせまいらせんと、心さしをよもひまいらする事なるに、こけむの御わたりの御事、さらにくらうせきをいたし、御山をさはかする事、またくおもひよらさることなり、返々いつに一所、さかみに一所せ中さたし志つるへし、かならずく御山にしきちを、よせまいらすへきことをこそおもふに、ましてひころよりあらくみさういよく御山のこゑをはとうこくに御よしみをなさはやとこそおもふに、さらにくらうせきあるましき事なり、おのくかくのこときの事にこそは、そむせらるへく候、あなかしくく、

(治承四年カ) 八月十九日

472、《書籍頁三九〇九》

○五〇七〇 平某議状案○早稲田大学所蔵禰寝文書

くいさうにゆつる

しもんらのしゝの事

ひかしはうみ

みなみはうちやまのかふしたち、こつしのおたすへし、にしわくろいしのたちやま、きたわふねのすみさかしのかわおむれ、

ちそう五ねん十月十八日

平

473、《書籍頁三九〇九》

○五〇七一 平某議状案○早稲田大学所蔵禰寝文書

へいさうにゆつる

あかまろのかふのしゝ

ひかしはみかわのおち、はみはきしみのにわしさか、にしわなるみ

ねのかわたに、きたわおかわ、

又みやのそのゝ事

ひかしはてたうのお、みなみはてらさかのおち、きたハありまた、

ちそう五ね(ん脱) 十月十八日

平

474、《書籍頁三九一〇》

○五〇七二 関東御教書○尊経閣所蔵文書

(花押)(源頼朝)

楊下船事、子細(ハ)不知事なれとん、如此令申給(ニ)よりて、可停止其妨之由、被成御下文候也、且此御教書酒匂太郎跡可遣候也、仍執達如件、

四月十二日

仲慶(奉)

475、《書籍頁三九一〇》

○五〇七四 源頼朝御教書○尊経閣文書

(花押)(源頼朝)

金目郷麦事、全以不仰付事候、

凡ハそれならず、仏神於御領者、皆悉令御免候了、御不審不「候」可候、被加沙汰候、此上に令申事候ハ、以此御文、可令見給候、恐々謹言、

(治承七年カ)五月十六日

(花押)

○三九七七号文書参照。

476、《書籍頁三九一一》

○五〇七七 大山行貞島地充文○高野山文書又続宝簡集三十五宛行 処分長島之事

合百八十分者 井がき内西方大やふ村

四至 限東のこり地 限南小道/限西推上座作 限北近作

右件島、元大山行貞地也、而大山貞本宛行限永代、後日さた為、所分長状之如件、

(裏)「是島之直ハ、能米壹石父牛一頭(ニ)限永代、自大山貞本手、大藏中子買取了、

寿永元年壬寅十二月十九日 大山貞本 (略押)

477、《書籍頁三九一三》

○五〇八一 某相博券案写○尊経閣所藏藤井貞幹抄影文書

みつひさニたしかにくまいらせつ、たのさまたけあるへから(す脱)候、

——(花押影)

しをのこうちたかくらの地のかわりニ、七条はうもんたかくらの地、たしかにわたす、かれこれへぬしなかなり、くはしきことは、本んけんニみえたり、せうもん五枚候てなり、あなかしく、

寿永二年六月廿六日

——(花押影)

裏書云

安元二年三月七日日本券加浦書了、

478、《書籍頁三九一六》

○五〇八九 僧栄信田地相博券○書陵部所藏文書 替渡 田地事 (裏)「六百四十【三】二年」

「□之畔本老段者秦末時沽却了」

合式段者(服庄田内) □群郡坂門郷十条十里十七坪自西二反也、字柏取、

右、件私領田者、法隆寺之前□富田之内字かしハとり式□(段カ)者、僧栄信(仁)賜畢、然之間、以八嶋田式段かしハとり式段奉替、如何せん^と母有御□、於本券者、依有類地、不弃秦、仍放新券文之状如件、「大法師林暹(花押)」

元暦元年六月 日

僧栄□(信)(花押)

○紙面ヲ墨ニテ×消ス

479、《書籍頁三九一九》

○五〇九六 関東御教書○中野忠太郎氏所藏手鑑

山城介久兼解状(在具書等)如此、豊田郡司種弘無左右人(を)令追捕之条、尤不当事也、若有存旨欺、早可令召進其身給、為召問子細也者、仰旨如此、仍執達如件、

四月六日

盛時(奉)

佐々木左衛門尉殿

480、《書籍頁三九一九》

○五〇九七 源頼朝消息○長沼賢海氏所藏文書

其事と候はねは、自此も不令申候之処、盛俊下向、委承候了、そのかみの事、全不令思忘候、なしかは不令申候とても、おろかなること候へき、上洛なと仕て候はん時、見参に何事も可申承候也、はては大藏卿の許へ御昇進事、所令申候也、一行進覽候也、兼又筑紫(ニ)

肥前（三）晴氣領と申候ところ一所、為御志所令進候也、これ者も
のかましく雖不令存候、為志令進候也、委細ハ盛俊に令申候了、謹
言、

（元暦二年）八月五日

（花押）（頼朝）

前尾張少将（藤原隆頼）殿御返事

【第十卷、補遺統】

481、《書籍頁〇〇〇一》

〇補一 住吉大社司解〇住吉神社所藏
座撰津職住吉大社司解 申言上神代記事

合

從三位住吉大明神大社神代記

住吉現神大神顯座神緣記

座玉野国淳名椋長岡玉出峽墨江御峽大神

〈今謂住吉郡神戶郷墨江住吉大神〉

御神殿四宮

第一宮表筒男

第二宮中筒男

第三宮底筒男

右三前令三軍大明神〈亦御名向匱男聞襲大歷五御魂速扶騰尊又

速逆騰尊『狹』

第四宮〈姫神宮 御名氣息帶長足姫皇后宮奉齋祀神主津守宿禰氏

人者、元手搓見足尼後〉

神戶二百十四烟〈当国四十烟播磨国八十二烟長門国九十五烟□□

□□(七)烟〉

齋垣内四至〈限東□□道 限南墨江 限西海棹及限 限北住道

郷〉

凡大神宮所在九箇処

当国住吉大社四前 西成郡座摩社〈二前〉 菟原郡社〈三前〉

播磨国賀茂郡住吉酒見社〈三前 戸三烟〉

長門国豊浦郡住吉忌宮〈一前〉

筑前国那珂郡住吉社〈三前〉

紀伊国伊都郡丹生川上天手力男意氣統々流住吉大神

大唐国一処 住吉大神社〈三前〉

新羅国一処 住吉荒魂〈三前〉

部類神

当国広田大神 筑前国櫃日廟宮 糟屋郡阿曇社〈三前〉

播磨国明石郡垂水明神 紀伊国名草郡丹生咩姫神

子神

座摩神〈二前一名為婆照神〉 中臣住道神〈須牟地〉

住道神 須牟地曾禰神 住道神

件住道神達八前〈天平元年十一月七日依託宣移徒坐河内国丹治比

郡楯原里、故号住道里住道神〉

赤留比壳命神〈中臣須牟地神 草津神〉 船玉神〈今謂齋祀紀国紀

氏神 志麻神 静火神 伊達神本社〉

多米神 須牟道曾禰神 止櫛侶伎比壳命神

天水分豊浦命神 奴能太壳命神

津守安必登神〈二前号海神〉 難破生国魂神〈二前〉

下照壳神 味早雄神 萱津神

長岡神 大歳神 忍海神 伎人神

片泉神 阿閉神 魚次神 田蓑嶋神

開速口姫神 錦刀嶋神 長柄神 武雄命

神財流代長財

神世草薙劍一柄〈在驗、日月五星、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄

武、

形俾文彫著也〈長三尺、金銀螺鈿上作、納唐錦袋、

唐鏡一尺四面 白銅鏡八面〈八寸〉 鉄鏡八面〈八寸〉 納黒漆篔

浜鉄小刀四柄〈納犀角鞘〉 大刀四十柄 弓胡録四十具、各納油絹

袋、

鞆八枚 楯四十枚 梓四十本 鈴四十口〈大廿口 小廿口〉

御神殿裝束

三間絹斑幄一条〈御解除料〉 玉縵一枚〈金銅并饒居玉等〉

杼頭二枚（金銅） 麻桶筭一口（押金薄）

櫛一基（平文） 蓋骨四具（胡粉繪）

棹二枚（金銅） 鏡八面（四面銅 四面鉄） 鈴卅二口（金銅八口
中廿四口）

鏡筭八合（平文并白綾縫立） 大刀四柄（平文并金銅金物） 棹卅
二本（胡粉繪）

弓四張（赤漆） 鞆四枚（黒漆） 胡録四面（在金銅金物）

箭二百枚 几帳骨四基（金銅金物） 几帳帷四条（紫類纈）

吳床四脚（平文、金銅金物并色革敷物） 算敷床四脚（黒漆） 絹

盖四条（綿（錦））

弓袋四条（緋油衣） 胡録袋四条（緋油衣） 大刀袋四条（綿（錦））

緋綱八条 白馬一疋（色採飭） 衣韓櫃三合（赤漆加筭形并鉄鎖）

唐飭鞍一具（雲聚一茎 銀面一枚） 髮袋一枚 尾袋一枚

鏡一懸（泥繪） 手綱一条 泥障一懸

唐鑣一懸（金銅） 頸総（紫染加大鈴一口） 鞆一具（付杏葉）

已上神宝二具（内装束一具料 表装束一具料）

生絹壁代四条（長各六丈三尺五幅） 生絹幌八条（長各七尺四幅在
裏） 帛絹天井上覆（長尺各一丈四尺）

紫絹御帳帷四条（長各七尺十八幅） 細布御床土敷四条（長一丈四
幅） 緋絹御床上覆四条

坂枕四枚（端裏錦） 疊四枚（端裏雲纈） 八重疊四枚（長一丈四
尺八幅端裏錦）

四至（限東馱路 限南朴津水門 限西海棹及限 限北住道郷）

右大明神所以顯現者、古昔天地未割、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓

而含牙、及其清陽者薄靡而為天、重濁者淹滯而為地、精妙之合搏易、

重濁之凝竭難、故天先成而地後定、然後神聖坐其中焉、故曰、開闢

之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、状如

葦牙便化為神天御中主尊、一書曰、国常立尊、次国狭槌尊、次豊斟

淳尊、凡三神矣、軌道独化、所以成此純男、次有神泥土煮尊、次沙

土煮尊、次有神大戸之道尊、次大苦辺尊、次面足尊、次惶根尊、次

伊弉諾尊、伊弉冉尊、凡人神矣、軌川之道相參而化、以成此男女、

自国常立尊迄伊装諾尊、伊装冉尊、神世謂七代者、爰天神謂伊装諾

伊装冉尊曰、豊葦原千五百秋瑞穂之地、宜汝往循之、迺賜天瓊戈、

於是二神立於天上浮橋、投戈求地、因画滄海而引拳之、即戈鋒垂落

之湖（潮）結而為嶋、名曰磯馭廬嶋、二神降居彼嶋、化作八尋之殿、

又化豎天柱、陽神問陰神曰、汝身有何成耶、对曰、吾身具成而称陰

元者一処、陽神曰、吾身亦具成而称陽元者一処、思欲以吾身陽元合

汝身之陰元、云爾即將巡天柱約束曰、自左巡、吾当右巡、既而分巡

相遇、陰神乃先唱曰、妍哉、牙（可）美少男歟、陽神後和之曰、妍

哉可愛少女歟、遂為夫婦先生蛭兒、便哉載葦船而流之、次生淡路洲、

此亦不以充兒數、故還復上詣於天神、具奏其状、時天神以太占而卜

合之、乃教曰、婦人之辞其已揚乎、宜更還去、乃卜定時日而降之、

故二神改復巡柱、陽神自左、陰神自右、既遇之時、陽神先唱曰、妍

哉可愛少女歟、陰神後和之曰、妍哉、可愛小童歟、然後同共住而生

兒、号大日本豊秋津洲、次淡路洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次億

岐二子洲、次佐度洲、次越洲、次吉備洲、由此謂之大八洲国矣、然

後悉生万物焉、至生火神軻遇突智之、其母伊奘冉尊見焦而化去、于

時伊装諾尊恨之曰、唯以一兒替我愛之妹者乎、則匍匐頭辺匍匐脚辺、

而哭泣流涕焉、其淚墮而為神、是即畝丘樹下所居之神、号滌沢女命

矣、遂拔所帶十握劍斬軻遇突智為三段、此各化成神也、爰伊装諾尊

追伊装冉尊入於黄泉而及之、吾夫君尊何來之晚也、吾已食泉之龜矣、

雖然吾当寢息、請勿視之、伊装諾尊不聽、陰取湯津爪櫛、牽折雄柱、

以為康（乘）炬見之者、則膿沸虫流、今世人夜忌一片之火、夜忌擲

櫛、此其緣也、時伊装諾尊大驚之曰、吾不意到於不須也凶目汚穢之

国矣、乃急走廻婦曰、于時伊装冉尊恨曰、何不用要言、令吾恥辱、

乃遣泉津醜女八人、一云泉津日狭女留之、故伊装諾尊拔劍、背揮以

逃矣、因投黑鬘、此即化成蒲陶、醜女見而採噉々了更追、又投湯津
爪櫛、此即化成笏、醜女亦拔噉々了即更追、後則伊裝冉尊亦自來追、
是時伊裝諾尊已到泉津平坂、乃向大樹放髭、即化成巨川、泉津日狹
女將渡其水之間、伊裝（諾脫）尊已至泉津平坂、故便以千人所引磐
石塞其坂路、與伊裝冉尊相向而立、遂建絕妻之誓、時伊裝冉尊曰、
愛也吾夫君、言如此者、吾當縊殺汝所治國民日將千頭、伊裝諾尊乃
報之曰、愛也吾妹、言如此者吾則當產日將千五百頭、因曰、自此莫
過、即投其杖、是謂岐神也、又投其帶、是謂長道磐神、又投其衣、
是謂煩神、又投其禪、是謂開嚙神、又投其履、是謂道敷神、其於泉
所謂泉津平坂者、不復別有處、但臨死氣絕之際是之謂敷、所塞磐石
是謂泉門塞之大神也、亦名道返大神矣、又追黃泉津醜女五百神八雷
等採桃子投之、皆還去、仍未世青人草為便、投滅生魂死魂者此緣也、
伊裝諾尊一曰伊耶奈岐尊、悔曰、吾伊裝冉尊、一曰伊耶奈媚尊、到
於不須也凶目汚穢處、故當滌去吾身之觸穢、則往至筑紫日向橘小戶
櫛原而祓除焉、遂將盪滌身之所汚、乃興曰、上瀨是大疾、下瀨是太
弱、便濯之於是中瀨也、因以生神号曰八十枉津日神、次將矯其枉而
生神号曰神直日神、次生大直日神、又沈濯於海底、因以生神号曰底
津少童命、次底筒男命、又潛濯於潮中、因以生神号曰中津少童命、
次中筒男命、又濯於潮上、因以生神号曰表津少童命、次表筒男命、
凡有九神矣、其底筒男命中筒男命表筒男命三所大神（今謂墨江御峽
大神、号称住吉大明神也）、禱祓除緣發（自此時始也）、底津少童命
中津少童命表津少童命、是安曇連等所祭神是也、然後洗左眼、因以
生神号曰天照大神、洗右眼、因以生神号曰月詭尊、復洗鼻、因以生
神号曰素戔鳴鳴尊、凡三神矣、十四代足仲彥天皇穴門豐浦宮御宇（在
長門國豐浦郡北樹社、今謂住吉齋宮）、父曰日本武尊也、第二子也、
異母弟芦髮浦見王、仲哀天皇穴門豐浦宮與筑紫櫛日宮兩宮御宇、先
是娶叔父彥人大兄之女大中姬為妃、生子麿坂王、忍熊王、次娶來熊
田造祖大酒主之女弟媛、生譽屋別皇子、次氣帶長足姬皇后生譽田天

皇、合四王子也、父曰日本武尊、又名号日本小童尊、天皇崩化為白
鳥上天也、浦見王為父天皇至不尊、仍討殺了、母皇后曰兩道入姬命、
活目入彥五十狹第（茅）天皇之女也、天皇容姿端正、身長十尺、祖
父稚足彥天皇即位之後四十八年立為太子、于時太子年卅一歲、天皇
無男子、故立孫為嗣、即位元年（壬申）春正月庚寅朔（庚子）、二年
（癸酉）春正月（甲寅）朔（甲子）立氣帶長足姬為皇后、父帶（氣
長宿禰王女、母葛城高賴媛也、天皇居櫛日宮、秋九月（乙亥）朔（己
卯）詔群臣、以議討熊襲、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不
服、是膺之空國也、豈足舉兵伐乎、愈茲國而有寶國、辟如処女之隙
有向津國、眼炎之金銀彩色多在其國、是謂栲衾新羅國焉、若能祭吾
者則曾不血刃、其國必自服矣、復熊襲為服、其祭之以天皇之御船及
穴門直踐立所獻之水田十萬代名大田、是物等為太幣也、天皇聞神言
有疑之情、便登高丘遙望之、大海曠遠而不見國、於是天皇對神曰、
朕周望之有海無國、豈於大虛有國乎、誰神徒誘朕、復我皇祖諸天皇
等尽祭神祇、豈有遺神耶、時神亦託皇后曰、如天津水影押伏而我所
見國、何謂無國、以誹謗我言、其汝王之如此言而遂不信者、必不得
其國、唯今皇后始有胎、其子有獲焉、然天皇猶不信、以強擊熊襲、
不得勝而還之、九年（庚辰）春二月（癸卯）朔（丁未）天皇而明日
崩（時年五十二、即知不用神言而早崩、一云天皇親伐熊襲、中賊矢
而崩、）或記曰、天皇熊襲二國之擊思化平（世利）、是時有神、託沙
歷皇主祖內避國避高松屋種、以誨天皇曰、御孫尊也、若欲得寶國耶、
將現授之、便復曰、琴將來、以進皇后、則隨神言而皇后授琴、於是
神託皇后以誨之曰、今御孫尊所望之國、譬如鹿角以無実國也、其今
御孫尊所御之船及穴門直踐立所貢之水田名大田為幣、能祭我者、則
如処女之隙而金銀多之眼炎國以授御孫尊、時天皇對神曰、其雖神何
謾語耶、何處時（將）國、且朕所乘船既奉於神、朕乘曷船、然未知
誰神、願欲知其名、時神稱其名表筒雄中筒男底筒雄、如是稱三軍神
（止）名、且重曰、吾名向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊也、時天皇

謂皇后曰、聞惡事之言坐婦女人乎、何言速狹騰也、於是神謂天皇曰、汝王如是不信、必不得其國、唯今皇后懷任之子、蓋有得矣、是夜天皇忽病發以崩、於是皇后與大神有密事（俗曰夫婦之密事通、）時皇后傷天皇不從神教早崩、於是皇后及大臣武內宿禰天皇之喪、不令知天下、則皇后詔大臣中臣鳥賊津連・大三輪大友主君・物部胆咋連・大伴武以連曰、今天下未知天皇之崩、若百姓知之、有懈怠者乎、則命四大夫領百寮令守宮中、竊收天皇之屍、付武內宿禰、以從海路遷穴門而殯于豐浦宮、為無火殯殿、（甲子）大臣武內宿禰自穴門還之、復奏於皇后、是年由新羅役以不得葬天皇、於是氣息長姬皇后哀傷天皇不從神教而早崩（氣息長姬天皇諱神功天皇第十五代初居橿日宮後磐余稚椋宮、在大和國十市郡磐余里云々、）以為知所崇之神、欲求財寶國、是以命群臣及百寮、以解罪改過、更造齋宮於小山田邑、三月（壬申）朔、皇后選吉日入齋宮、親為神主、則命武內宿禰令撫琴、喚中臣鳥賊津使主為審神者、因以千繪高繪置琴頭尾而請曰、先日教天皇者、誰神也、願欲知其名、逮于七日夜乃答曰、神風伊勢國之百伝渡逢巢之拆鈴宮（五十鈴脫力）所居神、名撞賢木蔽之御魂天疎向津媛命焉、亦問之、除是神復有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾節之淡郡所居神之有也、問亦有耶、答曰、於天事代、於虛事代、玉籥入彥蔽之事代神之有也、問亦有耶、答曰有無之不知焉、於是審神者曰、今不答、而更後有言乎、則對曰、於日向國橘小門之水底所居而水葉稚之出居神、名表筒男中筒男底筒男神之有也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、遂不言且有神矣、時得神語隨教而祭、然後遣吉備臣祖鴨別令擊熊襲國、未經浹辰而自服焉、且荷持田村有羽白熊鷲者、其為人強健、身有翼、能飛以高翔、是以不從皇命、每略盜人民、戊子、皇后欲擊熊鷲、而橿日宮遷于松峽宮、時飄風忽起、御笠墮風、故号其処曰御笠也、（辛卯）至層增岐野、即舉兵擊羽白熊鷲而滅之、謂左右曰、得取熊鷲、我心則安、故号其処曰安也、（丙申）轉至山門峴、則誅土蜘蛛田油津媛、時田油津媛之兄夏羽興軍而迎來、

然聞其妹被誅而逃之、夏四月（壬寅）朔（甲辰）北到火前國松浦巢而進食於玉嶋里小河之側、於是皇后勾針為鉤、取飯粒為餌、抽裳糸為縵、登河中石上而投鉤、祈之曰、朕西征欲求財國、若有成事者河魚飲鉤、因以拳竿、乃獲細鱗魚、時皇后曰、希見物也、故時人号其処曰梅豆邏國、今謂松浦訛焉、是以其國女人每四月上旬以釣投河中捕年魚、於今不絕、唯男夫雖釣、以不能獲魚、既而皇后則識神教有驗、更祭礼神祇、躬欲西征、爰定神田而佃之、時引灘河水、欲潤神田、而掘溝及于迹驚崗、以大磐塞之、不得穿溝、皇后召武內宿禰、捧劍鏡令禱祈神祇而求通溝、則雷電霹靂、蹴裂其磐令通水、故時人号其溝曰裂田溝也、皇后還詣橿日浦、解髮臨海曰吾被神祇之教、賴皇祖之靈、浮涉滄海、躬欲西征、是以今頭滌海水、若有驗者、髮自分為兩、即入海洗之髮自分也、皇后便結分髮而為髻、因以謂群臣曰、夫興師動衆、國之大事、安危成敗必在於斯、今有所征伐、以事付群臣、若事不成者、罪有於群臣、是甚傷焉、吾婦女之、加以不肖、然暫假男貌、強起雄略、上蒙神祇之靈、下藉群臣之助、振兵甲而渡嶮浪、整艦船以求財土、若事就者群臣共有功、事不就者吾独有罪、既有此意、其共議之、群臣皆曰、皇后為天下計所以安宗廟社稷、且罪不及于臣下、頓首奉詔、秋九月（庚午）朔（己卯）令諸國集船舶練兵甲、時軍卒難集、皇后曰、必神心焉、則立大三輪社奉刀矛矣、軍衆自聚、於是使吾益海人烏摩呂出於西海、令察有國耶、還曰國不見也、又遣磯鹿海人名草而令視、數日還之曰、西北有山、帶雲橫絕、蓋有國乎、爰卜吉日而臨發有日、時皇后親執斧鉞、令三軍神曰、金鼓無節、旌旗錯亂、則士卒不整、貧財多欲、懷私內顧、必為敵所虜、其敵少而勿輕、敵強而無屈、則奸暴勿聽、自服勿殺、遂戰勝者必有賞、背走者自有罪、既而神有誨曰、和魂昵王身而守壽命、荒魂為先鋒而導帥船、即得神教而拜礼之、因以依網吾彥男垂見為祭主、于時也、適當皇后之開胎、皇后則取石二枚、挿御裳腰而祈之曰、事竟還日、產於茲土、宣賜事在驗、（一云、田裳見足尼取石搓御裳挿御裳腰、

祈曰、產吾広国美土賜、爰脱石落、因耶波多佐波奈良波佐志止白、強挾挿支、仍八幡止皇子白、随祈賜止、誉田天皇止号申、故改名手搓宿禰止詔賜、其石今在于伊都県道側、一枚長一尺一寸重四十九斤、一枚長一尺一寸重四十斤、冬十月己亥朔辛丑、從和珥津瓮之時、飛廉起風、陽侯拳浪、海中大魚悉浮狹、則大風順吹、帆船隨波、不勞櫓楫、便到新羅、時随船潮浪遠速、即知天神地祇悉助、新羅王於是戰々栗々、厝身無所、則集諸人曰、新羅之建国以來、未嘗聞海水凌国、若天運尽之、国為海乎、是言未訖之間、船帥滿海、旌旗輝日、鼓吹起声、山川悉振、新羅王遙望以為、非常之兵、將滅已国、誓焉失志、乃今醒之曰、吾聞、東神国謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其国之神兵也、豈可拳兵以距拒乎、即素旆而自服、素組以面縛、封籍降於王船之前、因以叩頭之曰、從今以後長与軋坤、伏為飼部、其不乾船舵而春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以每年貢男女之調、則重誓之曰、非東日更出西且除阿那礼河返以逆流及河石昇為星辰、而殊闕春秋之朝貢、怠廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉、時或曰、欲誅新羅王、於是皇后曰、初承神教將授金銀之國、亦封重宝府庫、收凶籍、自服勿殺、或記曰、皇后為男装束征新羅時、神導之、由是随船浪之遠及于新羅国中、於是新羅王宇流助富利知干參迎跪之、取王船則叩頭曰、臣自今以後、於日本国所居神御子内官家無絶朝貢、(一云)禽獲新羅王詣于海辺、拔王贖助、令匍匐石上、俄而斬之埋沙中、則留一人為新羅宰而還之、然後新羅王妻不知埋夫屍之地、独有誘宰之情、乃詭宰曰、汝当令識埋王屍之處、必篤報之、且吾為汝妻、於是宰信誘言、密告埋屍之處、則王妻与国人共議之殺宰、更出王屍葬於他處、時取宰屍埋于王墓土底、以举王櫬定其上曰、尊卑次第第国当如此、於是天朝聞之、重發震忿、大起軍衆欲頓滅新羅、是以軍船滿海而詣之、是時新羅人悉懼戰恐、則相集共議之、殺王妻以謝罪、又号令三軍神曰、勿殺自服、今既獲財国、亦人自服降、殺之不祥、乃解其縛為飼部、遂

入其国中、封重宝府庫收凶籍文書、即以皇后所杖矛、樹於新羅王之門、為後葉之印也、爰新羅王波沙寐錦、即以微叱已知波珍干岐為質、仍齎金銀彩色及綾羅練絹、載于八十艘、令從官軍、以齎來焉、是以新羅王常以八十船之調貢于日本、其是之緣也、於是高麗、百濟二国王聞新羅收凶籍降於日本国、密令伺其軍勢、則知不可勝得、營外叩和(頭)而歎曰、從今以後永称西蕃、不絶春秋調貢、因以定内官家、是所謂之三韓也、然而新羅国服給、三宅定、亦大神社奉定、而祝志加乃奈具佐、而然皇后從新羅還渡坐、而筑紫檀比宮御坐時、庚辰年十二月戊戌朔辛亥、生誉田皇子、故時人号其產處曰宇瀨、筑紫大神奉定社、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑、時穴門直之祖踐立、津守連祖(×之)手槎足尼、啓于皇后曰、軍三神欲居之地必宜定、則以踐立為祭荒魂之主、仍祠立之於穴門山田邑、爰明年(辛巳)春二月皇后随大神教賜、領群卿及百寮、移於穴門豐浦宮、即収天皇之喪、從海路以向京、時麿坂王、忍熊王聞天皇崩、亦皇后西征并皇子新生曰、今皇后有子、群臣皆從焉、必共議之、立幼主矣、吾等何以為兄從弟乎、為密謀(志)弓、乃詳為天皇作陵、詣播磨與山陵於赤石、仍編船組于淡路嶋、運其嶋石而造之、則每人令取兵而待皇后、於是犬上君祖倉見別与吉師祖將五十狹茅宿禰共隸于麿坂王、因為軍令與東国兵、時麿坂王、忍熊王共出菟餓野而祈狩之曰、若有成事必獲良獸也、二王各居假殿、赤猪忽出登假殿、昨麿坂王殺焉、軍士悉慄、忍熊王謂倉見別曰、是事大恠也、於此吾不可待敵、則引軍更返屯於住吉、乃亦曰有二所者可有論矣、今謂吾獨可天下、欲相闕、時大神誨於皇后賜、忍熊王起帥待、皇后聞起帥以待之、命武内宿禰懷皇子横出南海、泊于木水門、皇后船与大神船、直指難波登、于時皇后之船廻於海中、以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇后、当居御心広田国、即以山背根子之女葉山媛令祭、亦稚日尊誨之曰、吾欲居御心活田長峽国、因以海上五十狹茅令祭、事代主尊誨之曰、祠吾于御心長田国、則令祭之、弟長

媛令祭、亦表筒男中筒男底筒男三軍神誨之曰、吾和魂宜居大御榮大津渟中倉之長岡峽國、便看護往來船、因則以手搓足尼被祭拜矣、難破長柄泊賜、胆駒山嶺登座時、奉寄甘南備山、大神重宣、吾住居地渟名椋長岡玉出峽、時皇后勅、誰人知此地、今令問賜地手搓足尼居住地也、在然者替地賜手搓足尼、可奉寄於大神宣賜時、進手搓足尼啓、今須不賜替地、而隨大神願賜以己家舍地等、奉寄於大神已了、即大神住賜、因如御意、改号住吉國名定大社（×也）、即悅賜宣、吾為皇后神主、懸太極禊齋祀、更不享賜、被拜戴手搓足尼、奉護天皇君夜護昼護矣、同奉護天下國家人民宣賜、時為皇后神主止賜、吾代被奉齋祀手搓足尼神主勅賜、仍奉神主已了、亦大神宣、若雖有手搓足尼等子孫過罪、不被為見決、若在可勘當罪見決時、替吾受其罪、會不令勘決、爰皇后奉兔、自今以後不見決犯罪、勅答亦了、時大神曰、誤此勅旨若被見決、天下宗廟社稷在起災難病患兵乱口舌諸惡難疾疫、盟宣賜、仍件宅地定御社、奉齋主奉鎮祭也、亦皇后之御手物金糸耨利麻桶箭梓一尺鏡四枚劍梓魚塩地等奉寄賜、吾與御大神相住詔賜、御宮定賜、以是改渟中椋長岡玉出峽号住吉、自爾大神座賜处处称住吉、亦大神宣賜、吾天野錦織石川高尾張胆駒甘南備山等神黑木土毛土產菓臚并荷前及錦刀嶋物海藻、以此等物齋祀、隨神教以鎮祭焉、則平得渡海賜、爰忍熊王復引軍退之、到菟道而軍之、皇后南詣紀伊國、会太子於日高、以議皇后及群臣遽欲攻忍熊王、更遷小竹宮、適是時也、昼暗如夜、已經多日、時人曰常夜行也、皇后問紀直祖豐耳曰、是恠何由矣、須問旧老、時有一老父曰、伝聞如是恠謂阿豆那比之罪也、問何謂也、对曰、二社祝者共同穴合葬歟、因以令推問、巷里有一人曰、小竹祝与天野祝共為善友、小竹祝逢病而之死、天野祝血泣曰、吾也生為交友、何死之無同穴乎、則伏屍側而自死、仍合葬焉、盖是乎、乃開墓視之寔也、故更改棺槨、各異处以埋之、則日暉炳、日夜有別、三月丙申朔庚子、武内宿禰依三軍大神教、和珥臣祖武振熊率數萬衆、令擊忍熊王、爰武内宿禰等選精兵、從山背

出之、至菟道以屯河北、忍熊王出營欲戰、時有熊之疑者、為忍熊王軍之先鋒、則欲勸已衆、因以高唱之歌曰『云云有歌』、時武内宿禰令三軍令椎結、因以号令曰、各儲弦藏于髮中、且佩木刀、既而乃举皇后之命、誘忍熊王曰、吾勿貧天下、唯懷劣王從君王者也、豈有距戰耶、願共絕弦捨兵、与連和焉、然則君王登天業、以安席高枕、專制萬機、則顯令軍中悉斷弦解刀、投於河水、忍熊王信其誘言、悉令軍衆解兵投河而斷弦、爰武内宿禰令三軍出儲弦更張、以真刀渡河而進之、忍熊王知被欺、謂倉見別五十狹茅宿禰曰、吾既被欺、令無儲兵、豈可得戰乎、曳兵稍退、武内宿禰出精兵而追之、適遇于逢坂以破、故号其処曰逢坂也、軍衆走之、及于狹狹浪栗林而多斬、於是血流溢栗林、故惡是事、至于今其栗林之菓不進御所也、忍熊逃無所入、則喚五十狹茅宿禰歌曰、「伊裝阿芸、伊佐智須区禰、多摩积波屢、于知能阿會鉄、勾夫菟智能、伊多弓於孺破、珥倍迺利能、介豆岐齊奈」、則共沈瀨田濟而死、時武内宿禰探其屍而不得也、然後數日之出於菟道河、武内宿禰之歌曰、「阿布瀨能瀨、濟多能和多利珥、介豆区苔利、多那伽瀨須疑弓、于呢珥等邏倍菟」、冬十月癸亥朔甲子、群臣尊皇后曰皇太后、是年也太歲辛巳、即為撰政元年、二年壬午冬十一月丁亥朔甲午、葬天皇於河内國長野陵、亦新羅百濟兩國有貢物、貴賤爭、皇后祈大神曰、遣誰人於百濟將檢事虛寔、遣誰人於新羅將問其罪、便大神具指人誨賜、因之遣千熊長彦于新羅責、以荒田別·鹿我別·為我別為將軍、遣百濟國推問二國貢物貴賤、弁定虛寔、即勒兵亦請增兵衆、襲伐新羅國、即百濟王登辟支山盟之、復登古沙山居磐石上、亦盟之曰、若敷草為坐、恐火燒、取木為坐恐為水流、居磐石示長遠、自今以後千秋萬歲、無絕常稱西蕃、春秋朝貢、五十年春二月、荒田別大神共還賜上奏、即皇太后語太子及武内宿禰曰、朕所交親百濟國是大神授賜國也、非由人、故大神大社定所奉齋祀之、或記曰、住吉大神与広田大神成交親、故有御風俗和歌灼然焉、墨江伊賀太浮渡末世、住吉夫古、是即広田社御祭時神宴歌也、

一、御封奉寄初
明石郡封、元所寄進

船木村、為頭船木連宇麻呂戶五烟、進依又田二百代

黑田村、為頭船木連鼠緒戶十烟、進依田百代

辟田村、為頭船木連弓手戶十烟、進依田四百代

穴戶豐浦宮御宇天皇

奉充神戶百廿九烟

石余虱栗宮御宇天皇

奉充神戶五十烟

池辺烈槻宮御宇天皇

奉充神戶廿烟

奉充御田二町二百十步（凡田二町 忍海二百十步）

右大神宣、我田我山潔淨水錦織・石川・針魚川余里令引漑以榊黒木能齊（齋）祀、吾有覬覦謀時、如斯齋詔宣、亦山預石川錦織許呂志奉仕山名所在、号曰兄山天野、橫山錦織、石川葛城、音穗高向、華林二上山等（葛城山元高尾張也）四至（東限大倭国季道葛木高小道忍海刀自家宇智道 限南限木伊国伊都県道側并大河 西限河内泉上鈴鹿下鈴鹿雄浜日禰野公田宮處・志努田公田・三輪里道 北限大阪音穗野公田・陀那波多乃男神女神吾孀坂・川合狭山填田・大村斑熊野谷、）右山河奉寄本記者、昔卷向玉木宮御宇天皇癸酉年春二月庚寅、隨大神願、遣（×使）屋主忍男武雄心命（一云武猪心）所奉寄也、爰武雄心命用此山為幣、居於阿備栢原社齋祀、九年內即申賜難破道龍住山一岳（武猪心命者武內足尼父也、臣八腹等祖也、）御宇天皇御世誅於熊襲二国新羅国等、平賜成西蕃屯倉、丙申年二月丙申、至山門県賜、誅土蜘蛛夏羽・田油津女殺、亦大八嶋内国国県不隨皇命八十梟魁師之類令誅伏賜、大神詔宣賜、大國者天皇任御意、大山者任己意、隨願乞所奉寄賜也、亦誓宣賜、懸雲霰霞為壇宣了、担持此潔淨操嚴坂本黒木土毛土産瓜等、齋祀於吾、如朝霧夕霧起、天

皇君如不離主影、称我和魂奉護夜、天下国家同平安守護、覬覦謀為謀叛時、如斯好齋祀吾、不血刃、必舉足誅、時八咫鳥申云、懸雲霰霞春秋不定七廻飛巡、地名問定申、申点奉定、爰御神兒集懇開佃饗嘗、其地謂懇田原、謂小山田、謂坂本内懇田、亦大神誓約宣詔宣、我山為後代驗宣、差遣吾益海人鳥磨呂・磯鹿海人名草、令汲運海潮置山中、稠於礪破石壺、入潮覆石盖也、以是為後公驗矣、其地塩谷之田云、吾益海人鳥磨呂潮潰落地塩小谷云、多漏落地既成灌潮、其地塩淵云、神兒等自鼓谷如雷鳴出集、開墾佃墾田原小山田宇智乃懇田、羽白熊鷲誅伏得地熊取云、日晚御宿賜地日寢云、依有橫中山、故橫山云、在橫嶺故橫嶺云、嶺東方頭杖立在一處、石川錦織許呂志・忍海刀自等、爭論水別、故俗謂杖立為論義、亦西国見丘在、東国見丘在、皆大神誨天皇賜、令登塩筒老人見国賜丘、亦橫岑冷水潔清盈漲地在、吉野萱野沼・智原萱野沼、此水食聞甚食清水、仍欲御田引漑、思召針魚令堀作溝谷、大石小石針魚堀返水流出、亦在天野水、同堀流水流合地川合云、此山堺地大神誓約詔宣、以我溝水令引漑、我田潤、其獲得稻實、如石川河沙灘石、得其穎充春秋相嘗祭料、天下君民作佃同令引漑、其田實我田實如同、有谷谷水、從源颯颯決下全国、誓約賜、通高向堤樋流灌、其樋地二百代（在河内志紀屯倉高向堤地、樋尻仁謂住吉俾文穿彫付也、）墨江堰在（同屯倉沙古田里十五坪堰地五十代）時倭忍海刀自并率親族等、自於大神曰、別分此水給乞申、仍智原萱野水分少賜、悅其水賜持行、溝穿造而無溢、末地佗、誨大神賜、保木上木葉櫛集、造作土樋水越詔賜、隨御誨遂水通潤田、因其地水分水越云、亦令三輪人鎮守水分、時八咫鳥子等奉寄吾住嶺自斯内鳴、東倭岑、南美会道・竹川、西公田、北玉井・倭川・比太岑道鳴差申、（此從自此内云字下鳥鳴音如訛、）亦難破高津宮御宇天皇誨大神詔宣、以大嶋守令堀紺口溝、同水流開懇上鈴鹿・下鈴鹿・上豐浦四処効原四万頃之田、既成農田膏油、故其地百姓作喰、在寬饒之賀無凶年之患、是大神本願也、石川・針魚河水引漑於

大神御田縁此也、(針魚通此河今不絶為往来)、
胆駒神南備山本記

四至(東限胆駒川龍田公田 南限賀志支利坂山門川白木坂江比須
墓 西限母木里公田鳥坂至 北限饒速日山)

右山本記者、昔依大神本誓所奉寄卷向玉木宮御宇天皇、檀日宮御宇
天皇也、熊襲國・新羅國・辛嶋令服賜、自長柄泊登於胆駒嶺賜宣賜、
齋祀我山木実土毛土産等、天皇天下平奉守、若有荒振梟者、不血刃
拳足誅宣賜、大八嶋國天下奉出日神者船木遠神大田田神也、以此神
造作船二艘(一艘木作 一艘石作)為後代驗納置胆駒山長屋墓石船、
白木坂三枝墓木船、吳唐國大神通渡賜時、平理波足尼命以此山坂木、
迹驚岡神降坐岡齋祀時、恩智神參坐在、仍每年春秋通墨江參、因之
猿往來不絶、此其驗也、(母木里与高安國堺在置諱石、大神此山久誓
賜、草燒火木朽石久遠期、)

長柄船瀬本記

四至(東限高瀬大庭 南限大江 西限輛淵 北限川岸)

右船瀬泊欲遣唐貢調使調物積船舫造泊、天皇念行時、大神訓賜、我
造長柄船瀬進矣口造也、

一、六月御解除開口水門姫神社(在和泉監)

四至(東限東大路 限南神崎 限西海棹及限 限北堺大路)

九月御解除田蓑嶋姫神社(在西成郡)

豐嶋郡城辺山

四至(東限能勢國公田 限南我孫并公田 限西為奈河公田 限

北河辺郡公田)

右杣山河、元昔檀日宮御宇皇后所奉寄供神料杣山河也、元偽賊土蛛
造作斯山上城壘居住、略盜人民、軍大神悉令誅伏、吾杣地領掌賜、
山南在広大野、号意保呂野、山北別在長尾山、山岑長遠、号長尾、
山中有澗水、名塩川、河中涌出塩泉也、豐嶋郡与能勢國中間在斯山
(号城辺山由因土蛛城壘界在、)山中有直道、天皇行幸丹波國還上道

也、頗在効原、百姓開耕、号因田田邑、

一、河辺郡為奈山(別名坂根山)

四至(東限為奈川并公田 限南公田 限西御子代國堺山 限北
公田并羽東國堺)

右杣山河領掌之由、同上解、但河辺・豐嶋兩郡内山惣号為奈山(別
号坂根山、)昔大神誅土蜘蛛、宿寢坂上、仍号坂寢山、山内有宇禰野、
天皇遣采女、令採柏葉、因号采女山(今謂宇禰野訛、)御子代國(今
謂武庫國訛、)

一、為奈河 木河津

右河等領掌縁同上解、但源流者、從有馬郡・能勢國北方深山中出、
東西兩河也、東川名久佐佐川、流通多拔山中、西川名美度奴川、流
通美奴壳乃山中、兩河俱南流速于宇禰野、西南同流合、名号為奈河、
西辺有小野、当城辺山西方名曰軍野、昔大神率軍衆、為擊土蜘蛛坐
地也、因号伊久佐野、河辺昔居山直阿我奈賀、因号阿我奈賀川、今
謂為奈川【就】訛、大神現靈男神人賜、令流連宮城造作料材木、為
行事賜、時斯川居女神欲成妻、亦西方近在武庫川居女神亦欲同思、
兩女神成寵愛之情、而為奈川女懷嫡妻之心、発嫉妬、取大石擲打武
庫川妾神、并其川引取芹草、故為奈川無大石生芹草、武庫川有大石
無芹草、兩河一流合注海、依神威為奈川于今不入不淨物、領掌木津
川等此縁也、

一、荷前二処幣帛浜等本縁

一処、從料戸嶋山為上至于錦刀嶋南為堺、

一処、從宇治川為上至于針間宇刀川為堺、

一処、從三國川尻至于吾君川尻難破浦、

右荷前并幣帛浜等、昔氣長帶姫皇后所奉寄也、爰三韓國調貢從此川
運進、而漂没此川、仍有制不運漕、從吾君川運漕、因茲為幣帛浜、
坐姫神縁是也、社一前

四至(東限頭無江 南限海 西限郡堺 北限公田)

一、神前審神浜（今鯖浜云訛）

四至（限東江尻 南限川 限西為奈河 限北公田）

右、昔氣息帶長姫皇后御宇世、從角鹿發征穴門、討伏熊襲二国時、祈諸神賜遲集、因茲諸神集祈、故神前審神浜奉寄之、

一、奉寄木小嶋・辛嶋・粟嶋・錦刀嶋御厨本緣起

右、昔氣長帶姫皇后御宇世、依大神御願、所奉寄朝食夕食御膳所御厨也、

周芳沙麼魚塩地領本緣

右地、被奉寄於大神本紀者、所奉寄氣帶長足姫皇后也、昔日本武尊年五十二年崩、秋九月壬辰朔丁酉、葬于倭国狹城盾列陵、元年壬申春正月庚寅朔庚子、皇太子即天皇位、秋九月丙戌朔、尊母皇后、曰皇太后、冬十一月乙酉朔、詔群臣曰、朕未逮于弱冠而父王既崩之、乃神靈化白鳥而上天、仰望之情一日勿息、是以冀獲白鳥養之於陵城之池、因以觀其欲慰願情、爰越国貢白鳥四隻、使人宿菟道河辺、時芦髮蒲見別王視其鳥問事由、奪日雖白鳥而燒之則為黑鳥、奪去無礼於先王、乃遣兵率而誅矣、蒲見別則天皇之異母弟也、二月癸未朔戊子、幸角鹿、即興行宮而居之、是（謂筥飯宮、屯倉即月定淡路、）三月、天皇巡狩南國、於是留皇后及百寮、而從駕二三卿大夫輕行、至紀伊国而居于德勒津宮、是時熊襲叛不朝貢、天皇於是將（討脱力）熊襲国、則自德勒津發之浮海而幸於穴門（即日使遣角鹿、勅皇后曰、便從其津發之逢於穴門、夏六月辛巳朔庚寅日、天皇泊于豐浦津、）且皇后從角鹿發而行到淳田門食上時、海鯽魚多聚船傍、皇后以酒灑鯽魚、喰鯽魚酒即醉而悉浮之、時海人多獲其魚而獻曰、聖王所賞之魚焉、故其処魚、每至六月常傾浮如醉、是其緣也、秋七月辛亥朔乙卯、皇后泊於豐浦津、得如意珠於海中、九月興宮室于穴門而居、是穴門豐浦宮云、八年春正月己卯朔壬午、幸筑紫、時崗県主祖熊罽聞天皇之車駕、豫拔取五百枝賢木、以立九尋船之舳、而上枝掛白銅鏡、中枝掛十握劍、下枝掛八尺瓊、參迎于周芳沙麼之浦、而獻魚塩地、因

以奏言、自穴門至向津野大濟為東門、以名籠屋大濟為西門、限没利嶋・阿閉嶋為御筥、割柴嶋為御甌、以逆見海為魚塩地、既而道海路、自山鹿岬廻之入崗浦、到水門御船不得進、則問熊罽曰、朕聞汝熊罽者、有明心參來哉、何船不進、熊罽奏曰、御船所以不得進者非臣罪、是浦口有男女二神、男神曰大倉主、女神曰菟夫罪（羅）媛、必是神心歟、天皇則祈禱之得進賜、從新羅国還賜時、奉寄寄物魚塩地并御櫛笥物等、奉寄賜物色目、因上注已了也、因茲每年彼海入鹿參來、奉游遊是緣也、

一、播磨国賀茂郡椅鹿山領地田畠

合

四至（東限阿知万西岑心坂油位比介坂阿井大路布久呂布山／南限

奈波加佐小童寺五山大道布久呂布山登跡／西限猪子坂牛屋

坂辛国太平利須須保利道多可木庭乎布埼／北限阿知万西岑

堀越栗造瀧河栗作子奈位）

右杣山地等、元船木連宇麻・鼠緒・弓手等遠祖大由田命兒神田田命等所領九万八千余町也、而氣息帶長足姫皇后御宇世所奉寄於大明神已了、自爾以降大神社造宮料領掌年尚矣、爰宇麻等貢獻皇后造船、新羅国征時、依好造船定賜船木・鳥取二姓已了、即乙丑年十二月五日宰頭伎田臣麻、率助道守臣老夫・御目代大伴沃田連麻呂等、尋大神御跡奉寄定、於是船木宇麻・同鼠緒・同弓手等齊（齋）護御神山、時闌入公民等切取神山水、步穢山地時、大神穢宣賜、放神火杣山燒亡賜、三箇年内木土共燒燃不滅火、而燃時騰登烟炎灰塵滿国家、炎烟炭甚盛、闢塞人民侘僚、驚公家賜、令卜占天皇賜、大神御崇占申、因之公家人民等自爾以後、大神杣山地等不可步穢切【死】犯宣詔賜、重大神如旧跡、尋大神道步、定四至堺奉寄也、

船木等本記

右昔奉出日神宇麻・鼠緒・弓手等遠祖大由田命兒神田田命奉出日、即所領此杣山也、而氣息帶長足姫皇后時誅伏熊襲二国并新羅国征時、

大田田命・神田田命伐取己所領山岑樹而造船三艘、本造船者乘皇后并大神臣八腹、次中腹赤造船者乘日御子等、次末造船御子等并大田田命・神田田命共乘渡征、即有大幸、祈禱天神地祇在驗、大幸還上賜、其御船令奉齋祀武內宿禰、志麻社・靜火社・伊達社、此三前神也、即田田命子神田田命子神背都比古命、此神者天壳移乃命兒富止比女乃命娶生兒、先者伊瀨川比古乃命、此神者伊瀨玉移比古女乃命娶坐此伊西國船木在、又次子坐木西川比古命、此神葛城阿佐川麻之伊刀比女乃命娶坐生兒、田田根足尼命、此神古斯國君坐兒止移奈比女乃命娶坐生兒乎川女乃命、又次馬手乃命、又次口以乃命、此三柱者古斯乃國君等在、牟賀足尼命、此神者嶋東乃片加加奈比女乎娶坐(弓)坐兒、先兒女郎女、次田乃古乃連、次野乃古連、次尾乃連、次草古乃連、兄在兒女郎女者神直腹娶入、次田乃古連、和加倭根子意保比比乃命乃王子彦太忍信命兒葛木(乃)志志見(乃)与利木田(乃)忍海部(乃)刀自(乎)娶坐(弓)生兒古利比女、次久比古、次野乃古連、此者高(乃)小道奈比女娶(岐)、更田田根足尼乃命(乃)時(仁)、大波富不利相久波利(支)、息長帶比女乃御時(爾)大八嶋國(乎)事定了、彼時奉齋大禰宜汗麻比止內足尼命、又津守遠祖折羽足尼子手槎足尼命、又船木遠祖田田(根脱力)足尼命、此三柱相交矣、自卷向玉木宮大八嶋知食御世至于卷向日代宮大八嶋食知氣帶長足姬比古御世二世者、意弥那宜多命(乃)兒意富弥多足尼仕奉(津守宿禰遠祖也)於是船司津司任賜、又処処船木連被賜、(但波國、粟國、伊勢國、針間國、周芳國)右五箇國從爾時船津官(名)負仕奉、穴戶豐浦宮大八嶋國所知食氣長足帶比古皇后御世、熊襲二國(乎)平賜(支)、斯時(仁)筑紫國檀日宮天皇坐(弓)水波方國(乎)平賜氣帶長足比女乃命、此二所天皇御世折羽足尼乃兒多毛禰足尼仕奉(支)、於是住吉坐大御神之前(乎)任而祭治來在(支)、自其時大神(乃)前(乎)隨神之御願令忌、一帶須比女(乃)命住吉大神船辺坐奉(弓)、辛國(仁)渡坐(弓)方定進退鎮給(弓)、

辛嶋惠我須須己里(乎)召(弓)、即還行幸坐、自筑紫難波長柄(仁)依坐(弓)大神御言以宣(波/久)、吾者玉野國有大垂海、小垂海等仁祀所拜(礼牟/止)宣(弓)、胆駒(乃)嶺(仁)結行(支)、即是(乃)人等令奉仕給(弓)、奉於大御社者也、此者弥麻婦入子之命(止)者大日日命御子也、志貴御豆垣宮御宇天皇(六十八年以戊寅年崩、葬山辺上陵)此御時天都社國都社定始賜、山(乃)右門開香(乃)東日縱、南日橫、男(乃)御調女(乃)手末御調(乎)定賜而、初國所知食之天皇也、活目入彦命者、弥麻婦天皇子卷向玉木宮大八嶋國御宇五十三年辛未崩、菅原伏美野中陵、天社者伊勢大神・住吉大神、

一、明石郡魚次浜一処
四至(東限大久保尻限 南限海棹及際 西限歌見江尻限 北限大路)

右自卷向玉木宮大八嶋國所知食活目天皇、檀日宮氣帶長足姬皇后御世、此二御世平伏熊襲并新羅國訖賜、還上賜大神奉鎮於木國藤代嶺時、荒振神令誅服賜、宋背鳴矢射立為堺、我欲居住処、如向大屋、渡住於針間國、即切大藤浮海、盟宣賜、斯藤流著処、將鎮祀我宣時、流著此浜浦、故号藤江、自明石川內上神手山下神手山、至于大見小岸、為悉神地奉寄定、其時意弥那宜多命兒大御田足尼、津守宿禰遠祖奉仕、於是時船司・津司初任賜(支)、又処処船木姓賜(支)、一、賀胡郡阿閑津浜一処

四至(東限餘郷 南限海棹及 西限大湖尻 北限大路)

右同皇后御世大神平伏熊襲二國、從新羅國還上賜時、似鹿兒滿海上浮漕來、見人皆奇異云、彼何物、問似鹿兒物也、近寄來著於筑志崎見、數十餘人、有角着鹿皮、着衣袴棍取水手人、大神舟漕持來也、故其地号鹿兒浜、皇后奉饗大神、以酒塩入於魚奉賜、時号阿閑津奉寄定賜(支)、其時同奉仕津守宿禰遠祖賜(支)、皇后合掌誓宣、奉寄吾山河海種種物等、若有妨誤之人者、蒙天地災、遇痛患、絕滅子

孫、天下凶乱矣、

一、八神男八神女奉供本記

右卷向玉木宮御宇天皇御世、筑紫後国有僵樹、長九百七十丈、蹈此木往來、時人歌曰、「安佐志毛乃、弥概乃佐遠麼(志)、魔幣菟木弥、伊和多良秀暮、弥開能佐遠麼志云云」、仍天皇木名問賜、歷木(止)申、昔立時朝日暉隱杵嶋山、夕暉覆阿蘇山奏、時天皇神木宣、宜号御木国、八女隰藤山(仁)水沼県主猿大海奏言、有女神、名曰八神女津媛、常居山中奏齊(齋)於大神、由此皇后以八大夫八美女奉齋、自神主(支)、仍相伝也、又膳夫等遺蓋、其志蓋処曰浮羽、今謂的者訛也、筑紫俗蓋曰浮羽也、仍手槎宿禰子孫八神男八神女供奉、一、天平盆奉本記

右大神、昔奉誨皇后詔賜(久)、我(乎/波)天香个山社中取埴土、造作天平盆・八十盆奉齋祀、又有覬覦之謀時(仁/毛)、如此齋祀、必服(倍/牟)詔賜、古海人老父著田蓑笠箴、遣醜者土取、以斯奉齋祀大神、此即為賀悉利祝、古海人等也、斯造天平盆奉幣時御歌本記

坂本葉仁、余布止里志豆豆、多賀余仁賀、賀称(弥)乃美賀保遠、伊波比會(米脱)芸牟

右御歌奉太幣輕皇子賜(志)御歌也、時東一大殿押開扉(豆)、大神表美麗貝人、取白笏叩闕和歌、「宇倍麼佐仁、岐美波志良末世、賀美呂岐乃、比佐志岐余余里、伊波比會女豆岐」、縱容交親、具在支、吾和魂常厝皇身常磐堅磐奉守、一切衆生望願成就円滿、故吾万世住此地矣、

長門国豊浦郡齋宮

右社、氣帶長足皇后祈宮、

筑前国那珂郡住吉荒魂社(三前)

右社者、擊熊襲二国新羅国時、遣唐使將御社祭大宰府例供也、并能護嶋為御厨所領、從長門国西万九国内別小嶋皆所領御厨已了、

志賀社、(擊脱)新羅時御船挾抄、

大唐御社 新羅社 鎮服社也、

紀伊国伊都郡丹生川上社(天手力男意氣/統流住吉大神)

右毒滿九国領不令貢調時、文忌寸材滿、調伏祈請祭御神社、子孫伝為氏神、

一、猪加志利乃神前二前、一名為婆天利神(元大神居坐為唐飯所聞食地、)

右大神者、難波高津宮御宇天皇之御世天皇皇子波多毘若郎女之御夢奉喻覺(良/久)、吾者住吉大神之御魂(曾止)号為婆天利神、亦猪加志利之神(止)託給(支)、仍神主津守宿禰令齋祀、祝(仁)為加志利津守連等奉仕、奉充神戶二畑・神田七段百四十四步、即在西成郡、以前大神所顯坐處、并御名注顯如右、

右大神飛鳥板蓋宮御宇天皇御世始(仁)夏五月庚午宣賜(久)、為巡檢吾山(止)宣賜(豆)、即乘御馬賜、著油笠(豆)賜、兄乃山(余利)葛城嶺・胆駒山馳到(利)賜(豆)、以午時住吉(仁)馳還御座(豆)聞食御飯酒、即阿閑・魚次・椅鹿山御覽、還御座(支)、仍件山在神道也、

以前神代記、己未年秋七月朔丙子注進大山下右大弁津守連吉祥、以大宝二年壬寅八月廿七日壬辰定給引勘、

奉充御田三町四段百四十步

凡田二町 忍海二百十步

菟原郡一町三段二百九十步(元名雄伴国)

御封被寄三百四十四戸(但一百戸田一百五十町、在筑前国、)

右御封穴戸豊浦宮御宇天皇并石寸阪栗宮・池辺並槻宮・奈良宮等御宇天皇御世被奉寄也、

以前、御大神顯座神代記、引勘己未年七月朔丙子注進大山下右大辨津守連吉祥、去以大宝二年壬寅八月廿七日壬辰定給本縁起等、依宣旨具勘注、所言上如件、謹以解、

天平三年七月五日 神主從八位下津守宿禰「嶋麻呂」

遣唐使神主正六位上津守宿禰「客人」

件神代記肆通之中、進官一通、社納一通、氏納、一門一通二門一通、後胤各秘藏、妄不可伝見、努力、如前起請之、但客人家料也、
「嶋麻呂」

「客人」

為後代驗請判、津守宿禰「屋主」

「郡判依謂之、

擬大領外正六位下勳十一等津守宿禰「和麻呂」擬主帳土師「豊繼」
少領外從八位上津守宿禰「淨山」

「職判依郡判、

從五位下行大進小野朝臣「沢守」

正六位上行少進葛木「氷魚麻呂」

正六位下行少屬勳十一等物部首

從七位上行少屬堅部使主

延曆八年八月廿七日

○字面一面ニ「住吉神印」ヲ踏ス。

482、《書籍頁〇〇五》

○補三〇 三河守藤原有政書狀○東大寺文書四ノ五十四

(端裏)「參河守消息」

彼庄(紀伊木本庄)へハ二月月上旬農業沙汰へを仕候、今月之内官物沙汰へハ仕候、ころ吉候へめ、五之尚御下文可給候、於子細者、兼頼委令申了、可令尋、恐惶頓首謹言、

(長治元年カ) 正月十六日

參河守「有政」

進上 東大寺別当法眼御房

483、《書籍頁〇一一五》

○補五二 平氏女去文○九条家文書

券相副新券文、限永年所進上信濃守殿之如件、以解、

大治三年六月 日 平(花押)

平氏

後家内藏

しなの、かうの殿にやちたてまつりおわりぬ、おなし人にたてまつりおはる、

484、《書籍頁〇一三一》

○補六八 僧西念極樂願往生歌○京都市下京区松原通大和大路東入小松町四七五出土・東京国立博物館所藏

敬白

極樂願往生歌

イロイロノ花ヲツミテハ西方ノミタニソナヘテツユノミヲクイ
ロクロクニメクリアフトモノリノミチタエテオコナヘサカノコロ
ハカナシヤコノヨノコトヲイソクテミニノリノミチヲシラヌワカミハ
ニハカニモコナヒタツトアタナラシタ、コクラクノコトヲオモフニ
ホトモナクヨルヒルミルニアカヌカナ子テモサメテモサカミタノカホ
ヘシトサハアタナルツユノヨロツヨヨコノミヲステ、ノリヲコソオモ
ヘ
トシヲヘテミタノ上トヲ子カフミハヒトヨリサキニコセヤカナフト
チキリヲクミタノ上トノ西ヨリハムカヘテミセヨコクラクノミチ
リヲシリテオモフネカヒノタカハスハイ子子ムアマタタノマル、ナリ
ヌルコトハタ、コクラクノコヒシサニユメニミムトテヲキモアカラヌ
ルリノタマカケテカ、ヤクコクラクノホトケノスカタユメニノミ、ル
ヲトニキ、コ、ロヲツクスコクラクノ子カヒタカフナツユノワカミヲ
ワタツミノソノイロクツミナ、カラスクハムコトヲ子カフアマミタワ
カスカナルトコロトキケトコクラクヲ子カフワカミハチカクイタルカ

ヨルヒルモコ、ロニカクルコクラクノイケノミキハニワレヲスマセヨ
タソ子ツルカヒモアルカナ西方ノ上トノナカニスクレタルミタ
レイナラヌヲトヲシテコソヨモスカラコクラクミヨトユメニツケツレ
ソテヌレテノコヘハクチヌヒヲソヘテホトケノスカタミテモアカヌソ
ツレモナキヒトノコ、ロヲミルカラニイトフワカミモツユニタトヘツ
子テモマタヲキテハニシニムカヒキテコクラク子カフワレカシノヒ子
ナニコトモイハレサリケリツミノミハツユノワカミヲナケクワサカナ
ラセチ鬼ノヲソレハワレニアラシカシサカノミマヘニイソクコ、ロラ
ムラサキノクモノタナヒクオホソラニサムカクスルハタレムカフラム
ウシヤウシイトヘヤイトヘカリソメノカリノヤトリヲイツカワカレウ
キテモタチワカミヲステテコクラクノカタトオモヘハミチヲノミトキ
ノトカニハサラニオモフナウロノヤトイソキテユカムアミタフノミノ
オモヒテモナキフルサトソサカミタモコタヒナミセソフルノスミカオ
クラケレトサカノヒカリノアカリニテノリノミチニハマトハテソユク
ヤスラカニユクヘキミチモヲロカニテノリヲ子カハヌミトハシラスヤ
マトフトモナモアミタフトトナヘテハイノチヲハラハミチヒケヨエマ
ケムリタツトコロヲトヘハチクタクノムミタコソワレヲミチヒケ
フカクタ、アサユフ子カフコクラクノミタノ上トハミユヤトソトフ
コクラクハココロカラニテキラハレスクチニアミタフタツナフシトコ
エラフトモミニハフサウソナハレハツヒニハタレモホトケトソミエ
テヲスリテニシニムカヘハサカミタモイソキテヨトソユメトシメシテ
アチキナキヨトハシラスヤカリノヤトナカキスミカトアタニオモフア
サツキヤミクラキホトタニワヒシキニマシテヨミチヲオモフカナシサ
キ、シヨリノリノミチコソワスラレ子オモフアマリニワレヒトリナキ
ユメニタニミマクホシサニコクラクノヨルヒルヌレハマトロメハミユ
メモアハスカリノヤトリヲウチステイツチヘユカムツケヨカシユメ
ミヲステテノリヲモトムルトモカラハツヒニハミタノコクラクニスミ
シテノヤマナケキテコユトキケトミナメニミヌヒトノコ、ロヲロカシ

エニウツシ子カヘヤ子カヘホトケタチニシヘヤニシヘアケヨナモコエ
ヒスカシノココロヲロカノヒトハミナタ、コクラクヲノチノヨニコヒ
モユルヒヲアツシトオモフヒトハミナムナシキカラハヒトナルミモ
セチニタ、コクラク子カフワレナレハヲハラムトキハホトケキタラセ
スヘテミナホトケノコトヲオモフヒトツヒニハノリノミチニマトハス
別和歌
ヒマモナクコ、ロニカクルコクラクノナヲイソカシキミチヲシラヘ□
敬白

極樂願往生和歌序云、

蓋聞、和歌者仏神道哀後世菩提叶給道也、其三十一字之和歌数四十
八行注連、偏後世菩提懸意、家中往生之地穴儲、命終入滅与□宿、
仰願者安置隨身若干仏経王等之中、猶□□□三千仏九万七千八百十
九基銀塔同法花□(妙力)典仁王経等、各不誤本撰願而極□浄土令
往生給、数年之仏経供養之目錄、前条々記別畢、然則閻魔之庁善法
□記札文置相違哉乎、敬白、

康治元年壬戌六月廿一日壬午日□□

485、《書籍頁〇一三八》

〇補七五 賀茂社禰宜鴨季繼請文〇東大寺文書三ノ十

(端裏書)「長洲大造紙内也、一枚 禰宜季繼請文」

御消息旨委細承候了、抑新宮奉祝事、当社御領御庄々并御厨等(二)
新宮奉祝事、往古例候、而当御厨一所、未奉祝新宮、依事次、任本
社下知、奉祝候事也、又神領大物浜内、号無主荒野、始令企虜掠給
之之条、猶申下宣旨之甲斐不候事也、不用宣旨、木憚神威之躰(二)
候、自往古件浜者、為神領之内、供祭漁網之要路、神人往還之至用
也、而令称無主荒野給之条、甚以其謂不候、於寺家充文者、自本不
承引候事也、别当御上道之時、可申子細候、奉相貴殿、不可申論御
社家与寺家之間沙汰(二)候(裏)「故」寔年来不背仰、随分申承

候也、

故先日度々令申子細候了、雖然無御承引、季繼之時始為御厨令致妨給之条、本意不候、付内外其憚候、不能申左右、忝々不具謹言、

(久安四年力)十一月廿三日 禰宜鴨季繼(請文)

486、《書籍頁〇一四〇》

〇補七八 中臣祐重解〇千鳥家文書

□□位上中臣祐重解 申請 禰定殿下 政所裁事

請〇殊蒙 鴻恩、早任正預祐房讓申文狀、補任若宮神主職子細狀、

超越例

故信清三男有忠超越嫡男信親二男有親任神官、

右、謹檢案内、若宮神主職者親父故祐房多年之所帶也、由緒有限、祐房子息之外、輒不可成濫望者也、其故何者、□□給事、神勢令然、祐房忝蒙 禰定殿下仰、殊致潔齋令祈請申之間、□有示現之告、去長承年中所令祝別社給□、仍造宮雜事、□多功力、為祐房之沙汰、終造畢之功、即被相□□天下安穩御一家繁昌焉、祐房又無過怠、而及八旬之齡、既罷過畢、爰依為祐房之子息、以去年十月三日、件職讓祐重給畢、□□其讓申文祐房存生之時、長者殿下令進覽之、但二男祐政讓給事、去仁平元年之比也、雖而神明不令然給之由、親父□房申(豆)、改讓祐重給事顯然也、是非他、偏神□□応故歟、□神事勤勞十七箇年、敢無懈怠者、望請 鴻恩、早依神事勤厚、且任後讓申文狀、被補若宮神主職者、將仰 正道之貴、弥致御祈禱之勤矣、仍勤在狀、言上如件、

仁平三年四月八日正□位上中臣祐重

487、《書籍頁〇一五〇》 裏書

〇補八七 平姉子田地壳券〇国会図書館所蔵文書

沽却 壳買新券文事

合七段者

在山辺郡十三条五里九坪(西辺)

四至(限東中垣 限北公田/限西中垣 限南公田)

右領田元者、平姉子先祖相伝之所領也、而今依有要用、限価直米肆拾七斛壳与興福寺住僧長海事既畢、雖有本券、依有残地、不能副渡、於有進官三段者、所附西辺也、為無後日之相論、勒壳買之署名、所立新券文之狀如件、

保元二年卯月十九日壳人平氏(たいらのあねのこ)

壳人僧

(裏「合七段」ノアタリ)「自東五段目一反者字五郎沽却了、(磨実名安繼)

自東六七八段目參段者処分藤原仲子了、(字川髪)

於西端式段者処分藤原牟尼丸了、

(裏本文ノアタリ)「此内於參段進官者、雖被付西辺、支配參人之日、

壹町(仁)平等被付畢、追段別可勤件役、更不可異論之 狀如件、

此之内西六段(二八)兵庫庄三段在之、平等(三)支配之間、東

□段(二八)東長柄進官二段在之、平等(三)四段(三)支配之、

仍而計六段也、

488、《書籍頁〇一五二》

〇補九一 中原貞兼書狀〇東大寺文書四ノ四十

所申給駄明曉中借預御候、已上、

条々事畏承候了、先不見參仕候(ハ)、為貞兼にも極遺恨に候へとも、此御使仰給之旨、委に承候へハ存候へ、

御領勘会事畏承候了、其中御仏聖田檢注事、早可差進国使候也、

彼御書下事承候了、子細令申御使候了、恐々謹言、

九月廿七日

貞兼(中原)

489、《書籍頁〇一五二》

〇補九二 中原貞兼書狀〇東大寺文書四ノ三十八

伝馬五疋所悦思給候也、如本二疋をは、自薬師寺可返上候也、小東御庄

思定候、如仰下来廿九日可差進之由、謹承候了、如仰可令沙汰候也、任坪付勘判もめ二も候なん、早可問先任之由仰、於坪□は少見地多候云々、

惣任事、京都にて何様に申切仕たるにか候らん、ついににはおろかに候ましき事候、恐々謹言、

九月廿八日 貞兼

490、《書籍頁〇一五三》

〇補九三 中原貞兼書狀〇東大寺文書四ノ四十

小東御庄御檢注料国使、謹以差進之、昨日(ハ)不令渡御之由を承候て、不進候也、郡司(ハ)定入候敷、然者早自其可遣□(急力)非当御庄仏聖免御檢注可候由承候了、いかにも随仰可沙汰候也、恐々謹言、

九月晦日 刑部録貞兼

491、《書籍頁〇一五四》

〇補九六 藤原近光田地売券〇九条家文書

(端裏書)「あやのこうちよりはきた、にしのれさうよりはひ□(ん)かし、あやのこうちもてにすのなるさいくのす□ものうりけんなり、又そのうりたまふ人は、や□もにしのはうさうのねうはう」
「たしかにうりわたしつ、のちのためにかきわたすものな□(り)、
ふちはらのうち(花押)」

沽却 地売処事

合参拾壹丈式尺伍寸(口南北式丈伍尺 奥東西拾式丈伍尺)

(花押2)

在自樋口北烏丸西(烏丸面 自中央南)

右地者、会合越後守藤原邦綱朝□所相博樋口高倉地也、其後敢無□他妨、而依有要用、限直能米佰拾□石伍斗、所沽却渡左衛門府生橋安□也、於本券文者、越後守宅焼亡之時、□(焼)失畢、仍放券壹枚所副渡也、兼又為後代立新券文、沽却渡之状、如件、

永曆元年十月五日(花押)〇補九五花押1二同ジ、

藤原近光(花押2)

492、《書籍頁〇一六四》

〇補一〇八 某書狀〇勸修寺家本永昌記嘉承二年五月卷裏文書

大記(藤原為房記)天仁・天永之間、先少今日可申請候、此記(ハ)御方御秘藏之儀、一切不可候物也、猶此之外分、早々可申請分候間、忽達候也、謹言、

仰旨返々恐悦承候了、大記延久以後早可進覽候、永久候之由其仰候、
先一卷進候、御本(に)可令比校御候、御本無相違候者、可存証本之由候、天永先申請(て)可見給候也、信經記五卷候、長徳・長保之比記候、誠雖其興候、已流布之物、無念候敷、先比大記・宰記御沙汰可急候也、次又小右記(在此)殿御記大切々々候、件(在)御記等長元・永承・治暦・延久御記等候也、抑撰集秘記一部(四十卷)大府卿(為房卿)撰候(て)進白川院候、是切統數家秘記、殊以今案添□(之)候、高名記候、有御覽御志者先可□□
〇二八八〇、二八八一、三三六〇号によるに保元—永萬頃なるべし。

493、《書籍頁〇一六四》

〇補一〇九 僧観慶垣内処分状〇花園文書

処分帳事

合一所者

金剛峯寺御庄内在西垣内巻所者、

四至（限東加大口中ハニ加ツ加下門口ナリ、南河口／限西ヲ松
ウルシノ木定東下□□キノ木一本□□一本／限北ユノ木、ア
子ト二人シテトルヘシ、

右、件垣内者、僧觀慶（加）相伝私領也、而沙弥生老（ニ）宛行所
也、仍為後□□汰、放券文如件、以解、

仁安三年（戊子）歲十一月五日 僧觀慶（花押）

493、《書籍頁〇一七〇》

〇補一一四 尼妙法田地売券〇大東急記念文庫文書

売渡 尼妙法田地事

合巻段者（字養生）

在添上郡京南七条一里十二坪ノ内

四至（限東類地 限南畔／限西他領 限北河）

右、件田地者、依行範之遺言、範秀（爾）処分与所也、而範秀死去
仕畢、仍尼妙法相伝之、而今依有要用、限直米拾石（寺納）宇治中
子（爾）永沽却事畢、但於本券者、依有類地、不能副渡、故本券之
面槪以毀畢、仍為後代証文、立新券文之状如件、

嘉応三年十二月廿二日 尼（花押）

僧（花押）

中臣（花押）

〇「東大寺印」六丁あり。

494、《書籍頁〇一七一》

〇補一一六 僧某置文案〇九条家文書

たれくも経事能々可致沙汰也、御堂沙汰、穴賢く、

ひとせおのくにかきわかちてたひてしかとも、大夫はかなくな
りにき、そのところとんもいつれも、もとよりも申をきたるやうに、
こせんなにことをも、いきをハせんかきりハ、しりて、のちハはか
らひて、ひめきミにもたへかし、

承安元年十月廿九日

僧（在判）

〇次号左少将某処分状案と連券をなす、

495、《書籍頁〇一七一》

〇補一一七 左少将某処分状案〇九条家文書

□□時房状（此状奥有房朝臣以自筆注子細加判、）

□□死去之後、以彼分讓妻室状

処分 庄園京醍醐地田畠等事

合

一、田原御庄（在播摩国）八条院御領

一、泉村（多紀御庄内）

一、大炊御門地内（辰巳角八戸主）

一、醍醐堂領内（戌亥角八段、字高柿畠也、）

一、石田々畠林等（在山城国、）

右件所々、所処分散位時房也、各文書公驗等所副渡也、本寺本所年
貢公事無懈怠、謂合少将可令沙汰也、田原御庄可令執行之様、具注
別紙者也、槪不【用】背其状、可被致沙汰也、若背件状者、定御年
貢熊野両山御油及懈怠歟、

かくて大夫にたまひたりけれとん、いふかたなくさきたちまい
らせ給しかハ、これハみなこせんしらせをハしますへきよし、
ことの御やまゐのをり、へちのかみに、かんなにてかきかせ
おハしましたり、その定に給へし、

承安二年二月廿八日 左少将（在判）

○前号僧某置文と連券をなす。

秦国清（花押）

496、《書籍頁〇一七八》

○補一二九 大法印某讓狀○紀伊国古文書纂那賀郡宮村中氏藏
□□渡紀伊国伊都郡志賀郷内之くるみ谷之名分田事

字火口古河合半四至

東限々々 南限沼津 西限明白也 北限大川

一壺町六十分、四至明白也、

合式百四十分ハ寺兔田也、

有平井田一段（并）屋敷四至（東限川なか／南溝／西谷／北
大川）

合四所者、

右件所者、淨昭之相伝之所也、能陣（二）渡彼子細、三郎が許文を
あてかへれ、比庄司殿より能陣可有之、淨昭子（カ）たふ所のか
わり也、為後日沙汰、本券依有類地、改新券文之状如件、

治承三年（己亥）四月十五日 下司所
大法師（判）

三郎女之嫡女嫡男国覓万歳

497、《書籍頁〇一七九》

○補一三〇 秦国清家地売券○土岐武次氏所藏文書
秦国清謹辞沽却私領地壺処事

合壺処（口壺丈式尺七寸／奥捌丈）

在自四条南自町東、町面也、

右件地者、自秦国清之手、限価直、源光清所買領也、而依有直要用、
上品八丈絹陸拾疋、限永年源光清所売渡実也、仍為後日沙汰、新券
（二）相副本券、所沽却如件、

治承四年五月九日

498、《書籍頁〇一七九》

○補一三一 宇治中子田地売券○大東急記念文庫文書
沽却 私領田事

合式段式佰肆拾步者（字養生者）

在大和国添上郡七条一里十二坪之内

四至（在本券面、）

右件田者、僧顯恩并尼妙法自兩人之手、宇治中子相博（伝カ）領掌
年尚、雖経年序、更以無他妨、而依有直米要用、現米限拾陸斛（本
斗定、）元興寺惣撰大五師有嚴（爾）、相副本公驗、沽却永年作手畢、
但於加地子者、西金堂修二月六番御僧供料可被弁進之也、仍為後代
証驗、祿新券、放券文如件、

治承四年五月十三日 売人宇治中子

（略押）

○東大寺印数丁を踏す

499、《書籍頁〇一八〇》

○補一三二 源頼綱請文○嚴島野坂文書
（端裏書）「源頼綱カキ物、但不分明候」

以先々可令申候之处□□存思給候之間、自然□□□

抑三田并栗屋郷之□□御給之由承候事如何、於彼兩郷者、往古之
地主高田藤大夫依□□嫡子、為故源大夫（遠）養子（之天）被讓与、
傍証文等意趣者、且為荒野（志天）、所当官物負累未進并私負物相繼
事巨多也、公私之使（に）被責勘、且現世（爾者）為被養育、後世
（爾者）為被報恩、□故源大夫諸証也、併被讓与事顯然也、仍為遂
藤大夫之意趣、或令出家修善根、或与世路之相折令着衣裝了、或郷
未進私負物（遠）弁候了、加之死去之後（ハ）、迄至于今、無懈怠送

忌日報恩(天)、遂彼意趣來候者也、而不慮之外御知行之由承之、何
樣可候事哉、三田郷者為止、去春春木之前司任中(爾)、申請別結解
之旨(天)、依被別片端(天)、太政入道(平清盛)殿(爾)、此子細
(遠)為令言上、貴殿(与)源大夫互相会釈御(天)、三田并風早之
文書等為披見、令進文書之後、相待慶候處、不其左右候之間、可返
給件文書之由、源大夫雖令申、自然不返給候(而)、御返事顯然候、
附件文書(天)御沙汰候敷、又付他文書御沙汰候敷、尤以不審候事
也、但令領掌故源大夫(天)迄至卅余年、万雜公事無懈怠令勤仕候
了、其之間無指他妨(志天)、源大夫死去了、然則此三四年之間、
頼綱同相繼(天)、語居所從(天)、令勤仕万雜事、為宮仕企京上候
事者、以此兩郷勵微力、奔宮仕候之處、被抑召候之条、不為方候事
也、若依人之讒言(の)御我趣敷、若件所之当用(の)御所望候敷、
尤可承子細候之旨、所存候也、設如此之事、雖他之所行候、貴殿(与)
令加御制止、可御芳心候敷、若雖其理候、貴殿(の)御所知(者)
其員候、不可限于是、頼綱(者)此兩郷許也、敢不他領候、不便■
(爾)者不思食敷、謂哉、相伝譜代之住所非一所、併可押召候哉、
尤可御還迹候也、恐々謹言、

九月七日

源頼綱(請文)

神主殿(佐伯景弘力)(參)

(端裏)「可部源三郎書狀(目六外)(治承四年九月)」

逐申

乍存阿党御氣色之間、如此之事、令申候之条、雖恐思給候、
若依人之讒言、如此あやにくの御沙汰者候敷(と)存思給候
(天)所令申候也、重恐々、

500、《書籍頁〇一八一》

〇補一三三 掃部頭某請文〇嚴島野坂文書

(端裏書)「壬生御庄御下文之事(有之狀)」年号月日無之

壬生御庄御下文令請獻之、

前對馬守金田御庄請文令進上候(ひ寸)、當官御供米如先例可沙汰進
給之由候也、恐□□

正月廿七日

掃部頭正□□

501、《書籍頁〇一八三》

〇補一三五 僧宗玄田地売券〇九条家文書

謹辭 沽渡名田券文書

合式段者(在穴田里卅坪中(東繩本二段置次二段□□)但稻荷
中社領田也、)

右件田者、僧宗玄先祖相伝領□(也力)、雖然有直要用、限米拾肆斛
(三)、限永年藤井吉貞(二)売渡處也、仍本券相副新券文造、為後
□(日力)沙汰、注狀以解、

養和元年十二月廿五日僧宗玄(花押)

太郎讚岐国友(花押)

二郎同国貞(略押)

「於件田、自今已後、全以公事雜事不可有、仍上西門女院□作手
長加判、日前行正(花押)」

(裏、日付ノアタリ)「穴田里卅坪東綱本二反次二反者、敵(嫡)

□二男、二人別所處分田也、依本券□一紙、加裏書兩判者也、

此田内(壹段敵(嫡)女分(花押)／壹段二男分(花押)」

502、《書籍頁〇一八四》

〇補一三八 宗近置文案〇紀伊国古文書纂那賀郡小畑村八幡宮

神主葛來氏藏

定置 檢知職事

右件子細者、雖嫡子宗近相伝(ス)、若無宗近子孫、渡他氏者、末宗
子孫(三)可知彼檢知職(ヲ)者、為後日、加庄官嫡子助判者也、

仍為後日証文、置与之状如件、

寿永二年（癸卯）二月二日 嫡子宗近（判）

藤原宗貞（判）

公文日置（判）

御庄司紀（判）

503、《書籍頁〇一八九》

〇補一五二 源頼朝書狀〇長沼賢海氏所藏

其事と候はねは、自此も不令申候之処、盛俊下向、委承候了、そのかみの事、全不令思忘候、なしかは不令申候とても、おろかなること候へき、上洛など仕て候はん時、見参に何事も可申承候也、はては大藏卿の許へ御昇進事、所令申候也、一行進覽候也、兼又筑紫（二）肥前国（二）晴氣領と申候ところ一所、為御志所令進候也、これ者ものかましく雖不令存候、為志令進候也、委細ハ盛俊に令申候了、謹言、

（元暦二年カ）八月五日

（花押）（頼朝）

前尾張少将（藤原隆頼）殿御返事

504、《書籍頁〇一八九》

〇補一五三 源頼朝書狀〇尊経閣東福寺文書

多仁庄内田布施方の領家被示遣て候三輪十郎重光事、他郷ハさも候ハぬに、止当郷地頭候者、已似偏頗候、又他郷の領家も定被齎存候歟、然者無左右不改易候、仍慥可給領家命、自今以後、若違背之由有其聞之時ハ、可停止地頭之由、先所成進下文候也、謹言、

三月一日

（花押）（頼朝）

別当房御返事

505、《書籍頁〇一九〇》

〇補一五四 源頼朝書狀〇荒卷福吉氏所藏文書

せんさいの太郎か事、いたくなけき申候ひしかハ、あまりの所一所もあてたひて、めしつかはせ給へきよし申候了、御返事ニ、せんさいと申候所たふへきよしおほせ候ひしかハ、しんめうのよし申候了、それにいぬまをこそしり候はめと申候て、おさへさたし候らん事、返返ふんひんに候、それをもおんしめゆきて、つけられ給候こそ、しんめうの事にて候へ、せんさいのかうをたふて候也、このよしを又申下候へく候也、いつこに候とん、こめいおそむき候はてこそ、しり候へきに候へ、ほしきまゝに申候らん、ふんひんに候事也、以上、

八月十日

（花押）（頼朝）

【第十卷、新補】

506、《書籍頁〇一九五》

〇補一六六 寂楽寺宝蔵物紛失状案〇高野山文書

（端裏）「阿豆河庄立券」

長久参年（歳次壬午）十二月廿日□□立白河寂楽寺宝蔵二字為□□被焼失宝蔵経論、且被盜取寺財物等日記

合

一切経論五千余卷章疏記伝兩界壇并八供養具

俗書三千余卷

一、寺家所領国々庄園□□官省符公驗焼失紛失記

右京九条家地捌戸主

同条野島式町

大和国城上大田庄壹処（但加地子庄）

一、近江国滋賀郡和迺庄壹処

本田捌拾玖町

一、同国滋賀高嶋兩郡間比良牧壹処

四至（東限海 南限守山南龍花下大道／西限下立嶺 北限高嶋郡勝野浜勝須阡陌）

四至内所領山式仵町・荒閑地捌佰七拾陸町

一、同国高嶋郡大田庄老処（字音羽庄）

四至（東限海 南限志賀塚／西限下立嶺 北限高嶋勝野浜勝須阡陌）

阡陌）

右事発（ハ）以去年八月三日夜、窃盜燒穿宝藏敷板、盜取金泥法華經一部八卷・普賢經・無量義經并金蒔手筥等先了、自茲寺司結番差宿直人、雖令守護、盜人有仮、遂以今月十九日夜丑時許、宝藏二字掃地被燒失已了、隨其内所納置經論仏具俗典并寺領田藪官省符本公驗等、悉被燒亡、併被盜取了、仍為後代公驗、立日記如件、以解、寂樂寺四至（東限文室 南限岡峯／西限岡前河面 北限鉢臥山）日記申寺家司等

講堂 釈迦堂 藥師堂 都維那法師定範

法花堂 常行堂 伝法寺塔一基 寺主大法師（在判）

別当阿闍梨觀尊 上座大法師（在判）

「氏人

前安芸守正五位下平朝臣（在判）

兵庫頭從五位上平朝臣（在判）

從五位下織部正平朝臣（在判）

蔭子平（在判）

依本寺三綱（請脱力）氏人証署」

507、《書籍頁〇一九九》

〇補一七一 善通寺曼茶羅寺所司解〇東寺百合文書リ

「下 留〇〇

件〇〇〇田本兔玖町玖段餘也、任先例〇〇〇兼又依国檢田使入部〇〇〇也、於波田岐程者、〇〇〇雜事、又寺辺在家至于

先例免除者、同可令停止課役〇〇〇（花押）」
普通曼茶羅兩寺所司住僧等解 申重請 国裁事

請被殊任 代代帰依矣、亦依先日御判旨、裁免給兩寺新在寮〇〇〇非違表紅花責切〇於修理修〇〇力於大小（乃）仏神事勤致懈怠、為所司住僧等〇〇〇跡凌遲根源仏法破滅因縁也、仍為寺家旁難堪子細愁状

副進代代兔判御任兔判案文等

右、兩寺所司等謹案〇情、兩寺俱是雖私堂舍、無止大師第三地之菩薩建立先祖古伽藍也、且為報御生処之恩、〇〇〇家泰平宰丈安穩、国公興福万民安樂、所建立大伽藍、所安置諸尊也、所謂人口如來・金剛薩埵請觀世音・梵王・帝釈・四大天王・吉祥・毘沙門也、依之号曼茶羅院、所以昼登我拜師之峯、觀諸法空理、夜下足下里辺、修三密之秘法、是豈非表上求菩提、下化衆生二意哉、往來之程十三丁也、遊行之間、或時值金色沙門、是釈尊化現也（云々）或時四大天王指

〇下欠、以下空白三行分位アリ

〇治曆延久の頃なるべし。一〇二〇・四六三七・一〇三〇・一〇三五・四六四一・一〇八七号文書等参照。

508、《書籍頁〇二〇九》

〇補一九二 修理權大夫藤原為房書状〇九条家本九条殿記裏文書元三行事所勞〇減、可參仕由説〇所申也、俊清〇參供慈〇〇〇仰旨跪以承了、

正月間事、大略相催〇御座薦御庄依〇上、不足之由、政孝所申也、兼覺闍梨請文如此、兵衛督辺事、又沙汰了、材木条、何支（許）可罷入之〇哉、内内承寸法、可尋〇候歟、為房誠恐謹言、

十二月廿一 修理權大夫（花押）

509、《書籍頁〇二〇九》

○補一九四 源師隆書狀〇九条家本九条殿記裏文書

上啓

右陸州(源義綱)御上洛之後、依指事不候、不□(力)陳啓、隨不報敷、不審候て申候也、抑其辺常陸罷行候、依坪平給自然遲引、隨仰参仕事可申承候、恐々謹言、

(承德元年)後正月三日

散位師隆

謹上 前兵衛佐殿(侍)

510、《書籍頁〇二三二》

○補二一八 僧良覺奉書〇西尾種熊氏所藏文書

(端裏書)「(墨引)〈杜屋庄〉義林房得業御房 良覺(奉)」

法務御房令申給杜屋庄事、夜前以理証房得業被進申文、令尋御之処、出雲御庄(荏表)内実円法師(と)申者、全以不候、付何者(天)御沙汰可候哉、雲(をハ)可りなる事候、委令尋問給(天)可被申之由、可令伝理証房得業之許給者、依 仰執啓如件、

八月廿七日

僧良覺(奉)

進上 義林房得業御房

511、《書籍頁〇二三五》

○補二二三 僧義豪書狀〇東大寺文書四ノ三十六

先日為沙汰所召白米免小東庄田文可返遣御、今日午前可檢注之由、昨日大温屋衆會議了、仍大切候者也、同庁宣(牒状也)下文等(ハ)御要未畢者、不紛失可置御候、他事期見参、恐々謹言、

(平治元年力)三月廿八日

僧義豪状

威儀師殿

512、《書籍頁〇二四〇》

○補二三四 僧延寛書狀〇松本研次郎氏所藏仏頂抄裏文書

貴□之旨畏以承候了、近江事、国司庁宣未被進候之間、使等弥乘勝、新庄内散々仕候、尤御方(と)思候野口関司張行旁非法、散々仕候事、□前明日尋上仕哉、委細事、可有言上候之状、如件、

十月六日

延寛

【第十一卷】

513、《書籍頁〇二八五》

○補二八五 法眼寛慶書狀〇青蓮院所藏諸菩薩积義裏文書

「此之間、何等事候覽、抑三河国大陽寺者、天台末寺(仁脱力)〈天〉候なるを、氏人称僧出来、從難去所被申者、沙汰仕処(三)、其御房令知御之由、和尚御房所被仰也、若指大功興用人(に)不候者、令許給如□(何力)、随仰重可令申左右候者也、諸事不具、謹言、

(寛治七年力)十月十日

法眼寛慶(上)

謹々上 青蓮房僧都御房

514、《書籍頁〇二八六》

○補二八六 僧某請文〇青蓮院所藏諸菩薩积義裏文書

謹請

御消息者

右、所請如件、御所被示仰惠心院御領田事、彼国司(に)可伝啓侍、至是非者、彼守之沙汰也、於承引不候者、非力所及、但件守於大僧正御房并僧都御房辺、其志丁寧(に)申候、又随御恩之由、内々(に)存思給□(由力)、慇懃(に)所申候也、然則非大□
「者承候、於此事者、所不知申□、不論左右申候之後、可申案内候也、御覽之後、早破々々、不可及他見者也、謹言、

(寛治八年比)即時

僧□房(請文)

515、《書籍頁〇二八八》

〇補二九二 某領地売券案〇白河本東寺文書百六十二
「とうさい一丈九さく

きたみなミ六九丈

いは(くた力)んかち、うりわたしたてまつる、ようくあるによ
て、やくのしさう(典藥史生)きよわらのいちきよに、あたひ八
丈五を四丈のぬの二たん、ろくたうのぬの八たん、よねいちこく、
うりわたす、

かうわ三ねん五月八日

在判

をしの(こ脱力)うちを、いきみのさたなり、

516、《書籍頁〇二八八》

〇補二九四 大江匡房告文〇石清水文書

維嘉承二年丁亥二月丁卯(戊午)朔十五日壬申、吉日良辰(爾)、掛
(毛)畏(岐)石清水(爾)坐(留)八幡大菩薩(乃)宝前(爾)、
正二位行大宰権帥大江朝臣匡房恐(美)恐(美毛)申給(久)、大
菩薩者万乘照臨之本主、四海鎮護之宗廟、討鷄林而守日域、助鳳曆
而崇天祚、凡貴賤上下誰不欽仰、就中、匡房從生年廿二、偏仰神德、
至今茲六十七、敢無他念、大菩薩所見也、豈可陳一二哉、而今年病
入膏盲、命在糸髮、非仰明德者、何免痾恙、苟文道之愚翁、盍愁遺
一老、如之、禄命所告、今春可慎、司天所示、辺將受殃、畏首畏尾、
其餘幾何、為除危厄、敢奉幣帛、故是以良辰(乎)撰定(氏)奉出
給(留)、仰願大菩薩感応一念(氏)、此状(乎)安(久)平(久)
聞食(止)、恐(美)恐(美毛)申給(止)申、

517、《書籍頁〇二九六》 *末尾仮名文書

〇補三〇三 平資基屋地去渡状〇九条家文書

平資基解 申進上親父故散位平朝臣資孝私領屋地券文事

合屋地直能米參佰七拾伍斛内

地老戸主余拾玖丈肆尺參寸直二百卅五石

東西六丈五尺五寸 南北十丈六尺

在左京(山城)七条二防一町内西三行北七八門内

屋等直百五十石内

老宇五間二面寢殿 直八十石

老宇三間二面廊 直四十石

老宇三間二面雜舎 直五十石

老宇三間一面車宿 直十五石

右、件屋地元者、親父故資孝朝臣私領也、而資孝沙汰丹波国六人部
御庄(天田郡)御米未進六十石・相模国御任時官物未進千五百九石、
并能米千伍佰陸拾玖石之内、以件屋地直三百七十五石・他物等直百
九十二石、已上五百六十七石補弁進了、殘仟式石也、仍於本券相副
新券文、限永年、所進上信濃守殿之(状脱力)如件、以解、
大治三年六月 日 平(花押)

平氏

後家内蔵

しなの、かみの殿にやちたてまつりおわりぬ、おなし□□にたてま
つり□□□、

〇継目裏花押あり。

518、《書籍頁〇二九八》

〇補三一〇 関白(藤原忠通)家政所下文案〇尾張服部敏良

氏所蔵文書

(端裏書)「殿下政所下文案」

□□庄□□□□□□条事

□□(副進力)興福寺別当僧都請文

□(一) 可任度々糺定旨、遣重(御脱力)使・御寺使、相共永停止下司依友・住人友久・吉貞濫行、東大寺御領玉井庄(山城綴喜郡)分水事、

右、玉井御庄解状云、件分水去年度々遣御使、任理令分引了、而石垣御庄(綴喜郡)住人友久等、相語御寺西金堂衆等、俄拔棄分水札、所致濫吹也、友久等所為、罪過不輕、欲被召誠者、任度々糺定旨、御使・寺使相共停止友久等濫行、如元可令分引、尚不承引、可召進友久・吉貞身也、

一 可決実否并言上同玉井庄領島地事
右、同前解状云、件島地往古庄領、今俄依友等所押取也者、使等決実否、可言上也、

一 可糺決玉井庄住人等入採山路事
右、同前解状云、樵夫山路、往古以来無加制止、而右垣御庄下司等、寄事於染殿灰柴所、致妄訴也、依憚御勢、不向石垣山、入採他山之間、尚為其疑、奪取銚鎌之条、実以難堪事也者、御使等決実否、可言上也、

以前条事、如件、
保延六年五月十二日 案主

別当出羽守平朝臣(知信力)〈在判〉
散位藤原朝臣〈在判〉

甲斐權守平一(信範)〈在判〉
一 島井山路依前下知(三)沙汰、〈在判〉

519' 《書籍頁〇二九九》 裏書
〇補三二一 坂上氏女田島処分状〇早稻田大学所藏文書

(端裏書)「処分帳 舟(丹)室」

宛行 処分田島之事
合

字道依田壹段(但北繩本) 舟(丹)生室田東壹段六十夫
樺井田壹段 西嶋島中壹段大

右、件田地者、悲母先祖相伝地也、而次男相殿所処分給也、
在各本券、(裏)「西島大、員重壳畢、」
保延六年六月廿一日 權寺主(花押)

句当(略押)
女坂上氏(略押)

(裏) (樺井田ノトコロ)「樺井庄一段、在本券云(トモ)大京房(三)サリヲハヌ、依在類地、本券不渡、
道依田一段除了、

520' 《書籍頁〇三〇一》
〇補三二六 めうねん所領売券〇山城田中忠三郎氏所藏文書
(端裏書)「五てうのほうもんむろまちのちのけん」
うりわたすちい所
五てうのほうもん、むろまちはうもんおもて、きたのつら、にし
ひかし一へぬし、一ちやう二しやく三すん、きたみなみすゑ一ち
やう二すん也、

ようくあるに、あたいのよね九十六こおかきりて、みなも
とのうちの女に、ほんけんをあいそへて、うりわたしたてまつると
ころ也、あゑてたのさまたけあるへからず、よてうりふみのしやう、
くたんのことし、

かうち二ねん二月七日 めうねん(花押)
ふしわらのうちの女(花押)

521' 《書籍頁〇三〇五》
〇補三二三 平行兼私領讓状〇安芸野坂文書
(端裏書)「神第二十一号」

謹辭解申讓進平行兼私領田畠等事

合式拾肆町之内田十一丁ノ畠十三丁栗林五丁、

在佐東郡(安芸)内八木村者(於四至境者、委細不注之、)

一 田所在等

藤田五段 勢万前五段 餅田七段

大豆田一丁 井尻三段 沼尻五段

正木三段 □□二段 石田七段

塔本一丁 井野手一丁 三〇一丁

沼間七段 重光垣内五段 弓田一丁

寺田一丁 津き田三段

一 畠所在

見物□一丁 沼辺(フチ)三段次二段

中黒二段 溝(の)辺(へ)二段又溝辺五段

堤二段 田□一段 延永作一丁

東垣内一丁 忠末(末)作一丁 西垣内一丁

吉貞作五段 則貞作五段 河渡一丁三反

古□内二丁 栗林五丁

右、件田畠、依為行兼相伝之私領、所讓進実也、但於本券者、行兼之舍弟之僧忠範(二)預置(天)、且他国(三)移住之程、不慮之外(二)件僧既死去、其後間大夫国兼依為件忠範之舍兄、忠範彼国兼之許を為住所しき、仍件本券を所尋、無件券文、之不賜者、若於自今以後、件有本券之輩者、可謀作基之也、故作新券、所讓進也、

仁平二年三月八日

平(花押)

522' 《書籍頁〇三一一》

〇補三三四 某書状 〇高野山正智院文書

御庄(ヨリ)京上人夫一人沙汰仕候、智円坊令參候了、夫

一人を念遣候也、

自田仲庄(紀伊那賀郡)付候 殿下(藤原忠通)御下文案一通令進上候、自御山案共者、令使渡候也、定泉坊御下向候(へトモ)、雨降(リ)候間、未麦沙汰候、北堺之御沙汰之間、自御庄内讒言人出来事候者、兩方可被對問候由、思給候、一人申状令付御不可候、於御山、可被子細對決候、内々承事候(ハ)、令申上候者也、万事(ハ)可御遺迹候、委細事等

523' 《書籍頁〇三一一四》

〇補三三四 時村打渡状〇出雲北島家文書

其時之守護子濃国時村の二郎正綱おもんで、きつき十二郷村、直高(二)打渡処実也、仍渡状如件、

長寛二年十一月五日

時村(花押)

〇本文書検討を要す。

524' 《書籍頁〇三一一四》

〇補三三六 筑後鷹尾社宮役配分状案〇筑後鷹尾家文書

「檢校四人分

南北御前ヨリ祭川際限

勾当二人分

廻廊内南北加定

承仕一人分

御前後分

大太官司十五家分

馬坪ヨリ西廻廊御前限

右、御掃治支配、守次第、可令掃治之状如件、

永萬二年七月廿三日 公文(在判)

別当多米（在判）

別当笠（在判）

別当源（在判）

別当朝妻（平朝臣イ）

525、《書籍頁〇三一六》

〇補三四九 紀氏女所領壳券〇山城田中忠三郎氏所藏文書
謹辭 進壳渡私領地事

合式処

在（一）処、自六角北、自室町西角也、東西肆丈伍尺、南北參丈七尺）

一 処（自六角北、室町面、自角北二云所、南北參丈參尺、東西肆丈陸尺、）

右、件地元者、紀氏女所領地也、然直上品八丈式拾疋、限永年奏末永（仁）、進壳渡処、相具本驗七枚・新驗壹枚、此進副、但勒本驗・新驗等之書、沽却狀以解、仍不可在他人妨如件、

仁安三年七月十九日

紀氏（花押）

上野（花押）

526、《書籍頁〇三一八》

〇補三五五 若狹御賀尾浦刀禰職安堵狀〇若狹大音文書
若狹国三方郡内御賀尾浦刀禰職事

合

右、彼職付山一所并村きミ等、可有者也、仍致孫々（三）まで、不可背此旨之証文狀如件、

嘉応元年十月廿日

（花押）

527、《書籍頁〇三二八》

〇補三六五 中原氏女領地壳券〇山城田中忠三郎氏所藏文書
（端裏書）「ろかくのすみのけん」

沽却 領地壳處事

合捌丈式尺肆寸者

東西式丈式尺式寸 南北參丈七尺
在自六角北、自室町西角也、

右、件地、先祖相伝所領也、而依有直要用、限永年、上品八丈絹拾式疋之代（二）、所沽却小野季長渡実也、仍為後日沙汰、相副本公驗并讓狀立新券文、所沽渡如件、

承安二年十二月廿一日

女中原氏（略押）
嫡男 僧（花押）

528、《書籍頁〇三三一》

〇補三七〇 撰津恒久名田注文〇撰津勝尾寺文書
（端裏書）「次田消息住文」

但臨時出来公事不知定也、

注進 次田成枝御領（撰津島下郡）恒久名内西住名田事

合壹町肆段内

但恒久名沙汰人下知定、

除寺田二段

定田一丁二反内

除沙汰人給田料一反

去年蓮禪房沙汰時未進代一反（但九斗八升四合代／且又正安可
依申狀、）

殘定田壹町

所当米拾□□（石内）（□（但）依無能料下行、作半儀也、）

御地子□□□□（米四石六斗）三升一合（但一丁一反分
別四斗二升一合代）

庄司供給代米一斗四升（但一丁四反分段別一升代）

殘米伍石式斗式升玖合内

所濟米三石二斗六升

未濟一石九斗六升九合

右、大略例法所当米定、注進如件、

承安四年十二月 日

兼又花乘房沙汰時未進米殘、尤可御沙汰也、

529、《書籍頁〇三三一》

〇補三七一 *某書狀〇撰津勝尾寺文書

次田々所職事、刑部阿闍梨得替之刻、雖望申之輩【雖】候、貴房依被申請之旨候、去年令補給候了、仍為御沙汰之上者、為【寺】当【家】堂定被抽忠志候敷之由、面々相存候之處、去年所当一塵無其沙汰候之間、修正之時、尋申子細候之處、召代官、忽可令沙汰之由、被仰候き、仍雖相待候、御無沙汰之間、又二月会之時、令触申候之處、今一兩日之間（二）、忽可明沙汰、暫可相待之由、御返答候之間、存其旨候（二）、

530、《書籍頁〇三三二》

〇補三七二 僧觀照山寺讓狀案〇陸奥大梅寺文書

讓与 慈悲尾山寺一所事

合

四至如本券文

右、件山寺元者、僧觀照之師資相伝之所也、而弟子行觀所讓渡実也、但雖僧源經（二）讓（ト）、行觀相共可令寺務執行也、於源經讓事者、御寺修理之志有、依令申請、源經讓渡、行觀相共寺中可令知行、不可有相論者也、相副手續之証文、永以可讓与也、仍為向後龜鏡、注事狀□如件、

承安四年（甲午）十二月 日 僧觀照（在手甲）

531、《書籍頁〇三三二》

〇補三七三 藤原宗為私領壳券〇田中忠三郎氏所藏文書

（端裏書）「しちてうあふら」

沽却 私領地壳處事

合壳戸主（口南北五丈 奥東西十丈、）

在左京（山城）從七条南從油小路西、油小路面、

右、件地、自藤原則光手、兩度得買之後、領知之年久、而今依有用要、直能米本斗伍拾壳石肆斗（二）、永相副本券拾式枚、藤内所沽却申也、手繼之次第見本券之狀、不可有敢他妨、仍新券文之狀如件、

承安五年二月五日

藤原国宗（花押）

（裏）「字名藤な□（り力）」

532、《書籍頁〇三三四》

〇補三七九 源兼光解〇巖島野坂文書

（端書）「神第四十一号」

源兼光解 申進 申文事

請被殊且依弁濟実、且就所当員數、勘定玖河・周防・神代保三ヶ所名田官物結解子細狀、

副進色々結解、

右、謹檢案内、去年者即平均令内檢國中作田（天）、不作所加九把五分利、并本起請田作滿所（ハ）、行（引力）加三把利田、令遂收納畢者、任下知之旨、令弁濟官物之處、構事於縱横、令難没有限正税、令对捍公事之由、有風聞之条、遂為訴訟、而雖令造進結解、於正返抄者、加御目代判、令進国畢者、負名之許、云公文預、云諸收納書生、請繼正返抄之處、所放勘補也者、各名結解造進之時、無令繼進

正返抄之例、亦請（取力）次許為証文、所致後日沙汰也、然者、不可有勘定疑殆、文□枚々皆沙汰人署判掲焉之、被披校、又不可有其隱、爰以令究濟所当、乍勤仕□□□□□□庄藪、何可令勿（忽）諸国威哉、但於玖河・周防名田乃料者、春時勸乃使高経不下行者、不為究濟者、於乃料濟（催）徵者、高経沙汰也、尤可垂御推察事也、且依田数次第、且任所当員数、尤被勘合結解者、将仰 御勢貴、弥成勤厚勞矣、仍勒在状、言上如件、以解、

安元二年正月 日 源兼光（上）

533、《書籍頁〇三三六》

〇補三八一 安芸国司客人官祈念祝詞〇嚴島野坂文書

（端裏貼紙）祭第三号

国口（司力）祝 客人官

維安元二年歲次（丙／申）十二月朔（壬／申）十八日（己未）吉日
良辰（於）撰定（天）、掛（クモ）恐（シ）当国鎮守政（於）静（メ）
守給（フ）正一位伊都岐嶋大明神、大江客人、今客人、隈岡客人、
興雄（ヲキヲノ）客人、八所比延解（ノヒエトキ）、惣（天）十二社
（乃）宇豆（乃）広御前（仁）、驚令申給（フ）、国司大介（某）殊
（ニ）致（シテ）沐浴潔濟（斎）（於）、所令儲調献給（フ）白（シ
ロ）妙（乃）御幣、金（乃）散米、御供御酒、恒（ヨリモ）勝（タ
リト）受喜給（天）喜（乃）次（ニハ）所懼恐（ヲソレ）給（フ）、
年月日時（乃）怖畏急難不祥疫廻（ヲハ）未然（ニ）掃退（ケ）、所
（乃）欣（ネカイ）求給（フ）寿福官位（ヲハ）、一々（ニ）令階給
（天）、五穀豐饒蚕養如意（ニシテ）、国内興福人民案穩（シテ）、四
度（乃）公文任中（ニ）勘畢（リ）、治国（ノ）名聞（ヲハ）天下（ニ）
良吏誉（ホマレ）施（シ）日域（ニ）給（ヒ）、夜（ヲ）守（リ）日（ヲ）
守（リ）給（天）、運上（ノ）船筏（ハ□）海路浪静（シテ）合期（ニ）
着岸（シ）、陸地（乃）蹄（ヒツメ）無恙（ツツカ）（カ）、在庁官人

寿福增長安穩泰平（シテ）、常磐（キハ）堅磐（カキハ）（ニ）守幸
給（ヘト）申、

534、《書籍頁〇三三六》

〇補三八二 安芸国司大官祈念祝詞〇嚴島野坂文書

（裏貼紙）祭第四号

太官

正一位伊都岐嶋大明神卅三社宇豆広前（ニ）令驚申給国司某（云々）、
自餘祝

正一位伊都岐嶋大明神（客人官ニテハ、四所客人、八所比延解、惣
テ十二社宇豆乃）

広御前（ニ）令驚申給（フ）、某殊（ニ）致（シ）沐浴潔濟（ヲ）、
令儲献給（フ）白妙（ノ）御幣、金散米又某物、恒（ヨリテ）勝（タ
リト）受喜給（ム）所懼恐給（フ）、年月日時（ノ）怖畏急難不祥疫
廻（ヲハ）未然（ニ）掃退（ケ）、所願求給（フ）寿福官位（ヲハ）
一々（ニ）階（ヘ）、思（ヒ）望（ミ）給（フ）事（ハ）悉（ク）令
満足給（天）、五穀豐饒蚕養如意（ニシテ）、所作（ノ）田畠水旱虫
損（ノ）無恐（レ）、夜守（リ）日守（リ）給（天）、一家繁昌（シ）
子孫平安（ニシテ）、眷属牛馬無咎恙（ツツカ）安穩泰平（ニシテ）、
常磐堅磐（ニ）護幸給（ヘト）申、

535、《書籍頁〇三三七》

〇補三八六 某屋地讓状案〇摂津勝尾寺文書

よしみつのやち、ゆつりわたしたてまつる、のちのせうものため
に、てつからかきて、てつきをたてまつる、くハしき事ハ、けん
みえたり、

ちせう二ねん九月廿三日 在判

536、《書籍頁〇三三七》

〇補三八七 後白河法皇參詣祈念祝詞〇巖島野坂文書

(端書) 二二十九号四

再拜、維治承三年歲次己亥三月戊辰朔日、掛モ畏キ安芸国伊都岐嶋大明神ノ広前ニ、恐ミ恐ミ申給ヘハクト申ク、夫靈所権現ハ早出一如之宮テ、久ク同三有之塵シ給ヘヒテヨリ以来タ、跡ヲ芸州ノ巖嶋ニ垂レ、化ヘクワヲ天下ノ群萌ヘクンマウニ施ヘシタマウ、願力ノ篤信ヘトクシンニ叶ヘフコト如影之随形ヘシタカウカタチニヘシ冥感ヘメイカムヘノ懇望ヘコムハウニ答ヘタフヘスルコト、似響之応声ヘヲウスルコエニヘタリ、是以ヘタチマチニ禪定法皇吉日良辰ヲ撰定テ、種々ノ神宝幣帛等ヲ調飾ヘト、ノヘカサリテ、忝ク陵ヘシノキ万里ノ波濤ヘハタウラニ抽臨幸之志テ、殊ニ凝一心之精請ヘテ、祈現当之御願ヘオハシマス、大明神此状ヲ平安ク聞食テ、紫禁ヘシヨムノ際ヘウチニハ松栢比算ヘヒサンヲ、青闌ヘ牛ノ之中ニハ龜鶴讓齡ヘタテマツリテ、禪定仙院射山ヘヤサン風静ヘシツカヘニシテ禪樹無動ヘウコクコトク、定ヘチヨウ水波ヘナミ平ヘニシテ觀ヘクワン月常ニ明ヘニシテ、御往還之間ニ無風波之難ヘシテ、御心中ニ祈ヘオハシマス、大小之御願一々ニ令満足給テ、天下泰平朝家安穩ニ、夜ノ守リ日守ヘリニ、常磐ニ堅磐ニ護幸ヘ奉リ賜ヘ、恐ヘミ恐恐ヘミモ申、

537、《書籍頁〇三三八》

〇補三八八 後白河法皇參詣祈念祝詞〇巖島野坂文書

再拜々々

維治承三年歲次己亥三月朔己未某日某支干、嘉辰令月日ヘヨキヒキヨキツキヘヲ撰ヘエラヘヒ時ヘヲ撰ヘエラヒヘテ、山陽道安芸国鎮守第一巖嶋大明神乃宇豆ヘウツヘ乃、広前ヘヒロマヘ

江、太上法皇(後白河)白妙 御幣(シロタヘノオムテクラ)仁 金銀(コムコン)綵錢(サイセンヲ)捧持(サ、ケモタ)シメ給ヘテ、洛陽汾水(ラクヤウフンスイ)乃、仙居(セムキウ)平 出在(マンマシ)テ、神山宮嶋靈堀(ジンサンミヤシマレイクツ)仁 詣在(マウテマンマ)セリ、掛(カケマク)毛 畏(カンシ?)コ久 掛(毛)貴(タフト)久 在(マシマ)ス大明神、厚(アツ)キ御恤(オムメク)美(美)広(ヒロ)キ御助(オムタスケ)ヲ掲(イチシル)久 新(アタラシク)奉授給(サツケタテマツリタマ)比、青蓮ノ御眼(マナコ)ニ照(テラ)志 納(オサ)メ丹菓(タンクワ)ノ脣(クチヒル)仁 咲(エミ)ヲ含在(フクミマシマシ)テ、叡情(エイセイ)仁 令祈申御(イノリマウサシメオハシマス)良宇(牟?)御願、誤(アヤマツ)ヘコト無(ナ)久 令円満在(エンマンセシメマシマイ)テ、夜守(ヨルノマモリ)日守(ヒルノマモリ)、常磐(トキハ)堅磐(カキハ)仁 護幸(マモリサイハ)倍 護恤給(マモリメタ(ク?)ミ)倍、兼又金輪(コンリ)聖王宝祚(ホウソ)延長(エンチャウ)仁、青闌儲君玉躰安穩(セイキチヨクンキヨクタイヤ(ア?)ンオン)仁、中宮后房(コウハウ)長秋月静(チャツ(ウ?)シウツキシツカニ)、万春榮久(ハンスキンスサカエヒサシ)久、禪定前相国(センシヤコク)内外無恙(ツ、カナク)、子孫繁昌給(ハンシヤウシタマ)者牟 上自宰臣下至民庶(サイシンヨリイタルマテミンシヨ)、万、戸仰(アホキ)徳(ヲ)千箱成詠(セシシヨウエイヲナ)サム、臨幸(リンカウ)既(ステニ)及両度(ヘリ)、神感定(カムサタメテ)又(マタ)万端(ハンタンナ)ヘラム、十禪ノ宿因(シユクイン)厚(アツ)久 在(マシマ)ス上(仁)、二世ノ御願無止(ヤムコトナ)シ、君(キミ)神(モ)承悦(ウケヨロコビ)給(テ)、現(コンニ)モ 当(タウニ)モ 守(リ)導(ミチヒ)キ 賜(タマ)ハムコトハ、大明神ノ厚(ア

ツキ御恤(メクミ)広キ御助(タスケ)仁可在(アルヘキ)ナ
リト)所念行(オホシメシテ)ナム、恐(美)恐(美毛)申給(マ
ウシタマ)フト)申、

538、《書籍頁〇三三九》

〇補三九〇 坂上久寿田地売券〇早稲田大学所蔵文書

(端裏書)「百十一臈やまたのたなかのかきうちのけん」

謹辞 売渡田地券文事

合式段大者(字金剛峯寺御庄山田村中垣内、)

(裏)「此之内一段大除了、但南方也、」

四至(東限中クル 南限坂入導領/西限繩手 北限繩手)

右、件田地者、坂上久吉が先祖相伝領也、而為慈父孝養、限直米七

石、坂上中子永売渡了、仍為後日沙汰、放新券文、於本券者、依有

類地、不渡申狀如件、

治承三年(亥亥)七月廿五日

坂上(略押)

539、《書籍頁〇三三九》

〇補三九一 平盛時(?)書狀案〇島津家文書

六郎(畠山重保)ならひに二郎(重忠)りやう人かかんたうは、ち

は(常胤)殿おほせによりてゆるし候ぬ、しけたゝたかゝるこんにを

きてハ候へからず候、

(治承五年カ)正月十三日

平(在判)

540、《書籍頁〇三三九》

〇補三九二 寂蓮書狀〇穂久迹文庫所蔵文書

畏申上候、寂蓮か名田(ニ)皆神木(を)被立まいらせ候事、歎入

候、左衛門尉の田之事、不存知候上、此身不及口入候、此入道か相

いろわす候事、人々知て候事にて候、御尋候ハ、御不審候ましく

候、可然候ハ、此神木をぬかせ給候て、早田をゆるし給へく候、
左衛門尉か田の事におきて候てハ、自是さきも不存候、自是後も、
あいゝろい候ましく候事をハ、蒙仰候て、何も状におよひ候ても、
可仕候、御はからひ候て、名田ゆるし給候へく候由、よき様に申上
て候へく候、穴賢々々、

八月廿二日

寂蓮(花押)

進上帥(藤原隆季)殿

〇隆季、治承三年十一月十九日帥に任じ、養和二年四月九日得替。

541、《書籍頁〇三四〇》 *裏仮名文書

〇補三九三 僧巖祐文書紛失狀〇林屋辰三郎氏所蔵文書

僧巖祐立申紛失狀事

合家地陸間者(在東大寺造司辺)

四至(限東教語房領 限南路 限西一乘房領 限北大垣)

右、件家地者、故良巖法師先祖相伝所領也、而東副陸間、僧巖祐讓

給畢、敢無他妨、然於讓狀者、去年十二月廿八日追捕時、東大・興

福両寺焼失尅焼畢、仍立紛失狀、五師所御証判申請、後代為証驗、

録狀以解、

治承五年二月廿三日

僧巖祐

「件家地相伝領掌之旨明白、仍於紛失狀、五師加証判之、」

大法師(花押)(裏下同)「勝与」

大法師(花押)「有樹」

大法師(花押)「寛勝」

大法師(花押)「禅海」

大法師(花押)「珍範」

(裏書)「ろけ(六間)のちのうち、にしにちやうをは、いちせうに

たてまつりおわんぬ、のこりにちやうにもやくあり、」

(継目裏書)「文書三枚」

○紙首尾に継目裏花押五あり。

542、《書籍頁〇三四一》

○補三九六 源頼朝袖判書状○佐藤行信氏所蔵文書

(花押)(頼朝)

若宮廻廊中門の礎石ハ、酒匂太郎沙汰として、取うかへさすへし、船ハ酒匂にハなけれハハ、存其旨で、可致沙汰也、兼又濟物用途料国絹二百疋許沙汰出で、久兼(ニ)とらすへし、来月四日許、着瀬川など(ニ)著様(ニ)沙汰すへし、御忽候之間、久兼(ニ)物をも不被□□(ヨメズ)、然者着瀬川などにて、

○五〇七二号文書(治承六年四月十二日源頼朝下文)参照。

543、《書籍頁〇三四一》

○補三九七 紀伊荒河莊百姓等解○高野山文書又統宝簡集八十五

「荒川庄解状」

言上

事由

右、以去十八日午時、自田仲庄(紀伊那賀郡)、能清舍弟并長明等、千万軍兵相具足(シテ)、荒川(紀伊那賀郡)(ニ)打入(テ)、庄内(ヲ)焼失、或殺害、或負手候了、然上頭(平重衡)殿仰、并号権亮(平維盛)殿仰候(テ)、大和国(ニハ)刀帶先生奉行、和泉国・河内国家人等仰付、荒川庄焼失(シ)、百姓住人等并可殺害之由、所々縁人申遣処也、実住人等、東西(ヲ)失(テ)候也、以去年之比、荒川北四至、院宣被成下候之後、于今無相違思給之處、何様事等候(テカ)、如此事出来候(ラム)、百姓等失為方候、早子細(ヲ)大將殿令申上御(テ)、如此狼籍令留御者、百姓等(カ)悦、何事如之候哉、然間、尚廿五日辰時、為荒川庄焼失、彼長明等可乱入庄内之由、所承候也、能清之庄池田申所(ニ)、以外構城、集千万軍兵候(テ)、

日々夜々、自国他国不論、頭殿御家人等郡(群)集仕(ト云々)、仍百姓等捨御庄、山林(ニ)交(リ)、或他郷他所(ニ)移住仕候(テ)、凡為一人可留跡様不候者也、以去之比、自大將殿御文并左少弁殿御文等、荒川庄雖被下候、田仲庄能清并長明等、全以不承引仕候(シテ)、弥頭殿仰(ト)申、権亮殿仰(ト)申候、謀叛之躰、淺猿見候也、以此之旨、可然様(ニ)令申上御者、謹所仰也、百姓等誠恐謹言、

(養和元年)四月廿四日(未時) 荒川御庄百姓等

○本文書、大日本古文書高野山文書の推定年号文治二年により鎌倉遺文八八号に収めたるも、井上満郎氏「鎌倉幕府成立期の武士濫行」(日本史研究一一〇号)に依り更めてここに収める。

544、《書籍頁〇三四三》

○補四〇二 覚快親王書状○山城妙法院文書

貴房(ハ)自幼少、小事無恋心して、年来罷成候、有所思、小堂をも御領の最中(ニ)令思企候了、□謹言、

□□(一行分)願仰木堂如形仏聖灯油可沙汰□□□□由宿願候、而如此所勞、不覺東西候、静不令沙汰候、然而三昧院(ハ)是門跡相承所にて、向後無不重、彼領鏡社の以所村小堂仏聖灯油有用途者、如形承仕一人などに令宛給料(ニ)、永所寄進也、門跡之人等相計、仰付て、其沙汰必々可候事也、余の役など全不可懸事也、穴賢々々、此堂事、殊以二世まで必ず相懸候也、殿の法眼(ニ)も、其旨吉々申合(テ)、書状令被進、今時法眼(ハ)慈円と改名候云々、当事ハ偏其御弟子等(ニ)仰て、実円法眼以後も、可有御沙汰之由、深存候、後世事、偏此堂事計也、後世御恩、只此事候歟、謹言、

養和元年十月廿五日 覚快親王

横川長吏法印并法眼実円御房

(養和元年カ) 十一月廿三日 紀俊守

545、《書籍頁〇三四四》

〇補四〇五 紀俊守申状〇東京国立博物館所蔵高山寺文書

紀俊守謹言

言上 雜事

一 兵糧米事

右、件兵糧米、先日以梶取近守、委細申上候了、百姓等可募御米之由令存候、為公事可弁濟之思、更不候、就中、当御庄者、三分之二者、他所他庄之住人等令入作之処也、件入作人等申候様、於兵糧米者、非野介御庄(筑前早良郡カ)一所、諸国諸庄一同事也、然皆募所当御米之内、令弁進事無其隱、何当御庄一所及非分之役、若干〇三百余石之見米可弁濟哉(登)、他庄他所兼作入作人等論申候(天)、臨時役之儀一切不承伏仕候、爰無其儲之処、追討使令下向之間、従国衙三百五十石之兵糧米切懸、依令致水火之責、為遁當時之苛法、以不載〇仕〇無極為訴之間、追討使御下向間、為庄内住人等、付面々公私夫伝馬、或被宛召、或被押取之由、住人等多以逃散候了、當時所当御米七百九十石内見納四百七十余石也、(十一月廿三日以前納)未進二百余石、從此後及草干候(天)、難濟仕候(歟)、致苛法之責候(ハ)、百姓等弥以可逃散仕候、又不加其催者、御米難成候、但御庄之習者、明年之二三月(までも)塩(を)売様(ニ)廻船仕候(天)、隨堪令弁濟之例也、雖然、今(ハ)依兵乱之故、鎮西不静候之間、百姓等(も)例時之方術計略尽候(歟)、及愚意候(まで)、存秘慮、誘促候(天)、事之撰定上、可申上候、

一 御庄領塩浜事

右、件事、先日以御庄解申上候了、任状早々可被沙汰下候、

以前条々、先条申上候之上、重所申上候也、以此旨、能々委細可申上給候、俊守恐々謹言、

546、《書籍頁〇三四六》

〇補四〇八 僧円慶田地充行状〇早稲田大学所蔵文書

(端裏書)「万成房之」

充行 処分田地事

合式段者

金剛峯寺御領之内河北方者、

一 舟生室老段(在四至坪付本券、)

一 長古会村十四回三里十一坪北副老段参拾歩

(裏)「此田除了、」(在字久原者、)

右、件田地者、故相賢之相伝地也、然相賢子息等与僧万勝中不和事出来之故、帯互異心、彼万勝(ヲ)議絶仕事先畢、雖然、方執行御房為御沙汰、各和平仕(テ)、限永代本券相具、万勝(ニ)所令処分也、於自今已後、更不可有更改、若此上(ニ)或負物(ト)申、或(ハ)私不審有云(テ)、於致僻事輩者、於相賢之処分、永不可領知之状如件、

寿永元年(壬寅)六月十五日

僧円慶(花押)
僧定真(花押)

「河北執行権上座大法師(花押)坂上太子〇(裏)僧上実妻」

同 中子〇(裏)「僧宗順妻」

547、《書籍頁〇三五二》

〇補四二一 源頼朝下文写〇集古文書十二

(花押影)(頼朝)

大しやうけの

みさきのけうまさちかゝ代官ニ、せとくの三郎まさもり御かたにて、かうみやうをしたれハ、まさちかゝもとしりつらんところハ、

ちきやうすへし、以下、

元暦元

三月三日

○本文書、疑うべし。

548、《書籍頁〇三五三》

○補四二六 *中原盛家請文○東京国立博物館所蔵高山寺文書
追申、

院□(御力)書案一昏□(給力)預候了、供御所証文(ハ)、
参向之時、可□申候也、

御札之旨、謹以拝見仕候了、蔵人所御牒事并院宣之由、畏承候之処
也、

抑以去二月廿五日於二鵬出納奉行宮内少輔殿仰下候之内、牛瀬村供
御者、何(を)令勤(そと)被尋下(天)候(之)、乃毎年三箇度炉
供御之内、五節・御仏名・白馬等令勤仕之由、所令申上、先日以助
久沙汰、蔵一先生久則目代代納之□、又以件人可申尋聞食之由、所
令申上也、而不勤供御之由、以外事候也、争無止供御可不勤仕哉、
無極言虚候事也、誰人御沙汰仰罷、企参向、可令申之状如件、□□
□□(不具謹言力)

二月□(廿力)四日

明法□□中原盛家(請□)

(牛脱)瀬供御沙汰者、明法□□盛家返□□

549、《書籍頁〇三五四》

○補四三〇 *隆政書状○東京国立博物館所蔵高山寺文書

来廿三日送僧前、可勤仕永末名之由承候了、やかて以佃米可令勤仕
之旨、平内代官男令申含候了、加地子(ハ)二石令未進事也、前々
候於佃者、以作田依令取候(敷)、無未進之物也、然者佃(ヲ)切
(天)給候了也、其旨(ヲ)平内(ニモ)可被仰給候也、謹言、

十一月十八日

隆政

550、《書籍頁〇三五四》

○補四三一 *信経請文○東京国立博物館所蔵高山寺文書

祇候北面、五位有官無官、令注進候、但初参以後不参躬合輩、つか
さなりてや候らん、又死去者(ニ)てや候らん、不知子細候、然而
随注置候、所令注進候也、只々いそきかき候間、定らうせきもや候
らん、以此之由可然様、可□披露給候、恐々謹言、

十二月十五日

信経

551、《書籍頁〇三五四》

○補四三二 某仮名書状○東京国立博物館所蔵高山寺文書

(原文チラシ書)やうや□くらのかみに、さたする□うに候、むね
かぬは、いくたひに候はん、わかひかことをするそ、とうみさうに、
なすへしとは、いかてか申候はん、わうこの、みくりやのちなりと、
申て候へ□、それにつきて、□□も候にや、きのうしんわうのもと
より、このことたつねて候し、つかひのまてきて候しか□、つかは
し候にき、このこといかかし候へき、くらのかみの、かさねてけた
いなして候へとも、もちゐてふたとりて、すてなとして、むきたか
りとりなとして候も、たたすて□、□もすてやめ候なは、つひくあ
なつり候て、人わらはれに候はんすらん、それをは、いかかし候へ
き、はからひておほせらるへく候、むねかぬをめして、みさうのも
とのもんちうをや、せられ候へき、

(切封墨引)

御かへりこと